

16号掘立建物（第726図）

1 B郭の中央東端にあり、8-21グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の東側に、重複する。検出された建物は、2間(4.34m)×1間(3.04m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-73°-Wである。重複する11号掘立建物との新旧関係は、本建物の方が古い。

17号掘立建物（第727図）

1 B郭の中央やや南西寄りにあり、7-25グリッドを中心に位置する。10・12・23号掘立建物と、重複する。検出された建物は、2間(3.86m)×1間(3.70m)のほぼ正方形に近い建物で、桁行方向はN-22°-Eである。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

19号掘立建物（第728図）

1 B郭の中央西端にあり、10-26グリッドを中心に位置する。12・13・20号掘立建物と、重複する。検出された建物は、3間(7.40m)×2間(4.74m)の南北に長い建物で、桁行方向は、N-13°-Eである。梁行方向の2間のうち、東側の柱間は3.04mを測るのに対し、西側では1.70mと狭い柱間となっている。また、この西辺での中間の柱穴が検出されていないことから、本建物は3間×1間(3.04m)の建物である可能性もある。ここでは、柱穴位置にあたる土坑により、検出できなかったものとして建物を想定した。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

20号掘立建物（第729図）

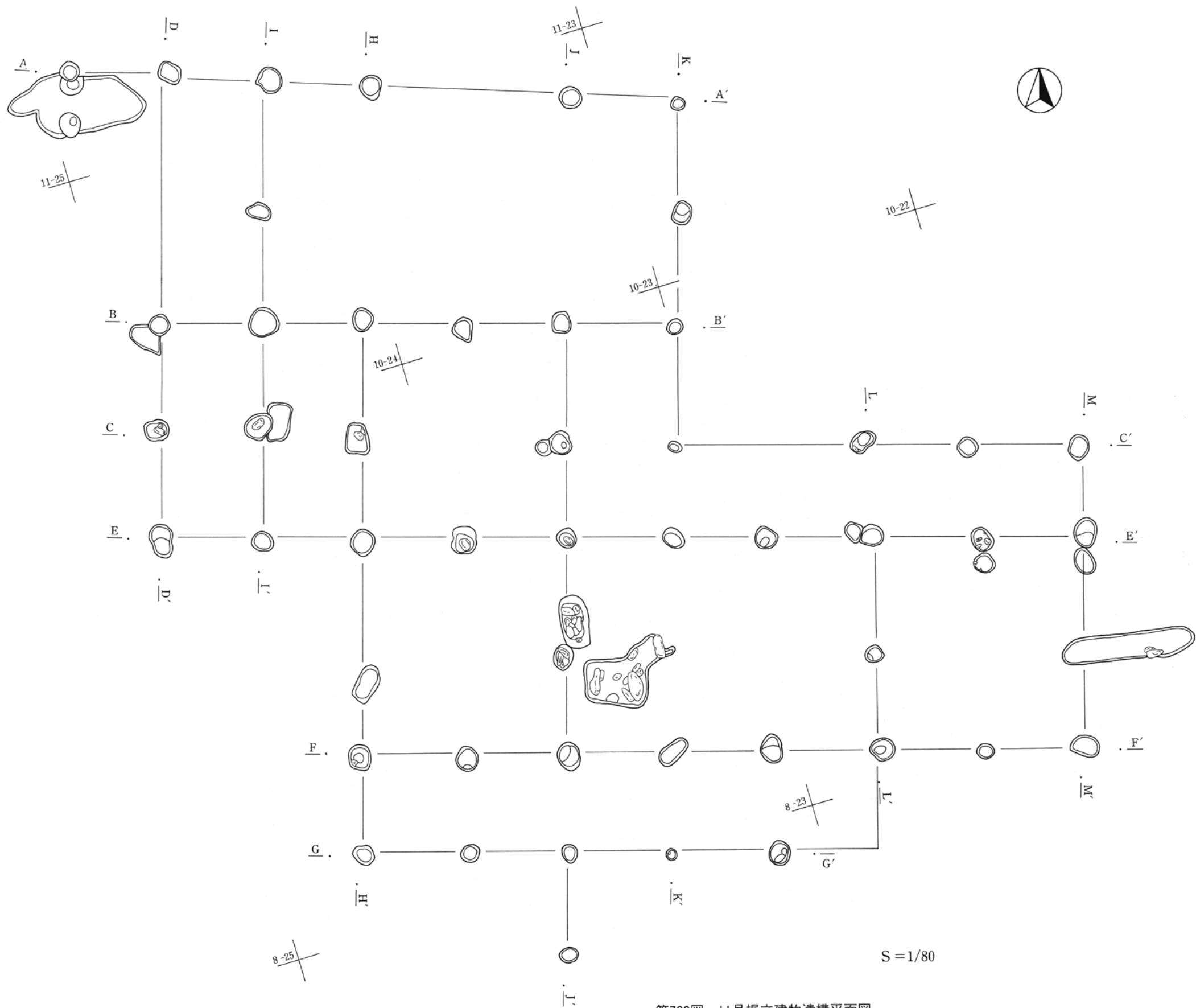
1 B郭の中央西寄りにあり、10-25グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の西隣にあり、7・12・13・19・23号掘立建物と重複する。検出された建物は、5間(11.04m)×2間(3.86m)の南北に長い建物で、桁行方向はN-22°-Eである。桁行方向の南側の柱間では1.70mを測るのに対し、北側ほど広く2.30m前後ないし2.80m前後を測る。重複する掘立建物との新旧関係は、12号掘立建物の方が新しく、他とは不明である。

21号掘立建物（第730図）

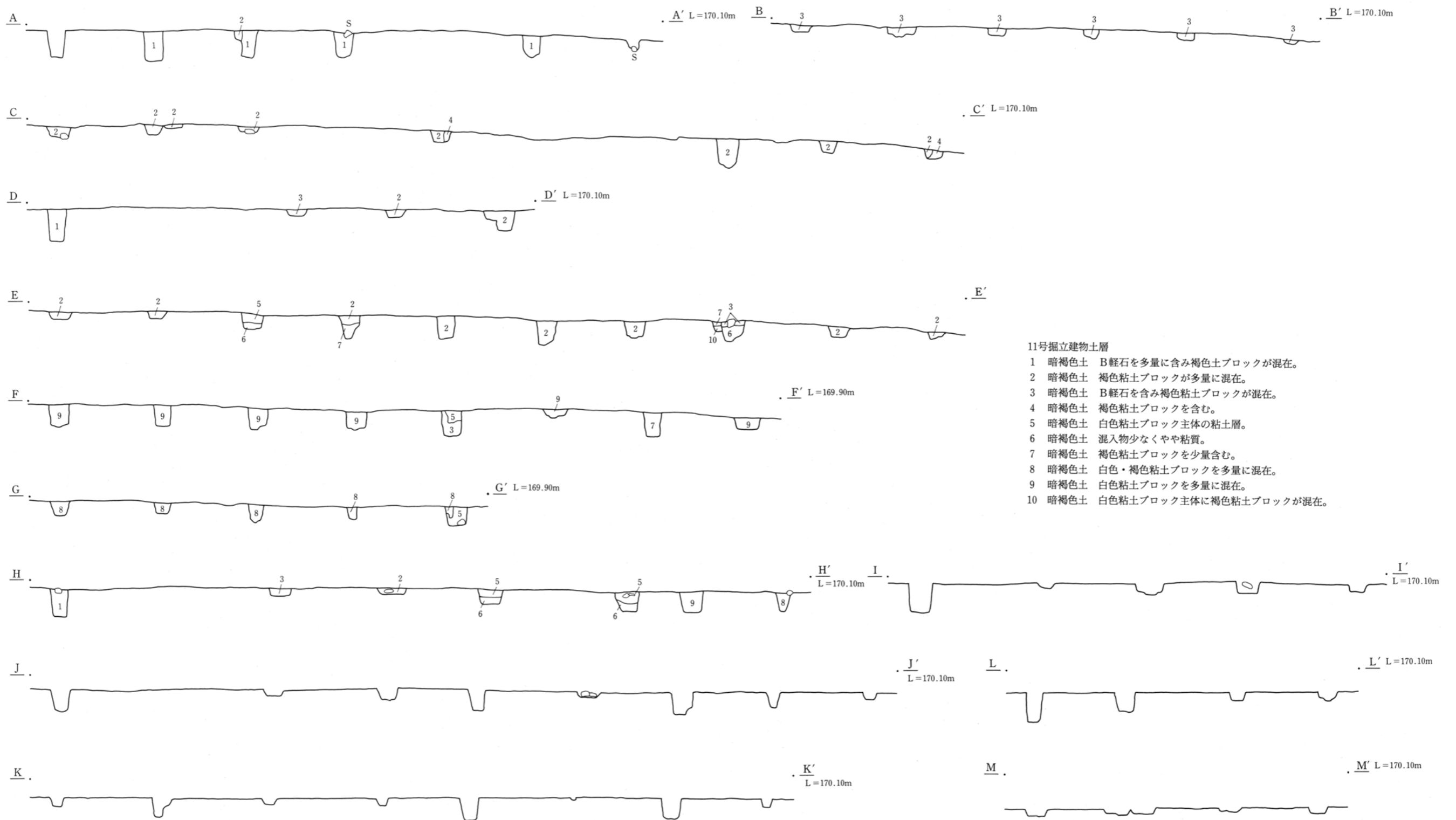
1 B郭の中央東寄りにあり、7-22グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の南東部、および8・9・22号掘立建物と重複する。検出された建物は、5間(9.74m)×2間(4.62m)の東西に長い建物で、桁行方向は、N-75°-Wである。重複する掘立建物との新旧関係は、22号掘立建物の方が新しく、他とは不明である。

22号掘立建物（第731図）

1 B郭の中央東寄りにあり、7-22グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の南東部、および8・21号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(6.12m)×1間(1.82m)の南北に細長い建物で、桁行方向は、N-14°-Eである。桁行方向の柱間は、2.54mと3.58mを測り、他の建物の柱間と比較すると広いことが解る。重複する掘立建物との新旧関係は、21号掘立建物の方が古く、他とは不明である。



第720图 11号掘立建物遺構平面図

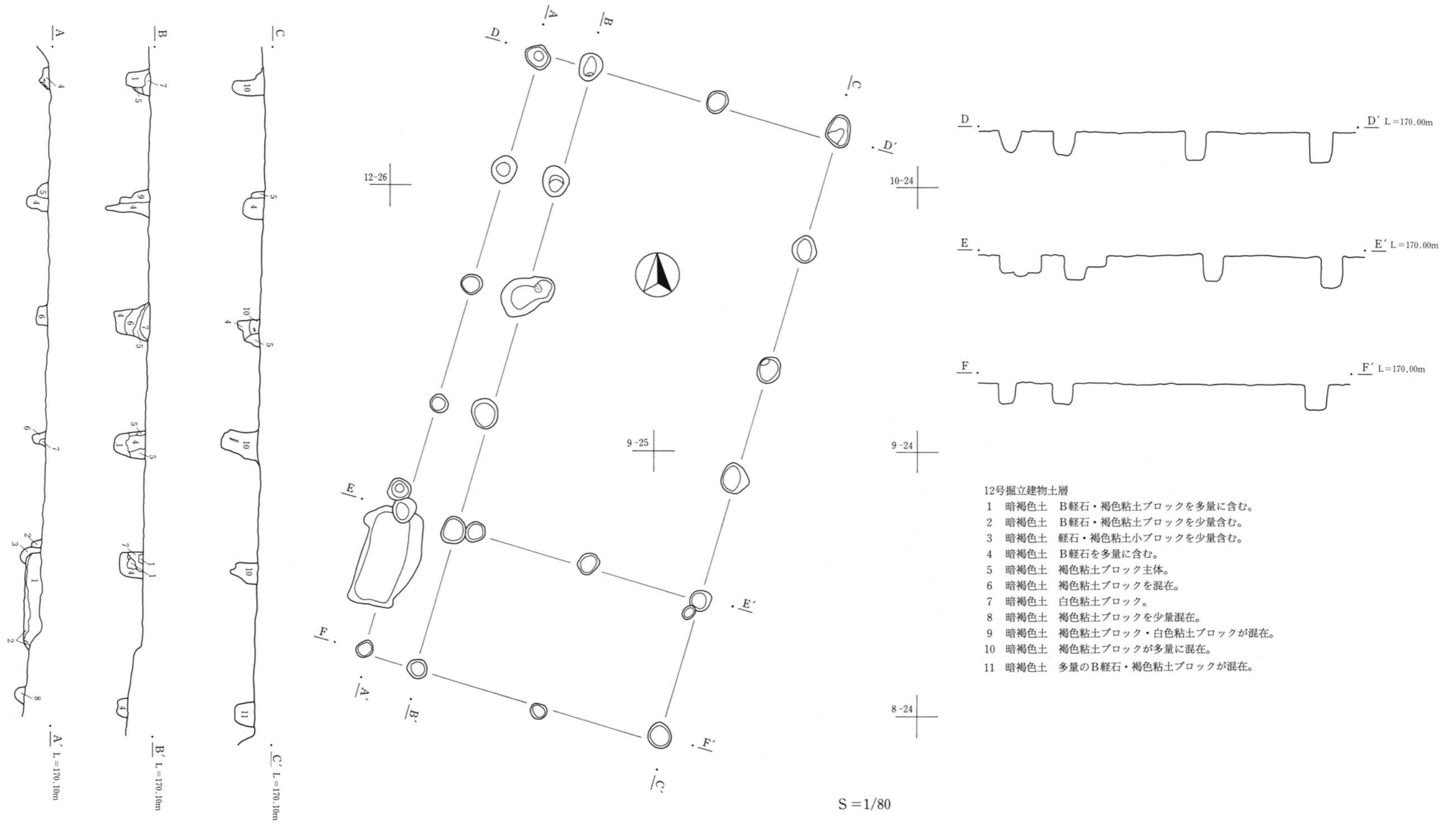


11号掘立建物土層

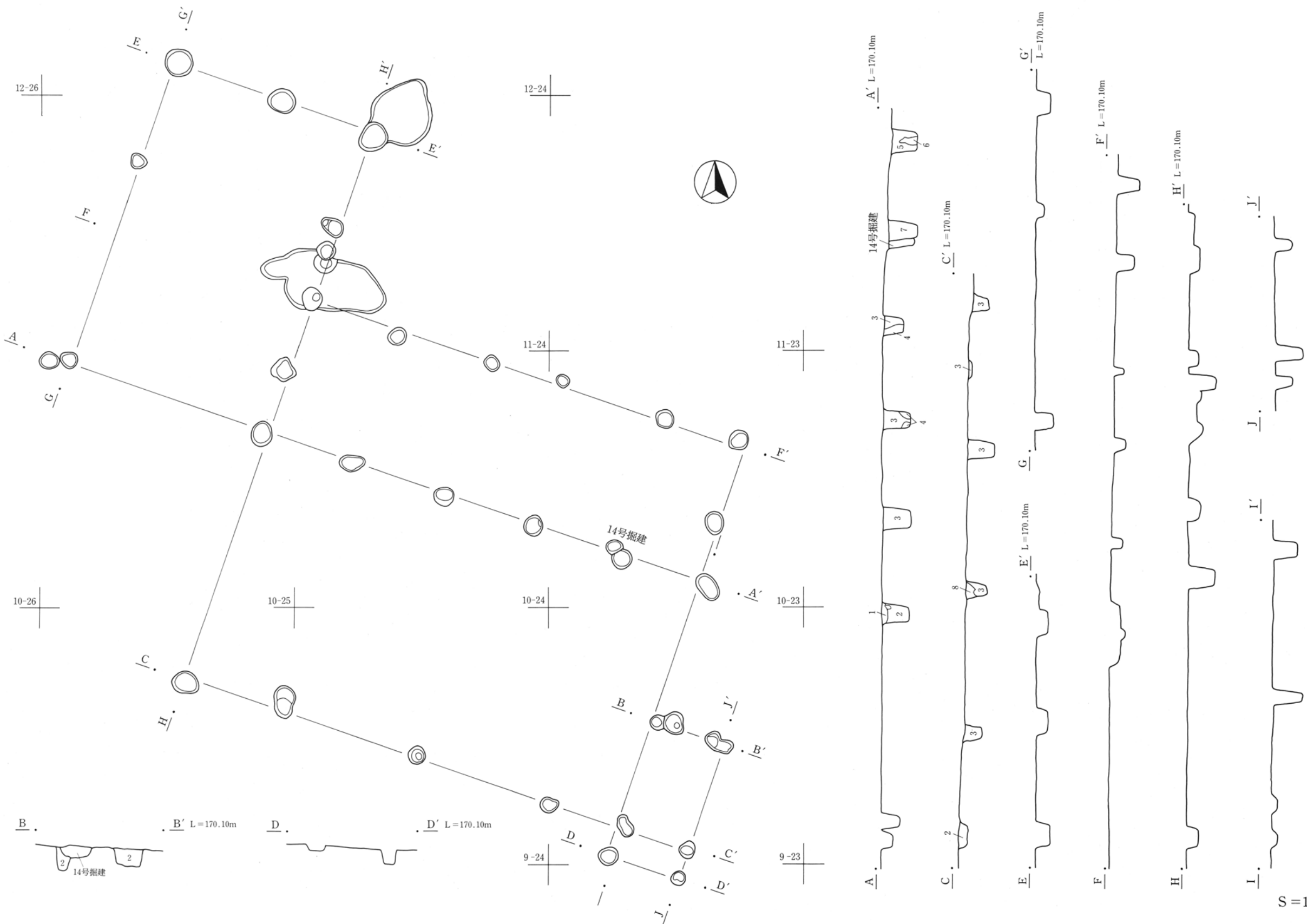
- 1 暗褐色土 B軽石を多量に含み褐色土ブロックが混在。
- 2 暗褐色土 褐色粘土ブロックが多量に混在。
- 3 暗褐色土 B軽石を含み褐色粘土ブロックが混在。
- 4 暗褐色土 褐色粘土ブロックを含む。
- 5 暗褐色土 白色粘土ブロック主体の粘土層。
- 6 暗褐色土 混入物少なくやや粘質。
- 7 暗褐色土 褐色粘土ブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 白色・褐色粘土ブロックを多量に混在。
- 9 暗褐色土 白色粘土ブロックを多量に混在。
- 10 暗褐色土 白色粘土ブロック主体に褐色粘土ブロックが混在。

S = 1/80

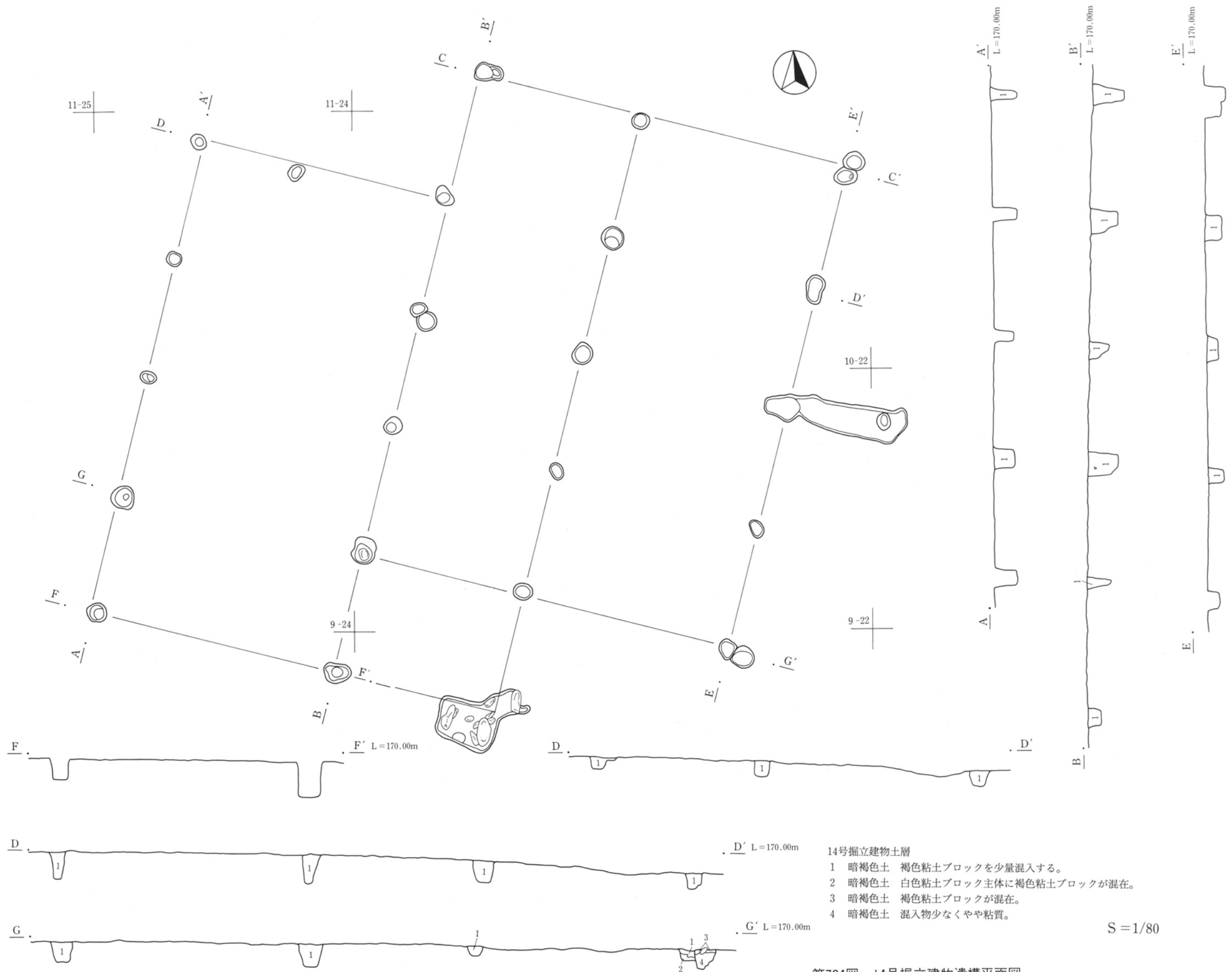
第721図 11号掘立建物遺構断面図



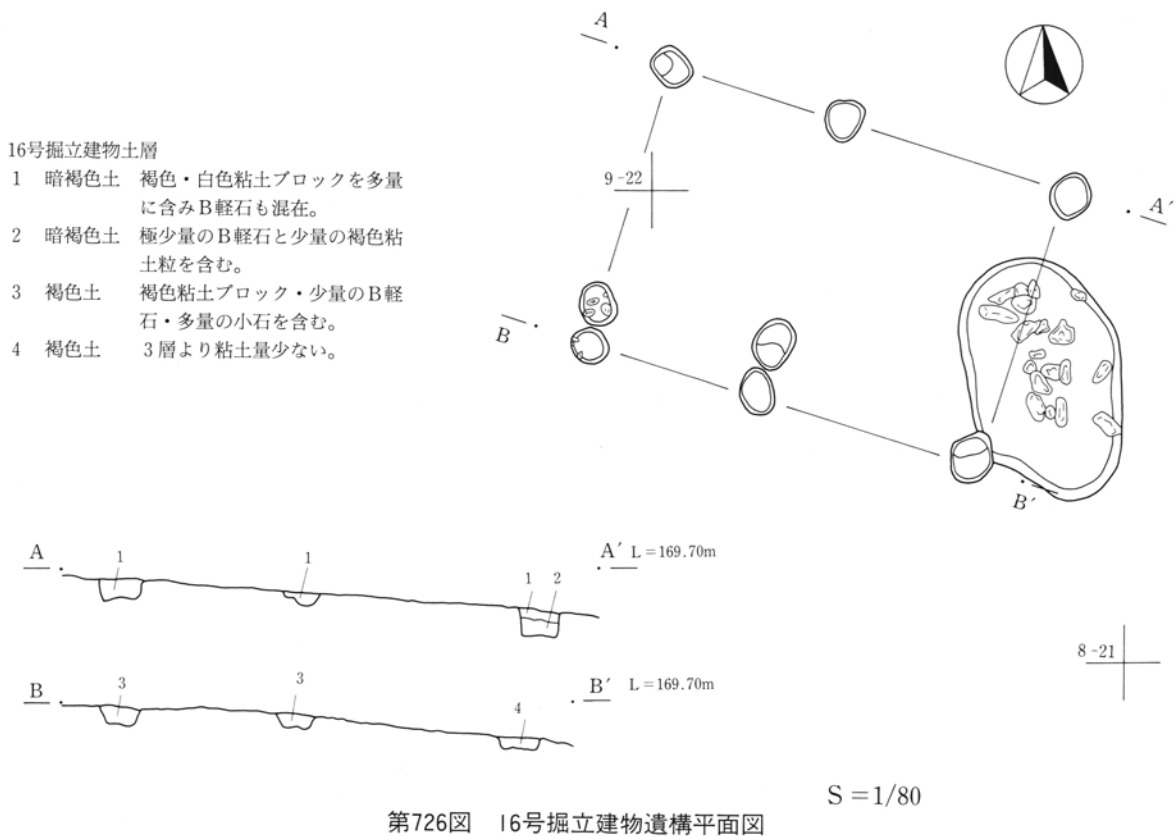
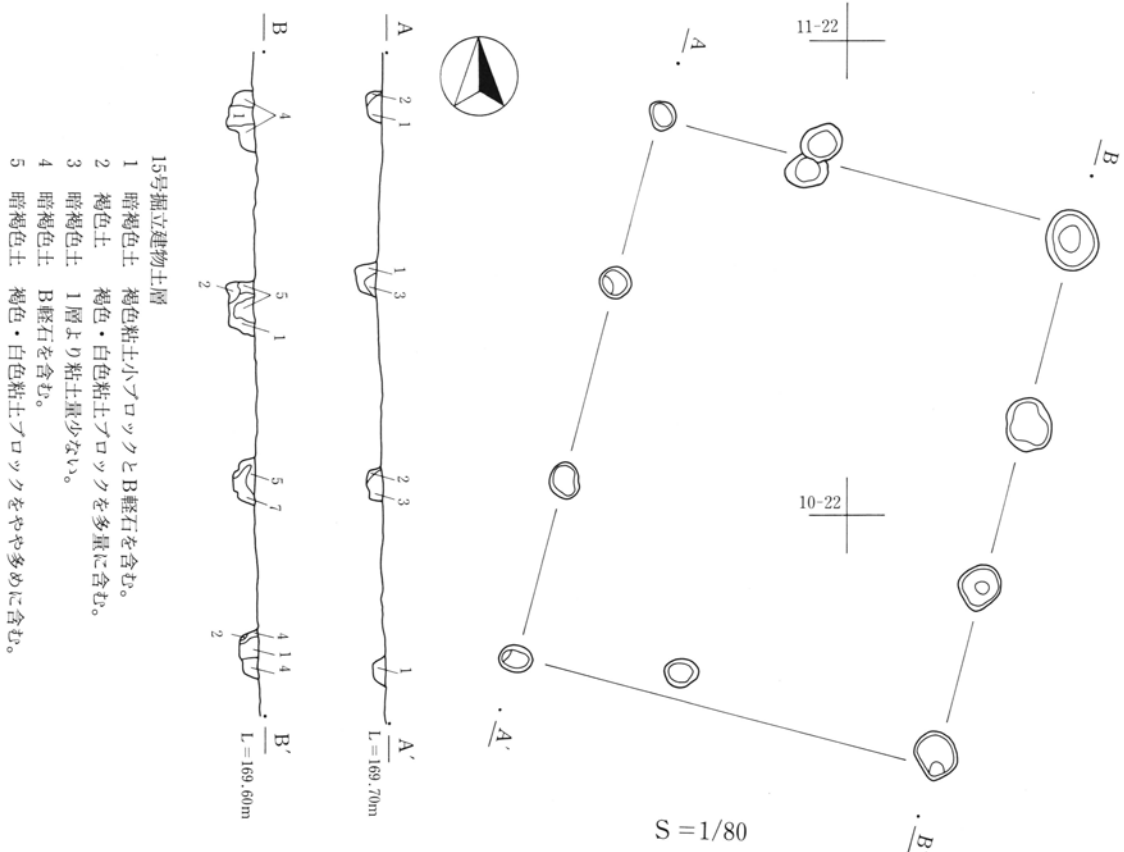
第722図 12号掘立建物遺構平面図



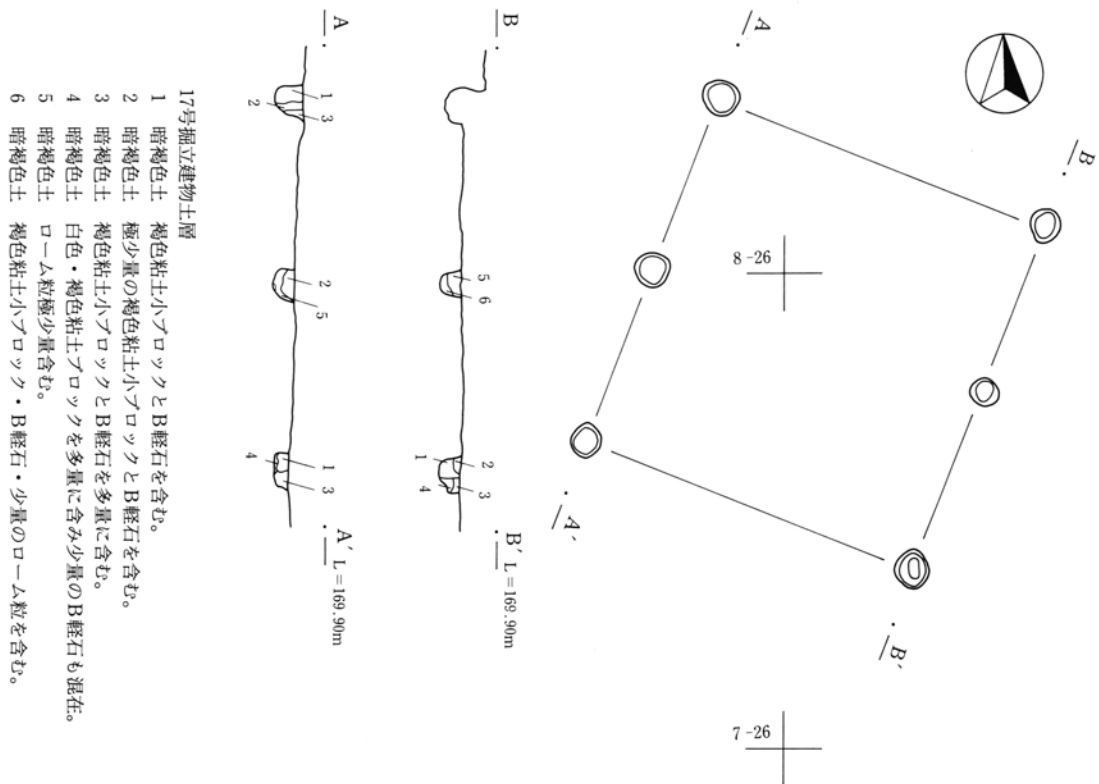
第723図 13号掘立建物遺構平面図



第724図 14号掘立建物遺構平面図



第3章 検出された遺構と遺物



第727図 17号掘立建物遺構平面図

S = 1/80

23号掘立建物 (第731図)

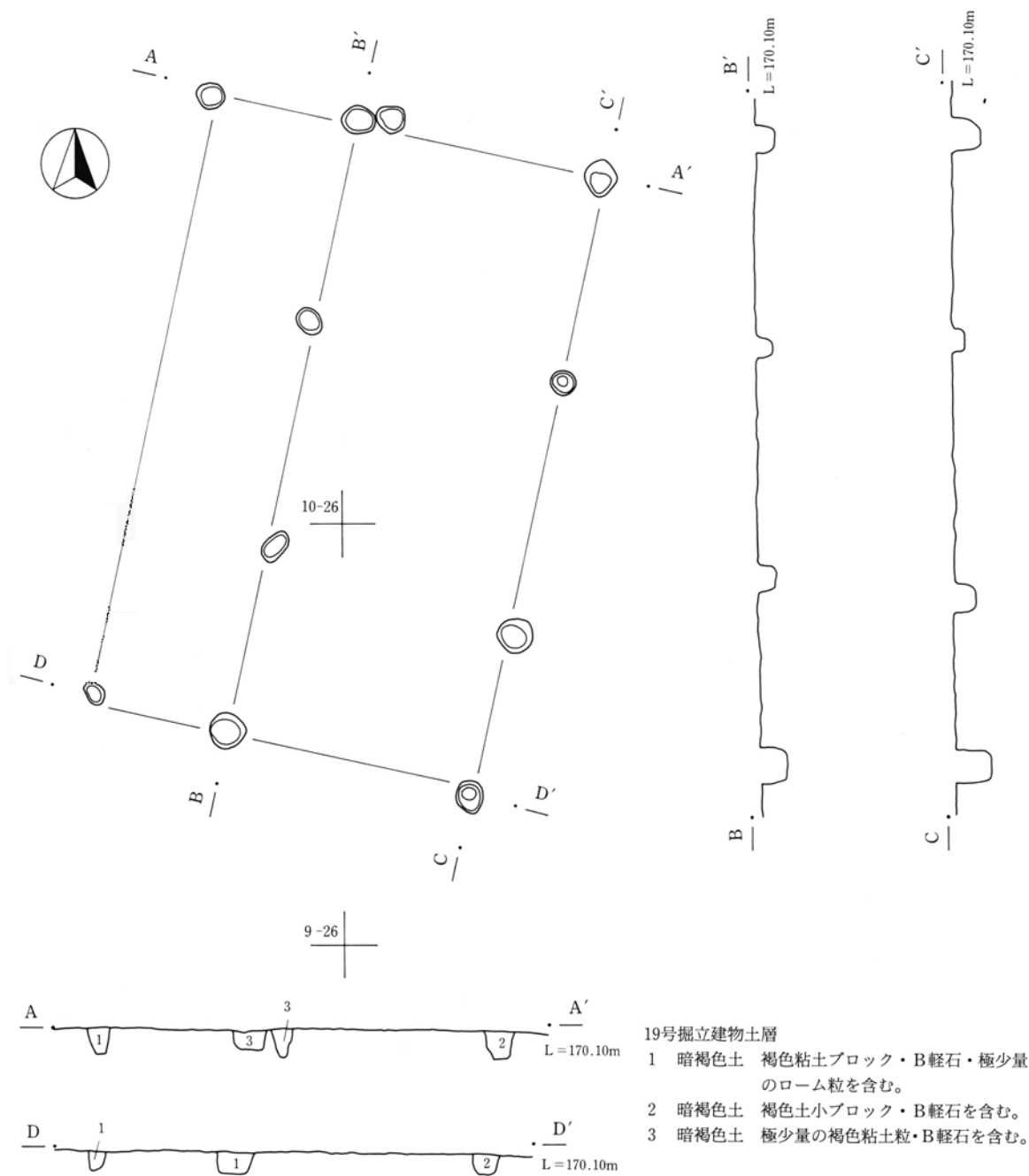
1 B郭の中央西寄りにあり、8-26グリッドを中心に位置する。12・17・20号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(4.66m)×1間(4.06m)の南北にやや長い建物で、桁行方向は、N-20°-Eである。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

24号掘立建物 (第732図)

1 B郭の北東寄りにあり、10-23グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の北東部、および13・14・15・25号掘立建物と重複する。検出された建物は、4間(7.68m)×2間(3.76m)の南北に長い建物と、3間(4.98m)×2間(3.78m)の東西に長い建物が、T字状に組み合わせた形状を呈し、東西8.74m、南北7.68mの建物規模となる。建物の長軸方向は、N-78°-Wである。建物は、1.90m前後の柱間が基本となっているが、南北方向の建物の東辺にT字状に連結する東西方向の建物の接続部での柱間は、1.18mと狭くなっている。なお、南北方向の建物の東南隅の柱穴は検出されていないが、本来は存在したものと想定される。重複する掘立建物との新旧関係は、25号掘立建物の方が古く、他とは不明である。

25号掘立建物 (第733図)

1 B郭の北東隅にあり、9・10-22グリッドを中心に位置する。郭内で最大の11号掘立建物の北東側にあり、14・15・24号掘立建物と重複する。検出された建物は、4間(9.60m)×2間(4.12m)の南北に長い建物で、桁行方向は、N-16°-Eである。桁行方向の南側の柱間は3.10m前後と広く、中間の2間分は1間2.



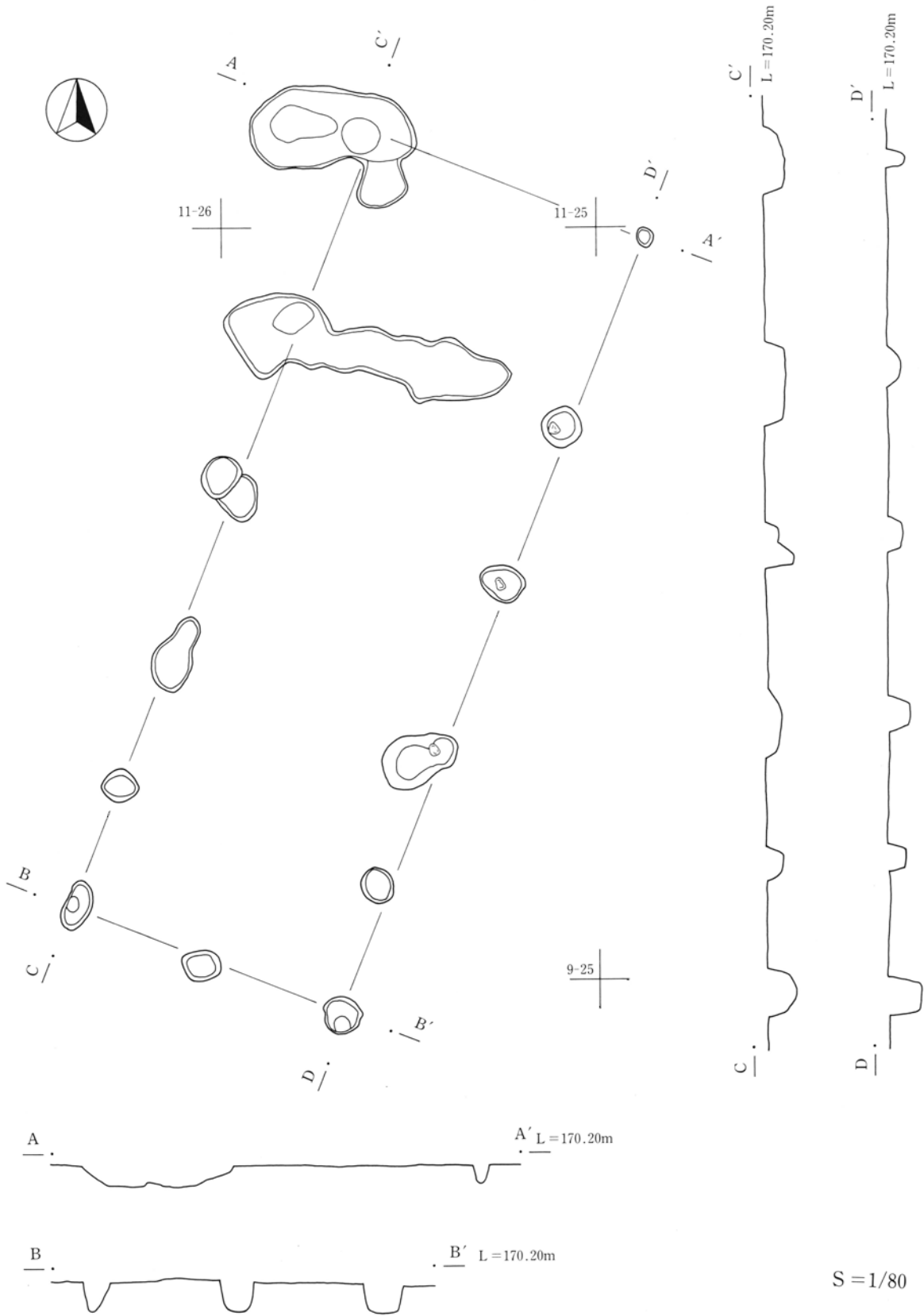
S = 1/80

第728図 19号掘立建物遺構平面図

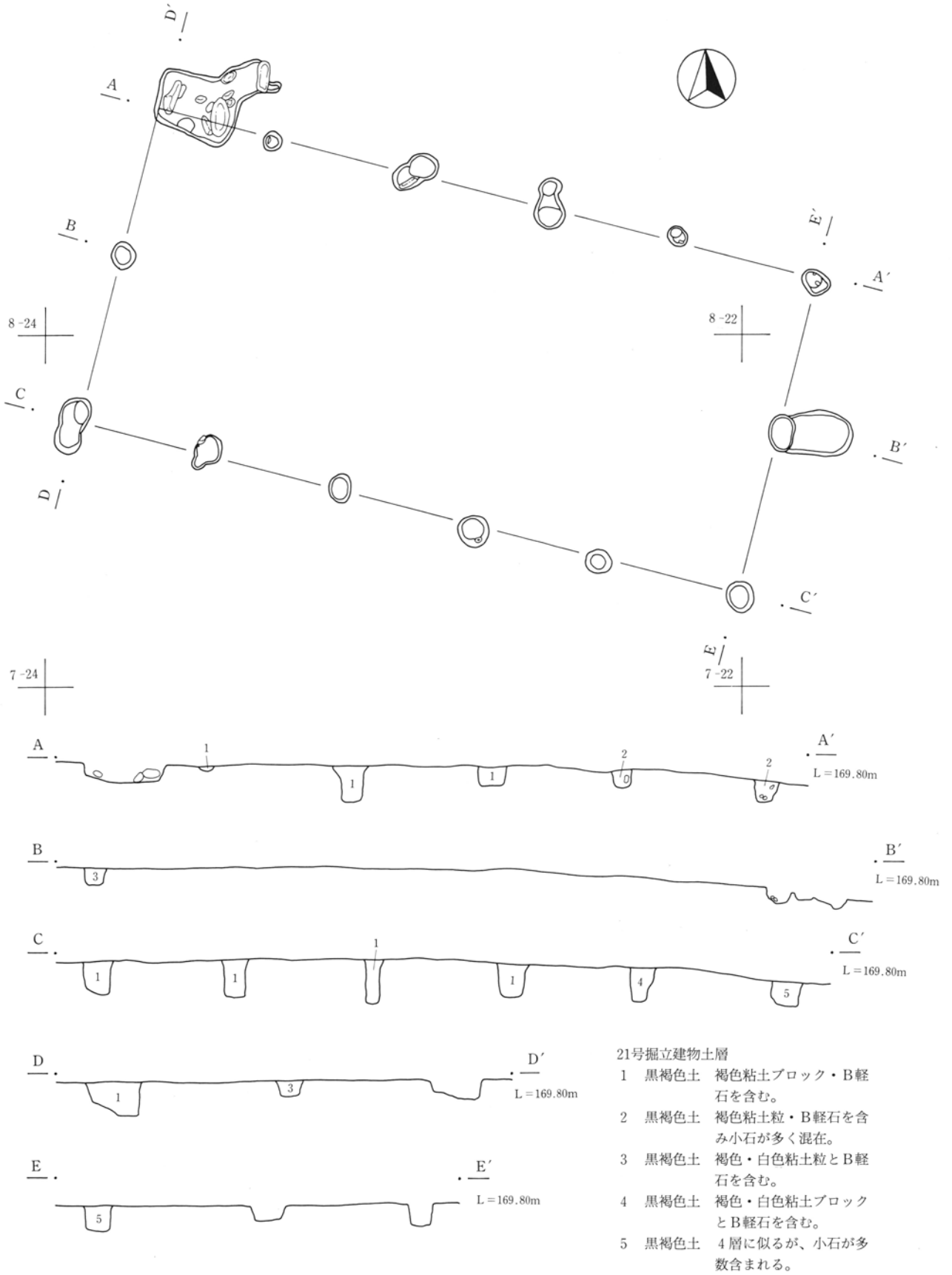
60m前後を測り、北側では1、36mと中間の柱間の半間と狭い。重複する掘立建物との新旧関係は、24号掘立建物の方が新しく、他とは不明である。

26号掘立建物 (第734図)

1 A郭の中央東寄りにあり、10-30グリッドを中心に位置する。27号掘立建物の北隣で、46号掘立建物と重複する。検出された建物は、4間(8.56m)×1間(4.00m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-76°-Wである。他の建物に比べ、個々の柱穴は大きく、褐色粘土ブロックを含む復土により、多柱穴との識別も明

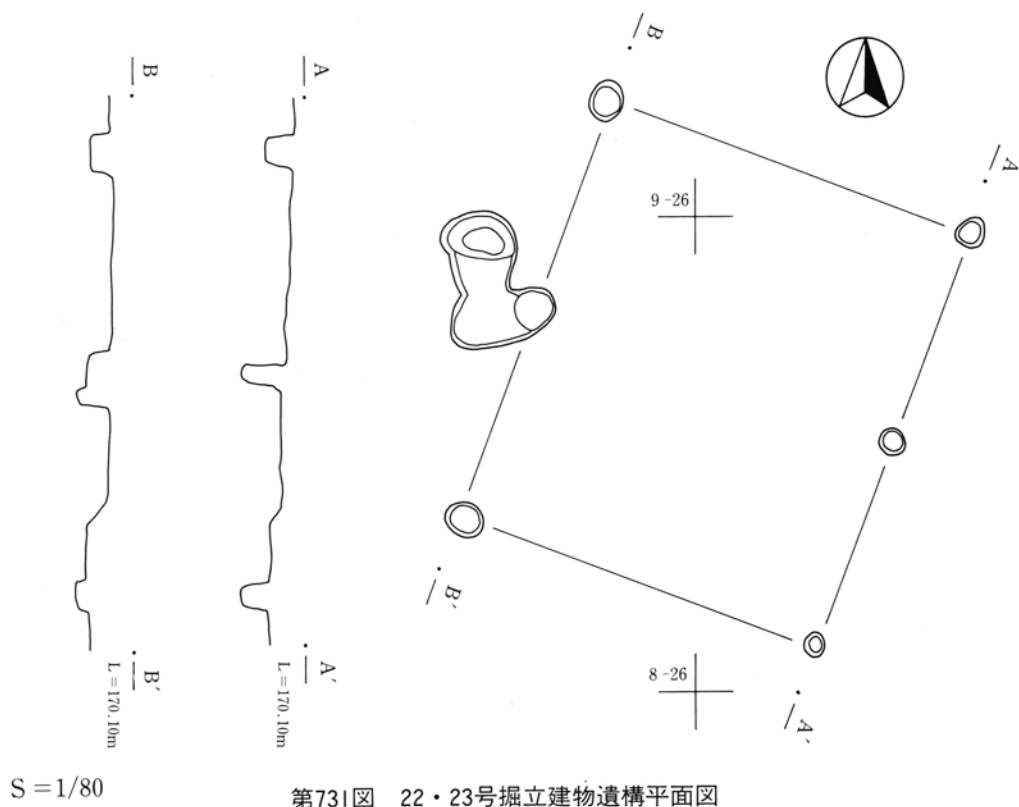
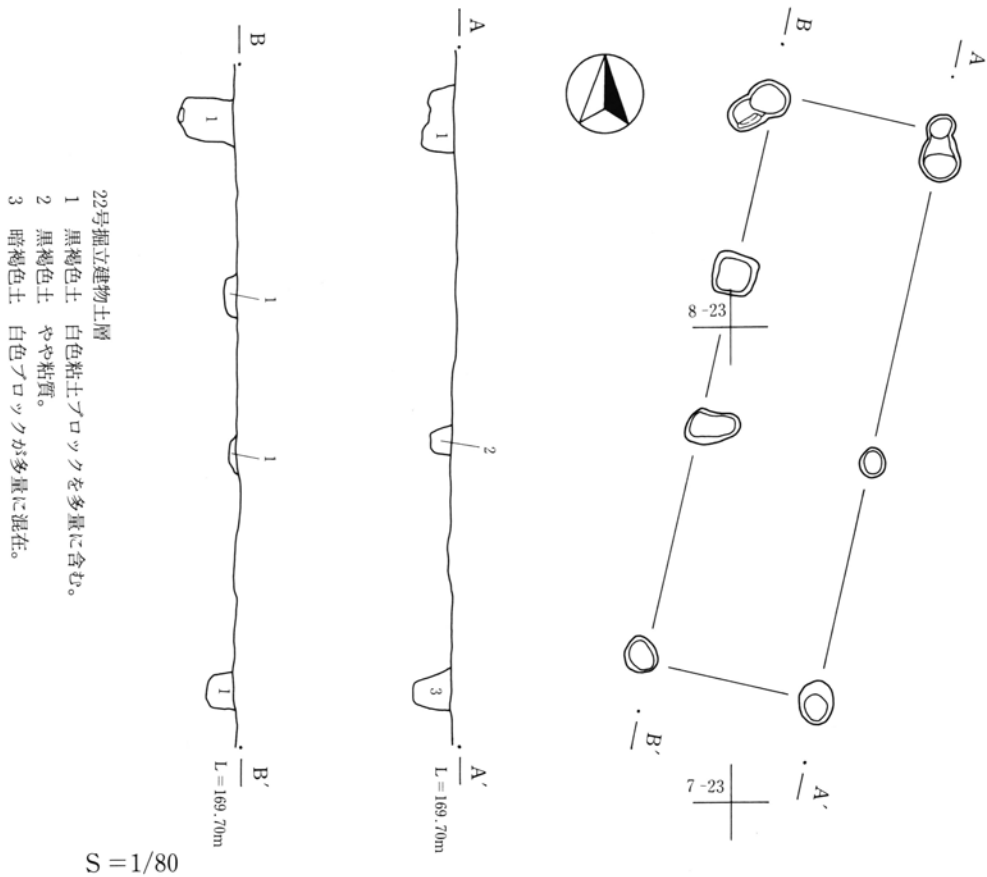


第729図 20号掘立建物遺構平面図

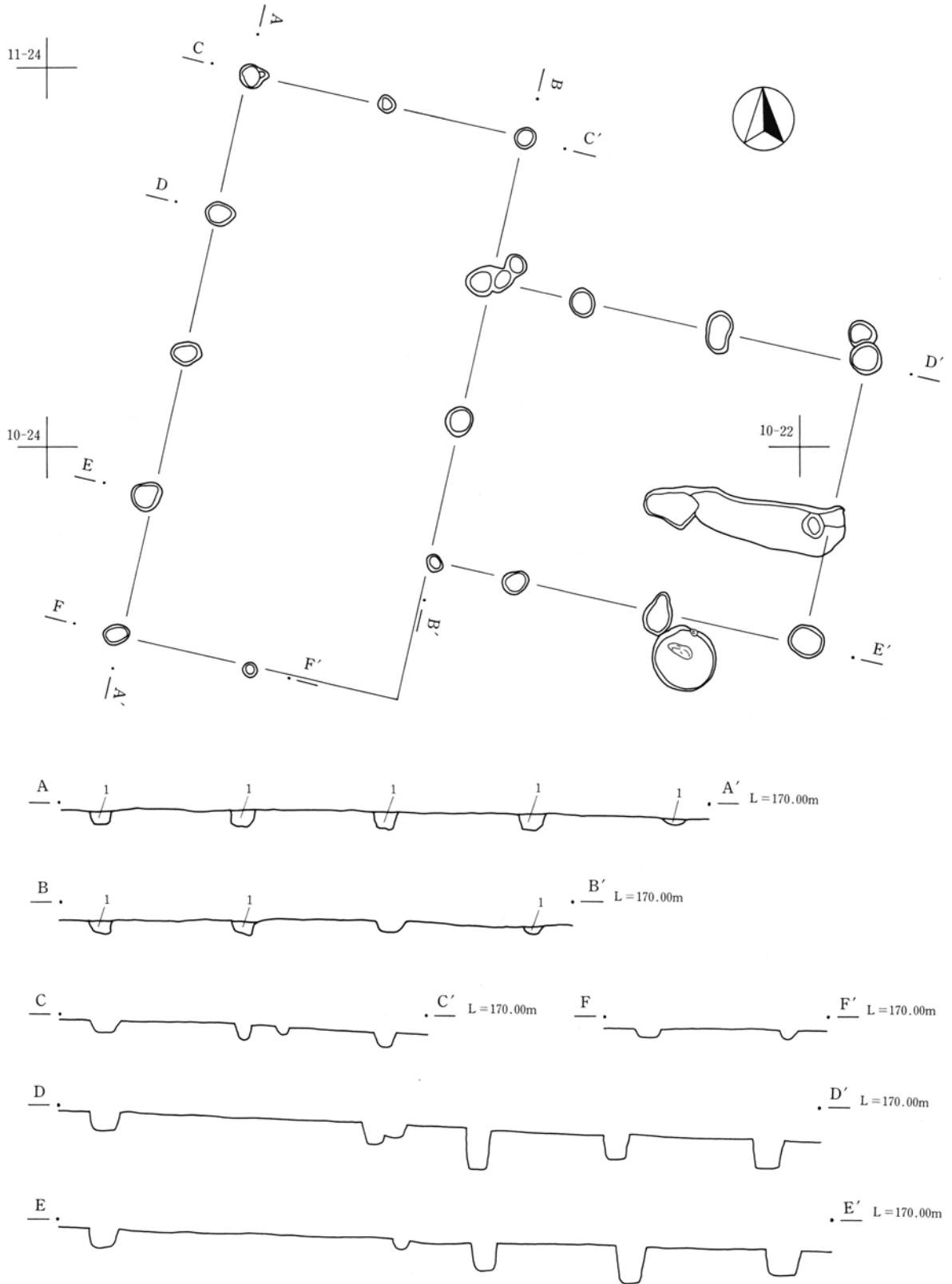


第730図 21号掘立建物遺構平面図

第3章 検出された遺構と遺物



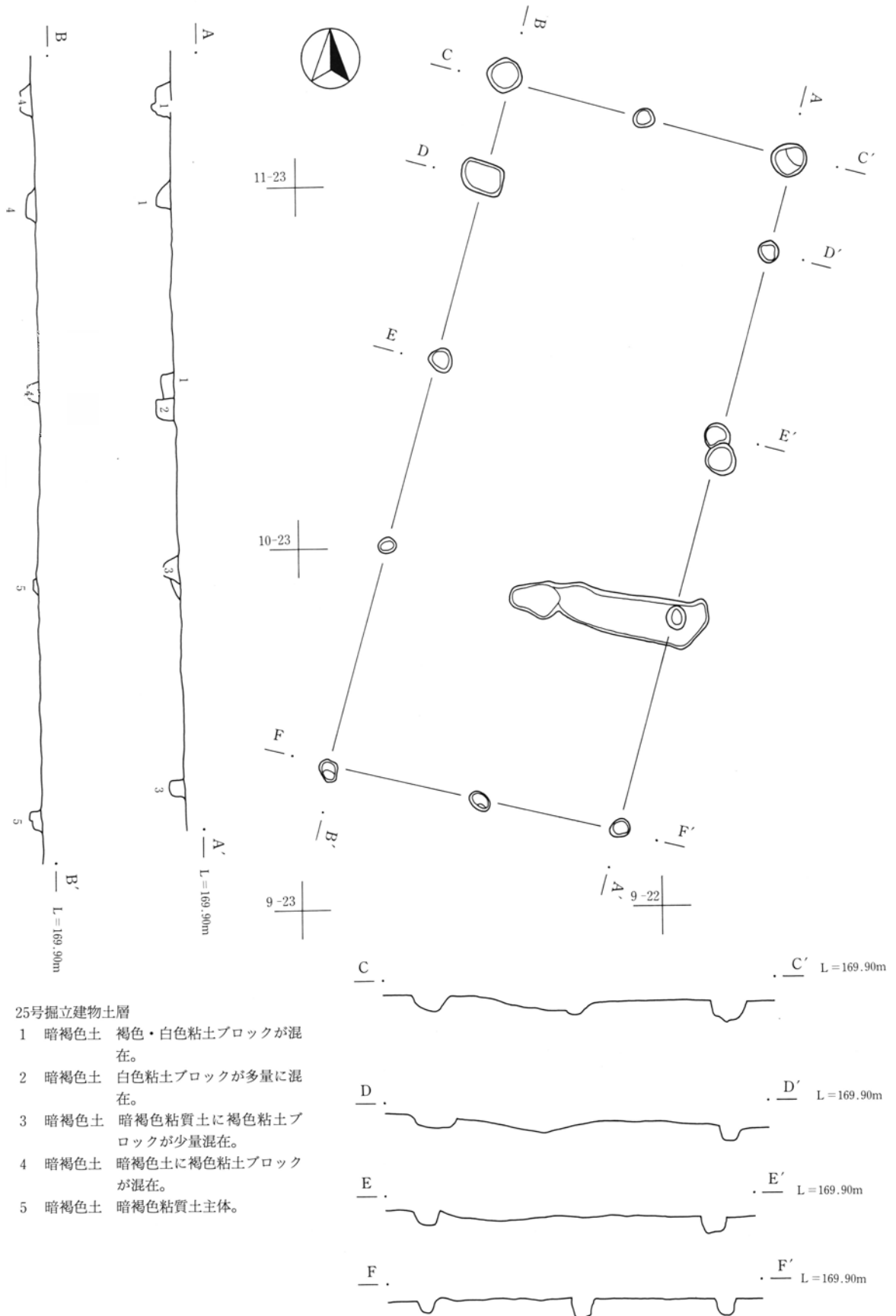
第731図 22・23号掘立建物遺構平面図

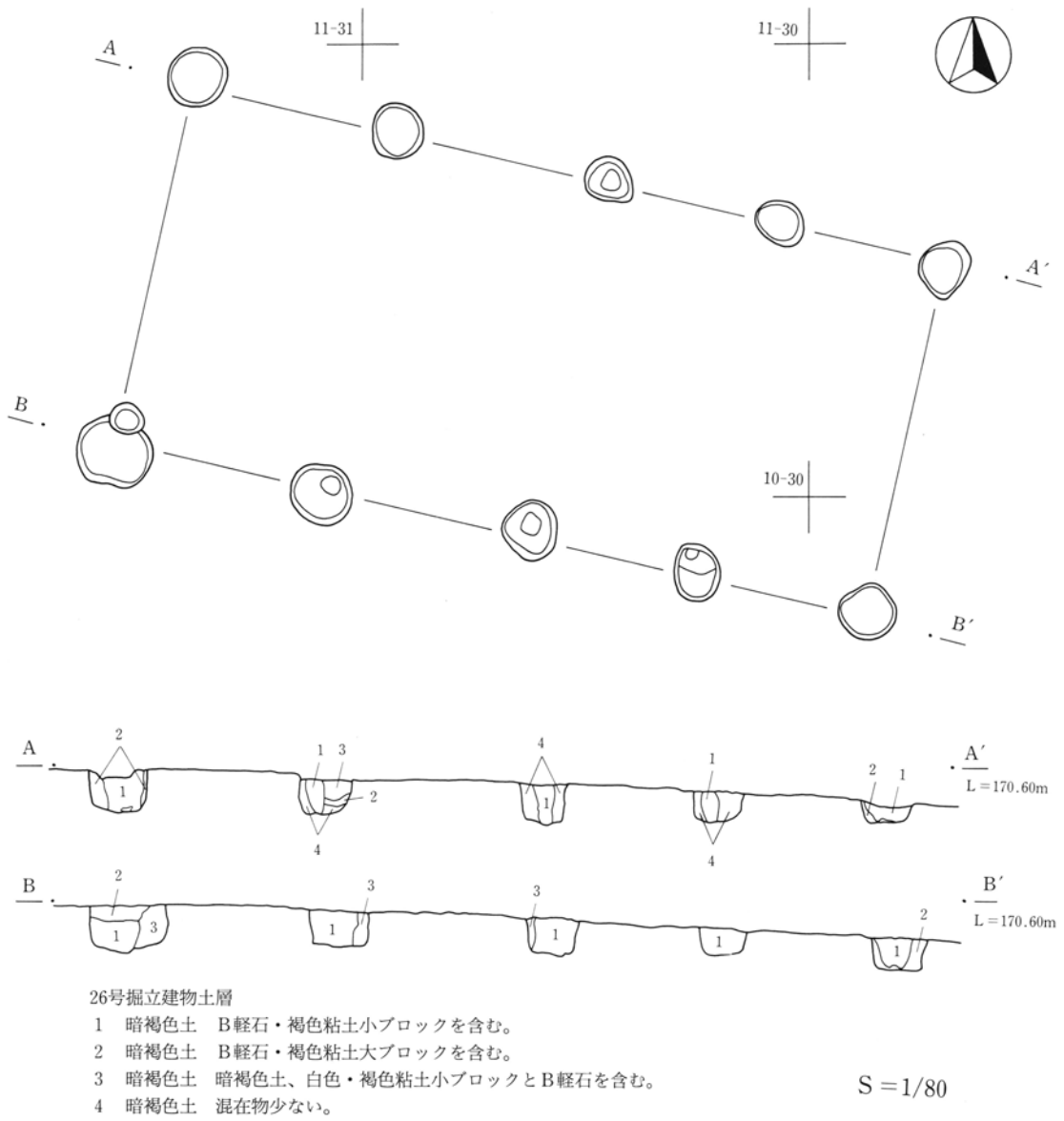


24・6号掘立建物土層
 1 暗褐色土 褐色粘土ブロックが少量混在。

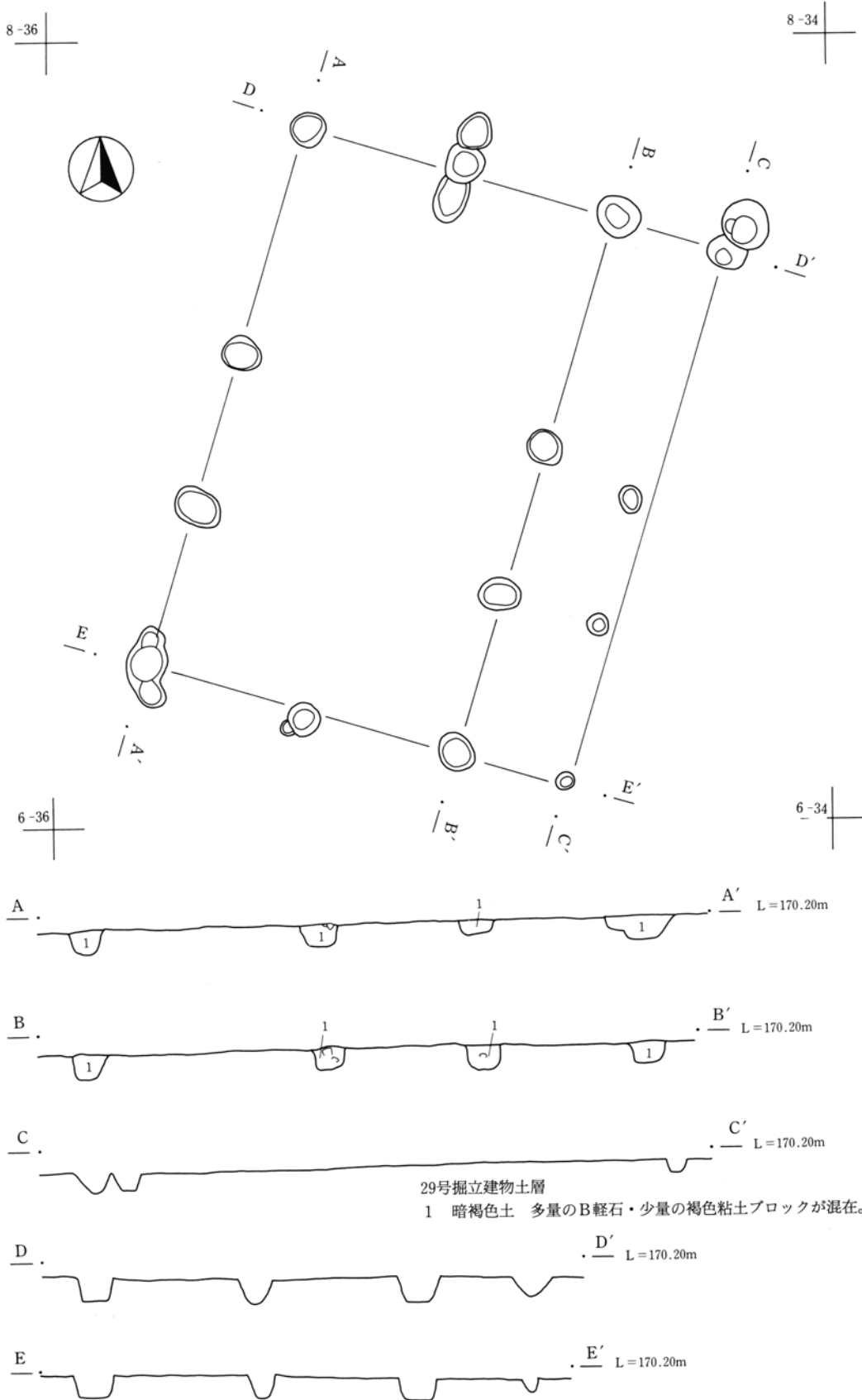
S = 1/80

第723図 24号掘立建物遺構平面図



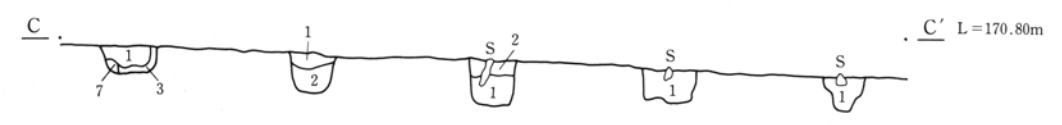
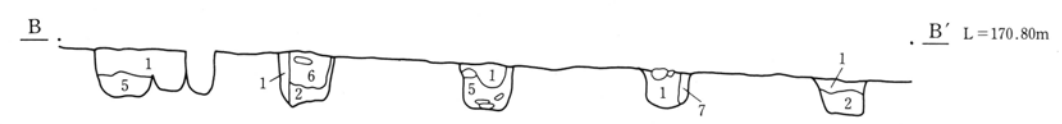
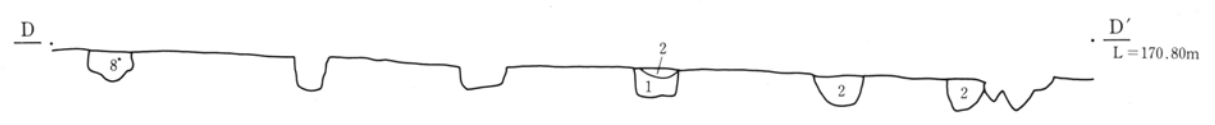
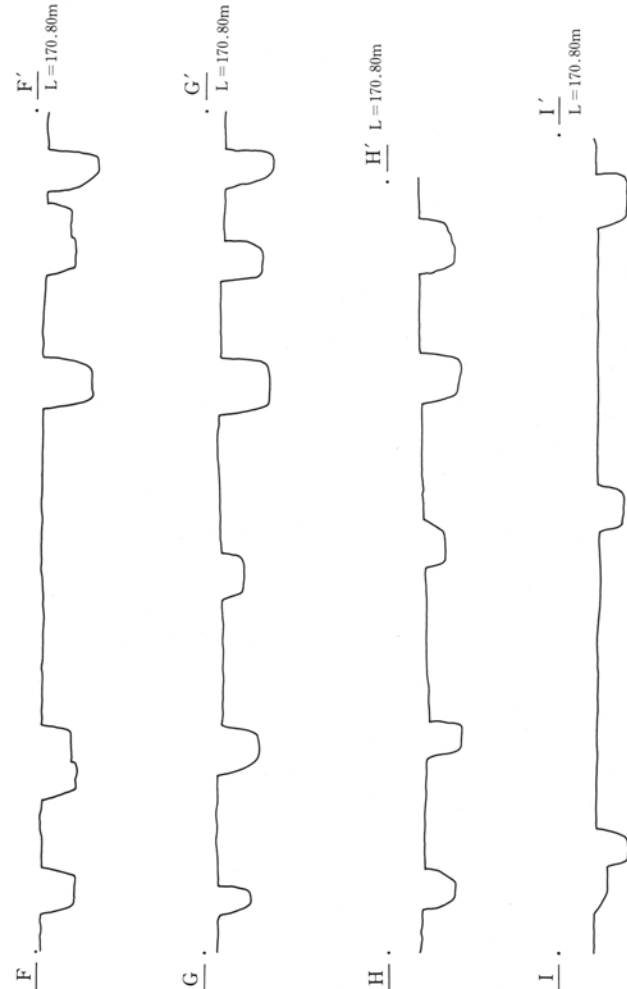
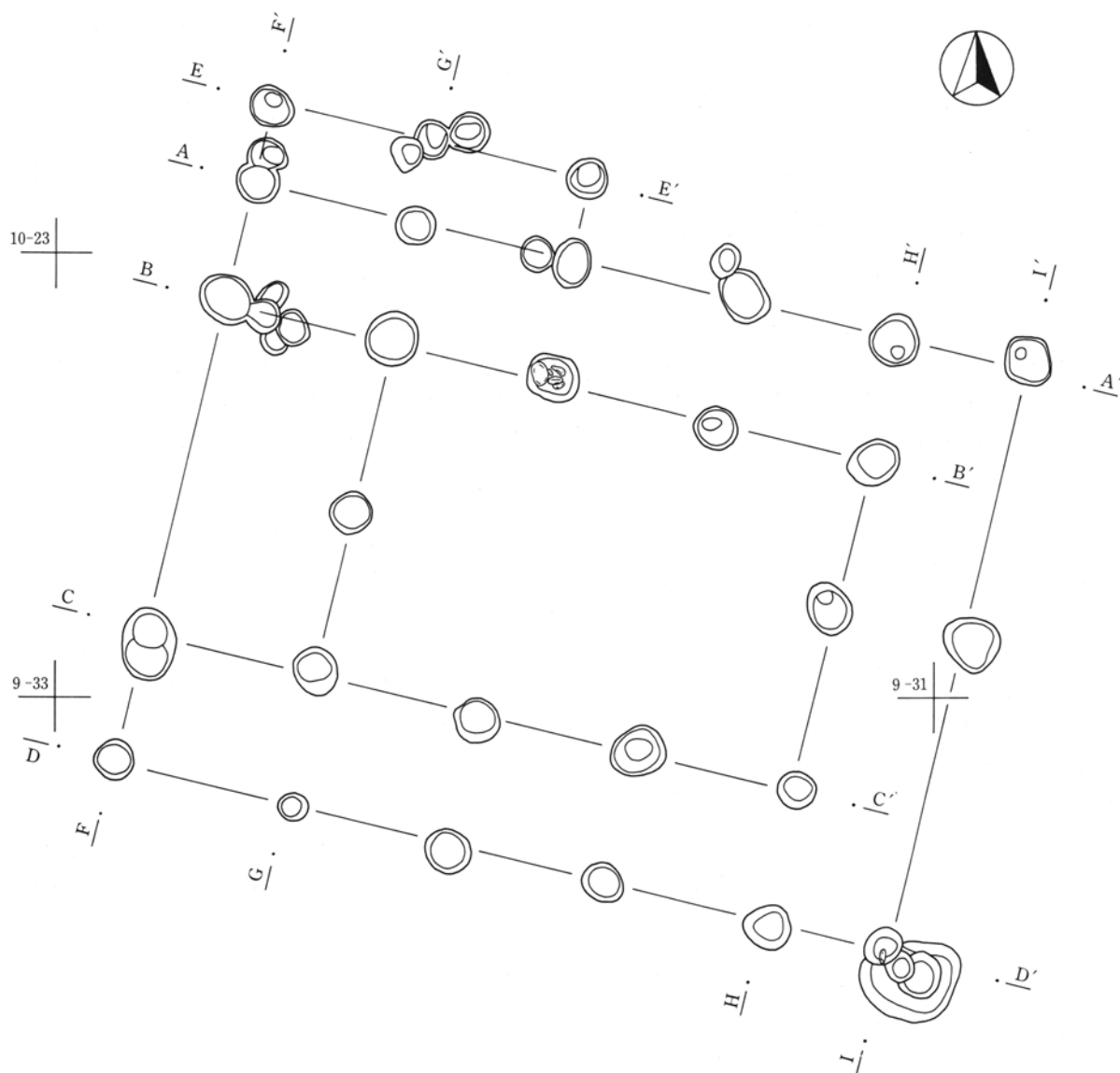


第734図 26号掘立建物遺構平面図



第735図 29号掘立建物遺構平面図

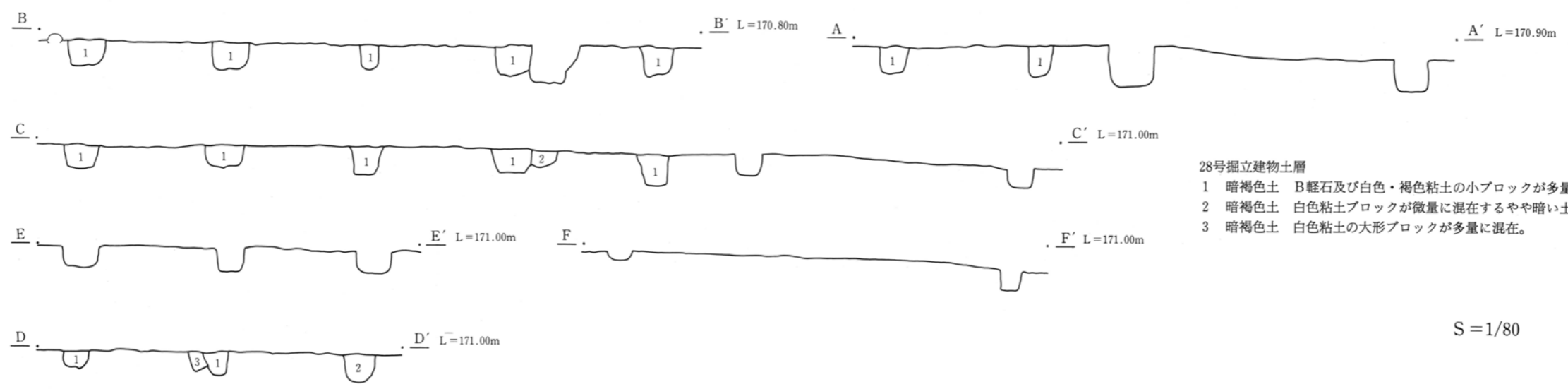
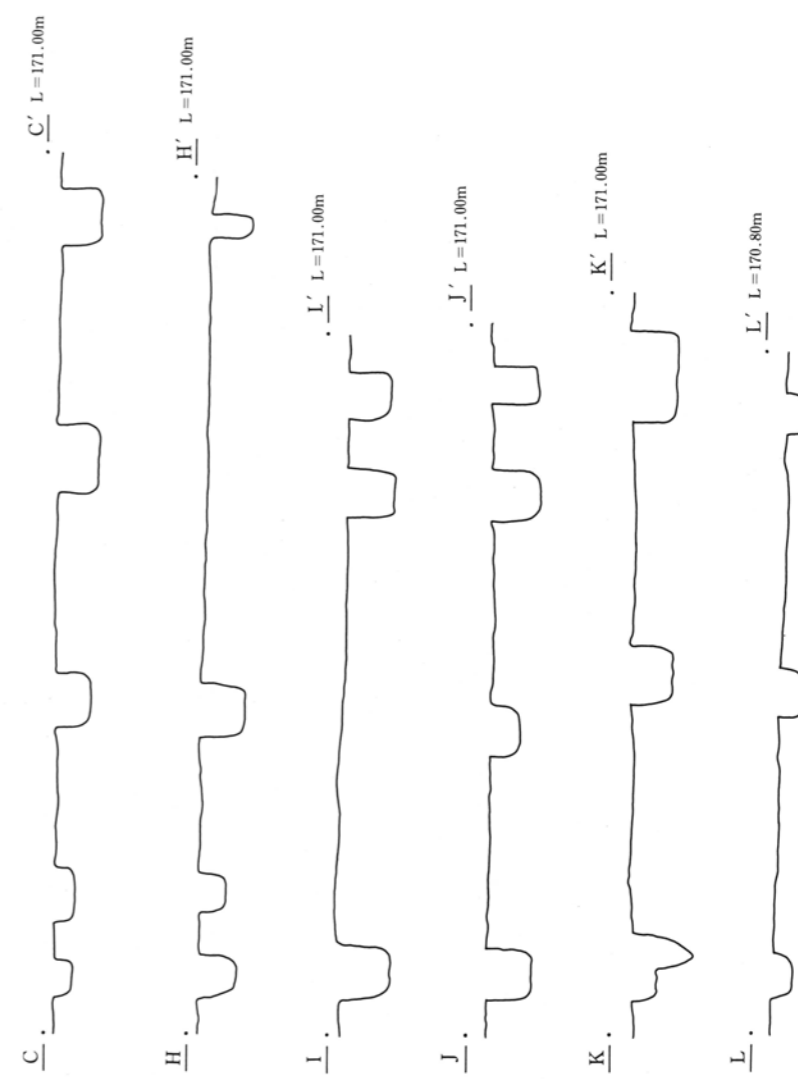
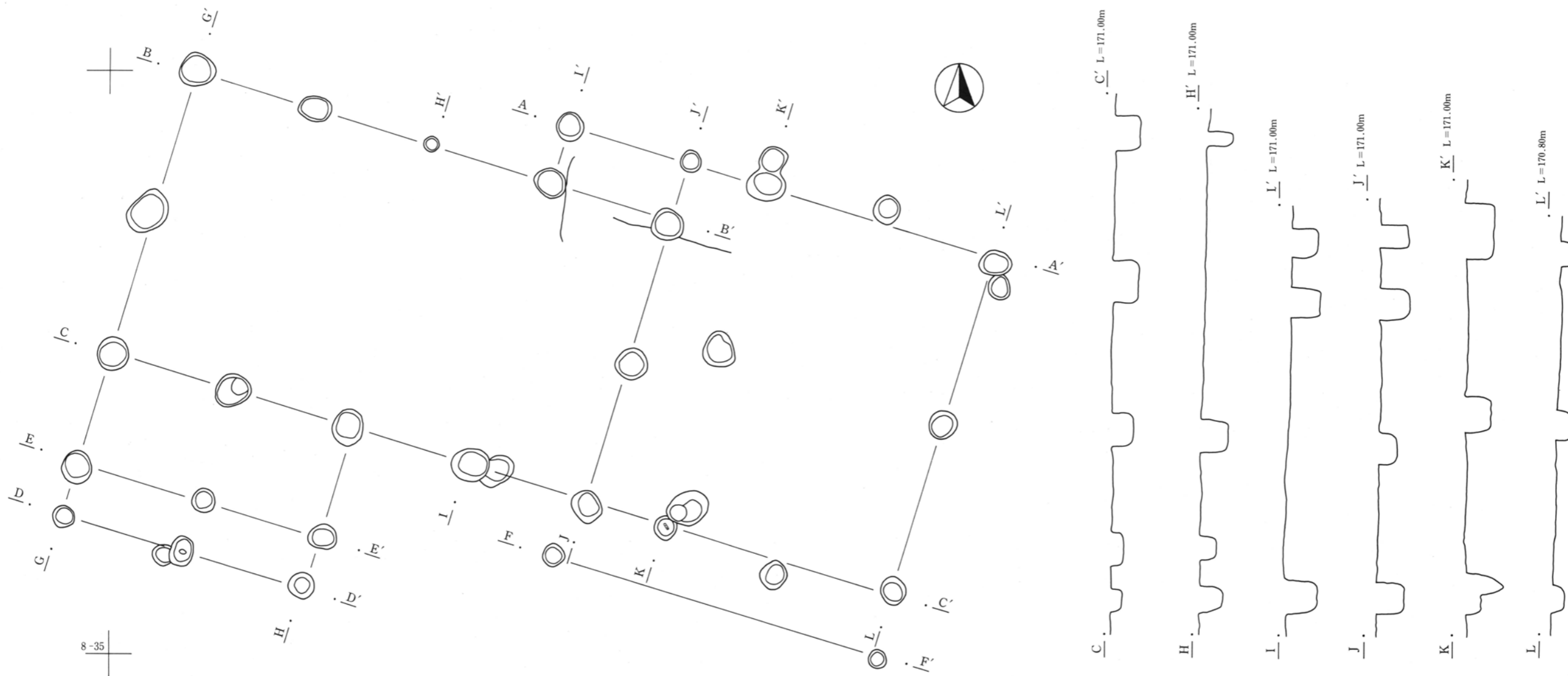
S=1/80



- 27号掘立建物土層
- 1 暗褐色土 B軽石と少量の褐色粘土小ブロックを含む。
 - 2 暗褐色土 B軽石と多量の褐色粘土小ブロックを含む。
 - 3 暗褐色土 混入物少ない。
 - 4 暗褐色土 ややB軽石多い。
 - 5 暗褐色土 B軽石と褐色粘土粒を少量含む。
 - 6 褐色土 白色・褐色粘土ブロックを多量に含む。
 - 7 褐色土 褐色粘土ブロックを多量に含む。
 - 8 暗褐色土 多量のB軽石と褐色粘土ブロックを含む。

S=1/80

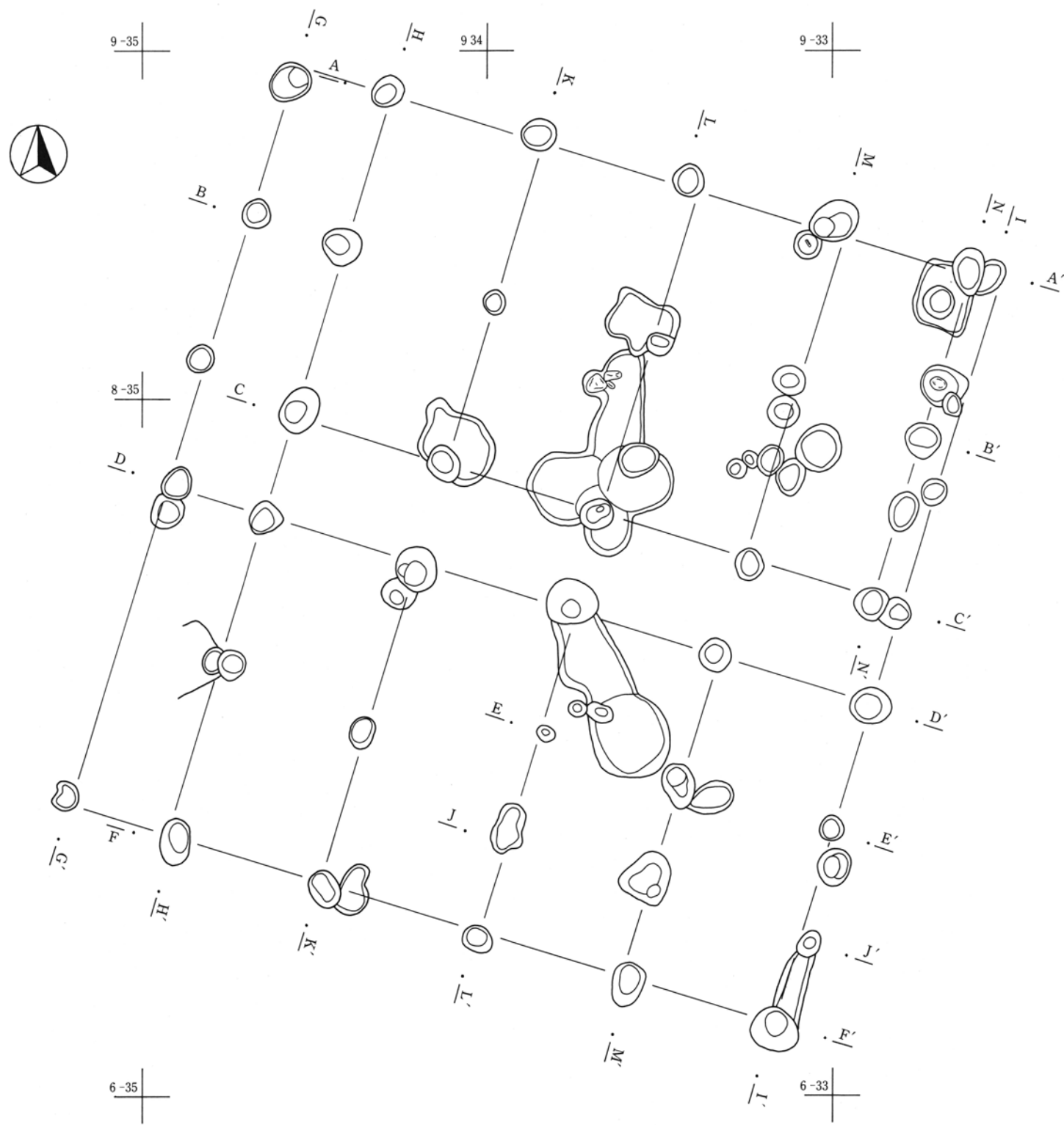
第736図 27号掘立建物遺構平面図



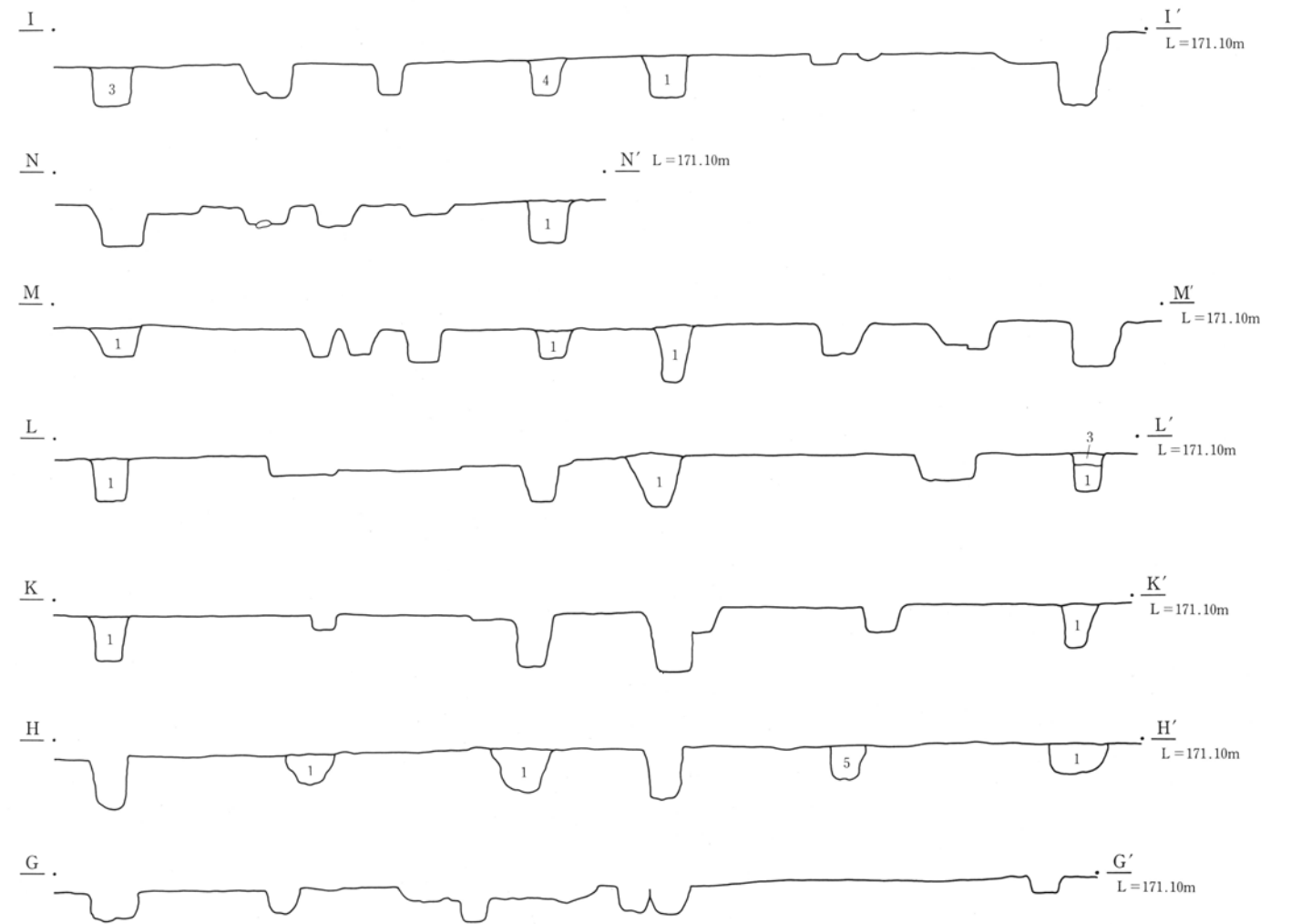
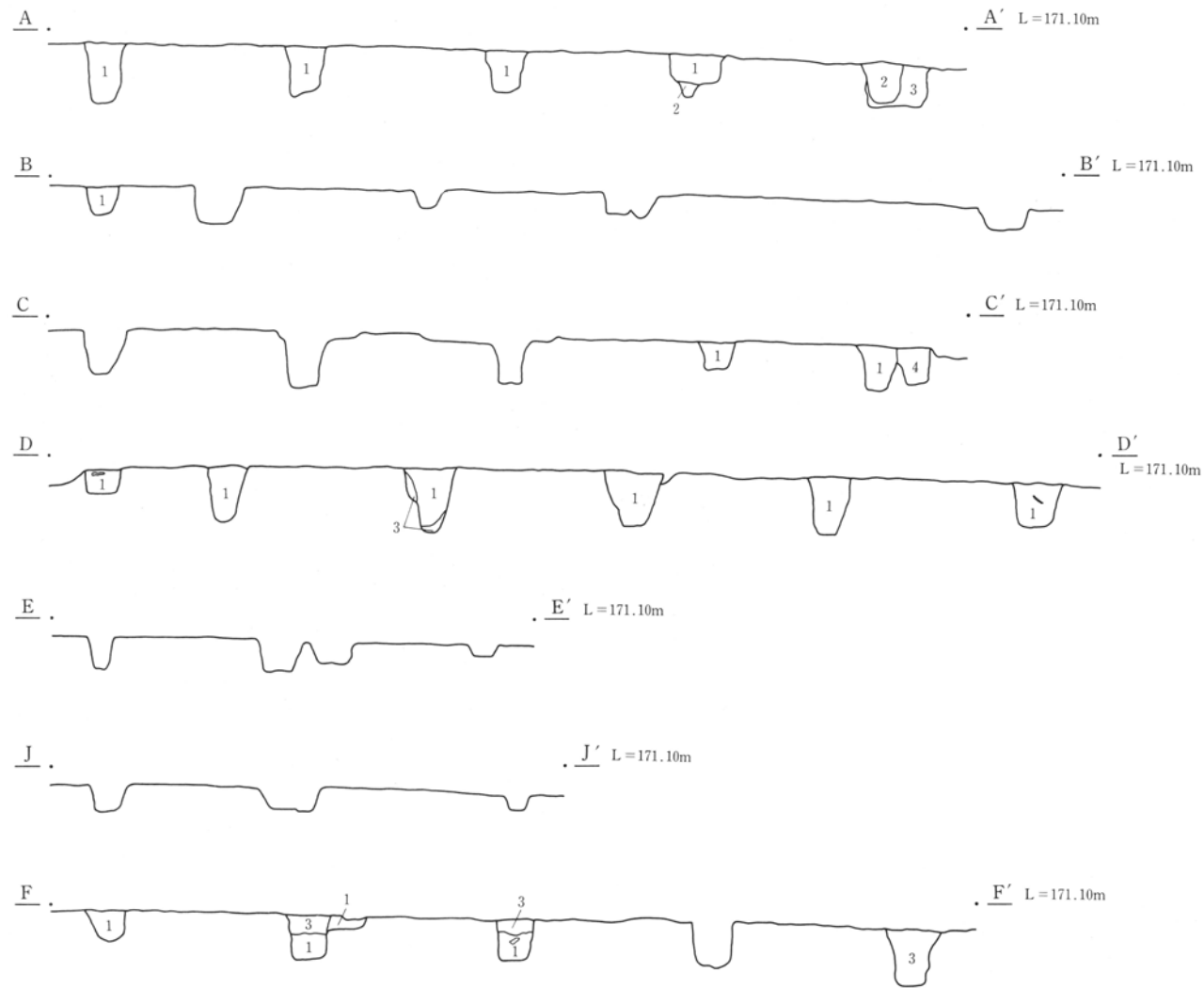
- 28号掘立建物土層
- 1 暗褐色土 B軽石及び白色・褐色粘土の小ブロックが多量に混在。
 - 2 暗褐色土 白色粘土ブロックが微量に混在するやや暗い土。
 - 3 暗褐色土 白色粘土の大形ブロックが多量に混在。

S=1/80

第737図 28号掘立建物遺構平面図



第738图 30号掘立建物遺構平面図

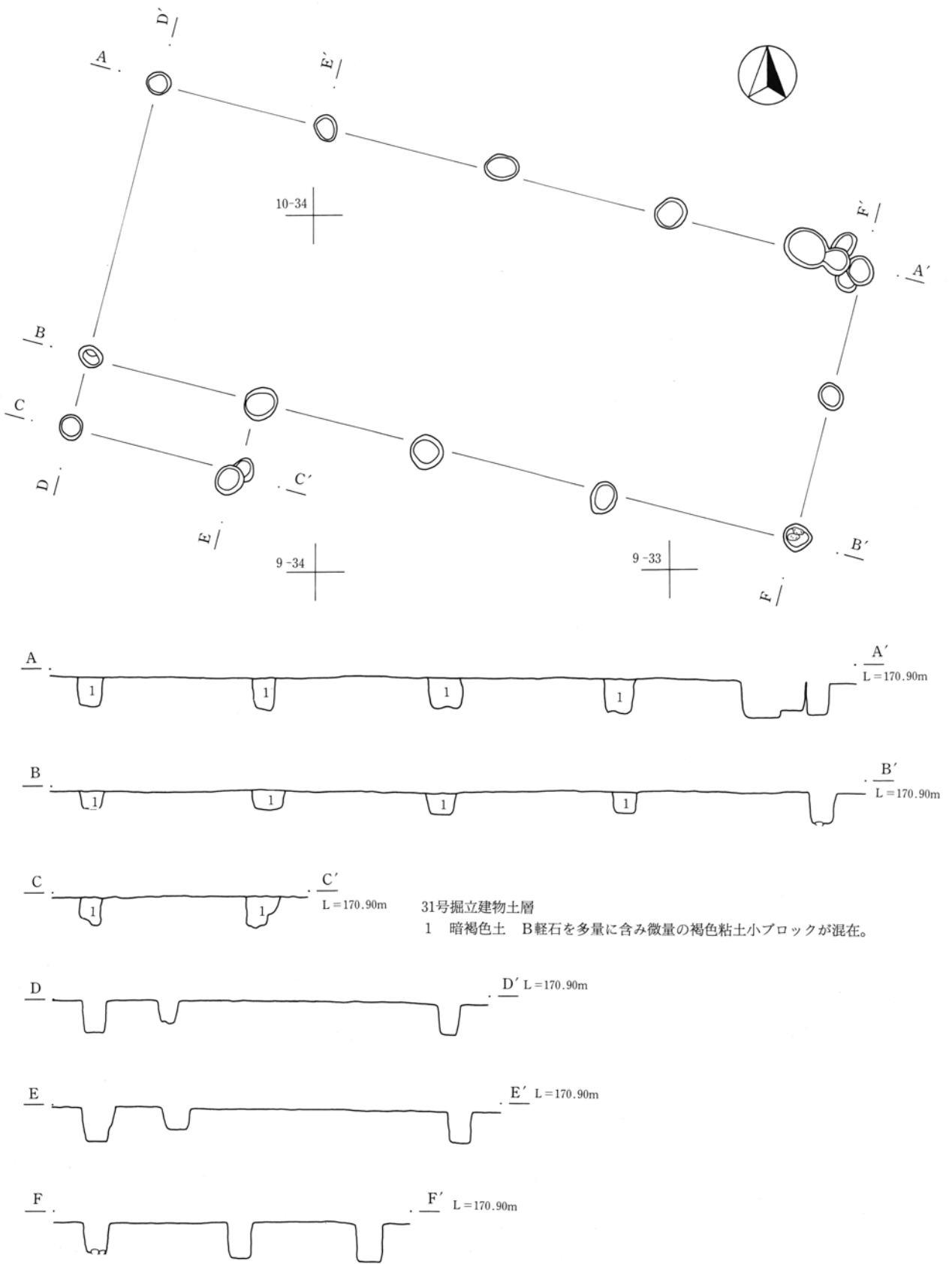


30号掘立建物土層

- 1 暗褐色土 褐色粘土小ブロック少量とB軽石を含む。
- 2 暗褐色土 白色・褐色粘土ブロックとB軽石を少量含む。
- 3 褐色土 褐色・白色粘土ブロックを多量に含む。
- 4 暗褐色土 白色・褐色粘土ブロックを多量に、B軽石・ローム粒も含む。
- 5 暗褐色土 褐色粘土小ブロック・B軽石・白色粘土ブロックを少量含む。

S = 1/80

第739図 30号掘立建物遺構断面図



第740図 31号掘立建物遺構平面図

S=1/80

第3章 検出された遺構と遺物

瞭であった。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

27号掘立建物（第736図）

1 A郭のほぼ中央東寄りにあり、9-31グリッドを中心に位置する。郭内で最大の30号掘立建物の北東側にあり、28・31・33・43・44・46号掘立建物と重複する。検出された建物は、外側が5間（9.02m）×2間（6.74m）、内側が4間（7.58m）×2間（3.82m）の東西に長い建物に、外側北辺の西側2間分に柱間約1mほどが出張り、L形状となる。桁行方向は、N-76°-Wである。外側の柱穴は、内側の建物を柱間1.5m前後で、北・東・南の3面を取り巻くように配置され、内側建物の西側で中柱がみられる。また、内側の柱穴のいくつかには、柱穴上部に石がみられ、礎石立ち建物の様相を呈しているが、外側では石はみられない。このことから本建物は、3面庇付の礎石立ち建物である可能性が高いものと考えられる。重複する他の掘立建物との新旧関係は、不明な点もあるが、本建物が最も新しい建物と考えられる。

28号掘立建物（第737図）

1 A郭のほぼ中央にあり、8・9-32~34グリッドを中心に位置する。30号掘立建物の北側に接し、29号掘立建物の北側で、27・30・31・39・42・46号掘立建物と重複する。検出された建物は、4間（8.58m）×2間（5.00m）の東西に長い建物を基本に、東側に南辺を揃えるように2間（6.04m）×2間（5.52m）の南北に長い建物をL字状に取り付け、さらに南辺の西側には半間0.94mの縁ないし庇をもつ1間（2.00m）×2間（4.38m）の出張りをもつ。建物全体の形状は、変則的なL字状（クランク状）をなし、規模は長軸となる東西方向で14.10m、南北方向で8.98mを測る。長軸方向は、N-72°-Wである。建物の南辺の南側東寄りには、2本の柱穴が南辺に添うように検出され、本建物に伴うものと考えられる。また、建物南西で張り部の南側には、29号掘立建物があり、本建物と走行を同じにしている。このことから、両建物が同時期に存在していた可能性もある。重複する掘立建物との新旧関係は、30号掘立建物の方が新しいことが確認されている。他とは、不明である。

29号掘立建物（第735図）

1 A郭の南側西寄りにあり、6-35グリッドを中心に位置する。3号井戸を有する32号掘立建物の東側、28号掘立建物の南側で、30・40号掘立建物と重複する。検出された建物は、3間（7.08m）×3間（5.60m）の南北に長い建物で、桁行方向はN-18°-Eである。梁行方向の西側2間の柱間が2.05m前後であるのに対し、東側の1間は1.48mと狭くなっている。また、北側に位置する28号掘立建物の西側部分とは、建物の走行および柱間が一致することから、同一の建物とする想定もあるが、その間の約4mに付随するような柱穴が存在しないことから、別々な建物として考えた。重複する掘立建物との新旧関係は、30号掘立建物とは本建物の方が古く、40号掘立建物よりも新しいことが、柱穴の重複のあり方から確認されている。

30号掘立建物（第738・739図）

1 A郭の中央南側にあり、郭内で最大の建物で、7-33グリッドを中心に位置する。3号井戸を有する32号掘立建物の西側、27号掘立建物の南西にあり、28・29・36・40・41・50号掘立建物と重複する。検出された建物は、5間（10.18m）×6間ないし5間（11.10m）の南北にやや長い方形の建物で、桁行方向よりも梁行方向の方が1mほど長い。桁行方向は、N-75°-Wである。建物の外側を取り巻く柱間は、桁行方向で1間

2.30m前後を測り、梁行方向で1間1.30m～1.82mないし2.20m～2.60mを測る。建物の中央部には、北側と南側を分けるように、東西方向に2列の柱穴列が存在し、南北にはそれぞれ束柱的な柱穴が存在するが、南側と北側では対応しない。また、梁行方向の東辺北側では、柱穴が重複しており、この重複が建て替えによるものとするよりは、むしろ本建物建築時の柱穴の位置替えによるものと理解したい。さらに、本建物と27号掘立建物を比較すると、両建物の桁行方向がほぼ同一方向であり、使用されている柱間がほぼ一致する。加えて、本建物の北辺東端の1間分と、27号掘立建物の南辺西端の1間分とが、並行して対応していることから、この部分に両建物を連結させる施設があった可能性があり、両建物の同時期存在の可能性が強い。重複する他の掘立建物との新旧関係は、29号掘立建物よりは本建物の方が新しく、他の建物とにおいても不明な点もあるが、27号掘立建物と同様に本建物が最も新しい建物と考えられる。

31号掘立建物（第740図）

1 A郭のほぼ中央部にあり、9—33グリッドを中心に位置する。郭内で最大の30号掘立建物の北側にあり、27・28・44・46号掘立建物と重複する。検出された建物は、4間（10.32m）×2間（3.96m）の東西に長い建物に、南辺の西側1間分に柱間1mほどが出張り、L形状となる。桁行方向は、N—75°—Wである。各柱穴内の覆土は、B軽石を多量に含む暗褐色土で、他の柱穴覆土とは識別が明瞭であった。重複する他の掘立建物との新旧関係は、不明である。

32号掘立建物（第741図）

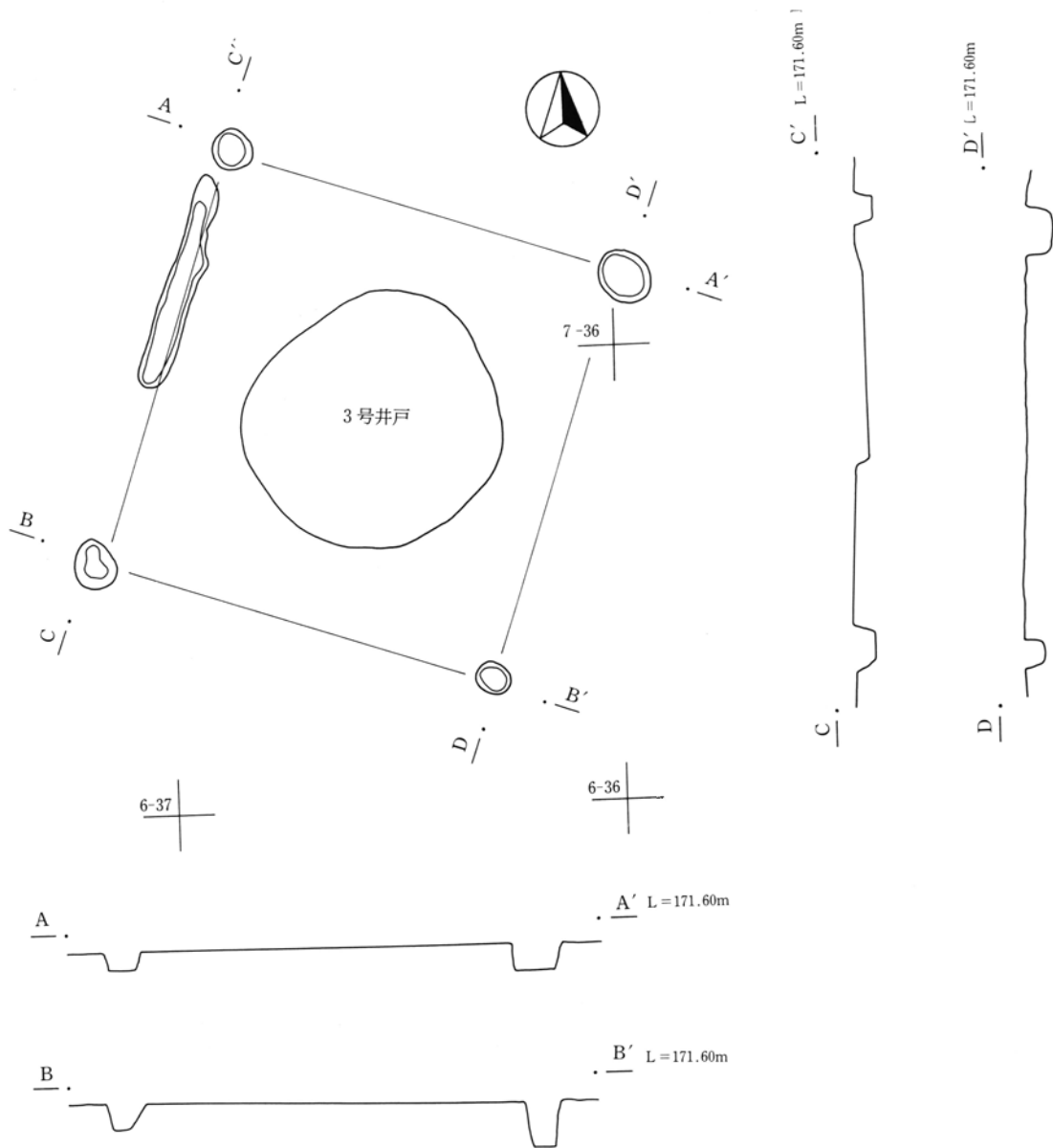
1 A郭の西南隅にあり、6—36グリッドを中心に位置する。郭西縁の土居から2mほど東側へ離れ、建物の辺をほぼ同一方向にもつ29・30号掘立建物の西側へ並行するようにあり、40号掘立建物と重複する。検出された建物は、1間（4.53m）×1間（4.53m）のほぼ正方形となる建物で、方向はN—69°—Wである。この柱間は、他の建物では余り見られない間であり、特徴的である。この建物の中央部には、3号井戸があり、井戸を取り囲むように柱穴が配され、西辺には雨落ち溝とも考えられる細い溝も検出されている。こうしたことから、本建物は、井戸を覆う建物である可能性が高い。重複する40号掘立建物との新旧関係については、不明な点もあるが、3号井戸との関係からは井戸の方が新しく、よって本建物の方が新しいものと考えられる。

33号掘立建物（第742図）

1 A郭の中央東寄りにあり、8—31グリッドを中心に位置する。郭内で最大の30号掘立建物の東側で、1号堀土橋の西側にあり、27・42号掘立建物と重複する。検出された建物は、4間（6.49m）×1間（2.98m）の南北に長い建物で、南側の1間分の柱間は0.92mと狭く、北側の3間の柱間の半間分となる。桁行方向は、N—15°—Eである。重複する掘立建物との新旧関係は、柱穴の重複のあり方から27号掘立建物よりも古く、42号掘立建物とは不明である。

34号掘立建物（第743図）

1 A郭の北側の東縁にあり、11—29グリッドを中心に位置する。郭内の北東隅に位置する土居状遺構の痕跡の南側にあり、後述する柵遺構の北端部に接する。検出された建物は、幅1間のL字となる形状で、東西方向3.93m、南北方向2.14mを測る。この建物形状は、他の建物とは大きく異なり、建物の位置および柵遺



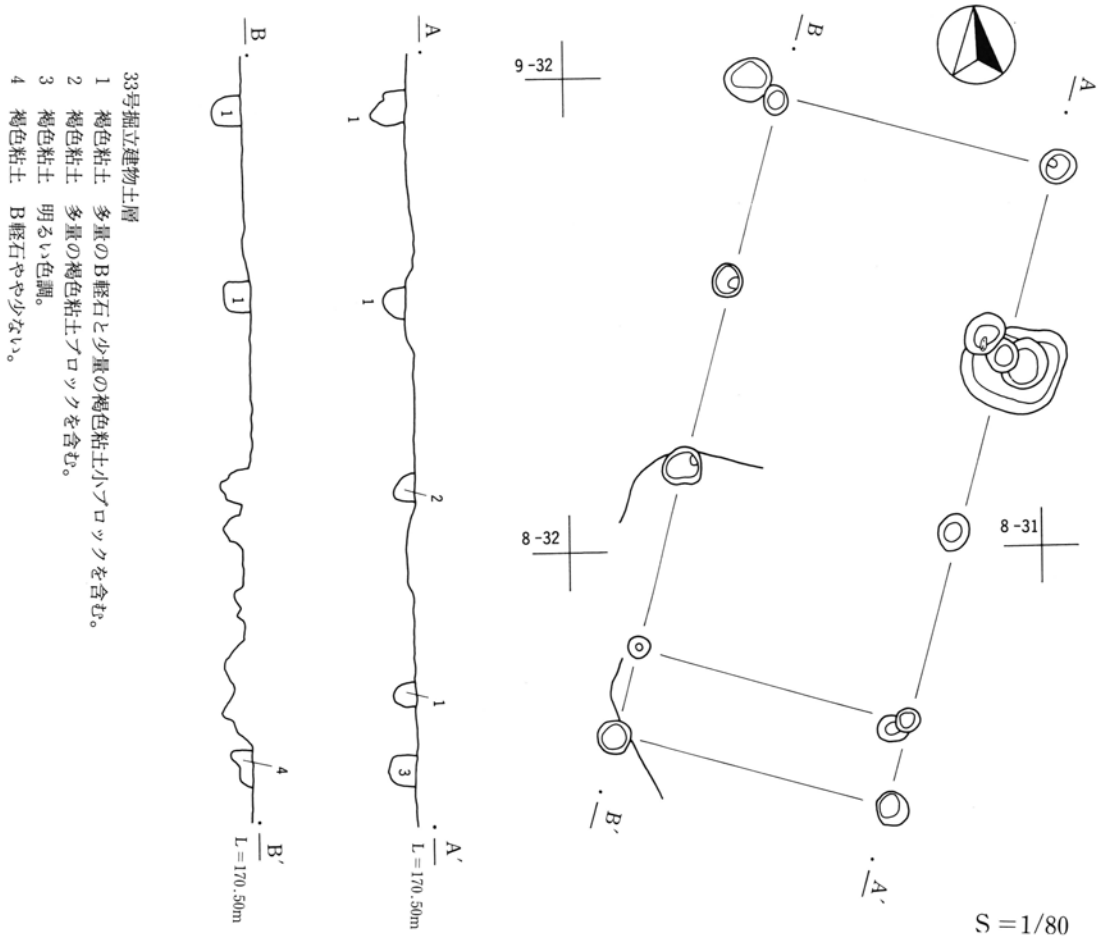
第741図 32号掘立建物遺構平面図

S=1/80

構にかかわる塀的な要素の高い建物と考えられる。

35号掘立建物 (第744図)

1 A郭の中央東寄りにあり、9-30グリッドを中心に位置する。27号掘立建物の東隣で、1号掘土橋の西側にあり、46号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(4.34m)×1間(3.03m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-80°-Wである。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。また、土橋に関わる入口施設および柵等とも重複していることから、これらの施設を要しない時期の建物であることは明かである。



第742図 33号掘立建物遺構平面図

36号掘立建物 (第745図)

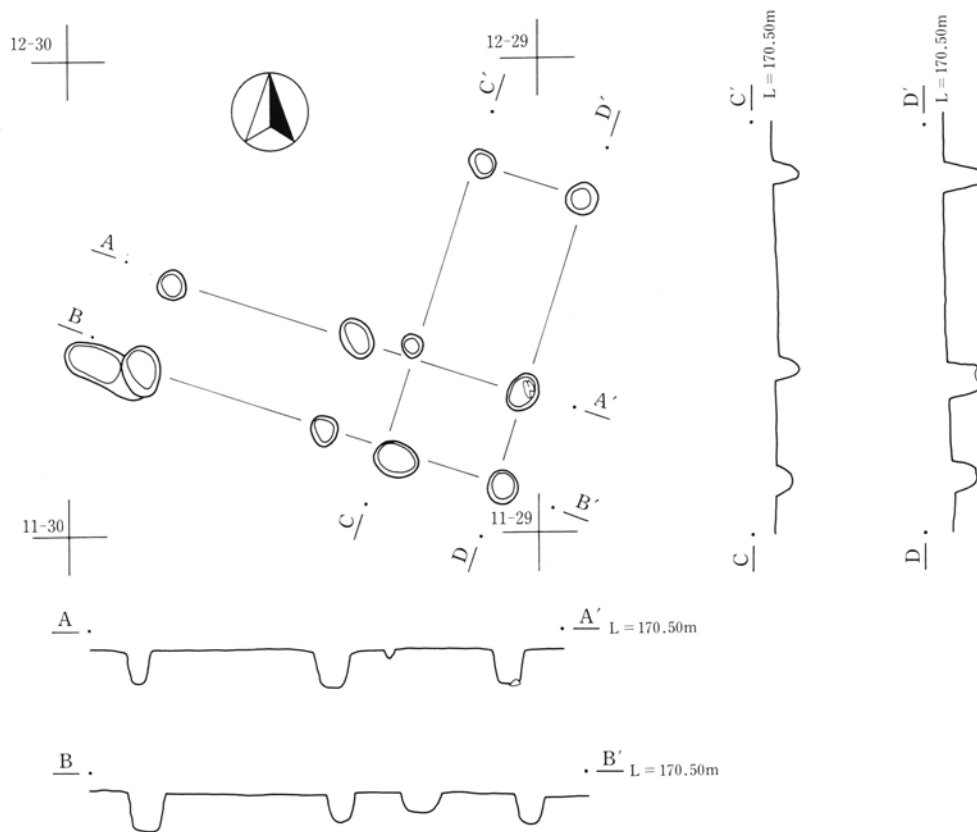
1 A郭の南側調査区際であり、6-32グリッドを中心に位置する。郭内で最大の30号掘立建物、42・50号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(4.22m)×2間(3.94m)の東西に長い建物で、梁行方向の柱間がそれぞれ2m前後であるのに対し、桁行方向では2.32mと1.90mの柱間となっている。桁行方向は、N-74°-Wである。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

37号掘立建物 (第746図)

城郭の西約200mほど離れたK区にあり、20-89グリッドを中心に位置する。この地点での掘立建物の検出は、37号と38号掘立建物の2棟であり、本建物は38号掘立建物の南東に位置する。検出された建物は、北辺2間と南辺3間(5.12m)×2間(5.00m)のほぼ正方形に近い形状を呈している。北辺の1間の柱間は2.55m前後であるのに対し、南辺では1.70m前後と、やや狭い間となっている。

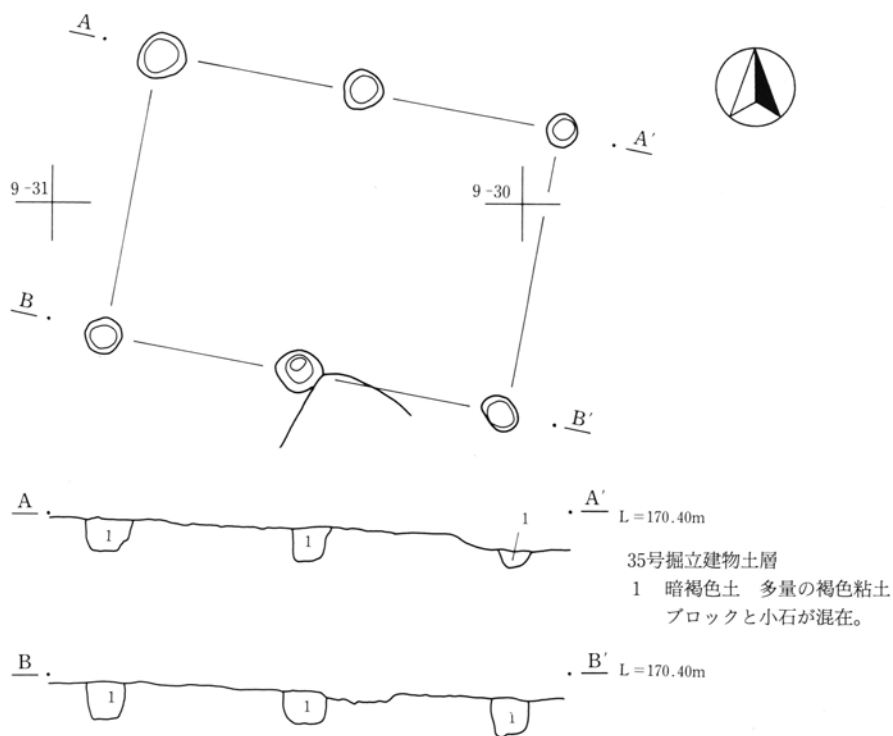
38号掘立建物 (第747図)

城郭の西約200mほど離れたK区にあり、23-90グリッドを中心に位置する。先の37号掘立建物の北西側と



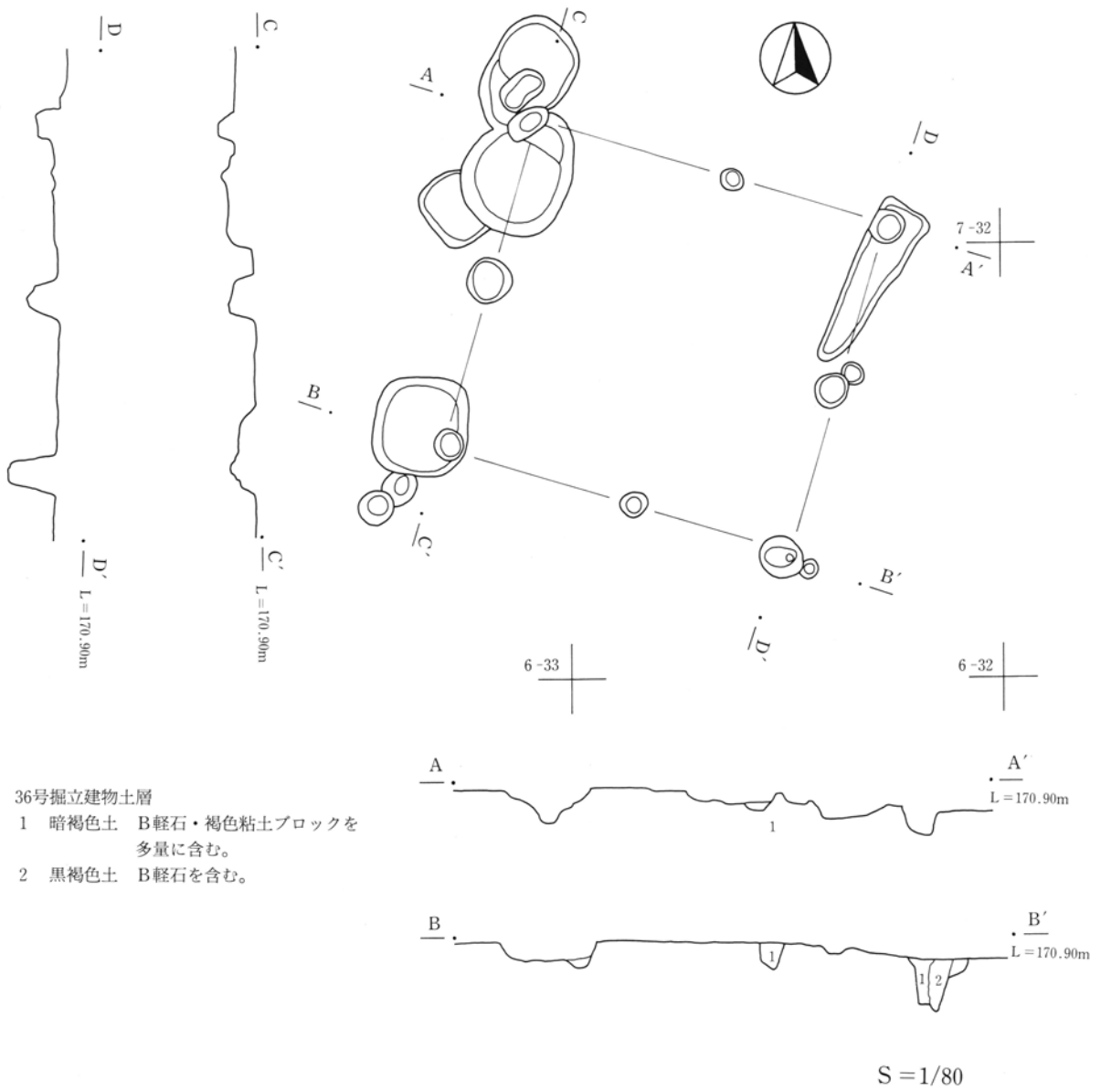
第743図 34号掘立建物遺構平面図

S = 1/80



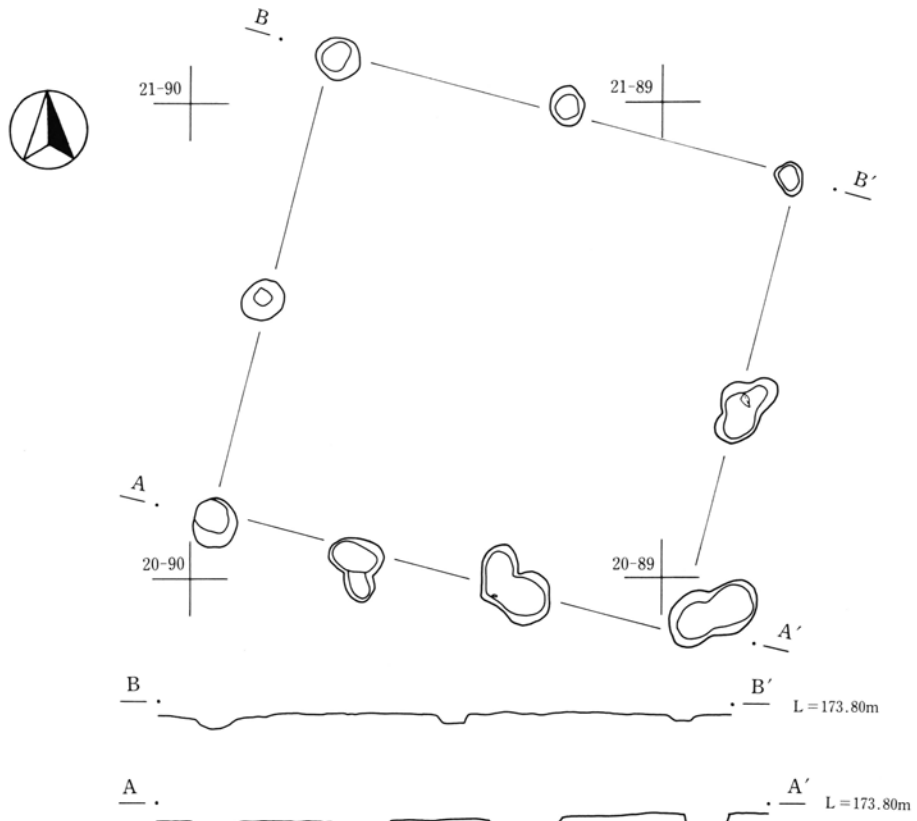
第744図 35号掘立建物遺構平面図

S = 1/80



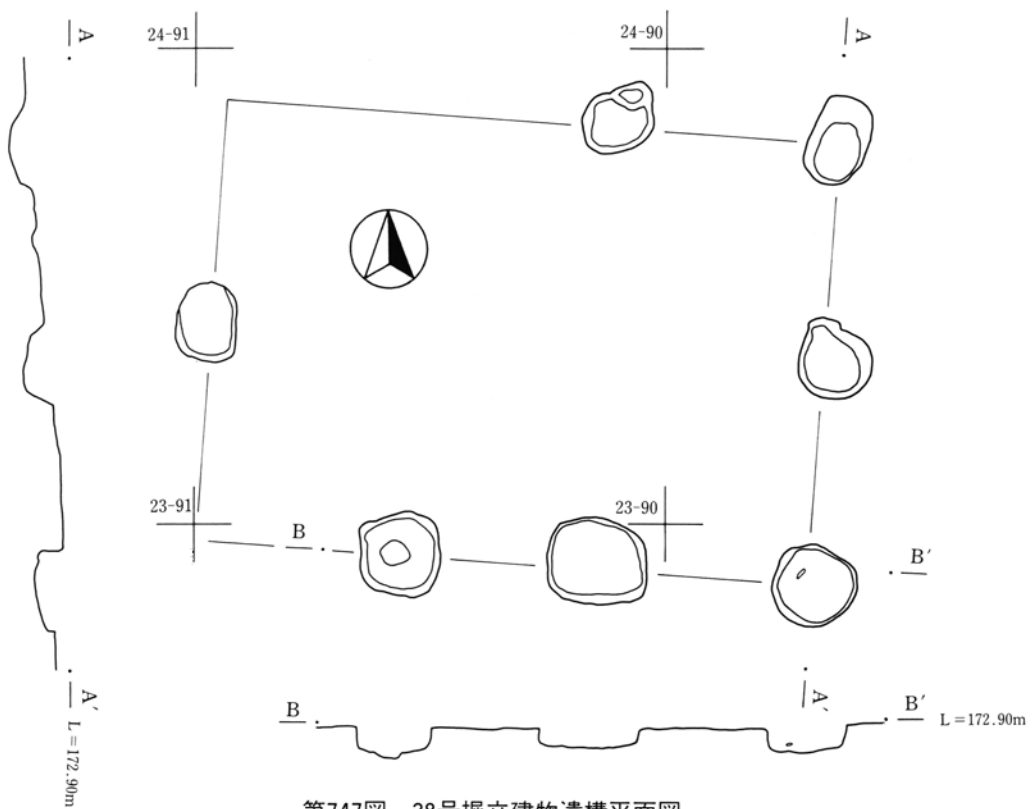
第745図 36号掘立建物遺構平面図

第3章 検出された遺構と遺物



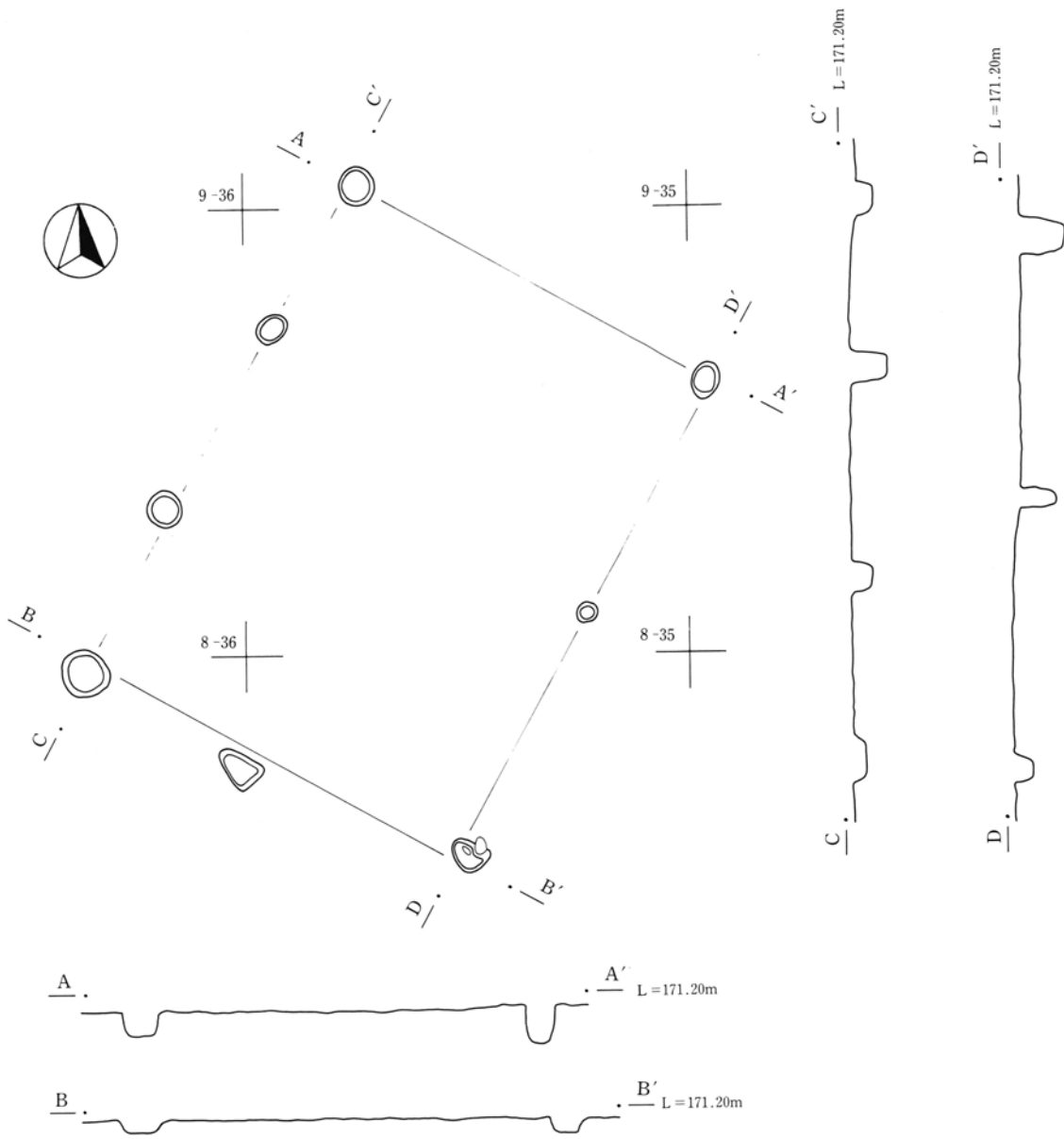
第746図 37号掘立建物遺構平面図

S=1/80



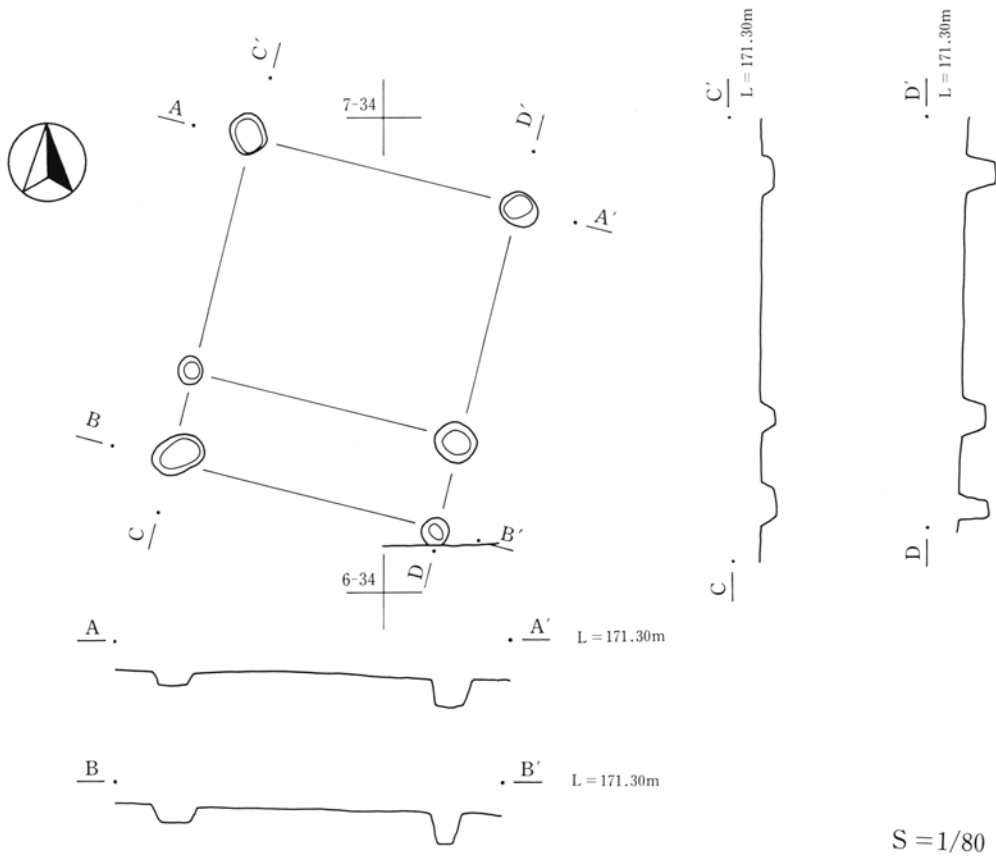
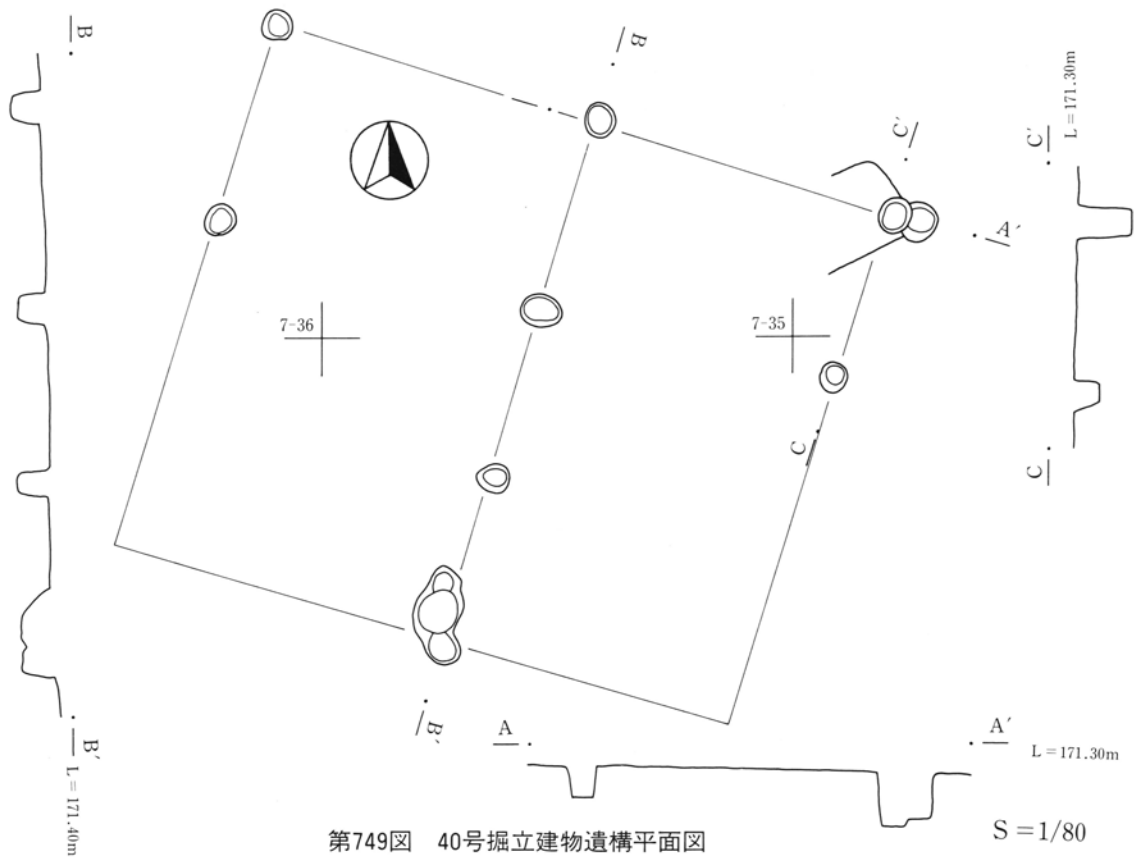
第747図 38号掘立建物遺構平面図

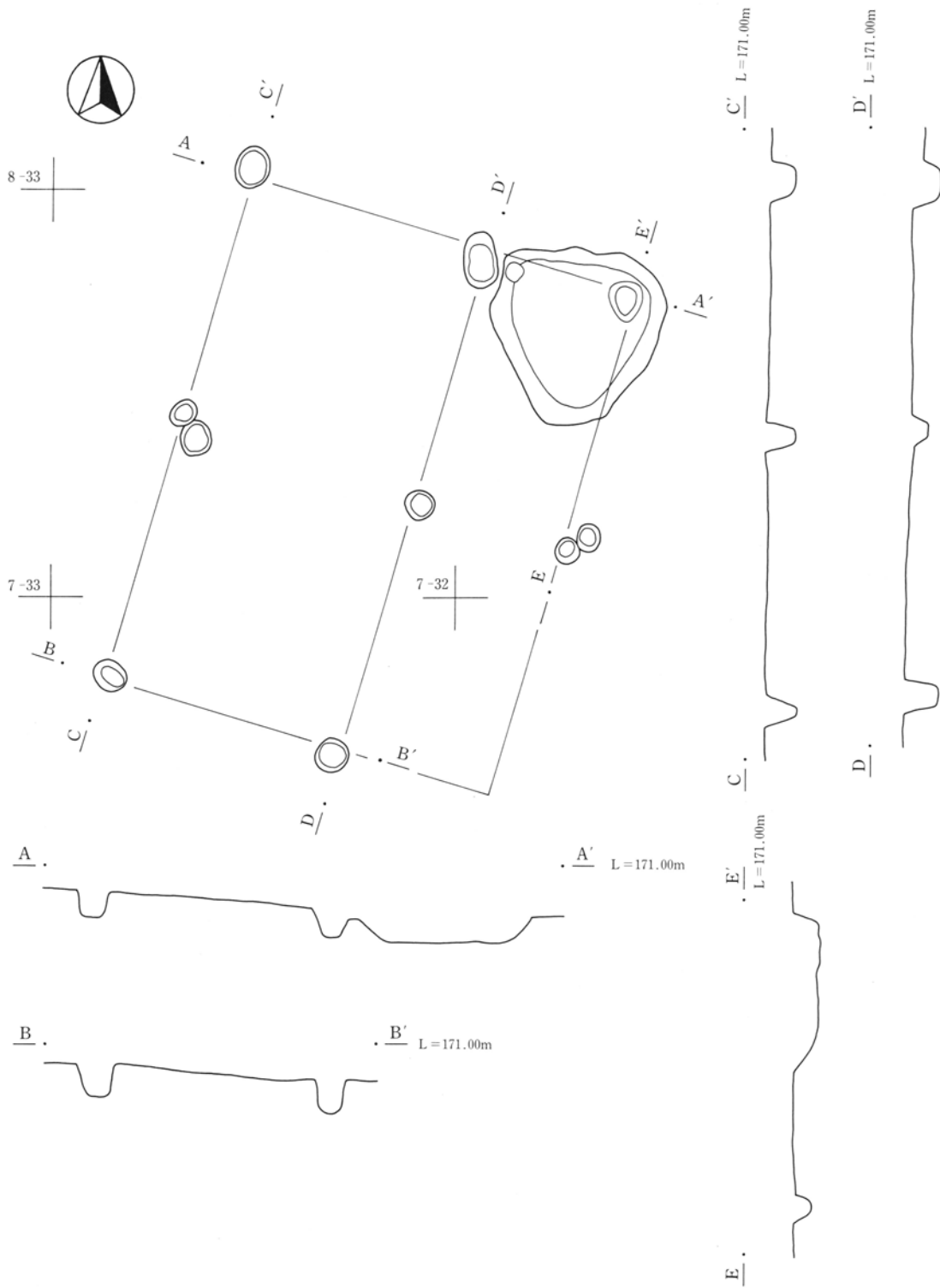
S=1/80



S = 1/80

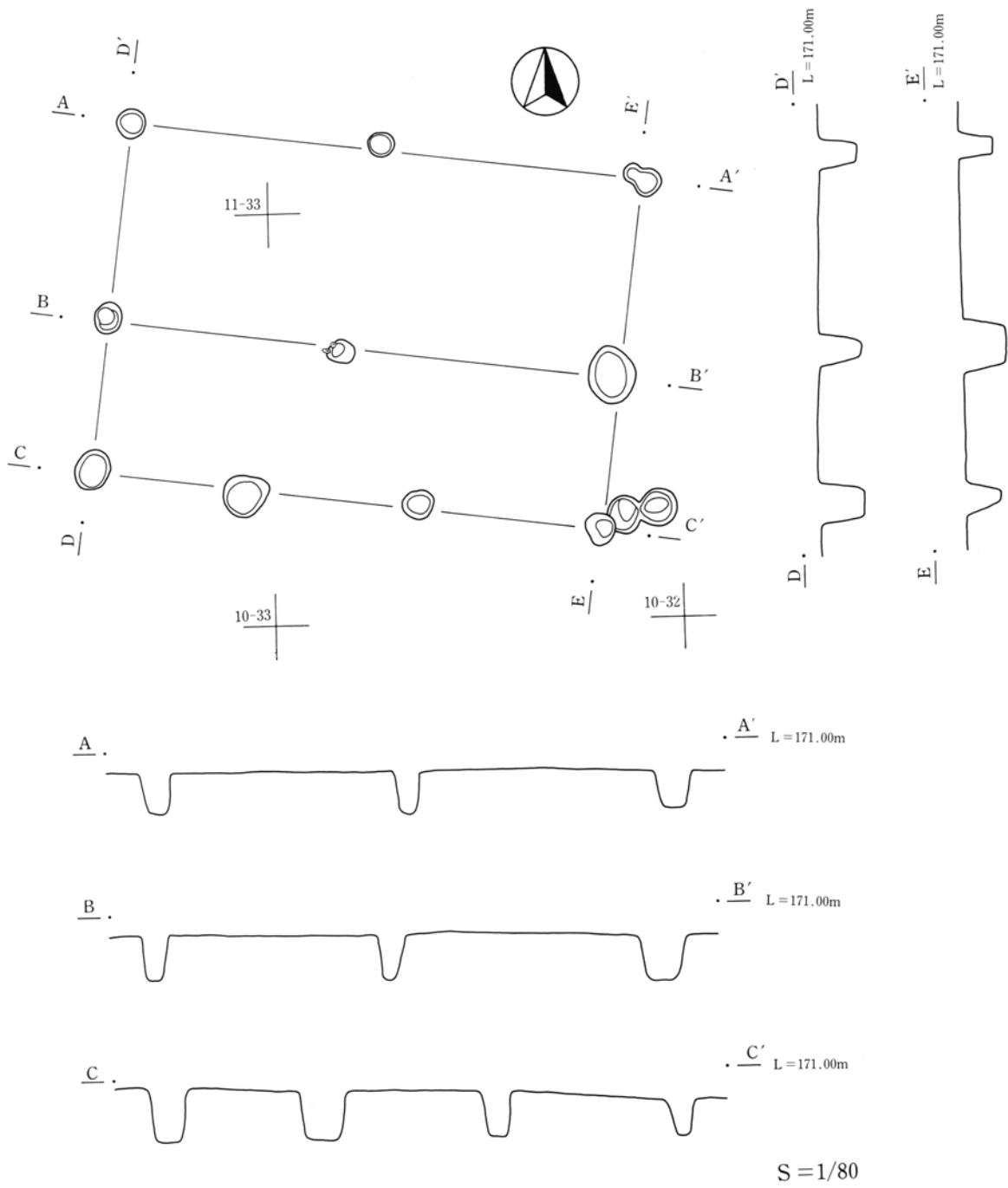
第748図 39号掘立建物遺構平面図



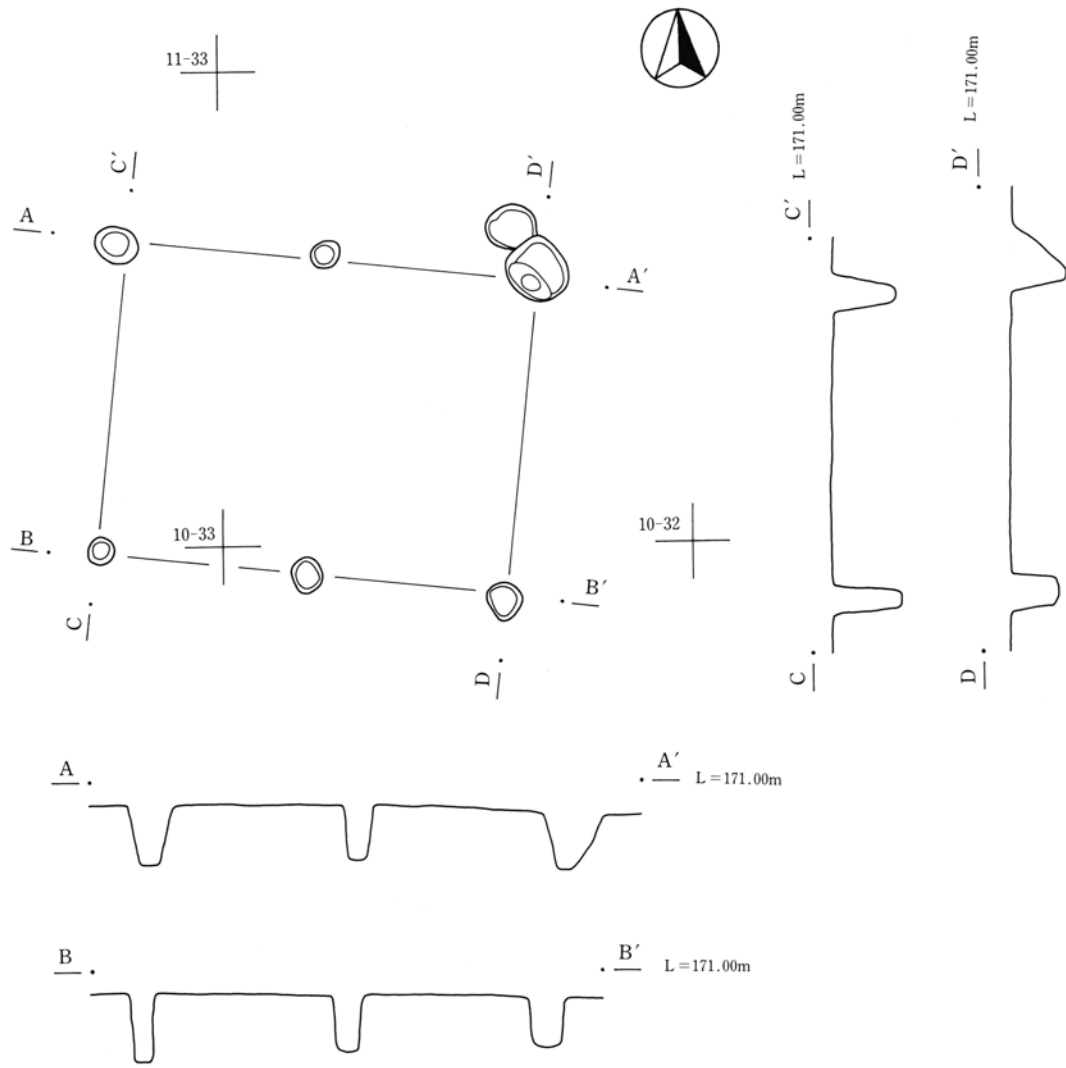


S = 1/80

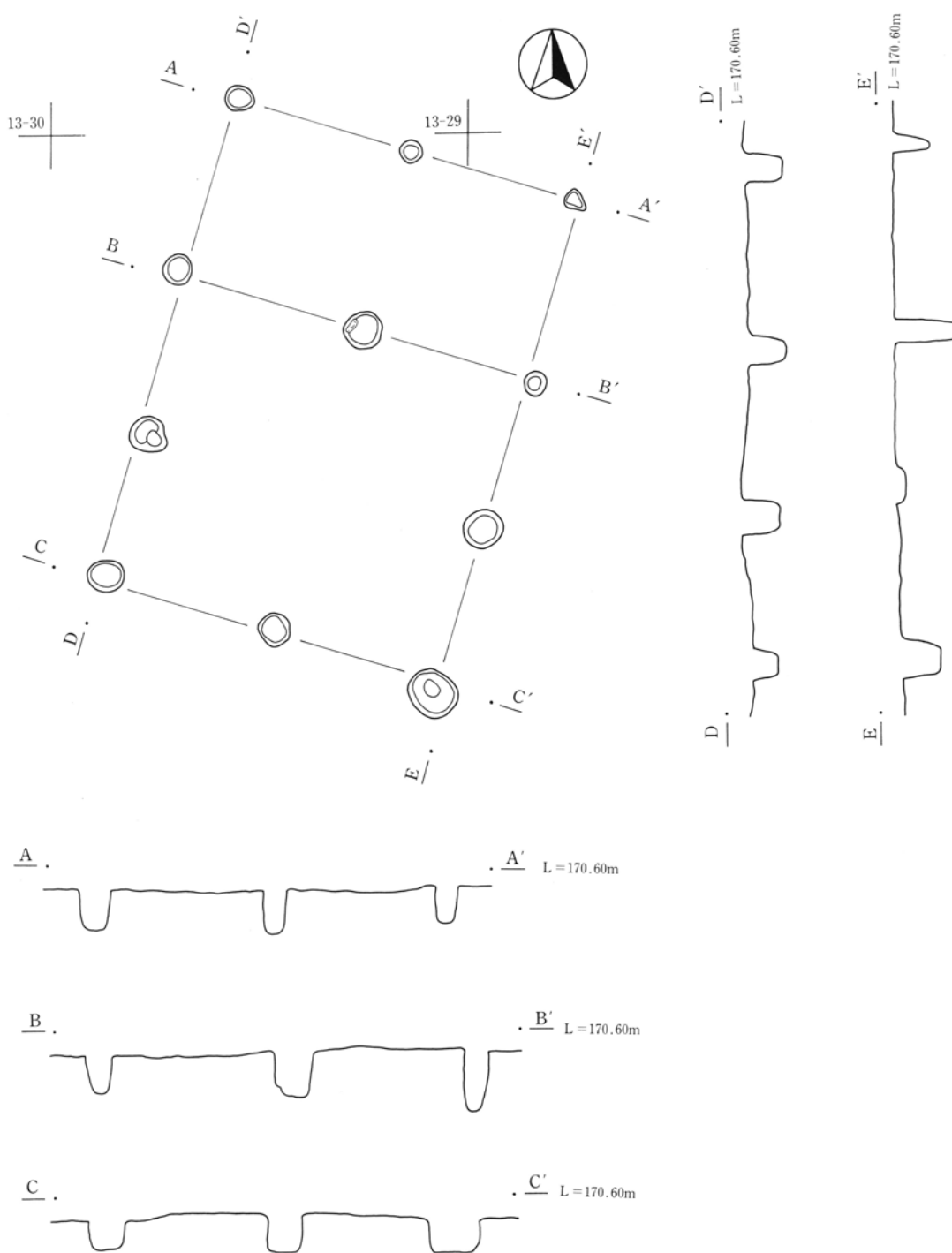
第751図 42号掘立建物遺構平面図



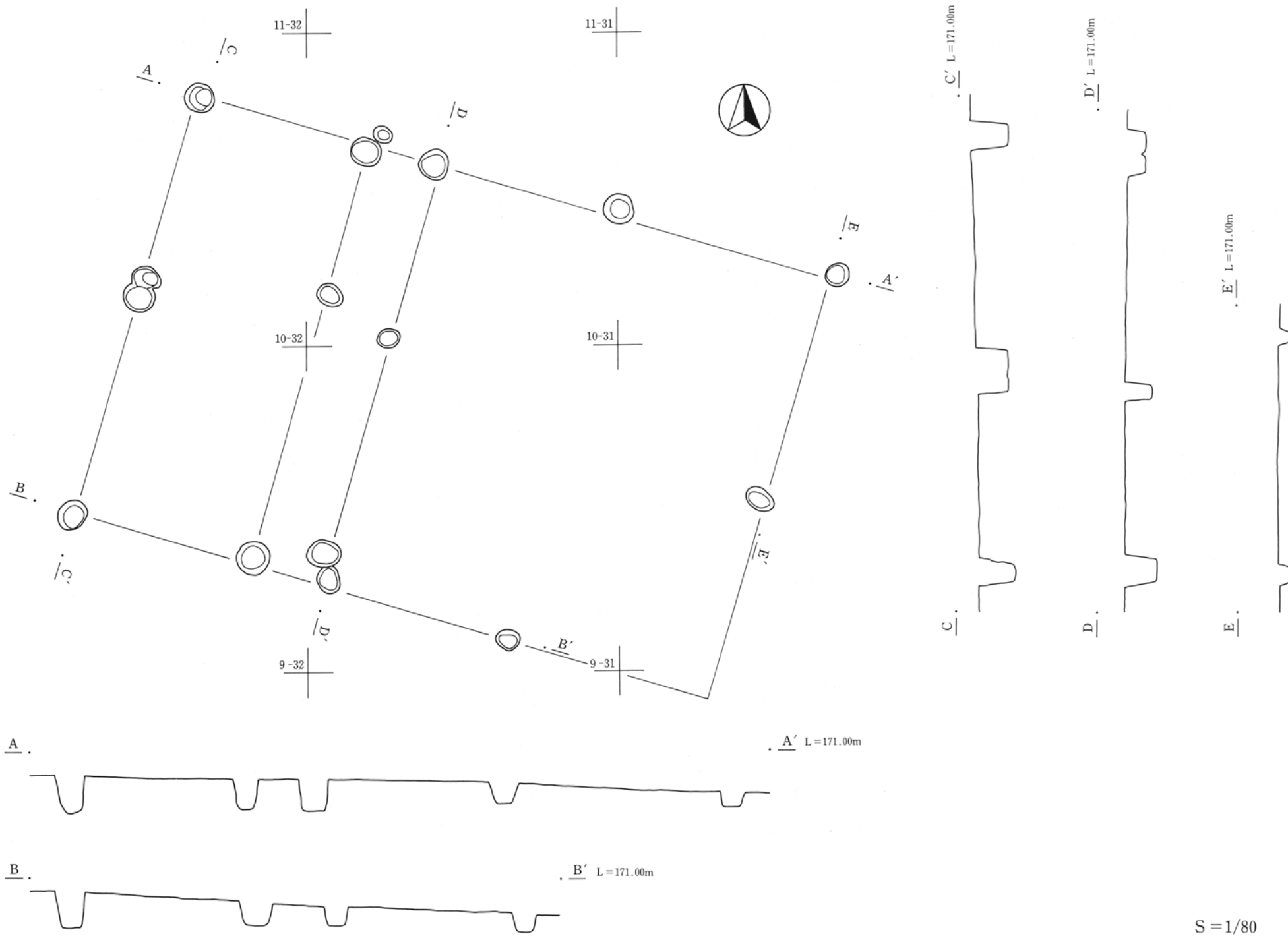
第752図 43号掘立建物遺構平面図



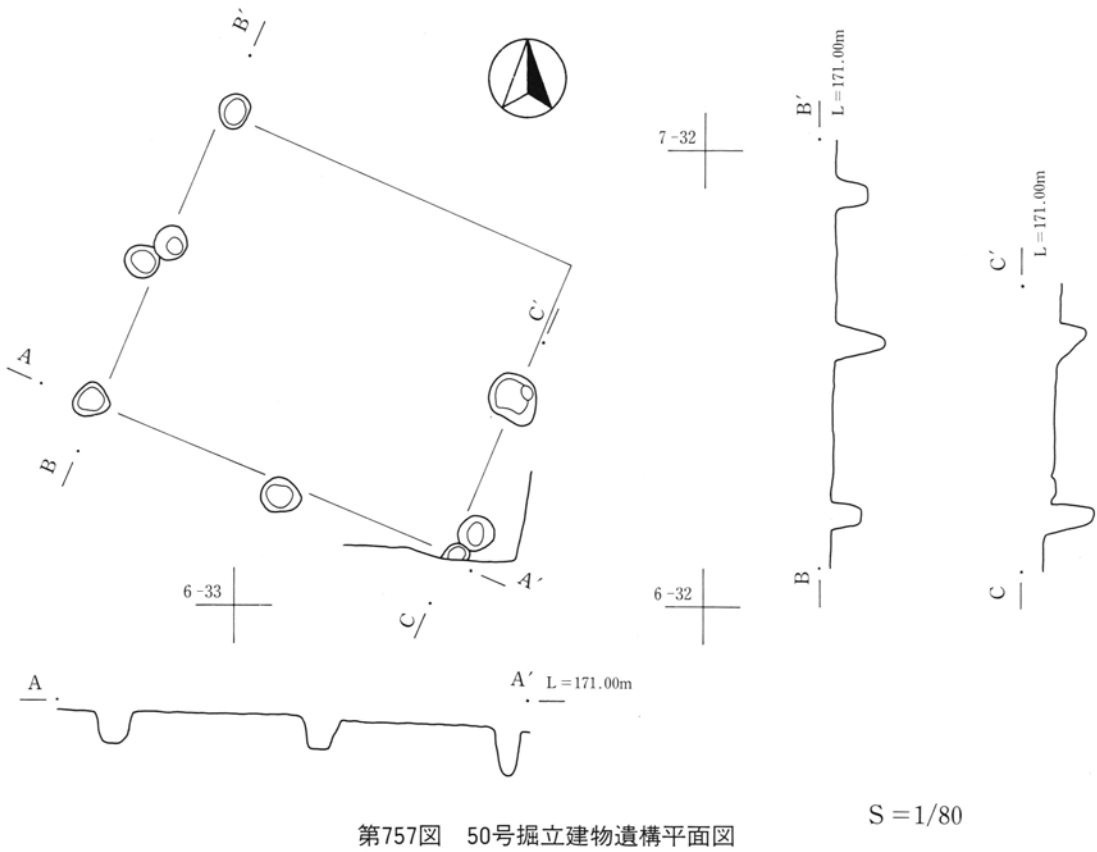
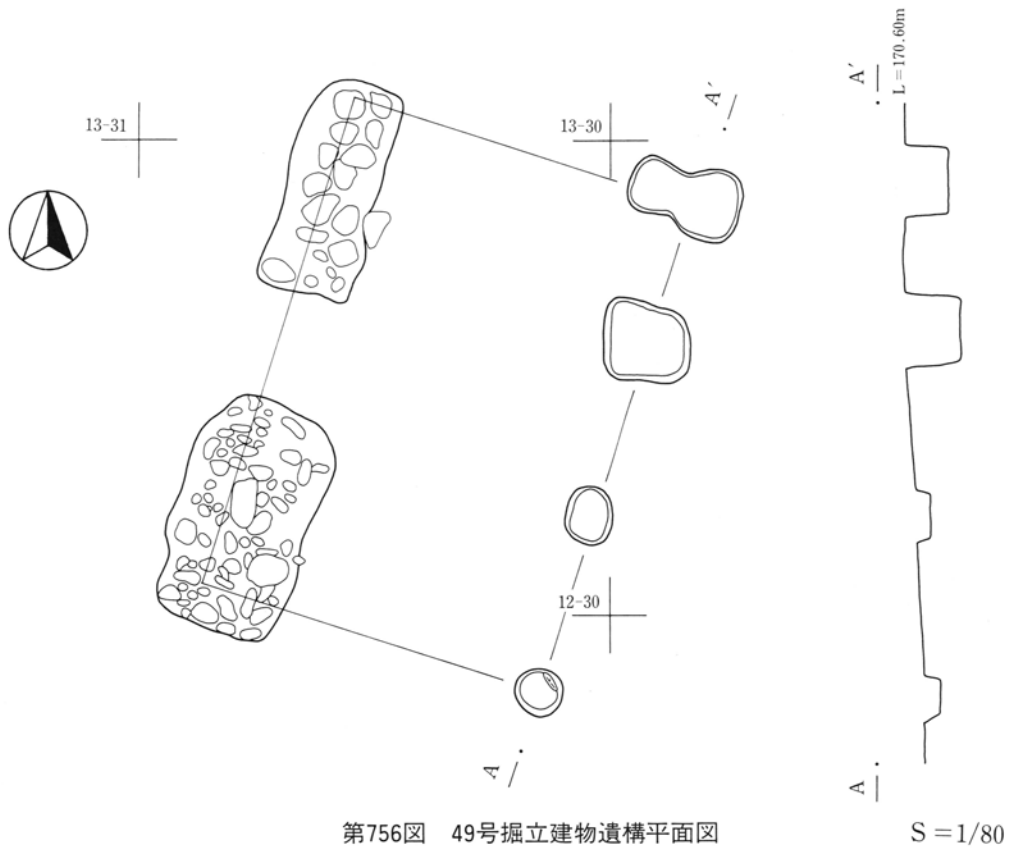
第753図 44号掘立建物遺構平面図

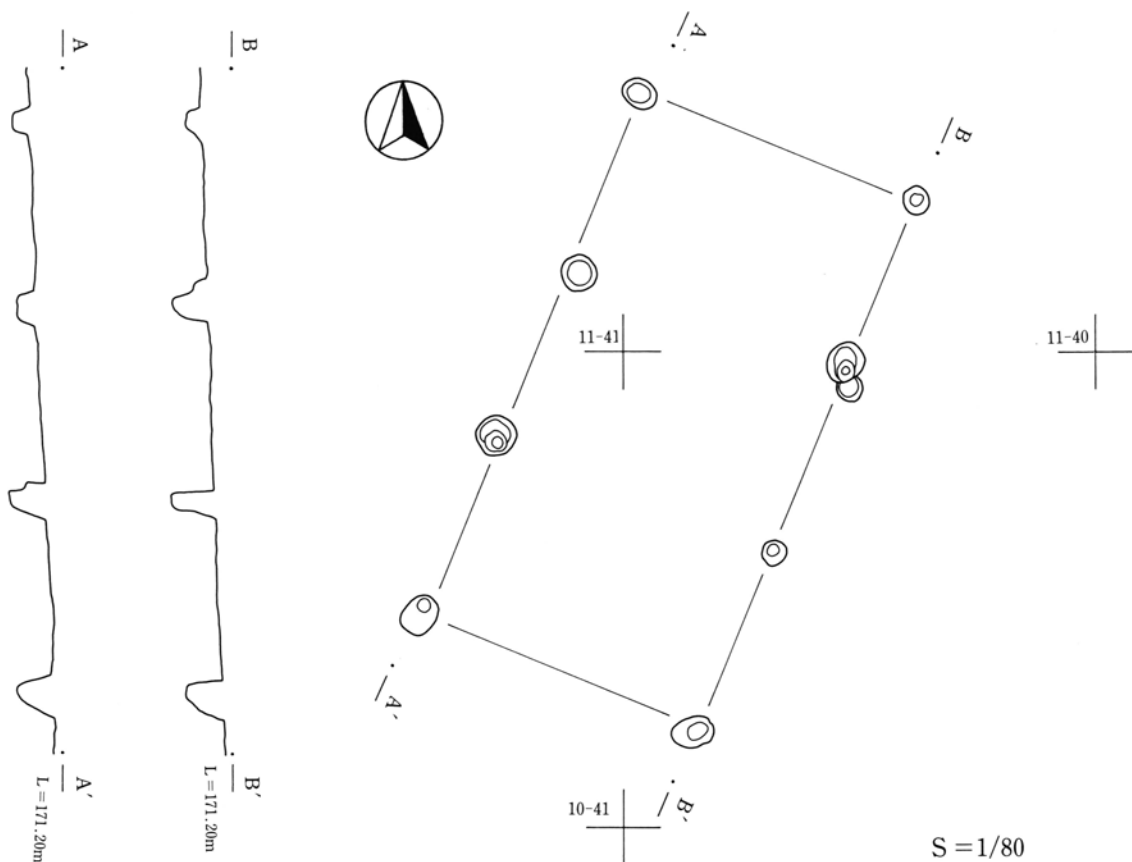


第754図 48号掘立建物遺構平面図



第755图 46号掘立建物遺構平面図





第758図 51号掘立建物遺構平面図

なる。検出された建物は、3間×2間(4.66m)の東西に長い建物と考えられる。部分的に確認のできなかった柱穴もあるが、本来は存在したものと思われる。

39号掘立建物 (第748図)

1 A郭の中央やや西寄りにあり、8—35グリッドを中心に位置する。郭内で最大の30号掘立建物の西側、3号井戸を有する32号掘立建物の北側で、28号掘立建物と重複する。検出された建物は、東辺2間と西辺3間(6.06m)×2間(4.64m)の南北に長い建物で、西辺の1間の柱間は1.86mおよび2.36mであるのに対し、東辺は3.00m前後を測る。桁行方向は、N—29°—Eである。部分的に確認のできなかった柱穴もあるが、本来は存在したものと思われる。また、束柱的な柱が存在した可能性も高い。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

40号掘立建物 (第749図)

1 A郭の南西隅付近にあり、6—35グリッドを中心に位置する。29・30・32号掘立建物と重複する。検出された建物は、3間(5.76m)×2間(6.92m)の梁行方向が長くなる東西に長い建物で、桁行方向はN—72°—Wである。部分的に確認のできなかった柱穴もあるが、本来は存在したものと思われる。重複する掘立建物との新旧関係は、3号井戸を有する32号掘立建物とでは本建物の方が古いことが確認されており、他の建

物とは不明である。

41号掘立建物（第750図）

1 A郭の南側中央にあり、6-34グリッドを中心に位置する。29号掘立建物の東側で、30号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(3.52m)×1間(2.94m)の南北にやや長い建物で、桁行方向はN-16°-Eである。桁行方向の2間の内、北側は2.54mと広い間に対し、南側は1.00mほどと狭い間となっている。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

42号掘立建物（第751図）

1 A郭の南側やや東寄りにあり、7-32グリッドを中心に位置する。郭内で最大の30号掘立建物の西隣で、28・33・36・50号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(6.44m)×2間(4.98m)の南北に長い建物で、桁行方向はN-16°-Eである。梁行方向の柱間は、西側が3.06mと広いのに対し、東側では1.92mとやや狭い。部分的に確認のできなかった柱穴もあるが、本来は存在したものと思われる。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

43号掘立建物（第752図）

1 A郭の中央付近で1号古墳の南側にあり、10-32グリッドを中心に位置する。27・44・46号掘立建物と重複する。検出された建物は、北辺2間と南辺3間(6.30m)×2間(4.28m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-81°-Wである。重複する掘立建物との新旧関係は、27号掘立建物とに於て本建物が古く、他とは不明である。

44号掘立建物（第753図）

1 A郭の中央付近にあり、10-32グリッドを中心に位置する。1号古墳の南側で、27・31・43・46号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(4.38m)×1間(3.32m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-86°-Wである。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

46号掘立建物（第755図）

1 A郭の中央付近やや東寄りにあり、9-31グリッドを中心に位置する。26・27・28・31・35・43・44号の7棟の掘立建物と重複する。検出された建物は、4間(10.67m)×2間(6.98m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-74°-Wである。桁行方向の西から2間目が、他の柱間に比べ1.20m前後と狭いが、北辺と南辺の走行および柱穴位置がほぼ一致することから、本建物を想定した。部分的に確認のできなかった柱穴もあるが、本来は存在したものと思われる。重複する掘立建物との新旧関係は、27号掘立建物とに於て本建物が古く、他とは不明である。

48号掘立建物（第754図）

1 A郭の北東隅付近にあり、12-29グリッドを中心に位置する。郭の北東隅に検出された土居状遺構痕跡と丁度重なるようにあり、34号掘立建物と重複する。検出された建物は、3間(5.98m)×2間(4.30m)の南北に長い建物で、桁行方向はN-17°-Eである。桁行方向の北から1間目には、束柱的な柱穴を有する。

第3章 検出された遺構と遺物

重複する34号掘立建物との新旧関係は不明であるが、土居状遺構痕跡の直下から本建物の柱穴が検出されていることから、本建物の方が古い。

49号掘立建物（第756図）

1 A郭の北側東寄りにあり、12—30グリッドを中心に位置する。1号古墳と郭の北東隅に検出された土居状遺構痕跡との中間にあり、存在したと考えられる土居の開く位置で、郭の入口部と考えられる辺りに検出された。検出された建物は、3間(5.36m)×1間の南北に長い建物で、桁行方向はN-16°-Eである。東辺が4基の柱穴であるのに対し、西辺は北側と南側の2基の石敷土坑(459・460号土坑)となる、独特な建物である。調査当初、2基の石敷土坑は、単独の土坑として考えていたが、その後の西辺での柱穴の検出から、その走行、規模、柱間等が一致する点で、建物であるものと想定した。他の建物と比較すると、建物の一辺が柱穴ではなく、石敷であるという大きな構造上の違いが認められ、建物自体の用途も異なるものと推測される。なお、建物の西辺と1号古墳との間は、数mの空間が存在する。

50号掘立建物（第757図）

1 A郭の南側中央にあり、6—32グリッドを中心に位置する。30・36・42号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(4.06m)×2間(3.34m)の東西にやや長い建物で、桁行方向はN-67°-Wである。部分的に確認のできなかった柱穴もあるが、本来は存在したものと思われる。重複する掘立建物との新旧関係は、不明である。

51号掘立建物（第758図）

3郭の調査区内中央東寄りにあり、10—41グリッドを中心に位置する。52号掘立建物の西側に、並行するように隣接し、53号掘立建物の南西にある。検出された建物は、3間(5.98m)×1間(3.10m)の南北に長い建物で、桁行方向はN-24°-Eである。

52号掘立建物（第759図）

3郭の調査区内中央東寄りにあり、10—39グリッドを中心に位置する。3堀から約3mほど西へ離れ、51号掘立建物の東側に並行するように隣接し、53号掘立建物の南側にある。検出された建物は、4間(8.26m)×1間(3.20m)の南北に長い建物で、桁行方向はN-11°-Eである。桁行4間のうち、内側の2間の柱間は2.70m前後を測るのに対し、両外側の柱間は狭い柱間となっている。

53号掘立建物（第760図）

3郭の調査区内中央東寄りにあり、13—39グリッドを中心に位置する。3堀から約4mほど西へ離れ、52号掘立建物の北側に隣接し、2号掘立建物の南側にある。検出された建物は、4間(8.90m)×1間(5.12m)の南北に長い建物で、桁行方向はN-14°-Eである。桁行4間のうち、北側の3間の柱間は2m前後を測るのに対し、南側の1間分の柱間は3mと広い柱間となっている。また、梁行が1間で5.12mと広いことから、検出されていないがこの間に柱が想定される。

54号掘立建物 (第761図)

城域外郭の中央部で2号古墳の北側にあり、12-56グリッドを中心に位置する。6堀から約38mほど西へ離れ、55号掘立建物と重複する。検出された建物は、3間(6.22m)×2間(3.72m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-83°-Wである。重複する55号掘立建物との新旧関係については、直接的な柱穴の重複が無いため、不明である。

55号掘立建物 (第762図)

城域外郭の中央部で2号古墳の北側にあり、12-57グリッドを中心に位置する。55号掘立建物と重複する。検出された建物は、2間(3.86m)×2間(3.70m)のほぼ正方形となる建物で、桁行方向はN-0°-Wである。重複する55号掘立建物との新旧関係については、不明である。

56号掘立建物 (第763図)

城域外郭の中央部で調査区南端にあり、6-55グリッドを中心に位置する。6堀から約35mほど西へ離れ、先の54・55号掘立建物からは2号古墳を挟んだ反対側の南側に位置し、56号から62号までの建物が集中する。検出された建物は、北辺3間(6.74m)、南辺4間×1間(2.98m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-80°-Wである。桁行柱間は、3間とも異なり、南辺は変則的な4間となる。重複する57・58号掘立建物との新旧関係については、直接的な柱穴の重複が無いため、不明である。

57号掘立建物 (第764図)

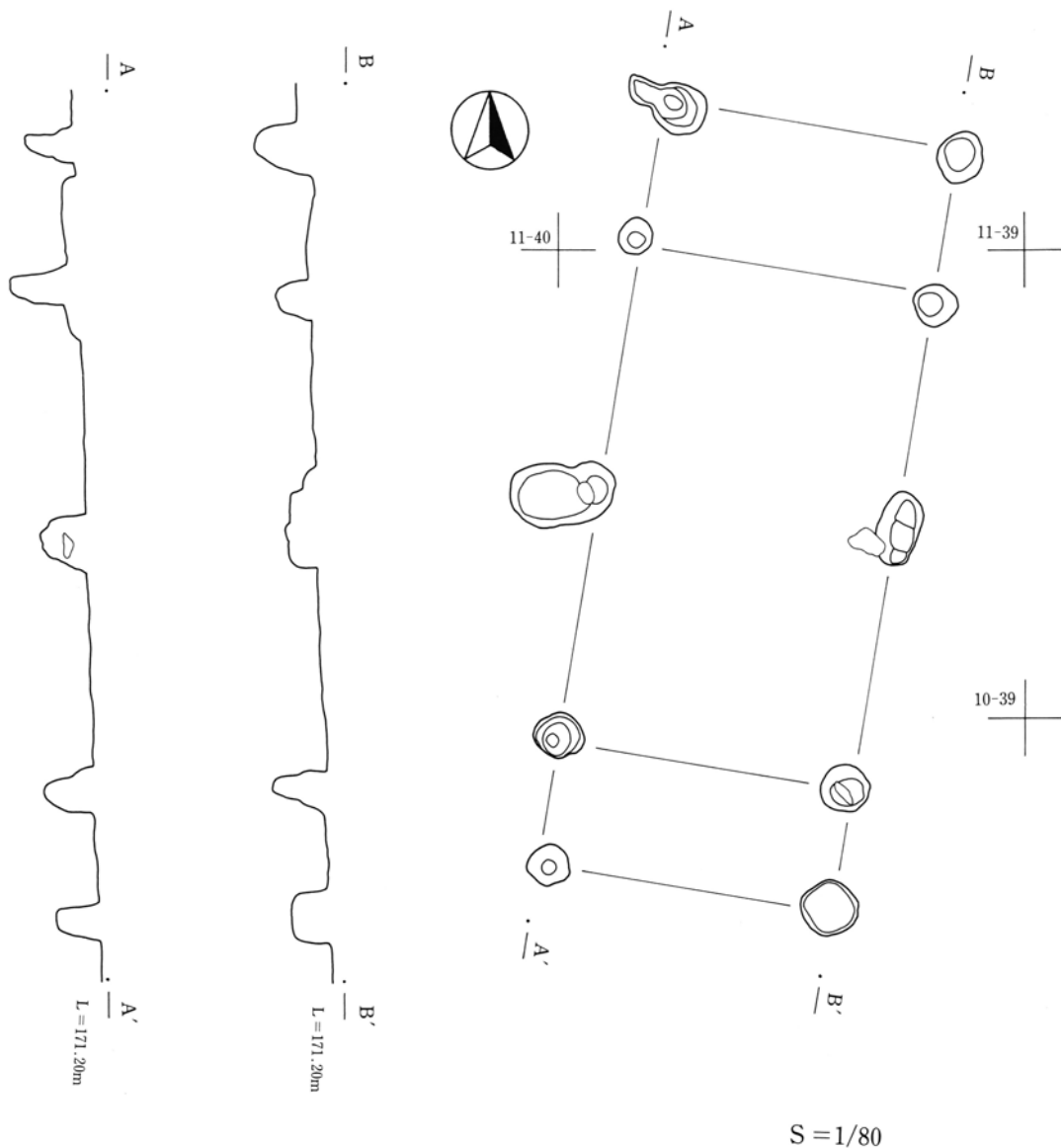
城域外郭の中央部で調査区南端にあり、6-54グリッドを中心に位置する。2号古墳の南側に位置し、56号から62号までの建物が集中する中で、58号掘立建物とほぼ同位置にある。検出された建物は、3間(5.66m)×1間(3.40m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-77°-Wである。重複する57・58号掘立建物との新旧関係については、不明である。

58号掘立建物 (第765図)

城域外郭の中央部で調査区南端にあり、6-54グリッドを中心に位置する。2号古墳の南側に位置し、56号から62号までの建物が集中する中で、先の57号掘立建物とほぼ同位置にある。検出された建物は、北辺5間、南辺4間(7.50m)×1間(3.42m)の東西に長い建物で、桁行方向はN-80°-Wである。桁行柱間は、東側3間が1.50m前後を測るのに対し、西側の1間は2.96mと広く、桁行5間の可能性もあるが柱穴は検出されていない。北辺は変則的な5間となる。重複する56・57号掘立建物との新旧関係については、不明である。

59号掘立建物 (第766図)

城域外郭の中央部で調査区南端にあり、5-55グリッドを中心に位置する。2号古墳の南側に位置し、56号から62号までの建物が集中する中の1棟である。検出された建物は、北辺の2間(3.54m)が検出されただけで、建物の主体は調査区外の南側へ延びるものと思われる。60号掘立建物と重複するものと思われるが、新旧関係については不明である。



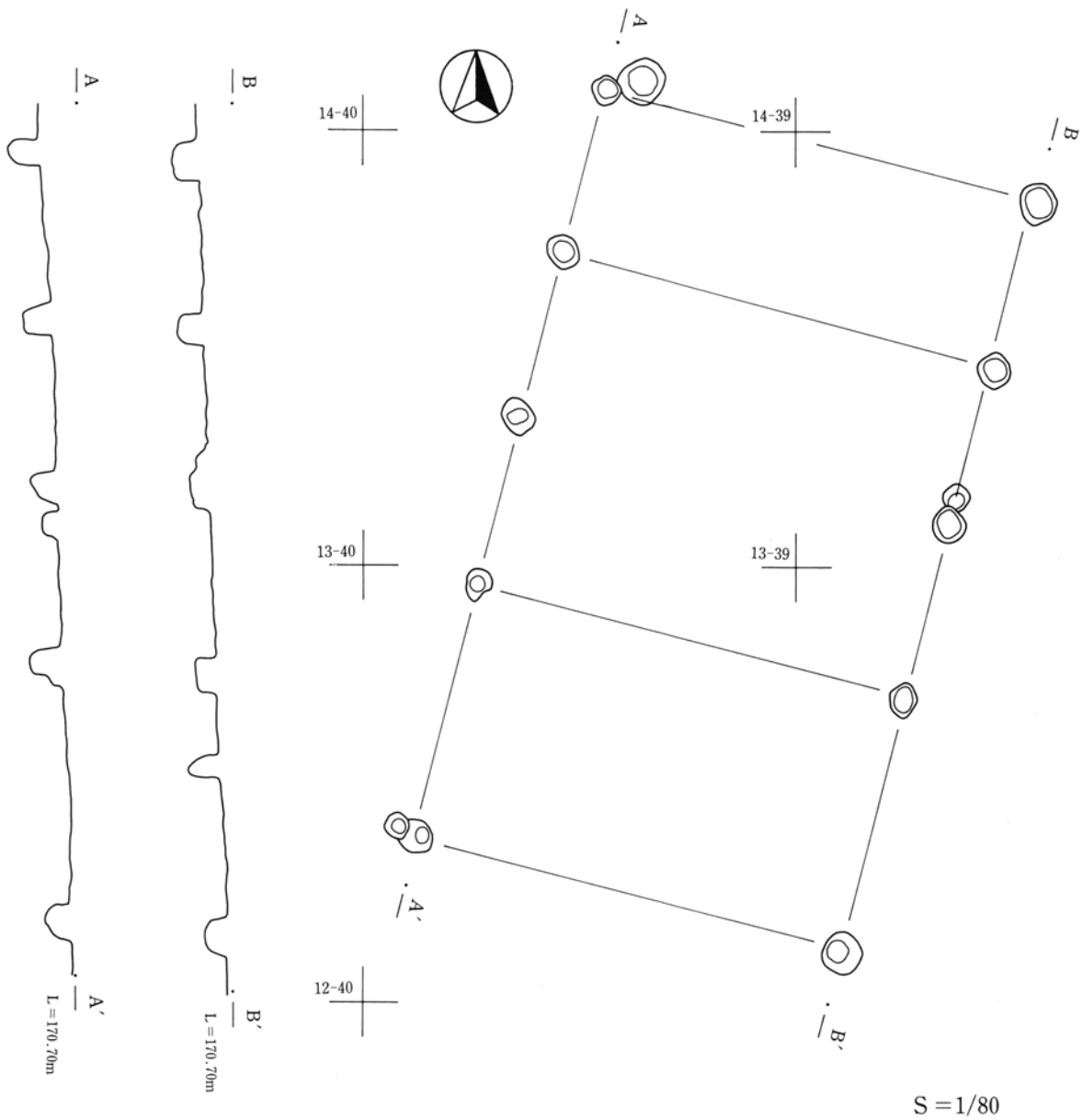
第759図 52号掘立建物遺構平面図

60号掘立建物 (第767図)

城域外郭の中央部で調査区南端にあり、5-55グリッドを中心に位置する。2号古墳の南側に位置し、56号から62号までの建物が集中する中の1棟である。検出された建物は、北辺の2間(3.54m)が検出されただけで、建物の主体は調査区外の南側へ延びるものと思われる。59号掘立建物と重複するものと思われるが、新旧関係については不明である。

61号掘立建物 (第768図)

城域外郭の中央部で調査区南端にあり、7-54グリッドを中心に位置する。2号古墳の南側に位置し、56号から62号までの建物が集中する中の1棟で、57・58号掘立建物の北東側、62号掘立建物の北側にある。検出された建物は、南辺の3間(4.92m)と東辺の1間(2.18m)が検出されただけで、建物の全体は不明。



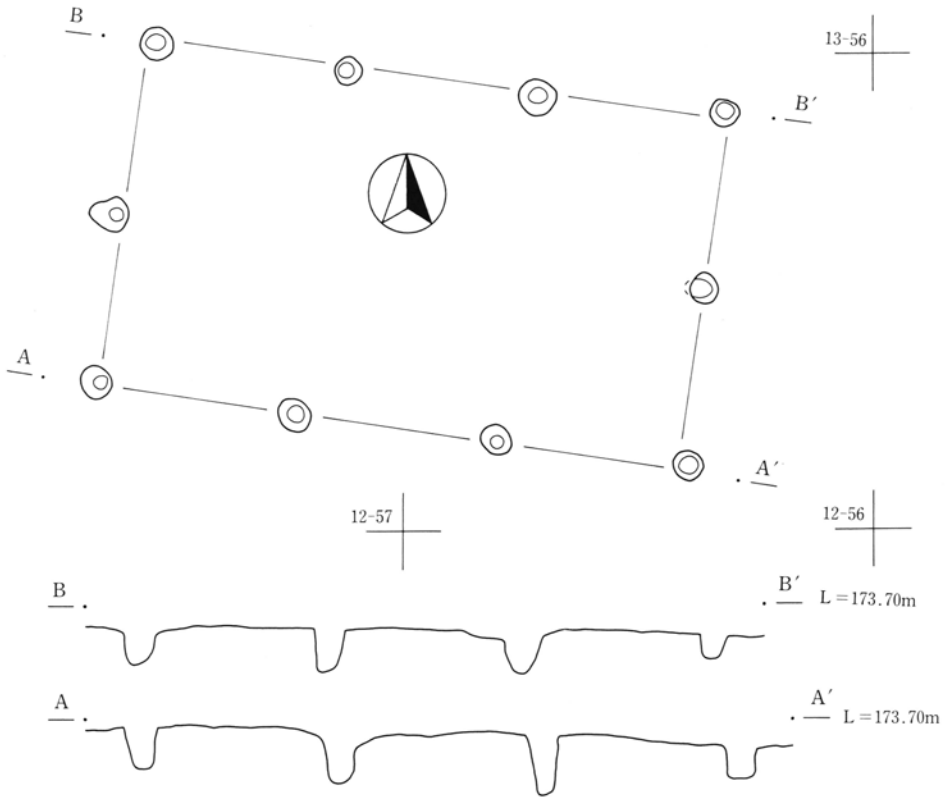
第760図 53号掘立建物遺構平面図

検出された柱穴のあり方から、東西に長い建物と推定される。2号墳の一部を削平して、存在した可能性が考えられる。

62号掘立建物 (第769図)

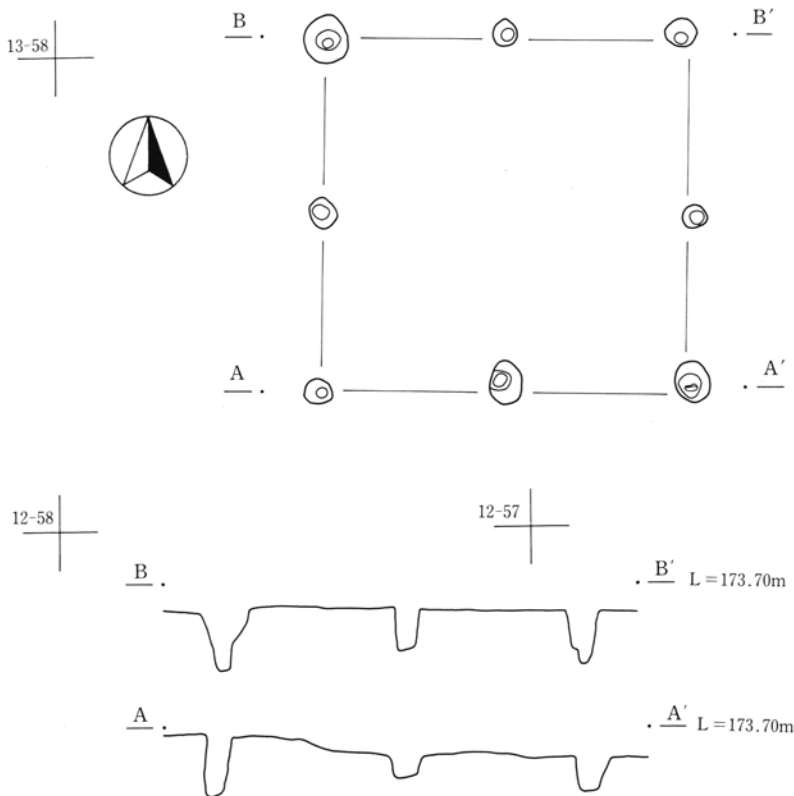
城域外郭の中央部で調査区南端にあり、5—55グリッドを中心に位置する。2号古墳の南側に位置し、56号から62号までの建物が集中する中の1棟で、57・58号掘立建物の東側、61号掘立建物の南側にある。検出された建物は、北辺の3間(4.26m)と西辺の2間(3.80m)が検出されただけで、建物の主体は調査区外の南側へ延びるものと思われる。

第3章 検出された遺構と遺物



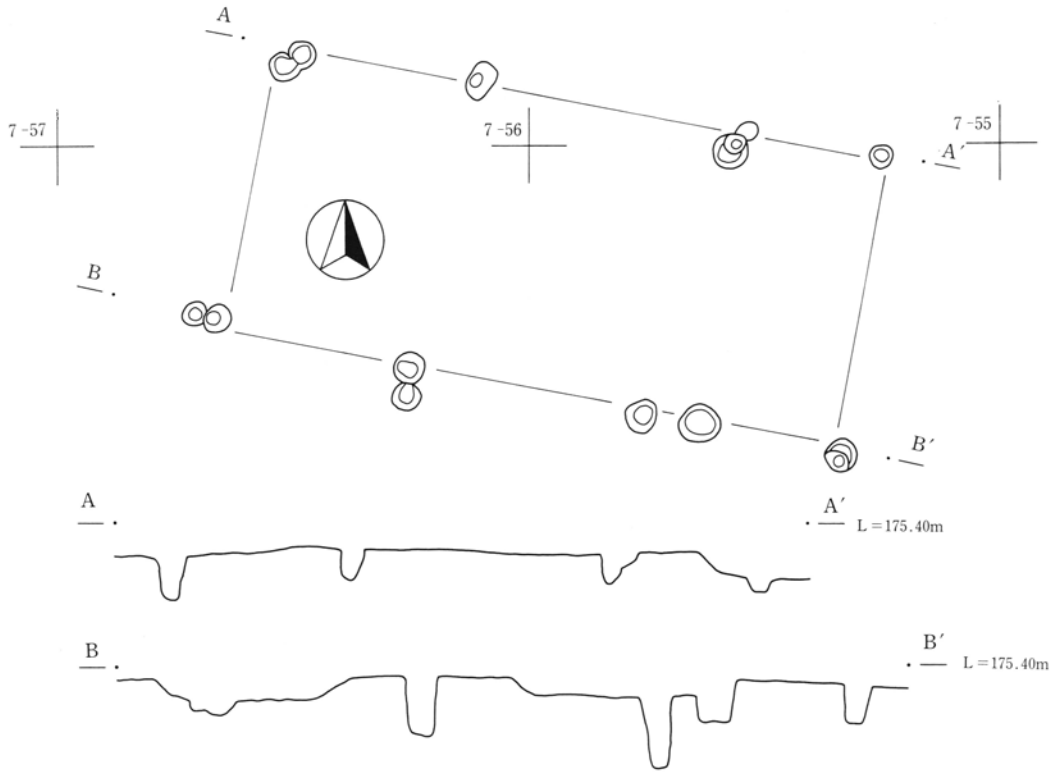
第761図 54号掘立建物遺構平面図

S = 1/80



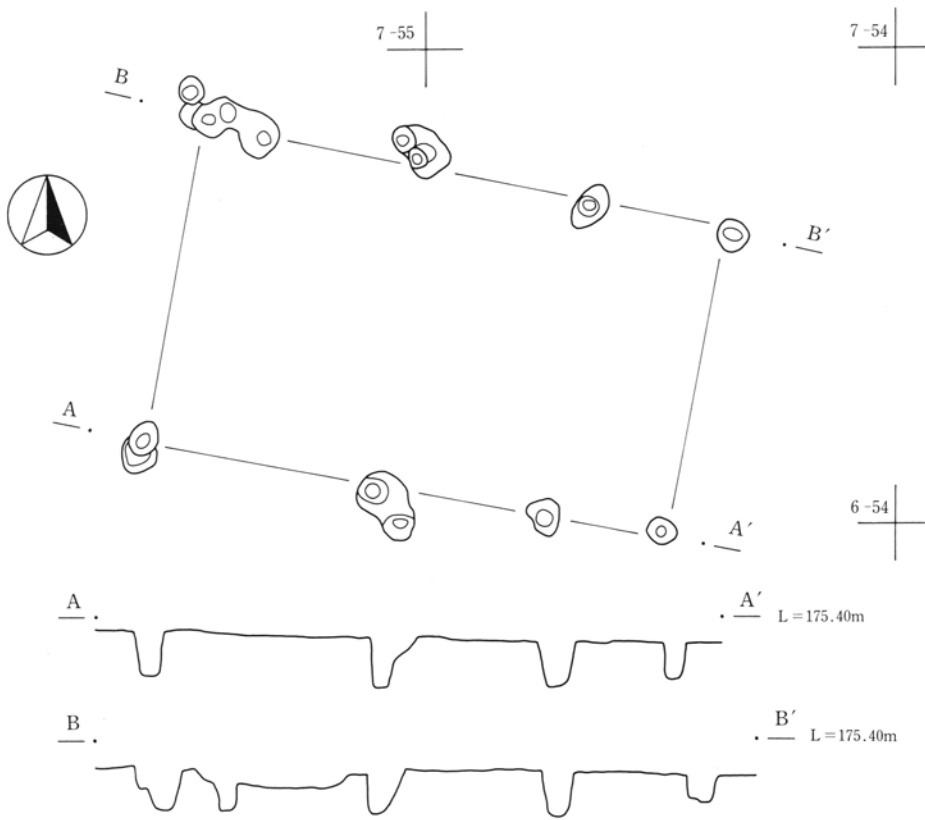
第762図 55号掘立建物遺構平面図

S = 1/80



第763图 56号掘立建物遺構平面図

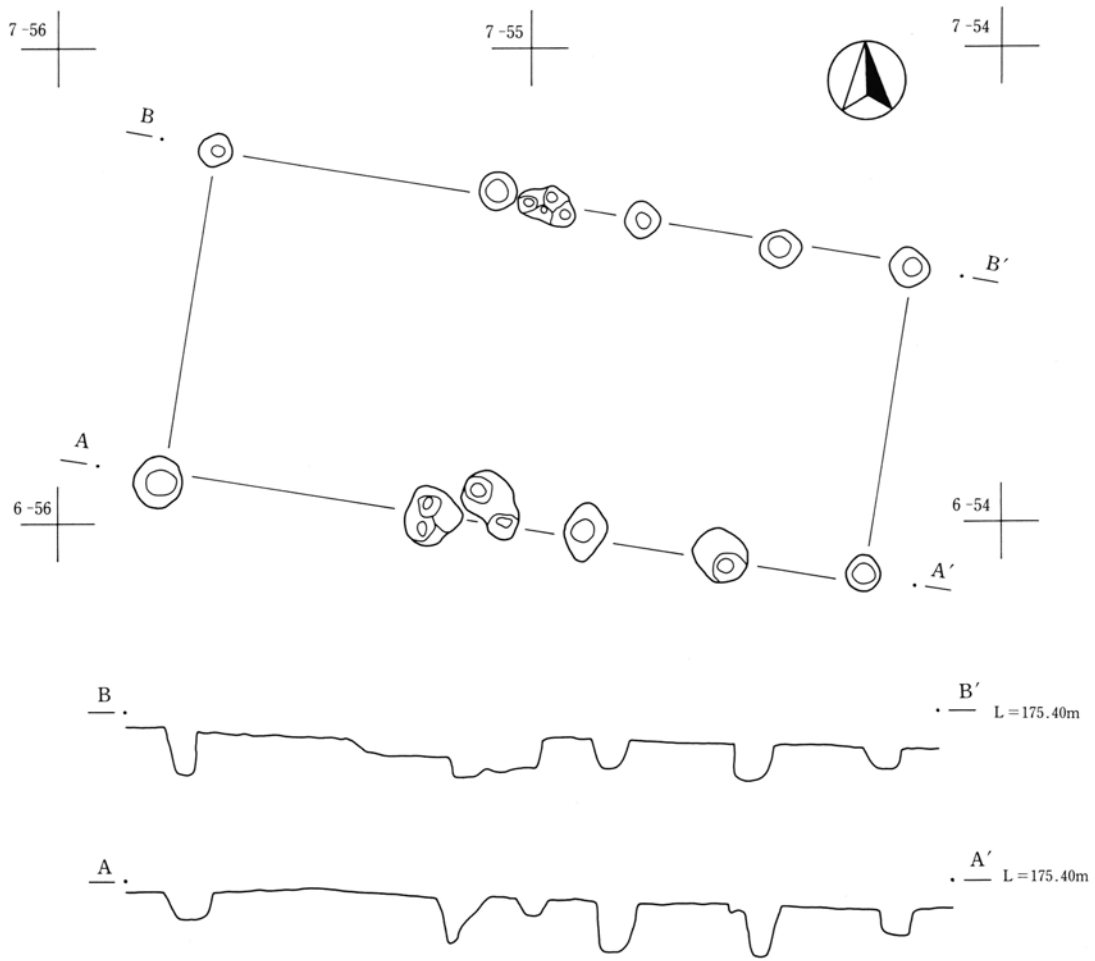
S = 1/80



第764图 57号掘立建物遺構平面図

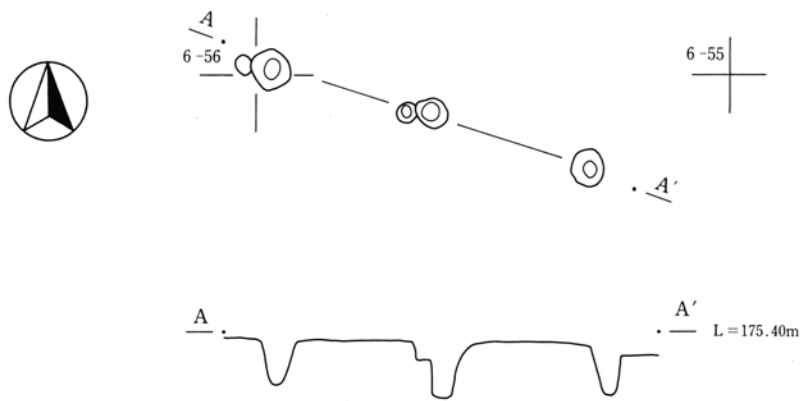
S = 1/80

第3章 検出された遺構と遺物



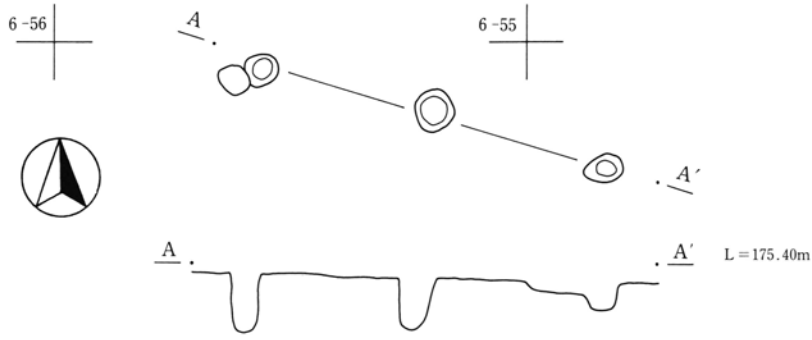
第765図 58号掘立建物遺構平面図

S=1/80



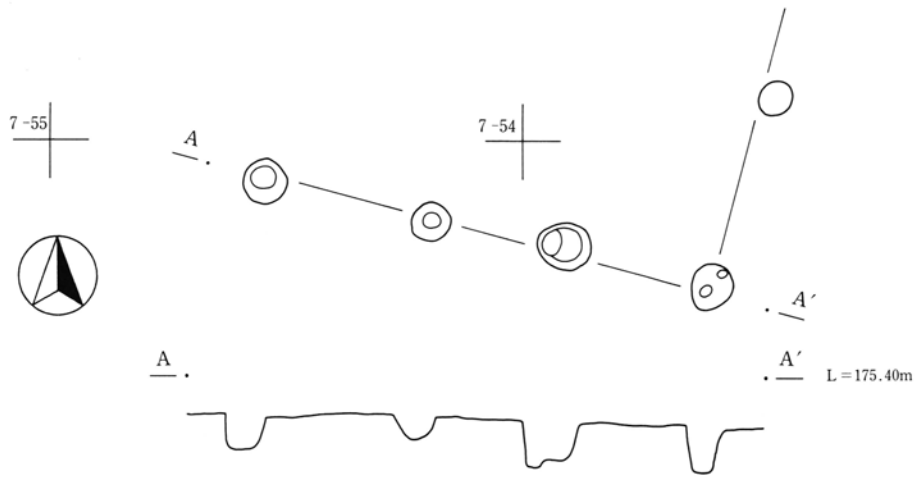
S=1/80

第766図 59号掘立建物遺構平面図



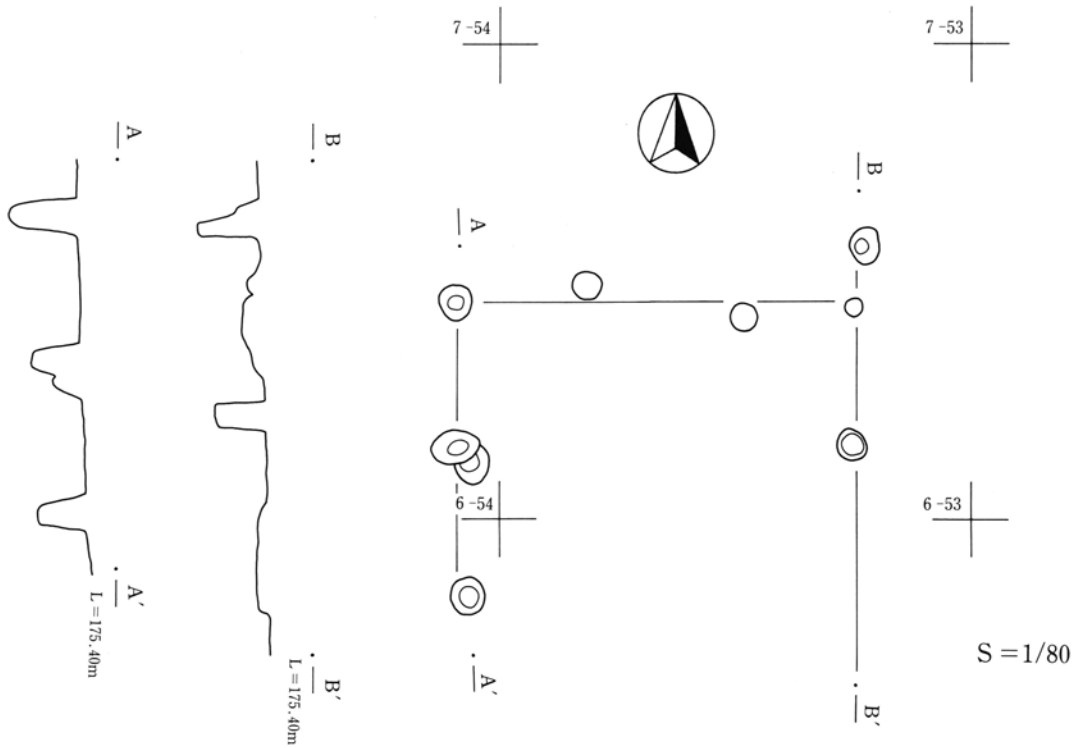
第767図 60号掘立建物遺構平面図

S=1/80



第768図 61号掘立建物遺構平面図

S=1/80



第769図 62号掘立建物遺構平面図

S=1/80

柵列(塀)・木戸・門跡遺構

1号柵列(第770図)

1 A郭の北東隅にあり、13—28グリッドを中心に位置する。土居の痕跡および48号掘立建物の北側で、他の中世遺構とは重複しない。検出された遺構は、48号掘立建物の西辺の延長上に柱穴が3本、その中央から東へT字状に3本、さらに南側へ直角に2本の柱穴が確認されている。ちょうど、入口部の東側を遮り、2・1号堀を隔てた2郭・1B郭からの目隠しの状態となる。他の遺構との重複はないが、土居の痕跡の北側を囲むように位置することから、土居と同時期に存在した可能性もある。

2号柵列(第770図)

先の1号柵列に付随するもので、判然としない。

3号柵列(第770図)

1 A郭の東縁にあり、8—10—29グリッドを中心に位置する。検出された柵の北端は、34号掘立建物の南辺に接し、1号堀に並行して南へ約13m(柱穴8本)ほど進んだ所でT字状に両脇に柱穴をもつ。さらに、このT字状となった両脇の柱穴に対応して、南側3.65m離れた位置に柱穴が2本検出され、その西側の柱穴から直角に南側へ1号堀に添って柱穴列が延びて行く。このT字状に対応する部分は、1(2)間(1.65m)×1間(3.65m)の南北に長い建物状(先に述べてきた掘立建物と、同様の建物とは考え難い)で、1号堀に設けられた土橋の西側に位置する。このことから、この部分が土橋を挟んだ本郭側の入口施設と考えられ、その両側に柵ないし塀が続いていたものと思われる。なお、本遺構は、35号掘立建物の東辺に接するように重複するが、新旧関係については不明である。

4号柵列(第771図)

1 A郭の東縁寄りにあり、7—10—30グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、先の3号柵列の約4mほど西側に並行して柱穴5本が検出され、その長さは14.50mを測る。その柱間は、3.40mから3.80mとまちまちである。また、この柱穴列に対応する柱穴も無いことから、掘立建物の1辺としての可能性はないものと考えられ、柵ないしは塀状の遺構であったものと思われる。むしろ、東側に位置する27号掘立建物に並行している点から、27号掘立建物の東側を遮るものとして想定できる。なお、26・35・46号掘立建物と重複するが、その新旧関係は不明である。

5号柵列(第771図)

1 A郭の中央やや東寄りにあり、8—31グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、1号堀に架かる土橋の延長線上で、東西方向に4本の柱穴が検出され、その長さは10.00mを測る。柱間は、3.20mから3.45mを測り、掘立建物の柱間よりも広い。また、この柱穴列に対応する柱穴も無いことから、掘立建物の1辺としての可能性はないものと考えられ、柵ないしは塀状の遺構であったものと思われる。遺構の位置から、郭内を北側と南側に分割し、遮るものとして想定されよう。なお、27・28・33号掘立建物と重複するが、その新旧関係は不明である。

6号柵列 (第772図)

1 A郭の北寄り、1号古墳の南側、7号柵列の西隣にあり、11-33グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、南側が解放するコ字状で、両側がハ字状にやや開く。柱穴は、5本からなり、東西方向に長く、その長さは3.20mを測る。柱間は、1.40mないし1.80mを測り、南側へ解放する柱間は0.80mほどを測る。この柱穴列に対応する柱穴は無く、掘立建物となる可能性はないものと考えられ、その形状から柵とは異なる遺構であった可能性もある。いずれにしろ、郭内の建物群の北側を遮るものと思われる。なお、他の中世遺構との重複が無いことから、存続時期は不明であるが、7号柵列等と関連する施設とも考えられる。

7号柵列 (第772図)

1 A郭の北寄り、1号古墳の南側、6号柵列の東隣にあり、11-31・32グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、49号掘立建物の西辺の延長状南側2.50mの位置を東端に、西側へ10.35mほど延び、6号柵列に寄った西端柱穴から南側へ直角に曲がる。5本の柱穴を確認しているが、柱間が5.35m空く中間にも柱穴が存在したものと考えられる。この柱穴列に対応する柱穴は無く、掘立建物になる可能性はないものと考えられ、柵ないし塀状の遺構であったと思われる。いずれにしろ、郭内の建物群の北側を遮るものと思われる。なお、他の中世遺構との重複が無いことから、存続時期は不明であるが、6号柵列等と関連する施設とも考えられる。

8号柵列 (第773図)

1 B郭の西縁で、1号堀に架かる土橋の東側にあり、7・8-28グリッドに位置する。検出された遺構は、土橋付け根部の北端から南端に至る3.9mの間に設けられたもので、柱穴5本からなる。ちょうど土橋の東側を塞ぐ形にあり、中間には1.80mの柱間が空く。このあり方から、本郭側の入口施設の一つで、木戸状の遺構であったものと考えられる。他の中世遺構との重複が無いことから、存続時期は不明であるが、9号柵列等と関連する施設とも考えられる。

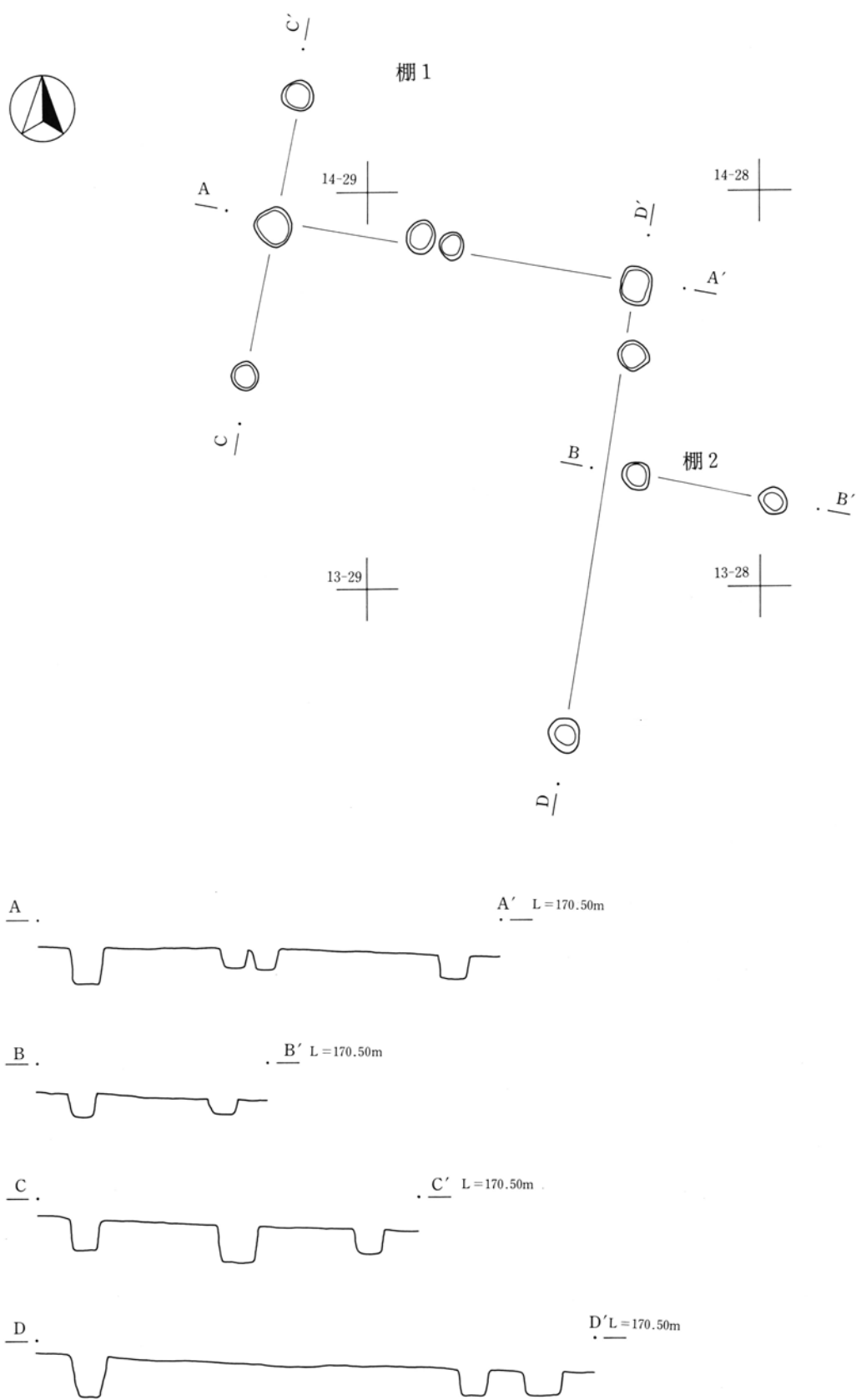
9号柵列 (第773図)

1 B郭の西縁で、1号堀に架かる土橋の東側、8号柵列の東側約1.50mにあり、7-28グリッドに位置する。検出された遺構は、8号柵列の東側に並行するように、北側に3本の柱穴が、南側にも対応する3本の柱穴が検出され、それぞれの中央の柱穴内には大型の礎石が据えられている。こうした状況から、この遺構は門跡と考えられ、柱穴の配置からH状に組まれるものと思われる。東西方向の長さは1.80mを測り、門幅は約2.00mを測る。当然、礎石のある柱穴に、大型の門柱が存在したものと考えられよう。土橋を介し、先の8号柵列と同一線上にある点からも、8号柵列と一連の入口施設と考えられる。

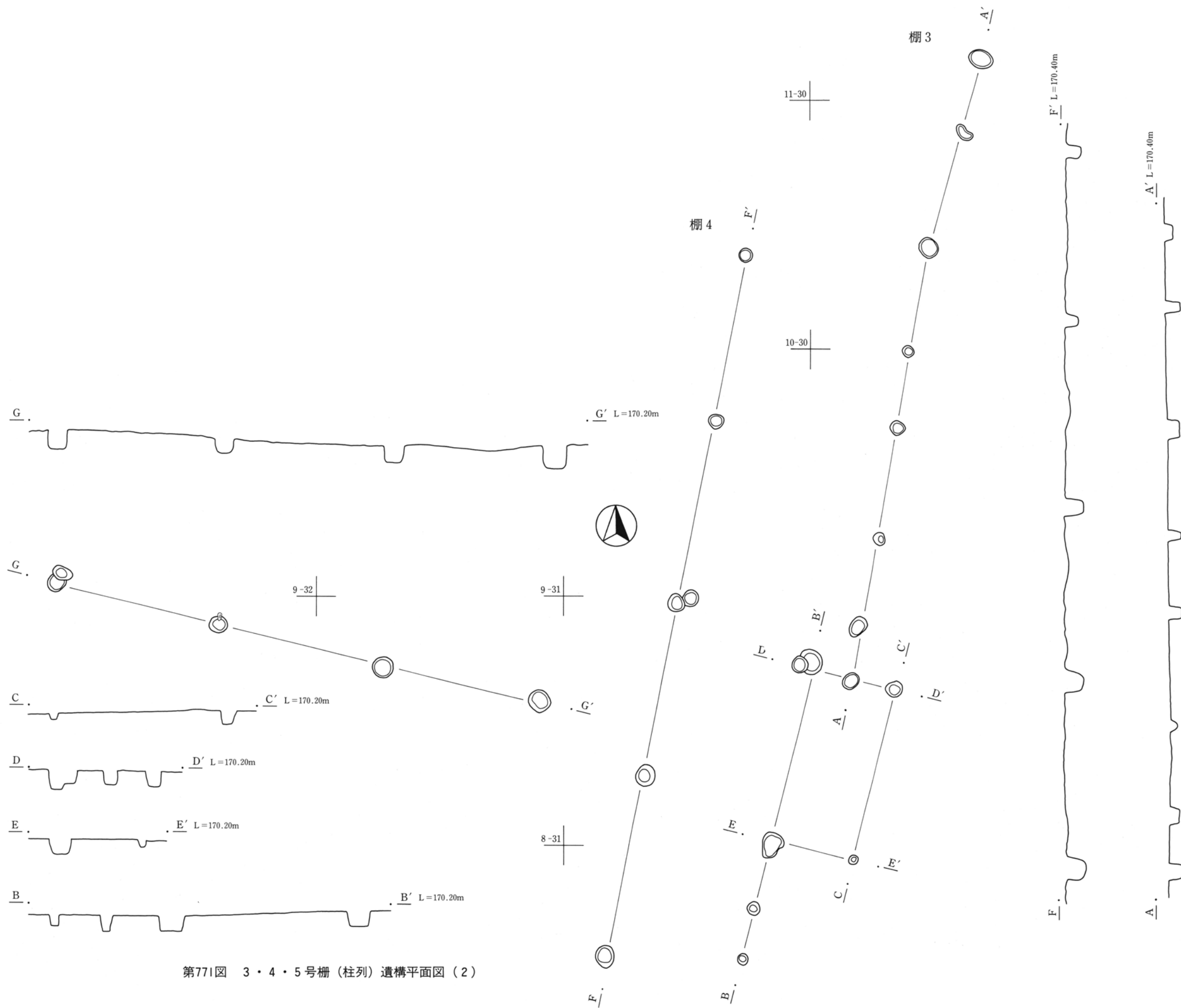
また、この遺構が、1号堀よりもやや内側に位置することから、本1 B郭の周縁にも土居ないし柵・塀状の施設が存在したものと考えられる。

10号柵列 (第773図)

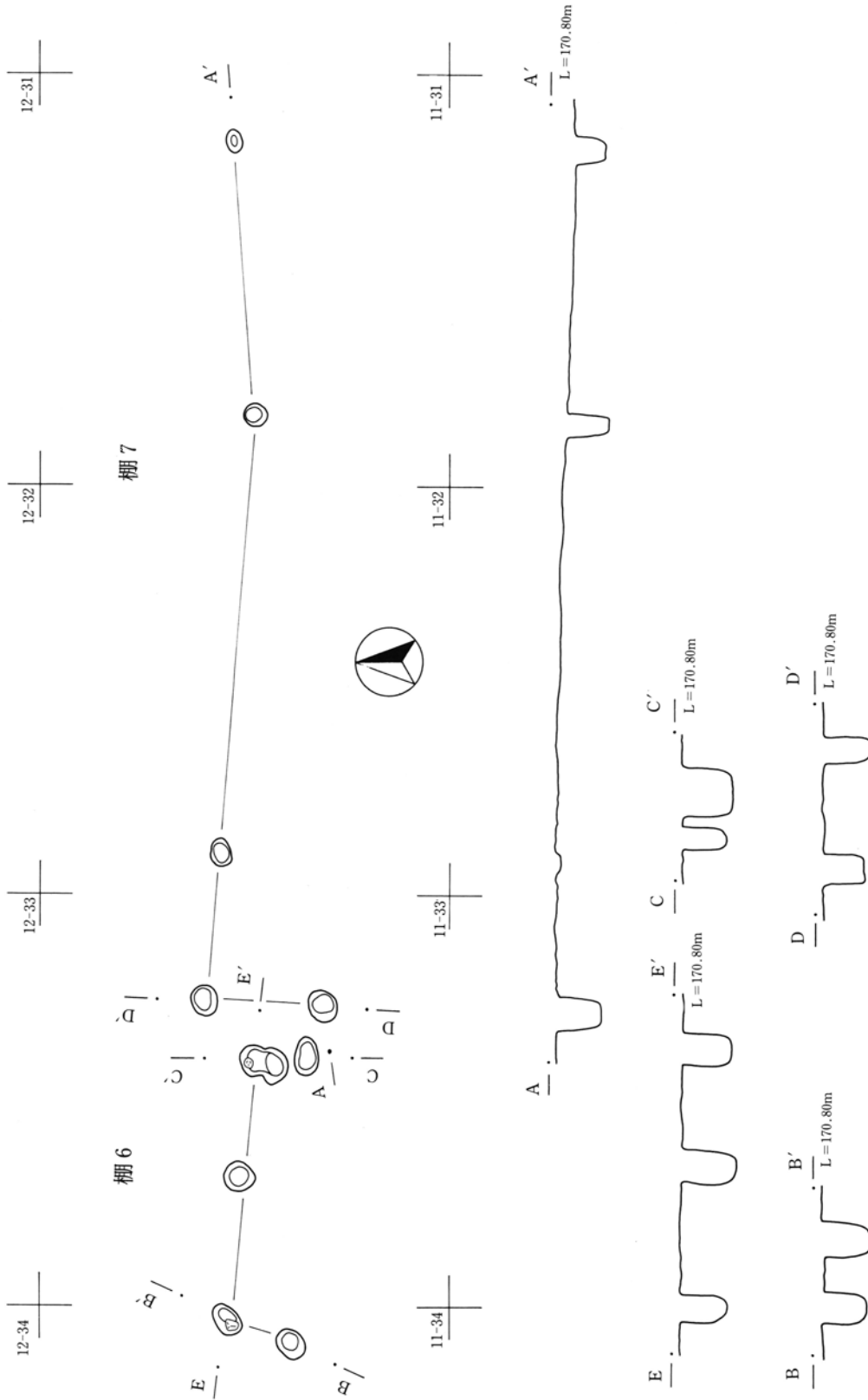
1 A郭の中央やや東寄りにあり、9-31・32グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、先の5号柵列の北側に、東西方向に5本の柱穴が検出され、その長さは9.06mを測る。柱間は、1.68mから2.68mを測り、掘立建物の柱間に近い。しかし、この柱穴列に対応する柱穴が無いことから、掘立建物の1辺として



第770図 1・2号棚(柱列)遺構平面図(1) S=1/80

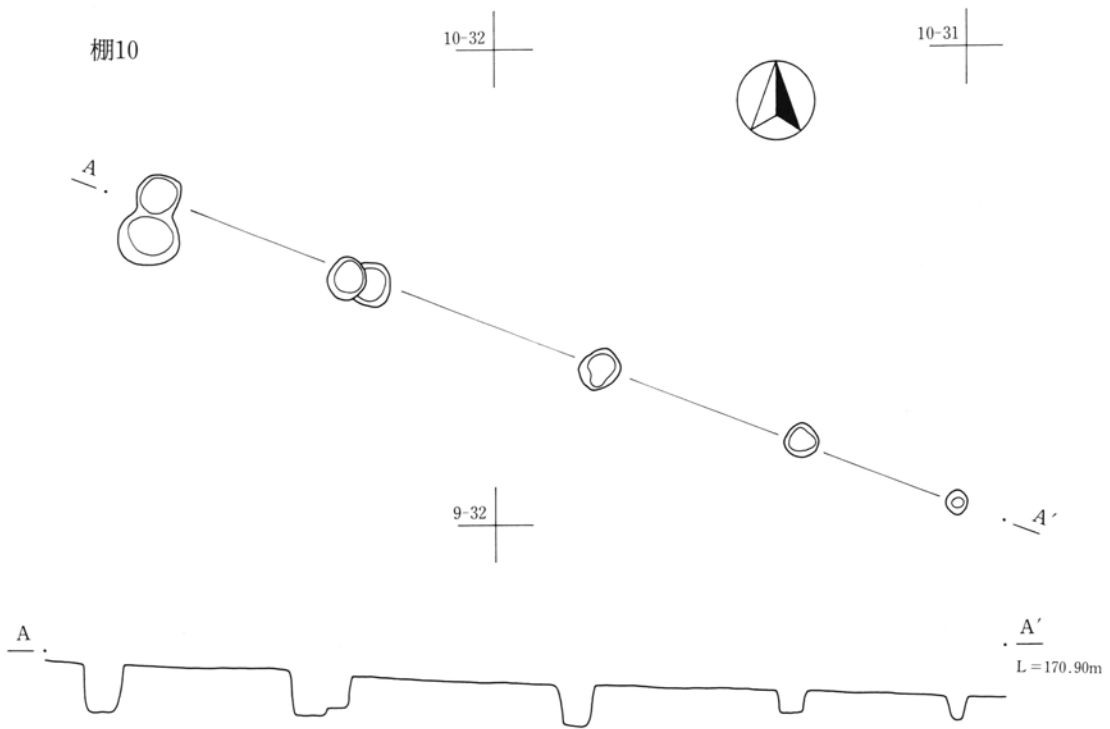
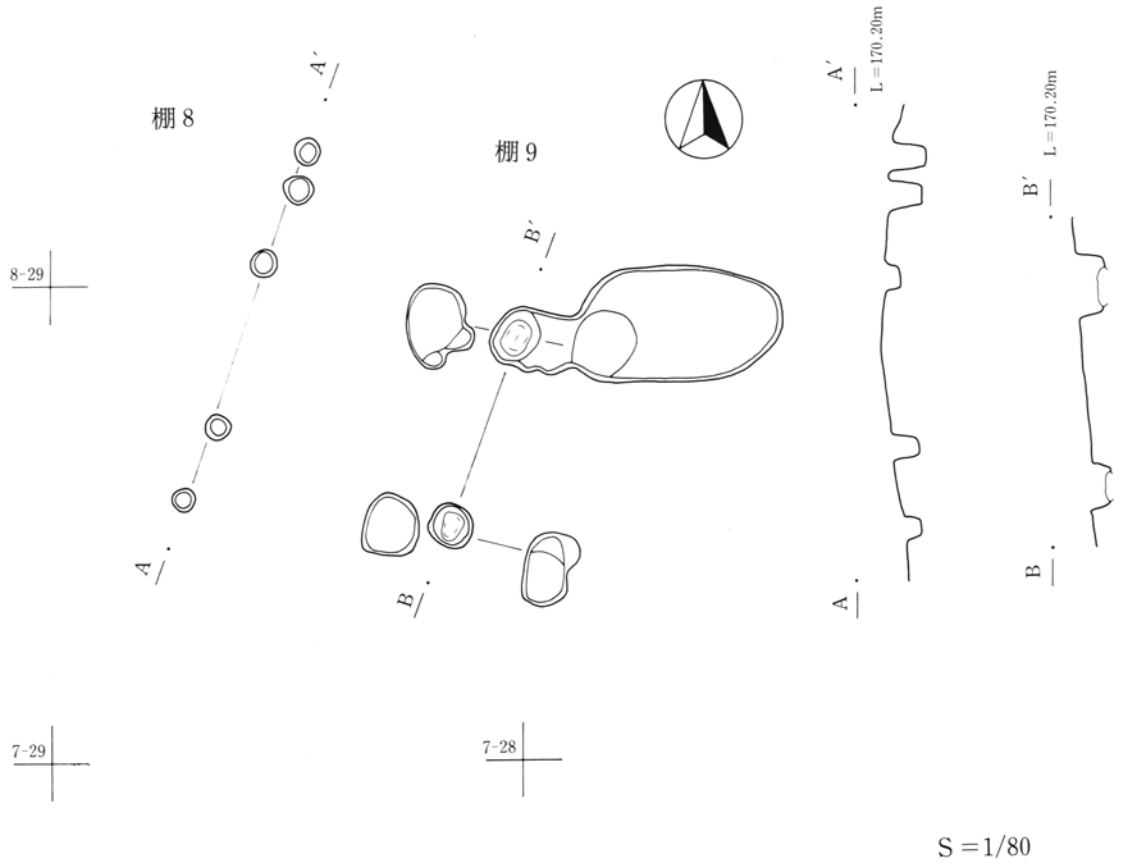


第771图 3·4·5号栅 (柱列) 遺構平面图 (2)

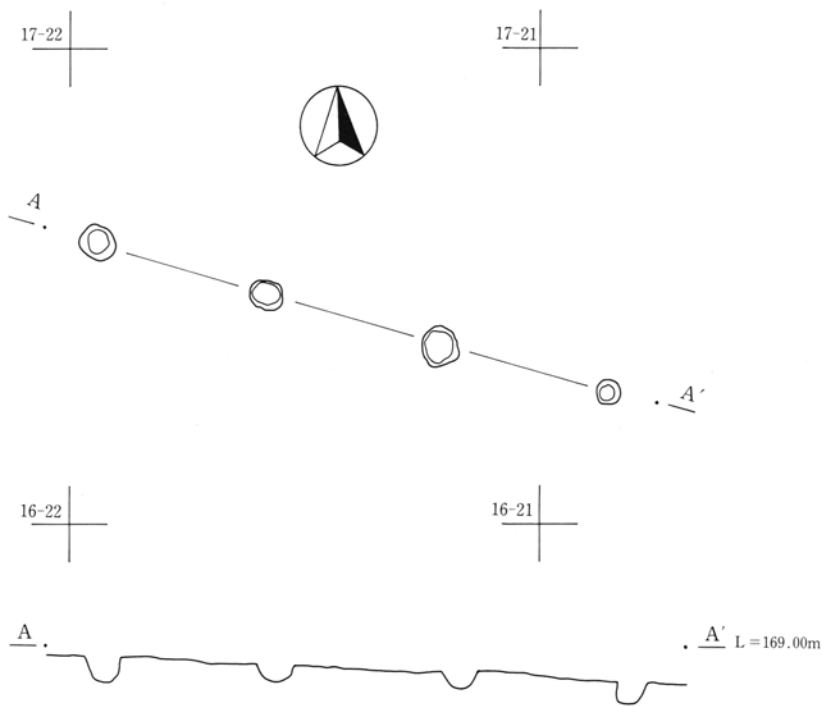


第772図 6・7号柵（柱列）遺構平面図（3）

S=1/80

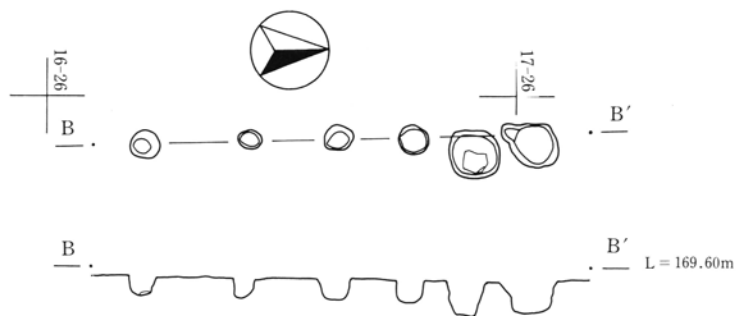


第773図 8・9・10号柵（柱列）遺構平面図（4）



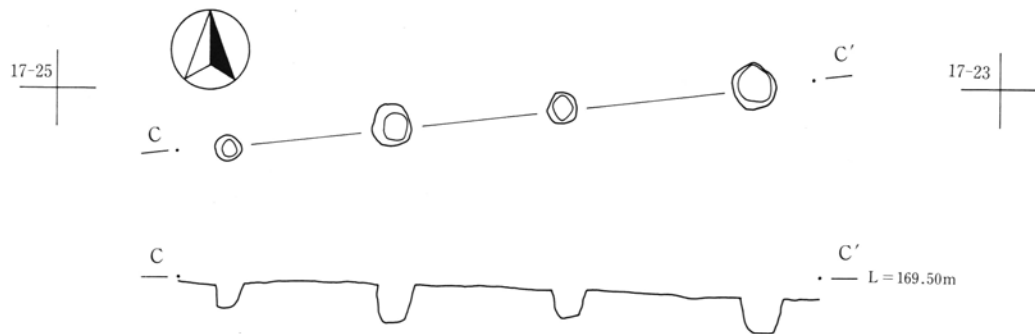
S = 1/80

B区1号柱列



S = 1/80

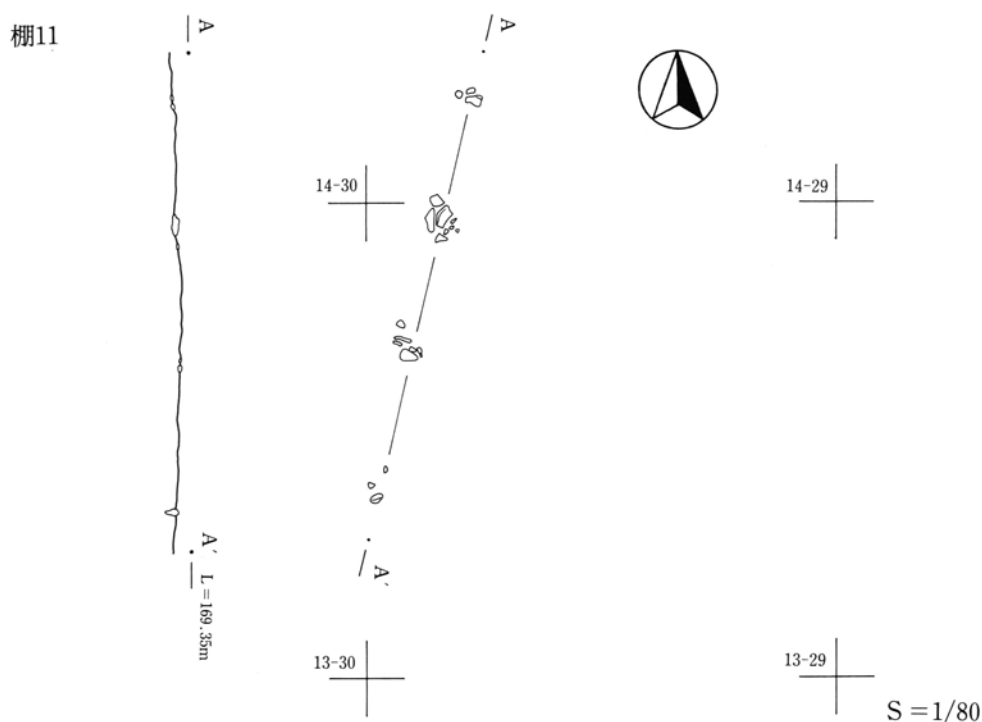
B区2号柱列



B区3号柱列

第774図 B区1・2・3号柵(柱列)遺構平面図(5)

S = 1/80



第775図 11号柵（柱列）遺構平面図（6）

の可能性は薄く、柵ないしは塀状の遺構であったものと思われる。遺構の位置から、郭内を北側と南側に分割し、遮るものとして想定されよう。なお、27・28・31・46号掘立建物と重複するが、その新旧関係は不明である。

11号柵列（第775図）

1 A郭の北東寄りにあり、12-29グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、49号掘立建物の東辺に接しており、土居痕跡の西側に柱穴ではなく、根石状のグリ石と考えられるものが直線上に4箇所確認された。その長さは、4.10mを測る。この遺構は、検出されたその位置等から、柵状の遺構ではなく、入口施設の一部とも考えられ、その全容は判然としない。なお、49号掘立建物と重複するが、その新旧関係は不明である。

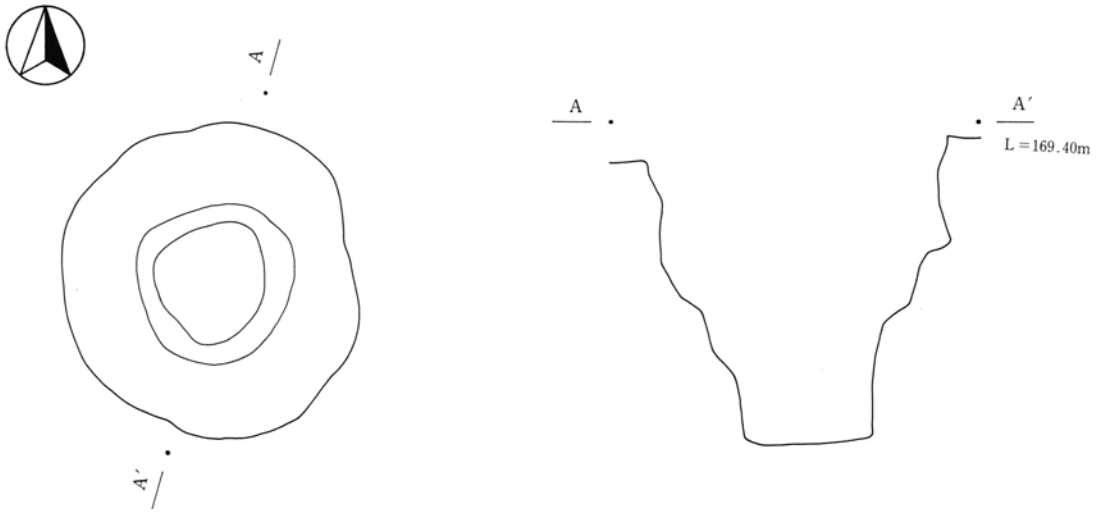
B区1号柱列（第774図）

2郭の東縁近くにあり、16-21グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、2号堀の北側10.25mほどの所に、東西方向に4本の柱穴が直線上に検出された。その長さは、5.80mを測る。柱穴の柱間は、1間が1.80m前後を測り、他の掘立建物の柱間と同様で、掘立建物の1辺である可能性が高いが、対応する柱穴は確認されていない。

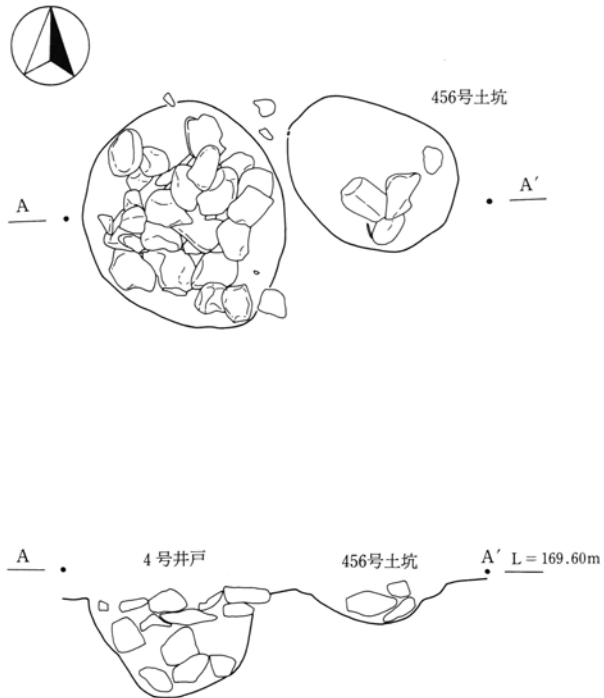
B区2号柱列（第774図）

2郭の中央やや東寄りにあり、16-25グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、1号堀と2号堀の

2号井戸

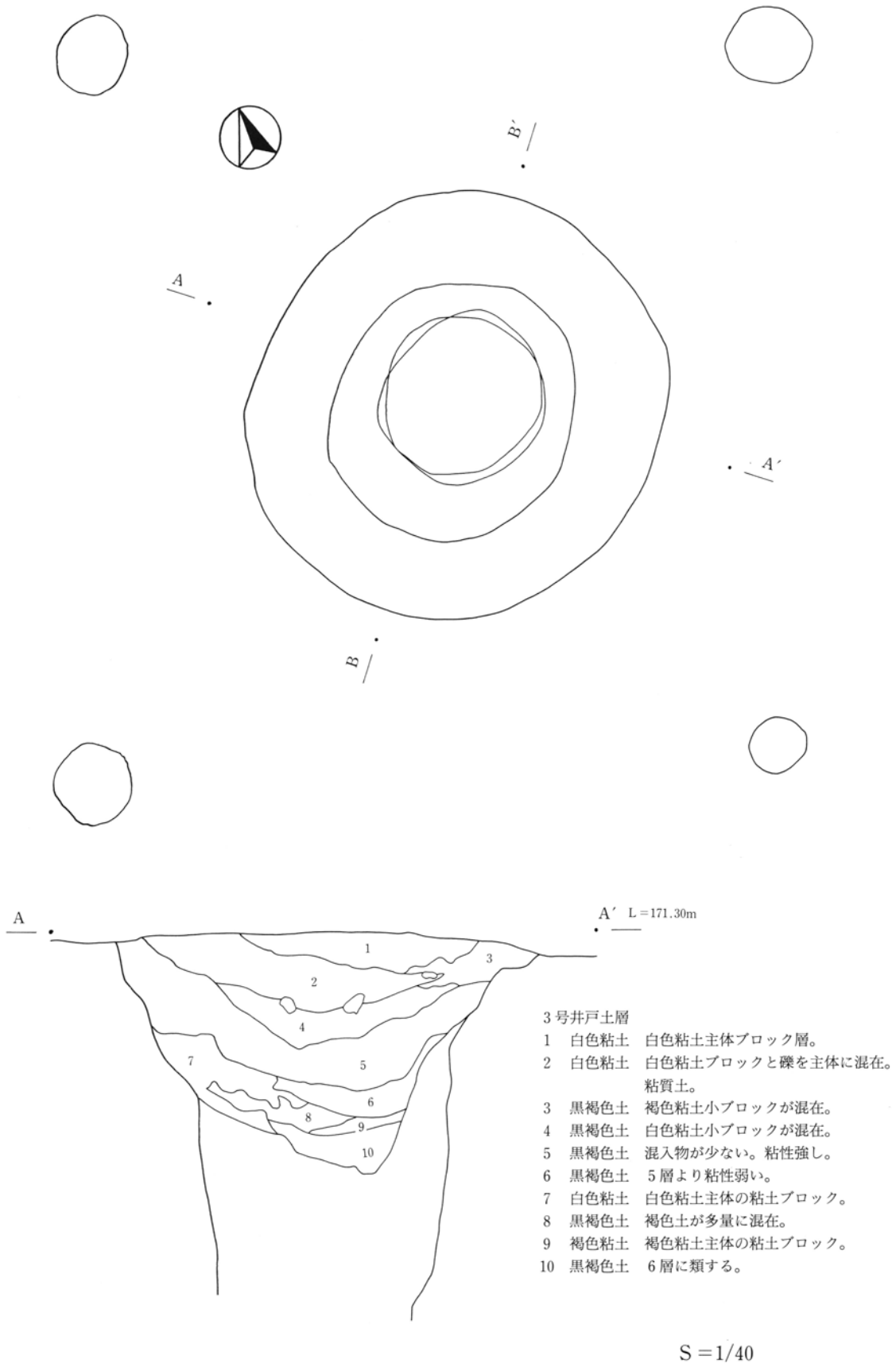


4号井戸

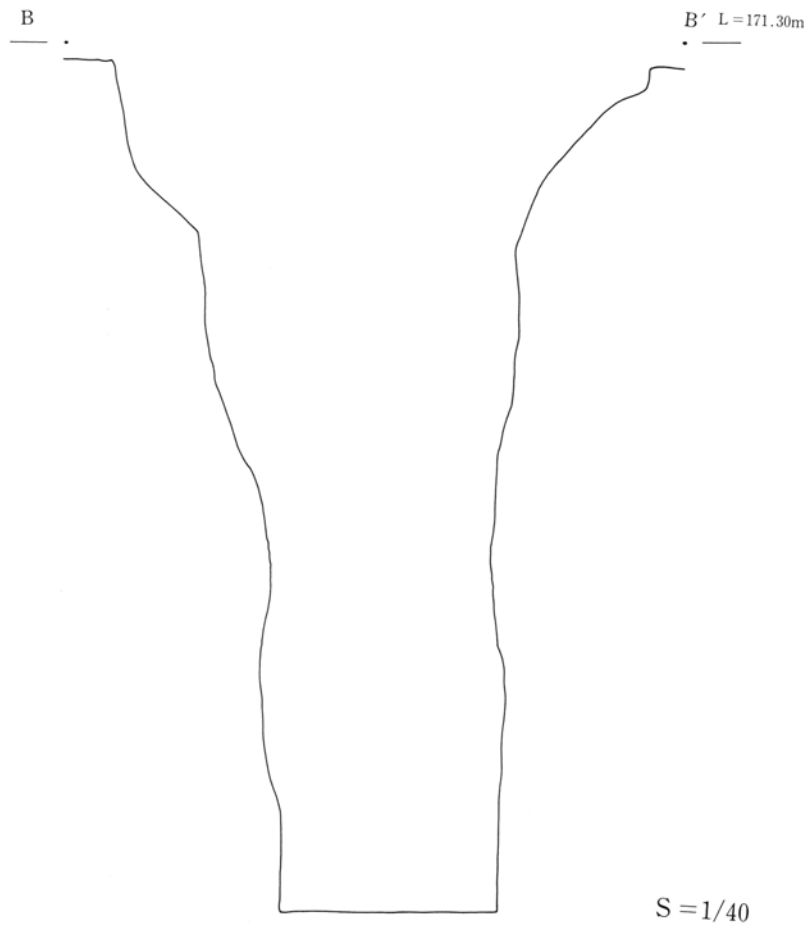


S=1/40

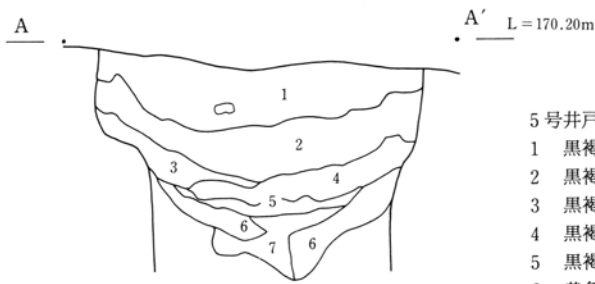
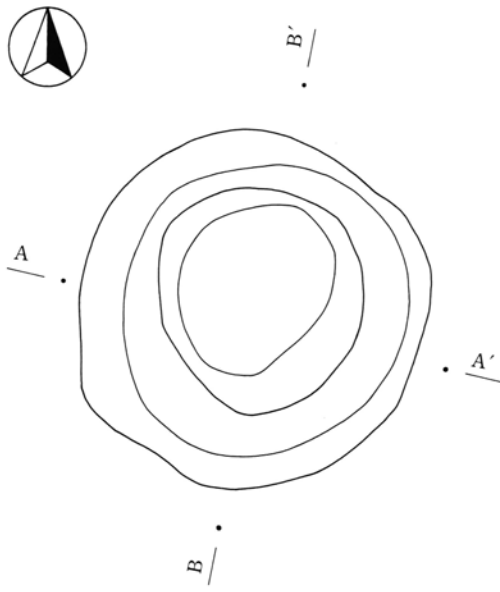
第776図 2・4号井戸遺構平面図



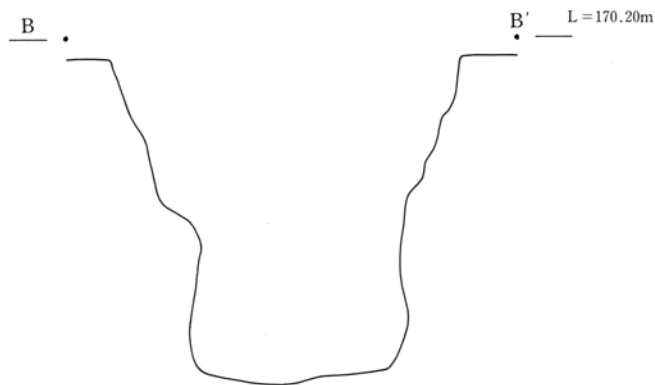
第777図 3号井戸遺構平面図



第778図 3号井戸遺構断面図



- 5号井戸土層
- | | |
|-----------|-----------------|
| 1 黒褐色土 | 粘土粒・ローム粒を少量含む。 |
| 2 黒褐色土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 3 黒褐色粘質土 | ロームブロックを少量含む。 |
| 4 黒褐色粘質土 | 3層とロームとのブロック混土。 |
| 5 黒褐色粘質土 | ロームブロックを多量に含む。 |
| 6 黄色土 | 粘質ロームブロック。 |
| 7 灰黒褐色粘質土 | 5層に類するが、やや明るい。 |



S=1/40

第779図 5号井戸遺構平面図

交点の北側5.00mほどの所に、南北方向に5本の柱穴が直線上に検出された。その長さは、4.40mを測る。柱穴の柱間は、1間が0.90mから1.30mを測り、他の掘立建物の柱間よりも狭く、対応する柱穴も確認されていないことから、柵状の遺構であるものと考えられる。

B区3号柱列（第774図）

2郭の中央より東寄りにあり、16—24グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、2号堀の北側10.00mほどの所に、東西方向に4本の柱穴が直線上に検出された。その長さは、5.60mを測る。柱穴の柱間は、1間が1.80mから2.00m前後を測り、他の掘立建物の柱間と同様で、掘立建物の1辺である可能性が高いが、対応する柱穴は確認されていない。

3. 井戸

本遺跡では、5基の井戸が検出された。その全てが、城郭内からのものであり、1A・1B・2郭に分布する。以下、各井戸について説明する。

1号井戸

1A郭の北西隅の3号堀内肩部にあり、14—35グリッドに位置する。検出された遺構は、3号堀内にあるため、その下部が残存していた。断面形状は漏斗状を呈し、下面の平面形状はほぼ円形で、底面は平坦となる。底面規模は、径1.00m前後を測る。重複する3号堀との新旧関係は、3号堀の方が新しい。

2号井戸（第776図）

2郭の中央東寄りにあり、15—22グリッドに位置する。検出された遺構は、2号堀の北側約6.00mにあり、平面形状は円形で、口径1.60mを測る。断面形状は漏斗状を呈し、下面の平面形状もほぼ円形で、底面は平坦となる。底面規模は、径0.70m前後を測る。底面までの深さは、1.50mほどと比較的浅い。

3号井戸（第777・778図）

1A郭の南西隅にあり、6—36グリッドに位置する。検出された遺構は、先の32号掘立建物の中央にあり、平面形状は円形で、口径2.80m前後を測る。断面形状は漏斗状を呈し、下面の平面形状もほぼ円形で、底面は平坦となる。底面規模は、径1.16m前後を測る。底面までの深さは、4.45mと深い。覆土内からの遺物の出土は皆無であるが、上部は白色・黄色粘土により埋め土されており、他の井戸の覆土とは異なっている。先にも触れたが、32号掘立建物と一体となるものと考えられ、本郭内で重要な井戸と推測される。

4号井戸（第776図）

1B郭の中央南寄りにあり、7—24グリッドに位置する。検出された遺構は、掘立建物群の南側にあり、平面形状は円形で、口径1.20mを測る。覆土内には、多くの礫を含み、底面までは浅く、井戸の形状とは異なることから、土坑の可能性が高い。

5号井戸（第779図）

1 A郭の中央東縁にあり、7—30グリッドに位置する。検出された遺構は、1号堀南半際にあり、平面形状は円形で、口径1.80m前後を測る。断面形状は漏斗状を呈し、下面の平面形状もほぼ円形で、底面は平坦となる。底面規模は、径1.00m前後を測る。底面までの深さは、1.74mほどと比較的浅い。覆土は、暗褐色土が主体となり、遺物は出土していない。

4. 竪穴状遺構

本遺跡からは、5基の竪穴状遺構が検出されている。この内、2基は城郭内の4郭縁辺にあり、3基は城郭の西方約300mほど離れたJ区とした西台地の西側斜面に検出された。特に4・5号竪穴状遺構としたものは、他とは異なる規模・構造をもつものとして、その性格には注目すべき点がある。以下、各遺構の説明を記す。

1号竪穴状遺構（第780図）

城郭内4郭の北西部縁辺にあり、27—22グリッドに位置する。検出された遺構は、郭の外縁部を巡る6号堀の南側約4.00mにあり、堀に並行するように、1辺が4.00m×2.80mほどの規模のやや台形気味の長方形を呈する。壁高は、最大で50cmを測る。底面は平坦であるが、中央部に2.20m×1.30mほどの方形の落込みを有する。この落込みの底面も、平坦となる。出土遺物は、無かった。

2号竪穴状遺構（第781図）

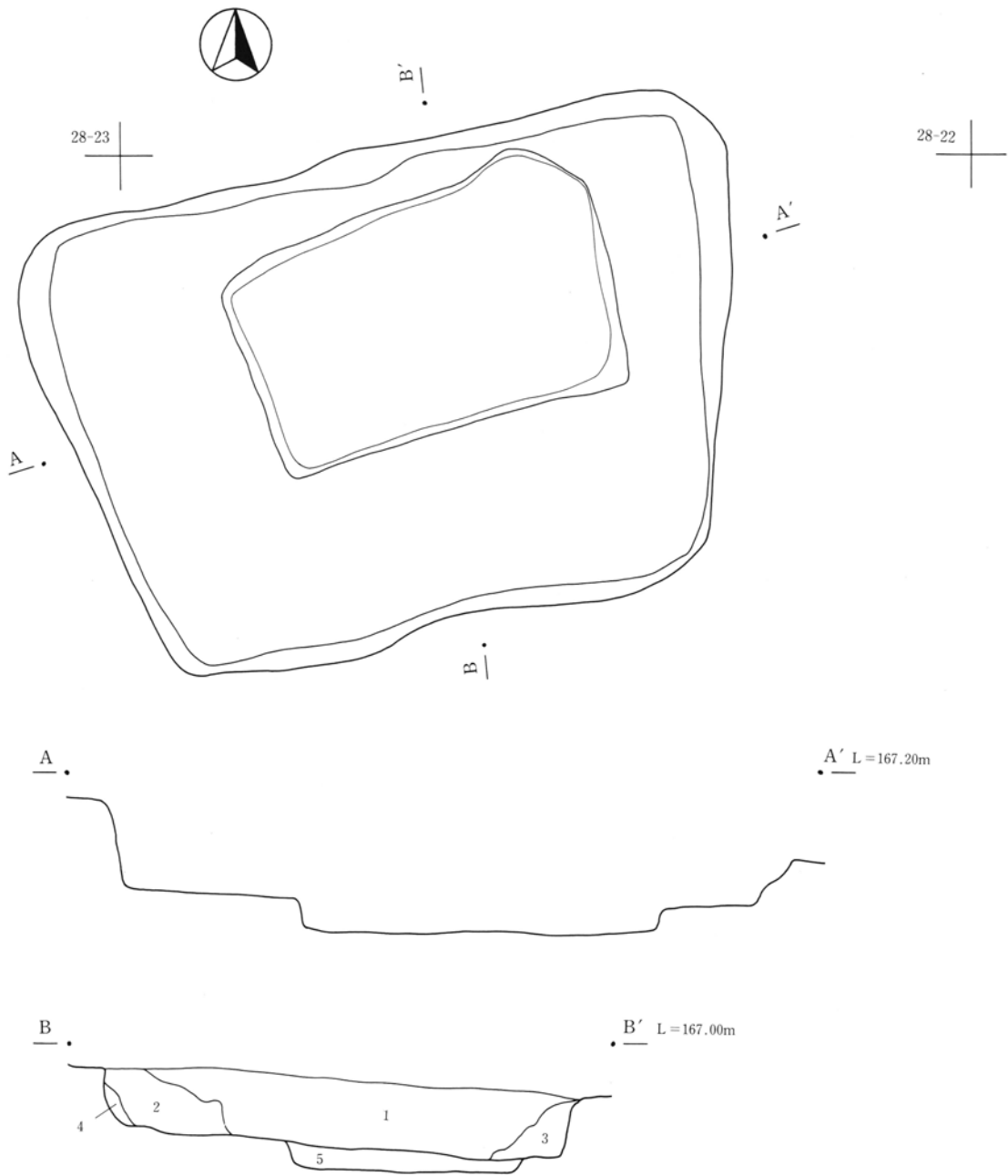
城郭内4郭の北西部縁辺にあり、28—21グリッドに位置する。検出された遺構は、郭の外縁部を巡る6号堀の南側にあり、堀に並行するように、1辺が3.20mほどの長方形を呈し、溝と重複する。壁高は、10cm前後を測り、浅い。底面は平坦で、ピットが3箇所検出されている。出土遺物は、無かった。溝との新旧関係は、溝の方が新しい。

3号竪穴状遺構（第781図）

城郭の西方約300mの西側台地で、J区とした西斜面にあり、8—96グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、4・5号竪穴状遺構の間であり、1辺が2.80m×1.70mほどの長方形を呈する。壁高は、最大で40cmを測る。底面は、平坦となる。出土遺物は、無かった。遺構の周辺からは、第806図50に示した内耳鍋と石臼が出土している。

4号竪穴状遺構（第782図）

城郭の西方約300mの西側台地で、J区とした西斜面にあり、9・10—94・95グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、西斜面の中位に、等高線に添う形で、竪穴状に掘り込まれている。遺構の東側は、斜面の山側となるため壁高は高く、西側では判然としない。平面形は、北東方向に長軸をもつように方形を呈しているが、北側は部分的に不明である。遺構の規模は、長軸14.40m×端軸7.20mほどを測る。底面は、3段の平坦面で構成され、北側が高く、順次南側が低くなる。南側底面の中央北寄りには、1.00m×0.80mの方



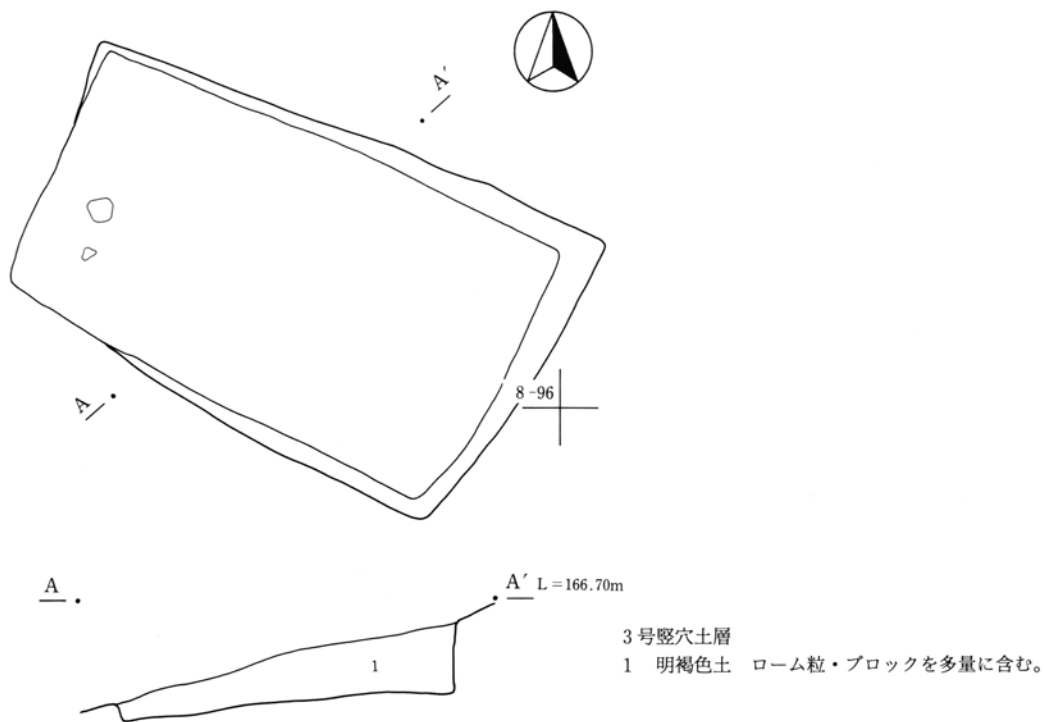
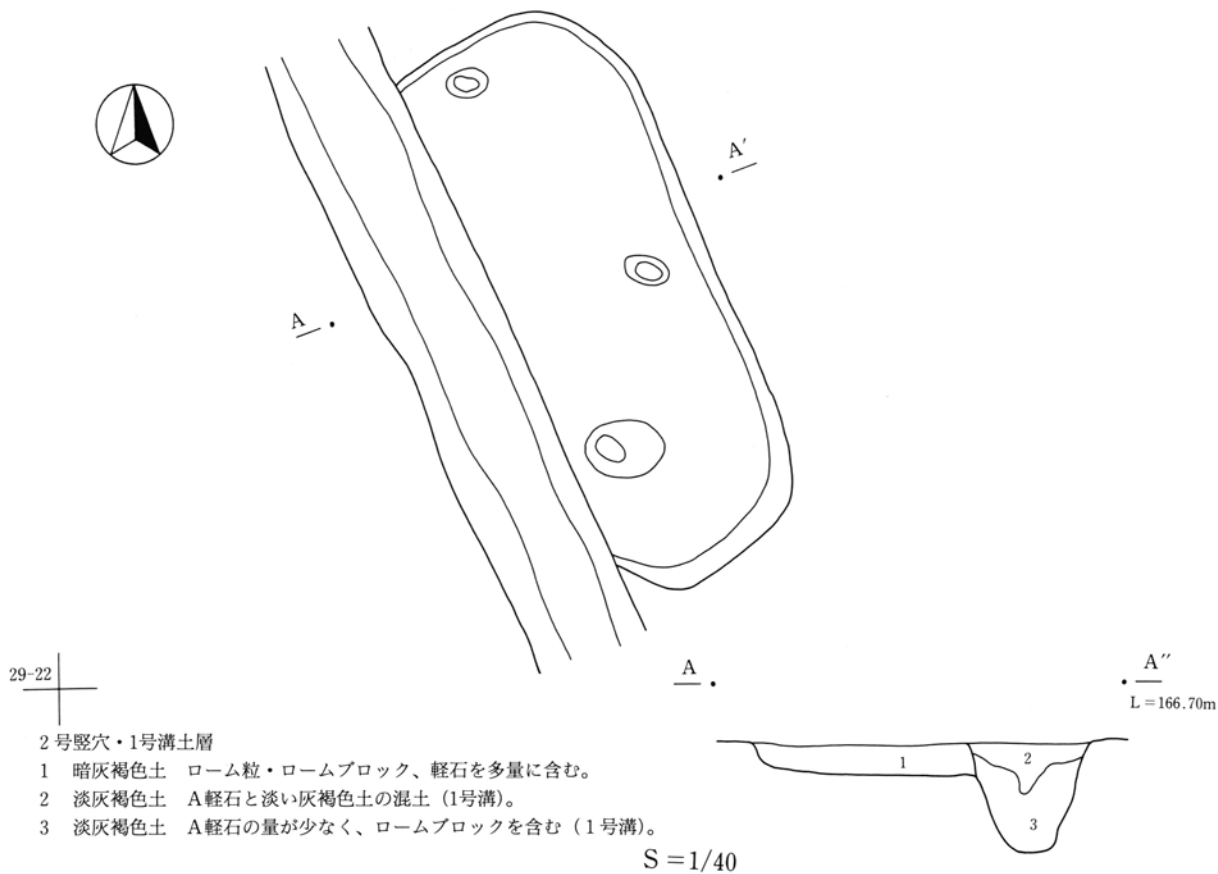
1号竖穴土層

- 1 明褐色土 黄色ロームの大粒ブロック、小粒ブロックを多量に含み、かなり明るく黄色系である。
- 2 暗黒褐色土 黄色ロームの小粒ブロックを多量に含み、暗い黒色系。
- 3 明褐色土 かなり明るい褐色土。混合物をほとんど含まない。
- 4 暗黒褐色土 黄色ロームの大粒、小粒を多量に含む。
- 5 明褐色土 黄色ロームの小粒ブロックを多量に含みかなり明るい黄色系。

S = 1/40

第780図 1号竖穴遺構平面図

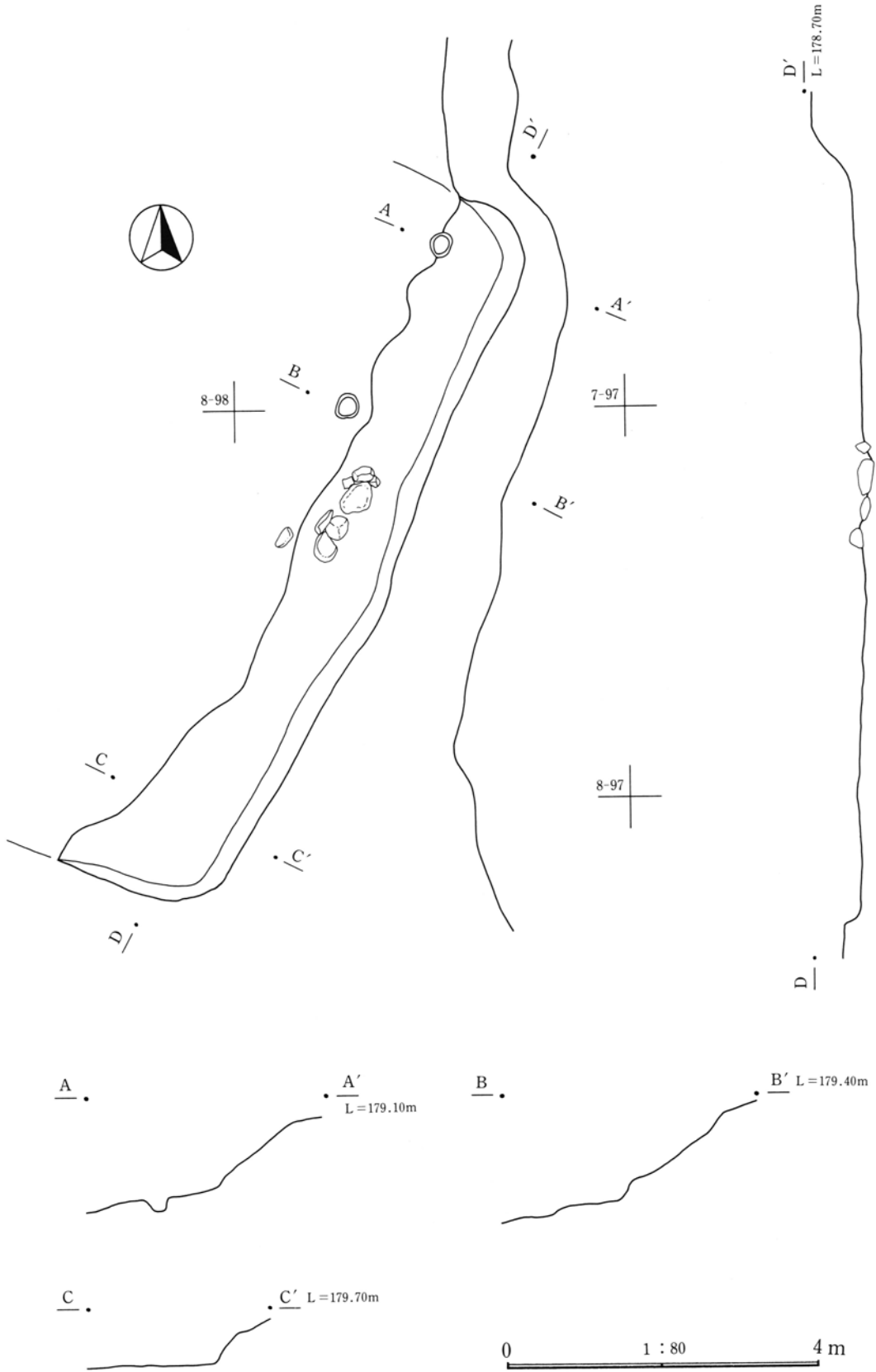
第3章 検出された遺構と遺物



第781図 2・3号竪穴遺構平面図



第782图 4号竖穴遺構平面図



第783図 5号竖穴遺構平面図

第3章 検出された遺構と遺物

形の土坑状のものが検出され、浅く、覆土は焼土粒を含む柔らかい土であった。また、遺構内には、いくつものピットが検出されており、壁内側に柱穴が存在したものと考えられる。この柱穴は、東側で6本が直線上に並ぶことから、5間×2間の間取りが想定される。

出土遺物には、陶磁器類や、内耳鍋等があり、遺構内全体に分布していた。特に、第806図47～49に示した内耳鍋は、中段東寄りに集中し、南側の下段からは第815図135・136に示すカワラケおよび三足高炉、第815図152の中国製陶磁器が出土している。

以上のことから、本遺構は竪穴状を呈しているが、中世民家であるものと考えられる。その存在時期は、本遺構出土遺物と城郭内出土遺物が同時期であることから、城郭の存続時期に並行して存在したのと考えられよう。

5号竪穴状遺構（第783図）

城郭の西方約300mの西側台地で、J区とした西斜面にあり、7-97グリッドを中心に位置する。検出された遺構は、西斜面の中位に、等高線に添う形で、竪穴状に掘り込まれている。遺構の東側は、斜面の山側となるため壁高は高いが、西側は削平され判然としない。平面形は、北東方向に長軸をもつように方形を呈しているものと思われ、先の4号竪穴状遺構と近似している。遺構の規模は、長軸で10.00mを測る。底面は、平坦となるが、西側は不明。また、遺構内北側には、壁内側に柱穴が2本検出されており、4号竪穴状遺構と同様に、柱が存在したのと考えられる。出土遺物は、無かった。

削平により、不明な点も多いが、4号竪穴状遺構と同様な建物と考えられる。存在時期は、不明。

5. 土 坑

検出された土坑は、全体で800基余を数えるが、このうち堆積土・出土遺物等から明らかに中世の所産と考えられるものは142基である。後述する不明土坑として扱った中にも、中世土坑が含まれていると思われるが、他の時代のものとの区別がつかないため、不明土坑の項で扱っている。なお、各土坑の遺構説明については、土坑一覧表として表118に示す通りであり、ここでは主な土坑の記載にとどめた。

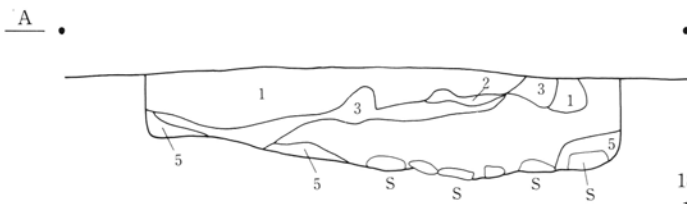
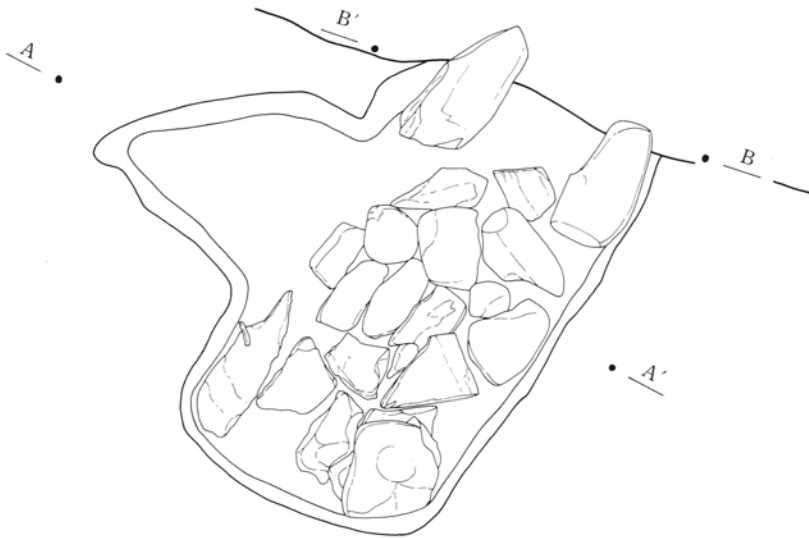
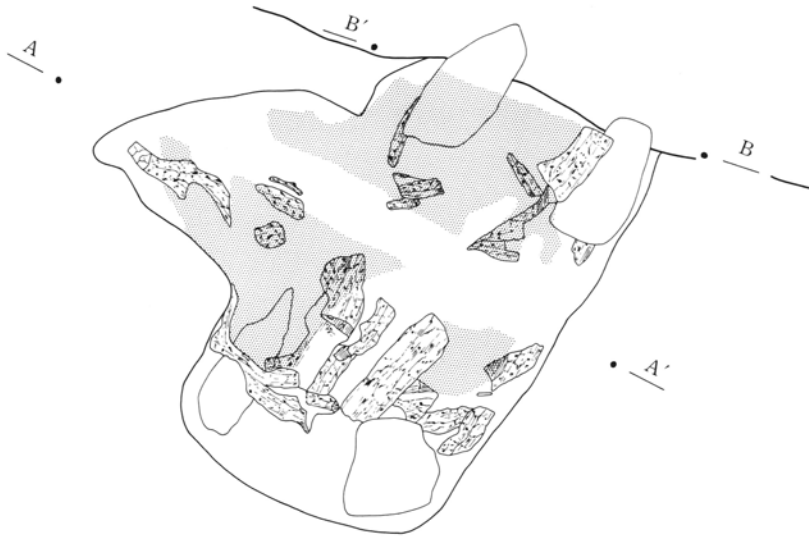
181号土坑（第784図）

城郭の西方約200mほどの低地部（H区）で、16-78グリッドに位置する。土坑は、北東方向に長軸をもつ1.30m×0.75mの長方形土坑の北西辺に突出部をもつ形状を呈し、長方形部の四隅に大型の礫を据え、底面には小型礫を敷く。壁高は、25cmを測る。覆土中には、炭化した木材および焼土粒が多く出土し、骨粉状のものも確認されている。

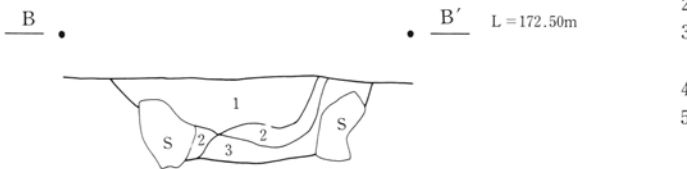
以上のことから、本土坑は、火葬墓であると考えられる。

225号土坑（第785図）

中央台地としたE区にあり、13-57グリッドに位置する。土坑は、長軸3.38m×短軸2.23mの長方形を呈し、長軸方向は北西を示す。深さは、1.03mを測り、かなり深い。覆土中の下方から底面にかけては、多くの礫および石臼が出土している。また、第805図42～46に示す、内耳鍋が出土している。



● A' L=172.50m

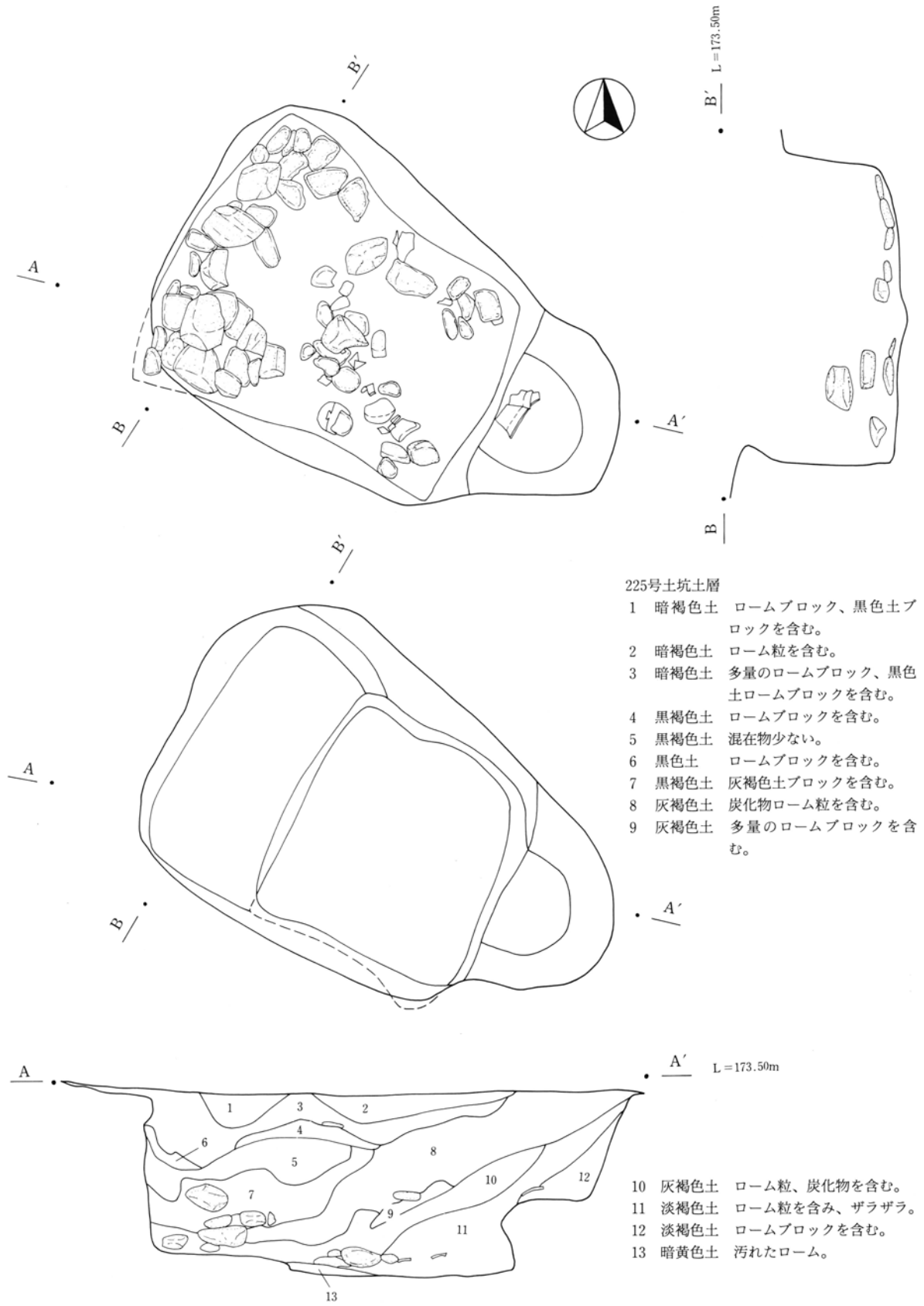


● B' L=172.50m

181号土坑土層

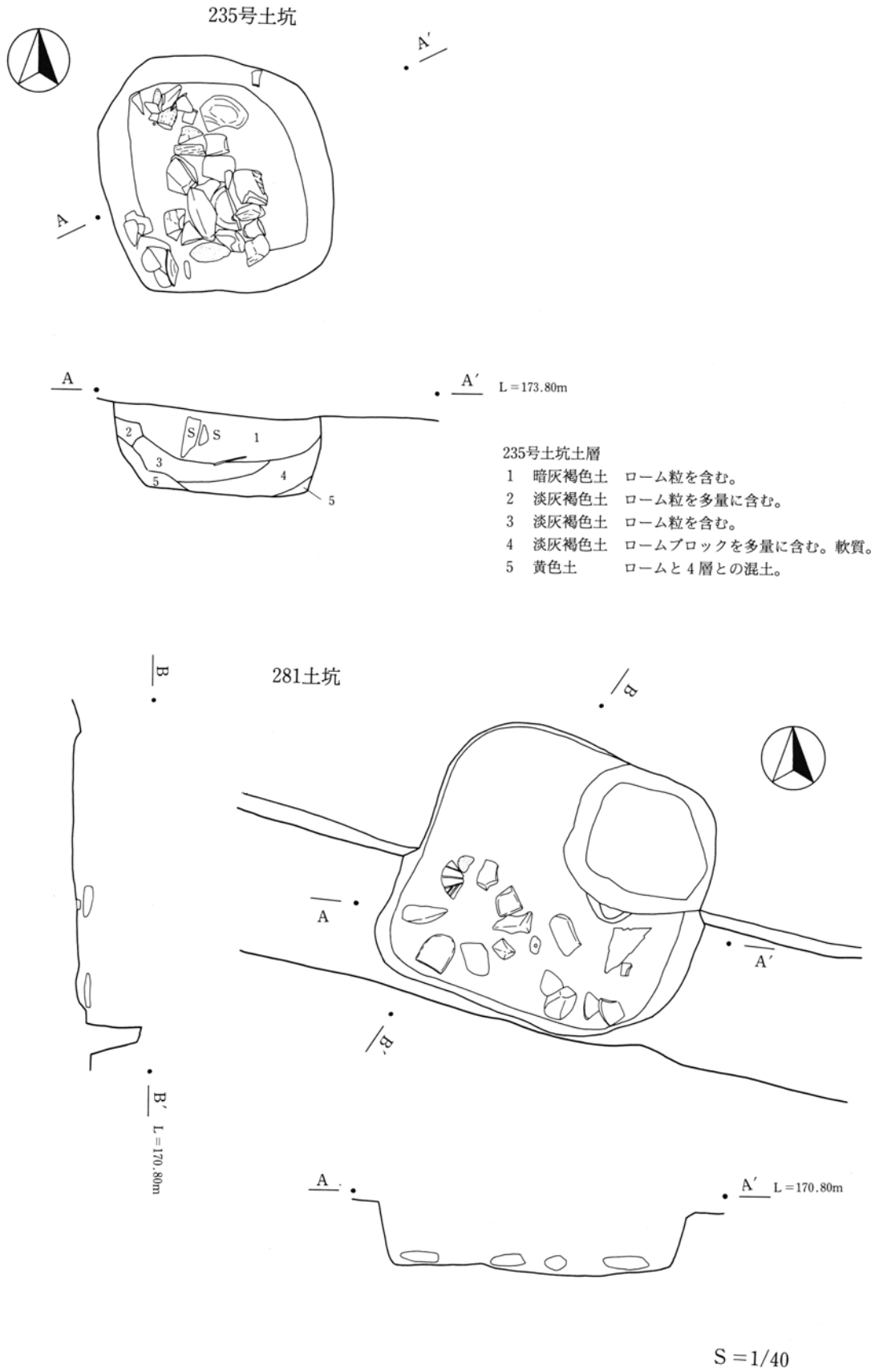
- 1 淡褐色土 粘性なし。
- 2 灰層 黒色灰を主とする。
- 3 黄灰色土 焼土・炭化物・淡灰褐色土の粒状混土。骨片を含む。
- 4 淡褐色土 1層を粒状に含む炭層。
- 5 淡褐色土 1層と同質。炭化物少量。やや粘性あり。

第784図 181号土坑平面図（中世火葬墓） S=1/40

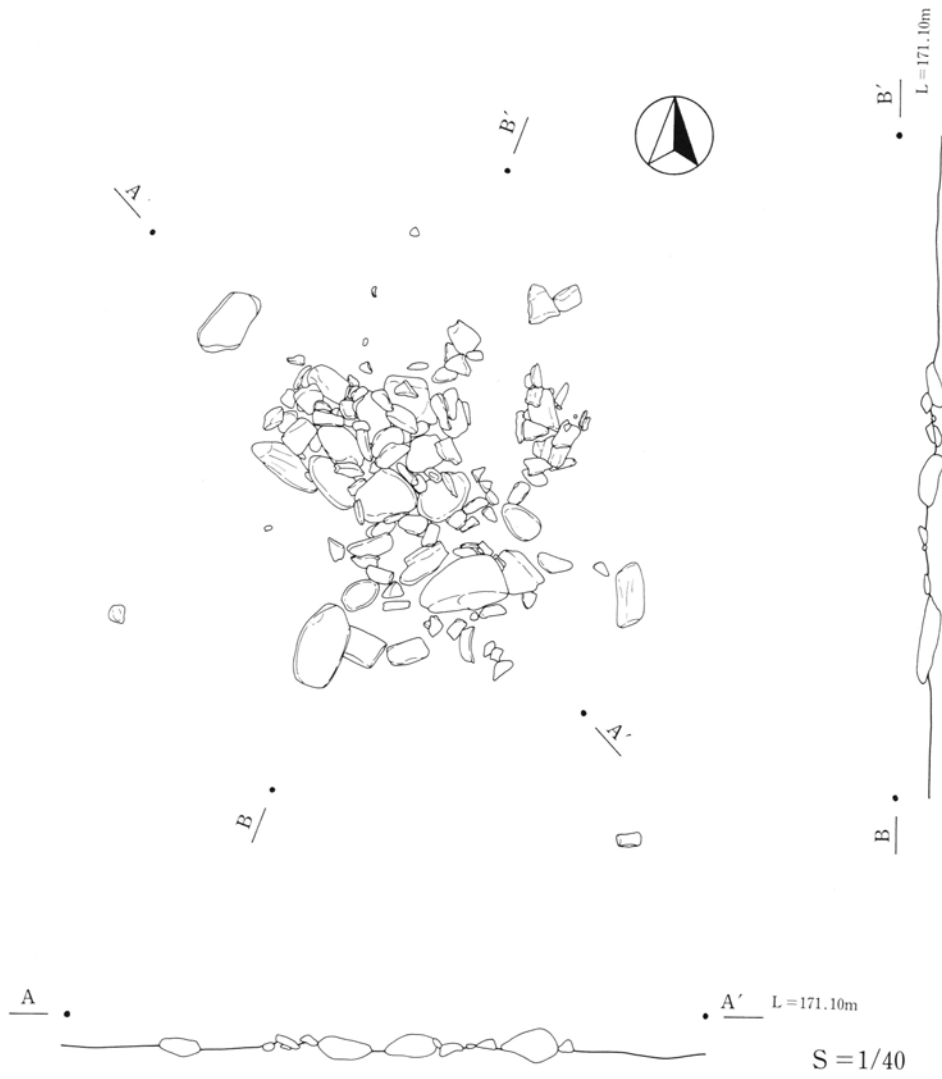


S = 1/40

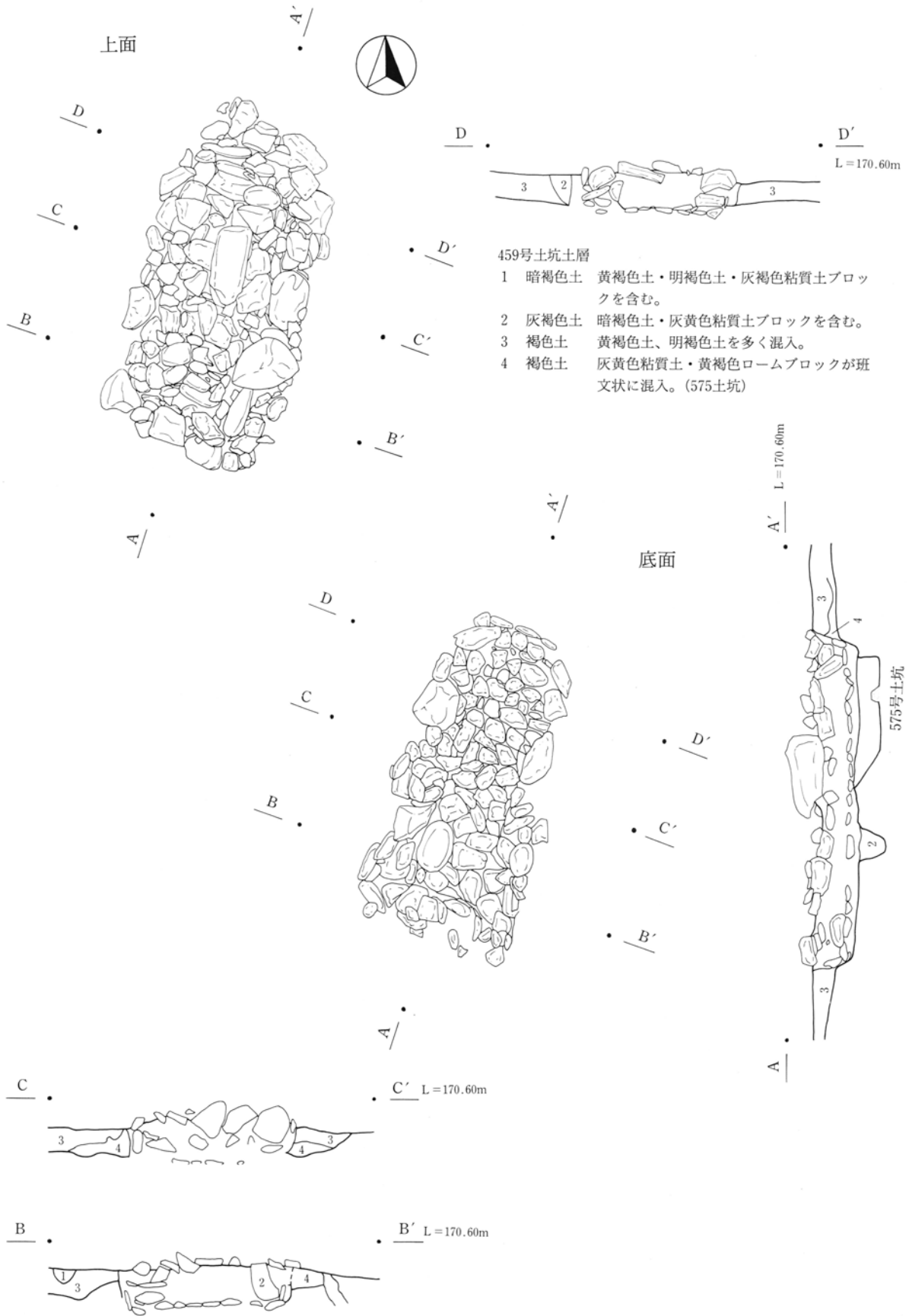
第785図 225号土坑平面図



第786図 235・281号土坑平面図



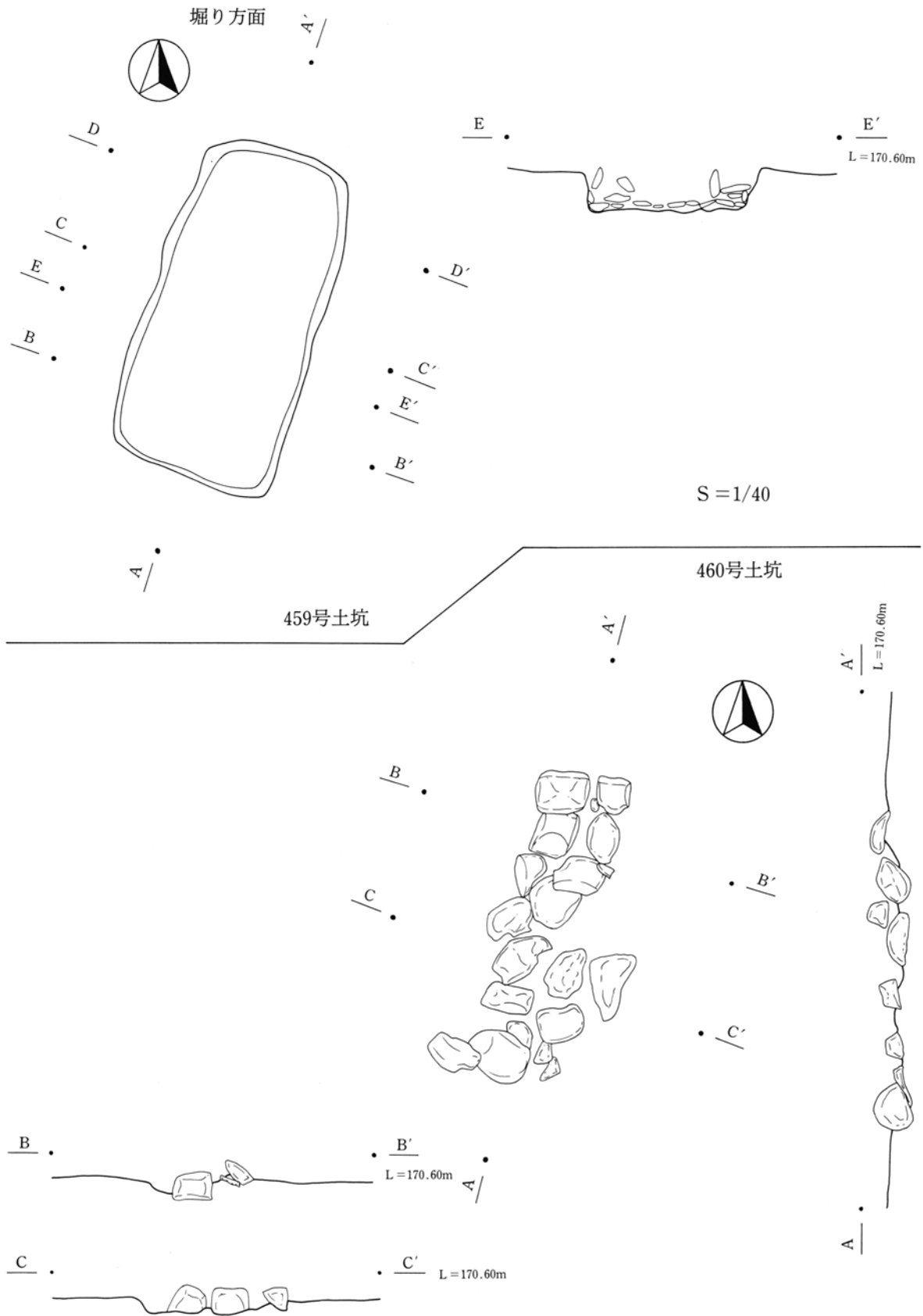
第787図 458号土坑平面図



第788図 459号土坑平面図

S=1/40

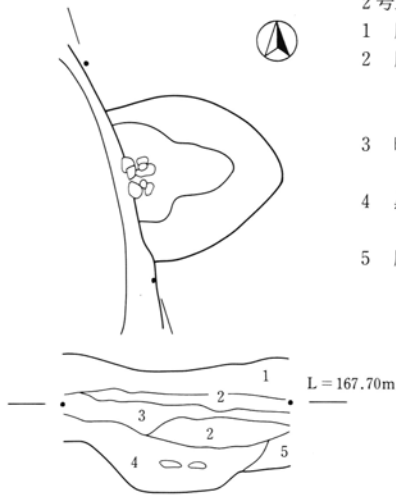
第3章 検出された遺構と遺物



第789図 459・460号土坑平面図

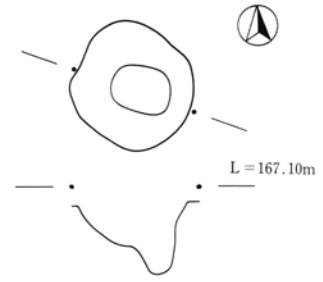
S=1/40

2号土坑

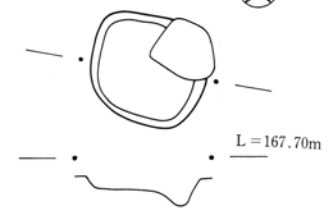


- 2号土坑土層
- 1 灰褐色土 A軽石含む。(耕作土)
 - 2 灰褐色土 ローム小ブロック・褐色土との混土。灰色粘土ブロックも含む。3層と互層となる。
 - 3 暗褐色土 ローム小ブロック・炭化物・軽石粒を含む。
 - 4 黒色土 ロームブロック・炭化物・軽石を含む。
 - 5 灰褐色土 2層とほぼ同質。灰色粘質土が多い。

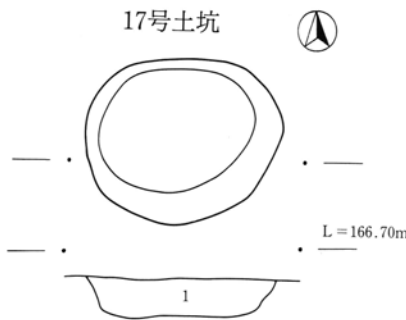
5号土坑



6号土坑

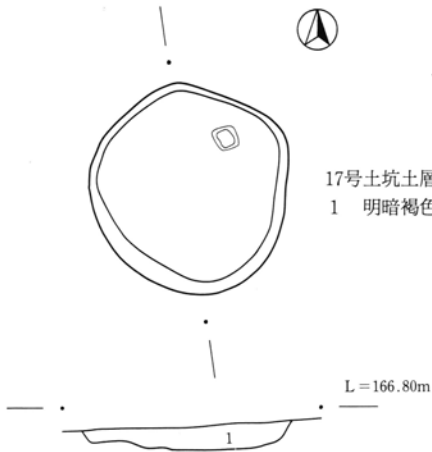


17号土坑



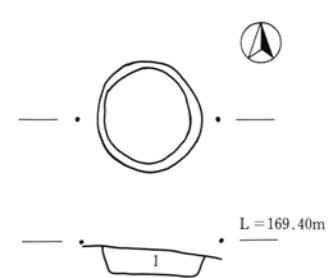
- 17号土坑土層
- 1 明暗褐色土 黄色ロームブロック粒を多量に含み明るい。暗褐色土含む。粘性は弱い。

15号土坑



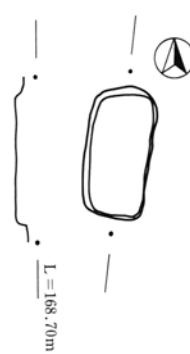
- 15号土坑土層
- 1 くすんだ灰褐色土 ロームブロックを多量に含む。硬質。

33号土坑



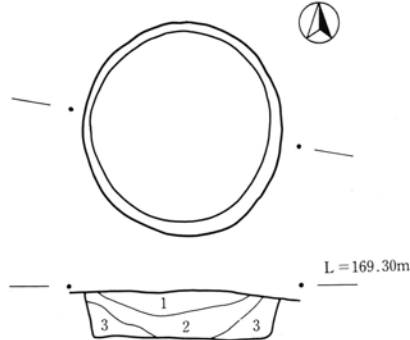
- 33号土坑土層
- 1 暗褐色土 B.P・ローム粒ブロックが多量に混在。

34号土坑



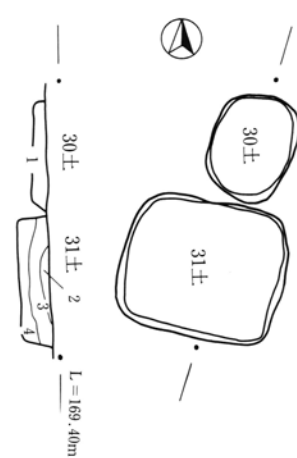
- 30・31号土坑土層
- 1 暗褐色土 (30号土坑)
 - 2 暗褐色土 Y.P・S.Pを多量に含み堅く締まる。
 - 3 暗褐色土 Y.P・S.Pを少量含み、1層よりやや明るい。
 - 4 明褐色土 ローム粒を多量に含む。

32号土坑



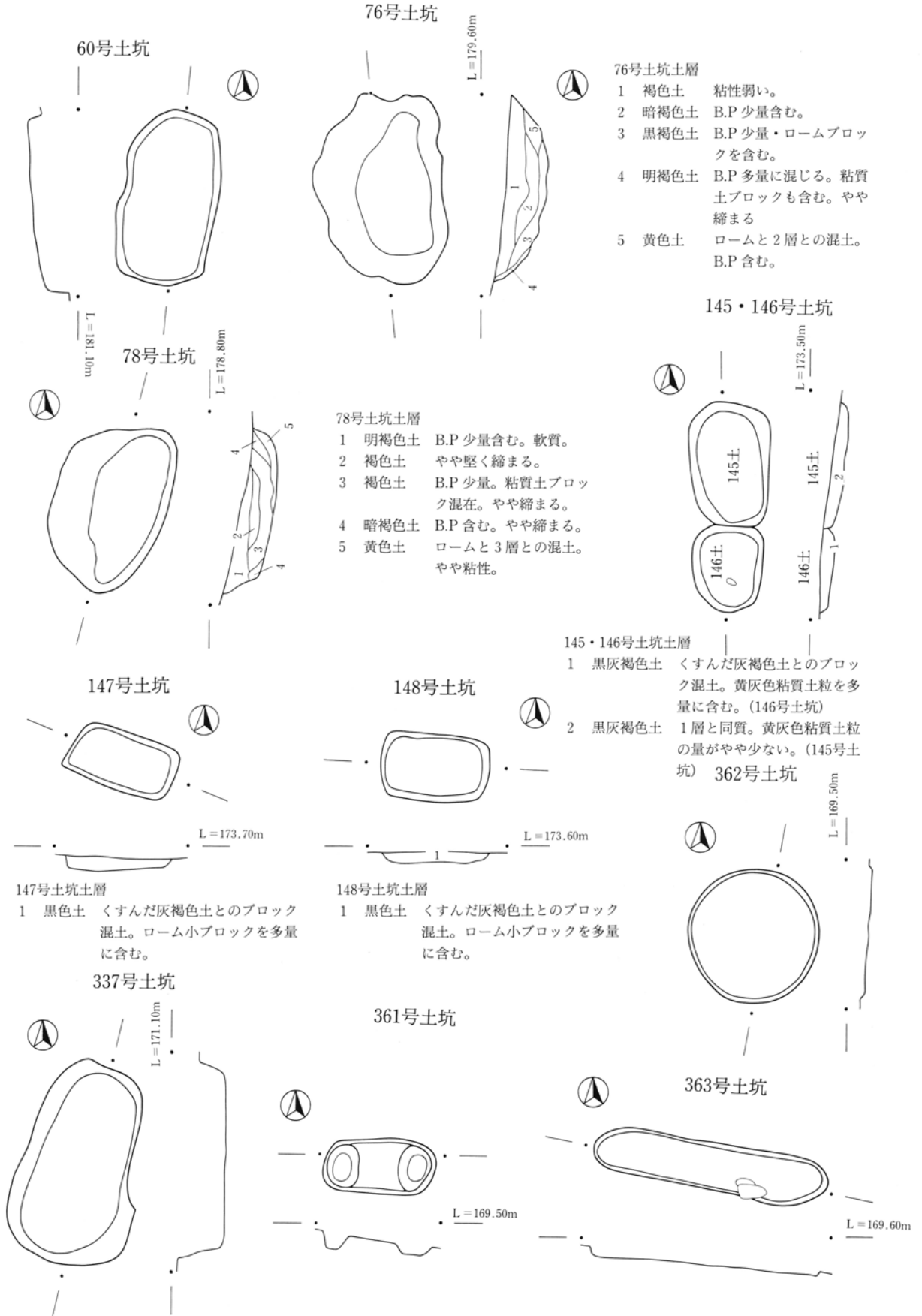
- 32号土坑土層
- 1 暗褐色土 B.Pを含みやや粘質。
 - 2 暗褐色土 ロームブロック少量含む。1層よりやや明るい。硬質。
 - 3 明暗褐色土 ローム粘質土を多量に含む。粘性強い。硬質。

31号土坑

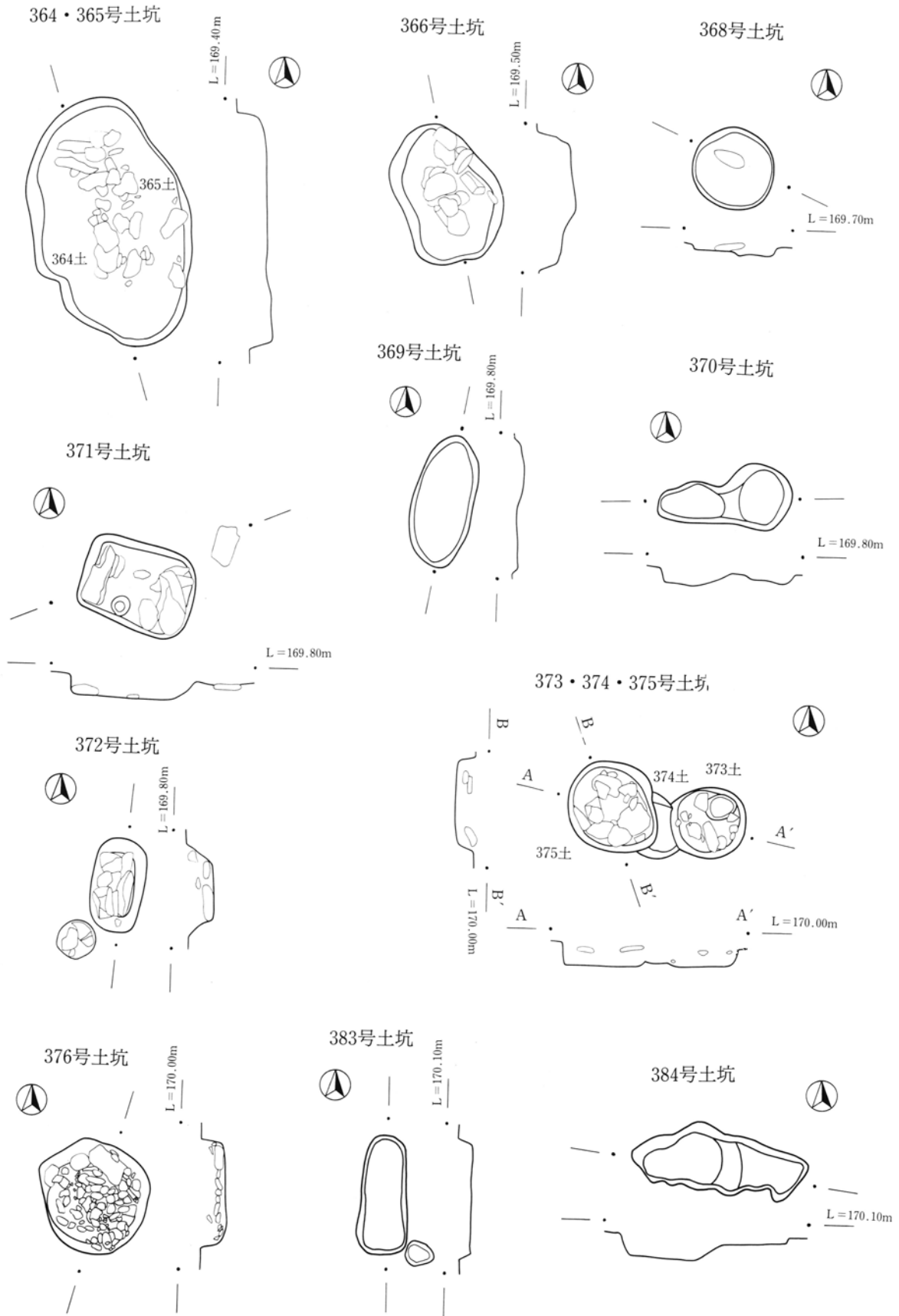


S=1/60

第790図 中世土坑平面図(1)

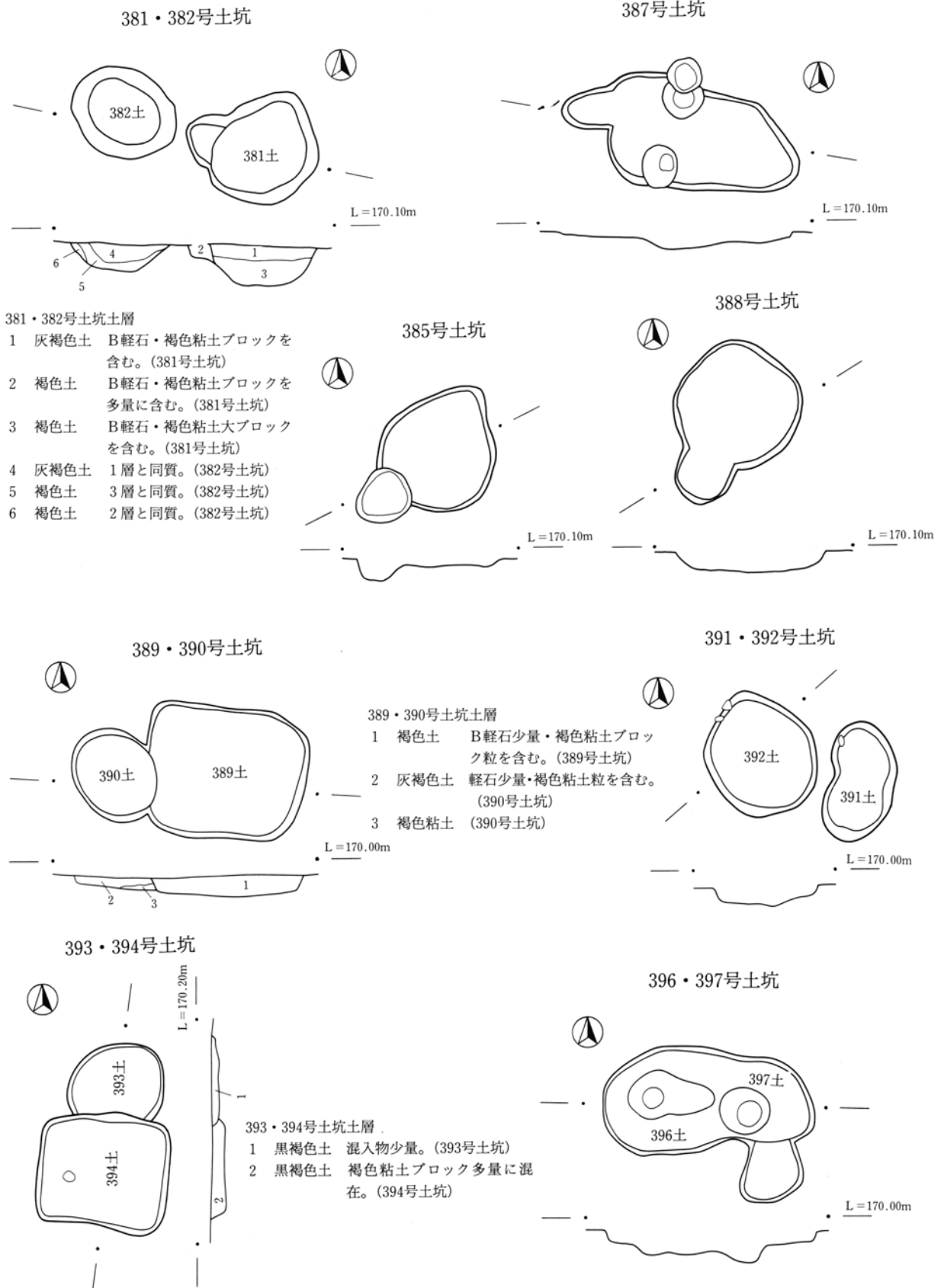


第791図 中世土坑平面図(2)



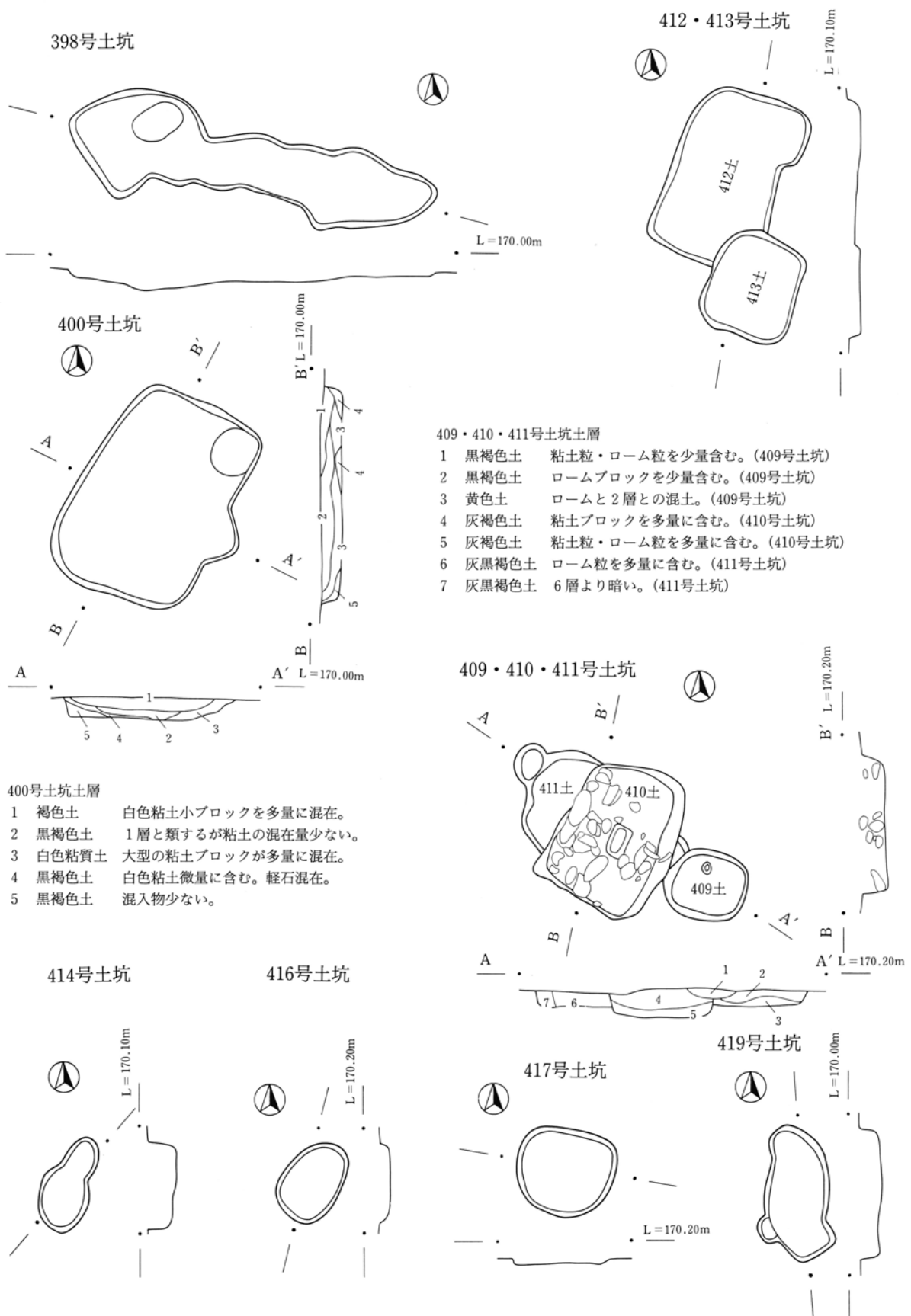
第792図 中世土坑平面図(3)

S = 1/60



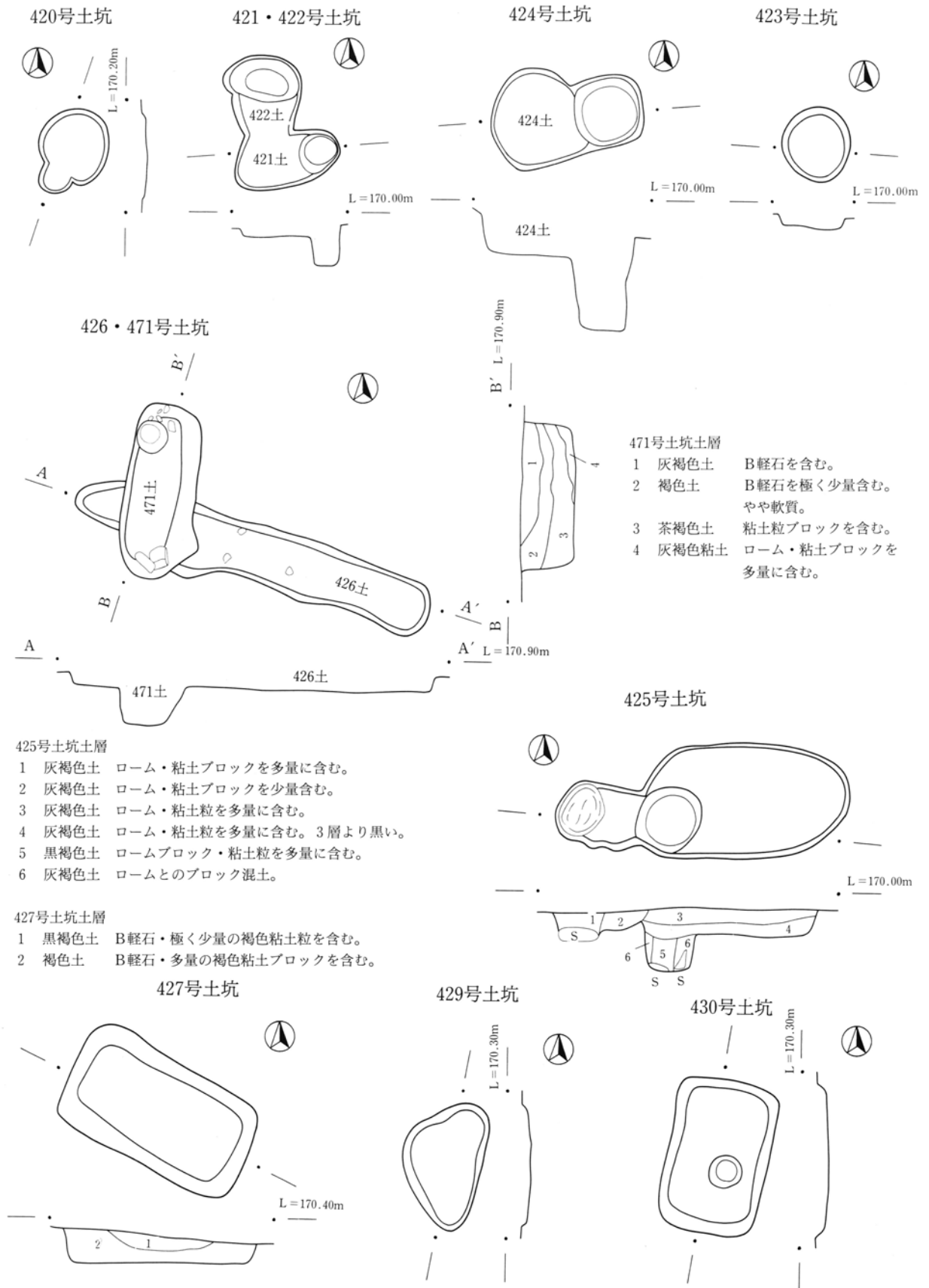
第793図 中世土坑平面図(4)

S = 1/60



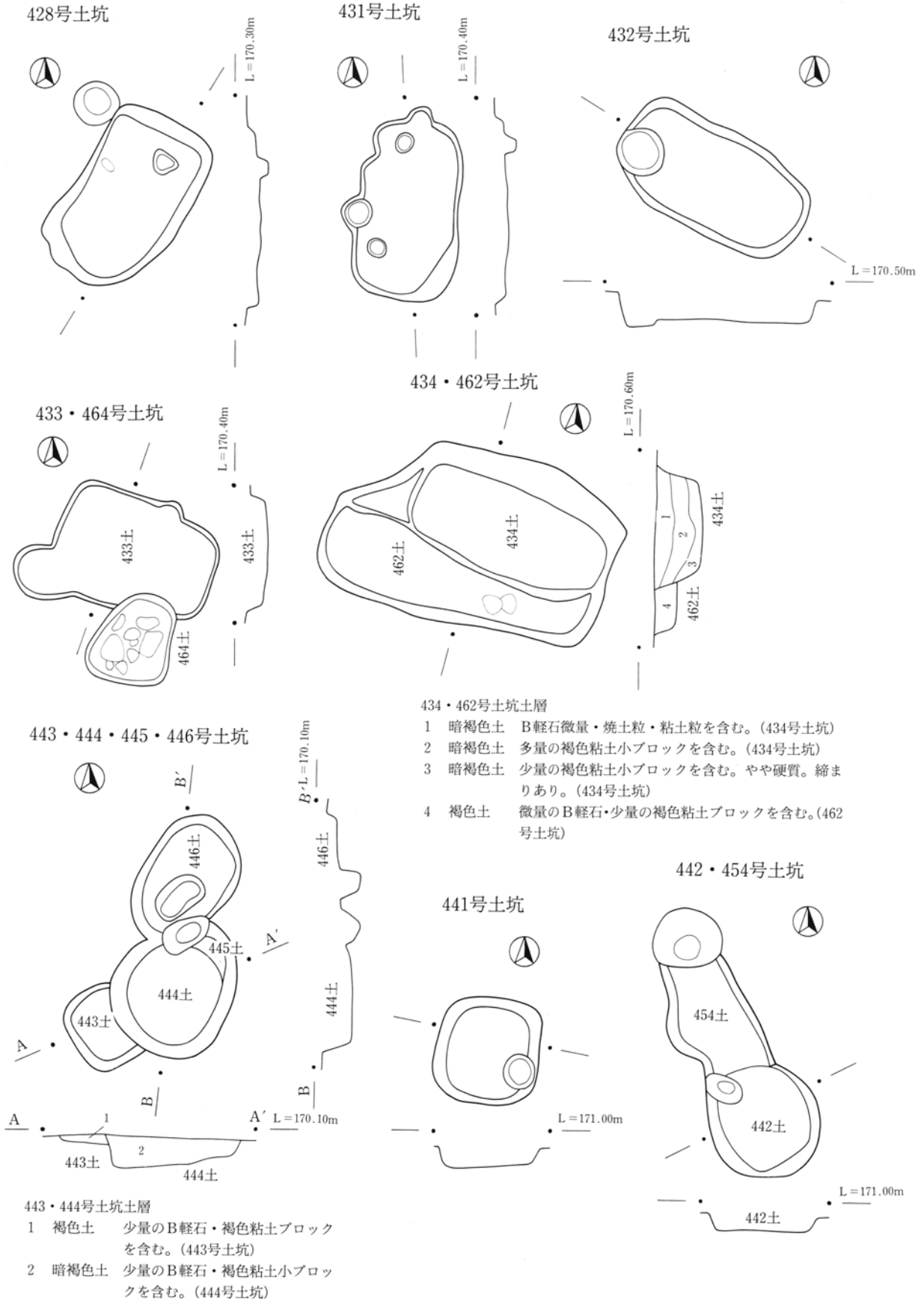
第794図 中世土坑平面図(5)

第3章 検出された遺構と遺物



第795図 中世土坑平面図(6)

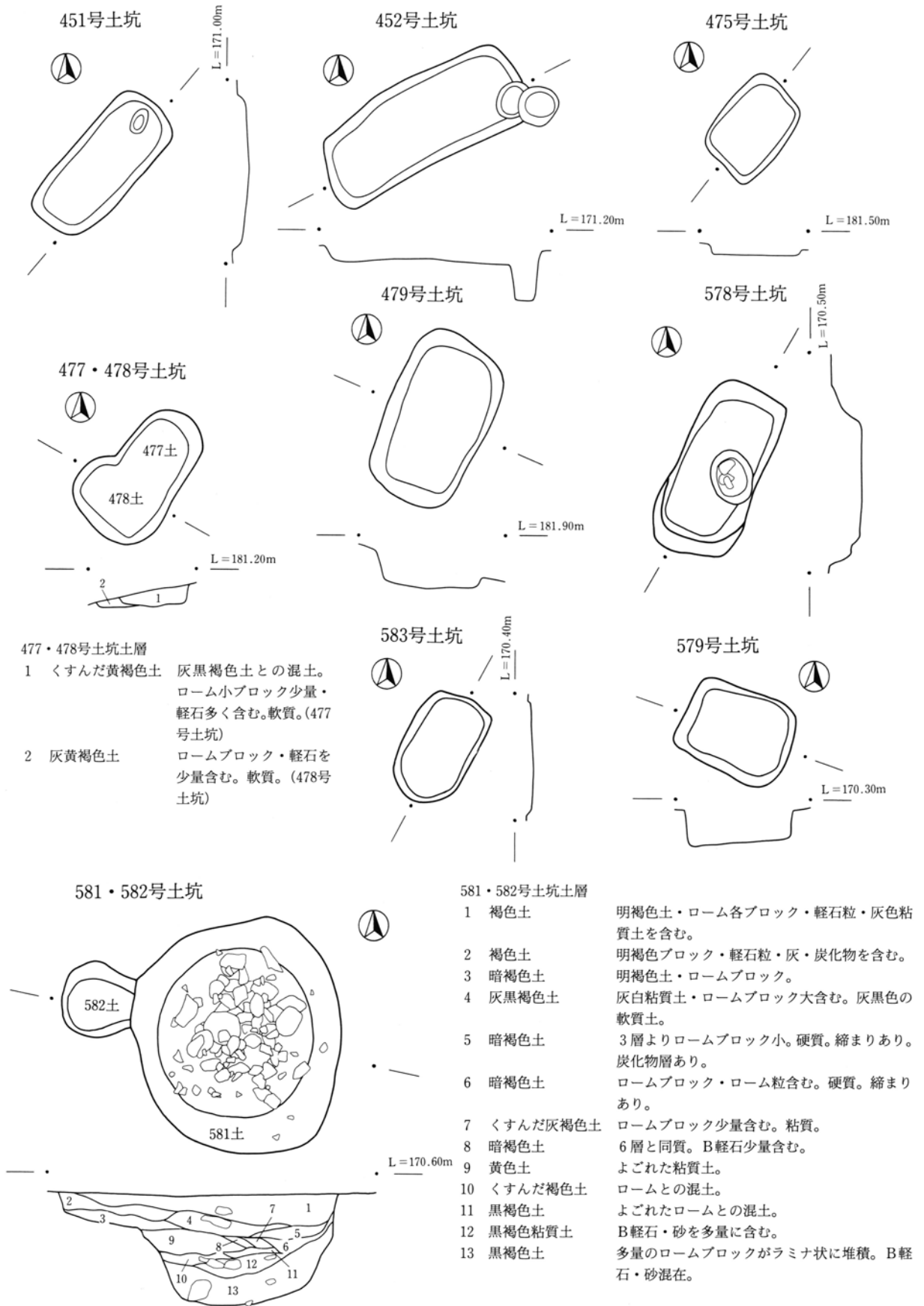
S = 1/60



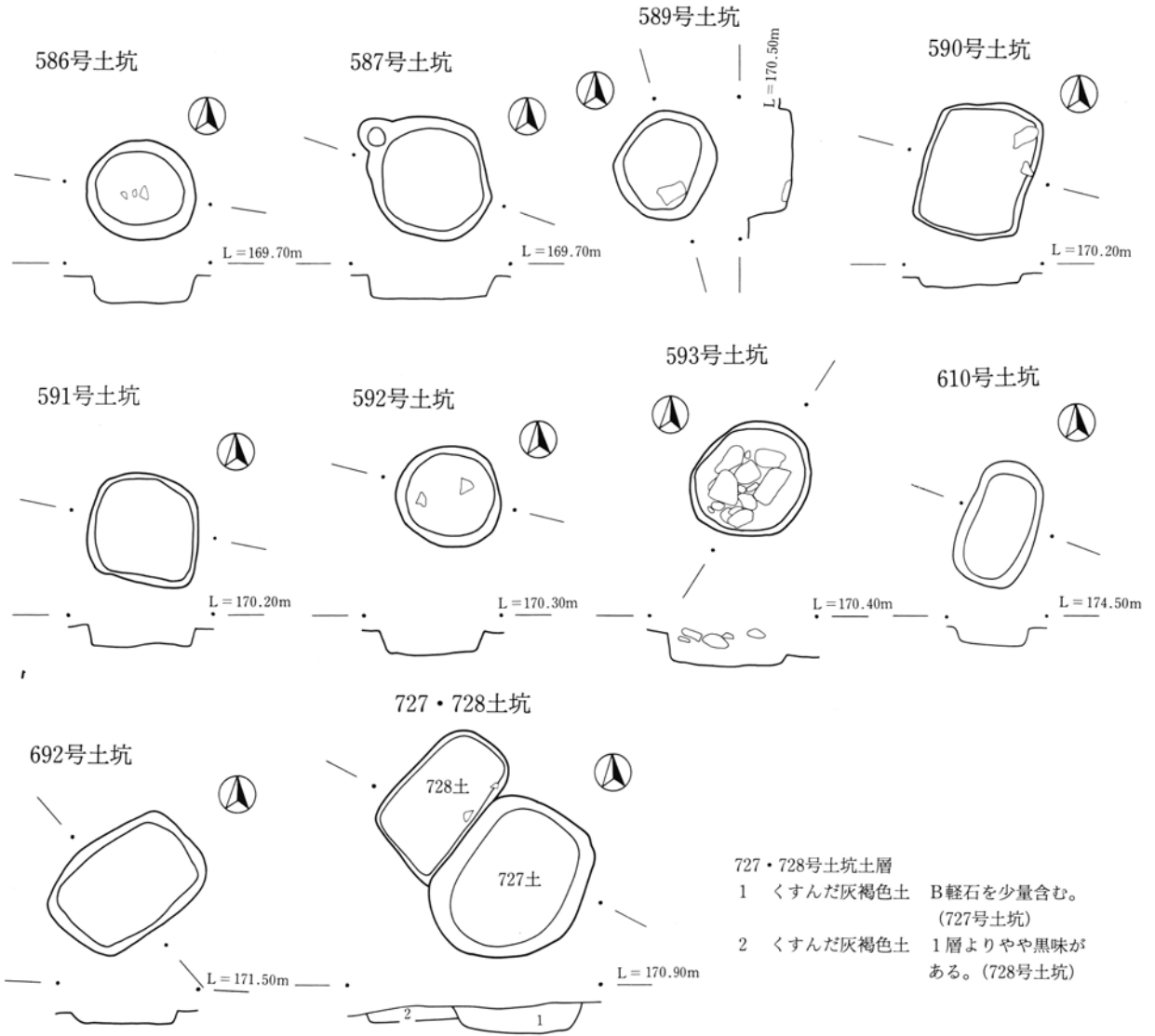
第796図 中世土坑平面図 (7)

S = 1/60

第3章 検出された遺構と遺物



第797図 中世土坑平面図(8)



S = 1/60

第798図 中世土坑平面図(9)

第3章 検出された遺構と遺物

表118 中世土坑一覧表

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
2	26-25	不整形	(1.28)	1.28	4	
5	27-24	円形	0.95	0.94	57	
6	25-24	方形	0.94	0.84	13	
15	27-22	円形	1.66	1.54	26	
17	28-21	楕円	1.52	0.82	33	
31	16-23	方形	1.30	1.08	27	
32	15-22	円形	1.66	1.56	51	
33	15-22	円形	0.86	0.80	26	
34	15-20	長方形	1.02	0.51	10	
60	9-93	楕円	1.82	1.02	37	
76	10-91	不整楕円	1.96	1.38	70	
78	10-91	不整楕円	1.55	1.19	66	
145	12-75	楕円	(0.91)	(0.82)	14	
146	12-75	楕円	(1.30)	(0.74)	15	
147	13-72	長方形	1.03	0.60	16	
148	13-71	長方形	1.14	0.71	16	
181	16-78	方形	1.27	(1.25)	26	火 葬 墓
186	14-53		1.29	0.88	15	
225	13-57	方形	3.38	2.23	103	
235	12-57	方形	1.48	1.44	25	
281	14-42	方形	2.02	1.90	44	
337	13-42	長楕円	2.12	1.36	53	
361	7-21	長楕円	(0.82)	0.60	12	
362	7-21	円形	1.40	1.40	5	
363	8-21	長楕円	2.50	0.56	12	
364	8-21	不整楕円	2.60	1.65	31	
366	9-21	不整楕円	2.48	1.08	41	
367	9-22		2.80	0.64	14	
368	9-22	円形	0.84	0.80	12	
369	9-22	楕円	1.32	0.56	12	
370	9-22	不整楕円	1.40	0.82	16	
371	8-23	方形	1.18	0.90	26	
372	8-23	方形	0.96	0.56	24	
373	8-24	円形	0.78	0.72	22	
374	8-24	円形	(0.56)	(0.21)	17	
375	8-25	円形	0.98	0.80	27	
376	9-25	円形	1.22	1.12	27	
377	10-23		1.32	0.96	14	
379	11-22		0.92	0.76	8	
380	11-23		1.08	1.00	8	
381	11-23	楕円	1.40	1.20	40	
382	11-23	楕円	1.12	0.92	28	
383	12-24	長楕円	1.24	0.52	13	
384	11-24	不整楕円	1.84	0.68	23	
385	11-24	不整楕円	1.60	1.24	12	
386	11-24		1.20	0.74	6	
387	11-24	不整楕円	2.76	1.20	18	
388	11-25	円形	1.72	1.28	20	
389	11-25	方形	1.68	1.40	22	
390	11-25	円形	1.04	0.84	13	
391	11-25	楕円	1.14	0.64	13	
392	11-26	円形	1.36	1.16	20	
393	11-26	円形	1.00	(0.72)	10	
394	11-26	方形	1.36	1.20	17	
395	11-26		(1.60)	1.20	22	

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
396	11-25	不整楕円	2.24	1.08	34	
398	10-25	不整楕円	3.92	1.16	26	
400	10-26	方形	2.28	1.76	24	
409	9-26	円形	0.80	0.74	21	
410	9-26	方形	1.54	1.18	28	
411	10-26	円形	1.10	(5.40)	18	
412	10-26	方形	1.84	1.12	15	
413	10-26	方形	1.04	0.96	13	
414	9-26	不整楕円	1.04	0.54	31	
416	9-26	楕円	0.84	0.60	14	
417	9-27	楕円	1.04	0.88	6	
419	8-26	不整楕円	1.36	0.70	25	
420	9-26	円形	0.72	0.76	7	
421	8-26	楕円	1.14	(0.60)	9	
422	8-26	楕円	0.84	(0.48)	34	
423	8-26	円形	0.76	0.68	17	
424	7-26	円形	1.60	1.04	45	
425	7-27	長楕円	(2.16)	1.20	38	
426	9-32	長楕円	3.90	0.64	23	
427	7-30	長方形	2.08	1.12	38	
428	8-30	長方形	1.96	1.16	25	
429	8-30	不整楕円	1.36	0.80	10	
430	9-30	長方形	1.64	1.04	14	
431	9-29	長方形	2.06	1.24	13	
432	10-30	長楕円	1.32	1.12	30	
433	10-29	長方形	1.76	1.24	26	
434	11-31	長楕円	2.60	1.28	(50)	
435	8-31		1.04	0.92	15	
436	8-31		2.48	1.80	19	
437	7-31		2.32	2.28	33	
439	6-32		2.02	0.56	6	
440	6-32		3.00	0.92	17	
441	6-33	方形	1.16	1.08	23	
442	6-33	楕円	1.20	1.14	20	
443	7-33	楕円	0.86	(0.48)	6	
444	7-33	円形	1.30	(0.86)	34	
445	7-33		(0.56)	(0.42)	(38)	
446	7-33	楕円	1.38	0.96	14	
447	7-33		1.04	(1.00)	12	
448	7-33		(1.34)	0.76	13	
449	7-33		1.08	(0.92)	8	
450	7-34		0.12	0.88	10	
451	7-34	長方形	1.72	0.76	20	
452	7-33	長方形	2.28	0.94	20	
453	7-35		2.34	2.08	31	
454	7-33	長楕円	(1.18)	(0.92)	10	
455	6-31		(1.32)	1.24	25	
456	7-24		0.94	0.74	22	
458	9-35	不明				集石状
459	11-30	長方形	2.30	1.18	30	
460	12-30	不明	2.30	1.00	13	集石状
461	10-31		1.22	1.08	51	
462	11-30	長楕円	3.00	(0.54)	(50)	
464	10-29	不整楕円	0.90	0.82	(25)	
465	13-29		1.31	1.29	65	
466	7-31		2.04	1.28	14	

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
467	6-32		4.02	1.00	11	
471	9-33	長 楕 円	1.82	0.74	61	
475	12-29	方 形	1.02	0.78	16	
477	7-32	楕 円	(0.79)	0.75	(12)	
478	8-33	方 形	1.10	(0.64)	24	
479	6-95	長 方 形	1.78	1.08	28	
572	11-32		2.01	0.84	23	
575	12-30		1.16	1.04	23	
576	11-31		5.32	0.95	40	
577	13-34		2.28	0.63	32	
578	12-35	長 方 形	1.94	0.93	71	
579	12-34	方 形	1.20	0.98	37	
581	11-34	円 形	2.60	2.20	51	
582	11-35	楕 円	(0.76)	0.80	27	
583	12-35	楕 円	1.24	0.72	10	

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
584	12-35		1.94	0.95	35	
585	11-35		0.84	0.76	27	
586	10-36	円 形	0.94	0.84	27	
587	9-34	円 形	0.10	1.00	22	
589	12-31	円 形	0.94	0.80	15	
590	12-29	方 形	1.18	0.90	12	
591	12-29	方 形	0.96	0.92	12	
592	12-30	円 形	0.90	0.86	23	
593	10-29	円 形	1.12	0.94	25	
610	5-57	楕 円	1.60	0.64	19	
631	14-35		1.18	(0.75)	36	
692	12-43	長 方 形	1.30	0.90	12	
727	11-42	楕 円	1.42	1.00	24	
728	12-42	長 方 形	1.22	0.72	12	
735	13-40		0.94	0.88	76	
736	13-39		1.02	0.92	88	

235号土坑（第786図）

中央台地としたE区にあり、12-57グリッドに位置する。土坑は、1.48m×1.44mの方形を呈し、深さは25cmを測る。覆土中からは、多くの礫および内耳鍋片が出土しており、この内耳鍋片が225号土坑出土の内耳鍋片を接合（第805図43・44）している。

281号土坑（第786図）

城郭内の3郭西縁寄りにあり、14-42グリッドに位置する。土坑は、郭の外縁を取り巻く土居の痕跡下に検出され、長軸2.02m×短軸1.90mの方形に近い形状を呈し、深さは44cmを測る。北東隅は、柱穴と重複する。底面は平坦で、底面からは礫および石臼が出土している。

458号土坑（第787図）

城郭内1A郭の中央西寄りにあり、9-35グリッドに位置する。遺構は、大小の礫が集積状にあるだけで、集積下には掘り込みは検出できなかった。

459号土坑（第788・789図）

城郭内1A郭の北西寄りにあり、11-30グリッドに位置する。遺構は、上面に大小の礫が集積状にあり、長軸2.30m×短軸1.18mの長方形の掘り込みをもつ。掘り込み内の底面および壁面は、平坦な礫で覆われており、覆土中からの出土遺物はない。

本遺構については、調査当初土坑として扱っていたが、その後460号土坑と共に49号掘立建物の西辺柱穴位置であることが判明した。

460号土坑 (第789図)

城郭内1A郭の北西寄りにあり、12-30グリッドに位置する。遺構は、大型の礫が集積状にあり、集積下には掘り込みは検出できなかったが、その範囲は459号土坑とほぼ同様である。また、その長軸方向は、459号土坑の延長線上にあり、当初土坑として扱っていたが、その後460号土坑と共に49号掘立建物の西辺柱穴位置であることが判明した。

6. 出土遺物

中世にかかわる出土遺物について、本項でまとめて扱うこととする。出土した遺物は、軟質陶器とされる内耳鍋を始め、播鉢、カワラケ、香炉、火鉢、陶磁器類、古銭、鉄製品、石臼、凹石、板碑、五輪塔の各種があり、その多くは城郭に伴う各堀から出土している。遺構に伴うものもみられるが、僅かである。以下、各遺物の概観について説明する。

内耳鍋 (第799~809図 表119)

中世遺物の中で、最も多く出土した器種である。このうち復元可能なものは、第779~806図に示した50個体であり、その他の破片については、口縁部片を中心に代表的なものを図化した。これらの資料の出土場所は、1号堀内から出土したものに1~7・51~56、2号堀内から出土したものに8~19・57~60、3号堀から出土したものに6・17・18・20~33・61~73、4号堀から出土したものに34~36・74、5号堀から出土したものに75があり、225号土坑から出土したものに42~46、235号土坑から出土したものに43・44、4号竪穴状遺構から出土したものに48~49がある。それ以外は、遺構外遺物となるが、41は第698図に示した土居下面から出土したものである。

これらの内耳鍋は、器形および整形等から次のように分類される。

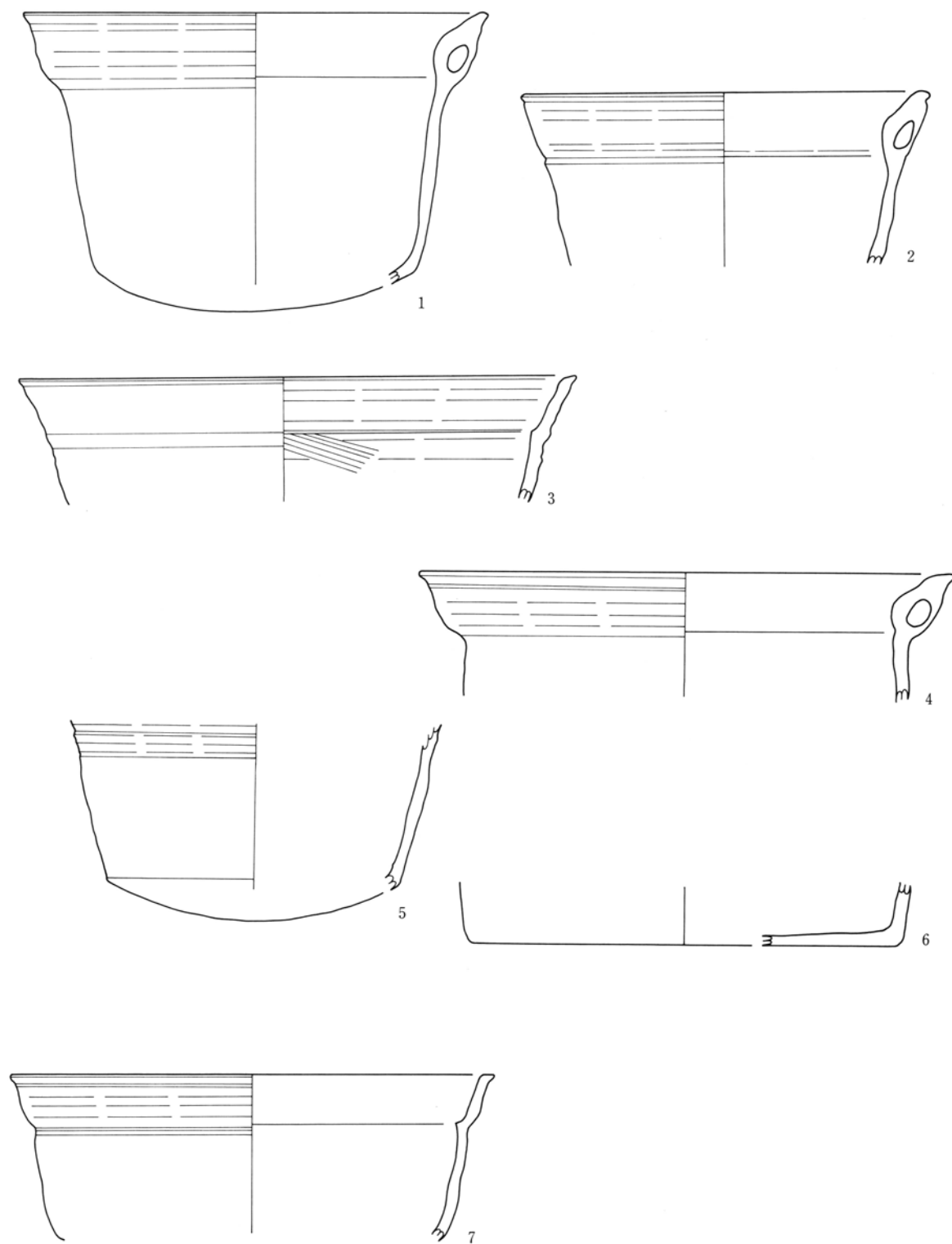
I類

底部形状が、平底となるものを、この類とする。口縁部形状および器体の成・整形から、次の種別に文別される。

A種 口舌部が丸く、やや内反気味となり、口縁はやや外反するが、明瞭な頸部屈曲は認められない。内面は、頸部位置に僅かに稜が認められ、B-1種のような屈曲はもたない。この僅かな稜で区分される口縁部は、器高の約1/5ほどと、B-1種よりも狭い。器厚は、全体に厚く、内耳部も太めである。整形は、胴部上位ないし頸部付近から口縁・内面にかけて丁寧な横撫で調整が施され、胴部下位には横位方向に篋削りを施して丸身をもつ。この種の代表的なものに、44が上げられる。

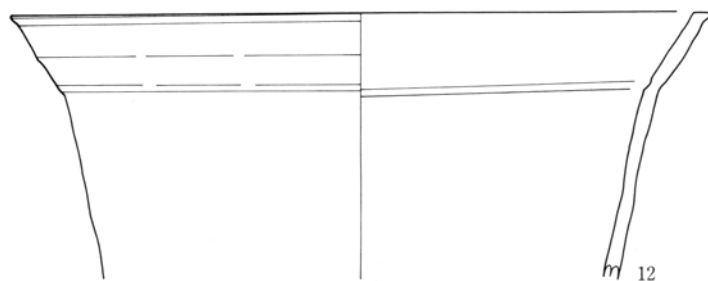
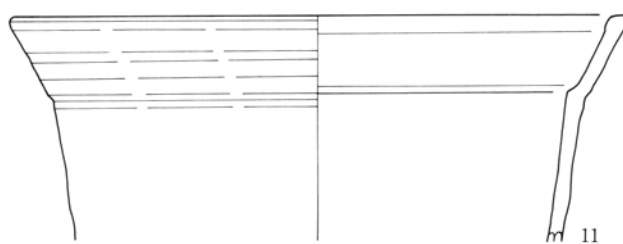
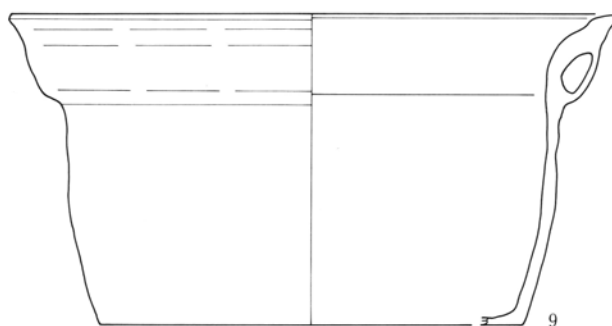
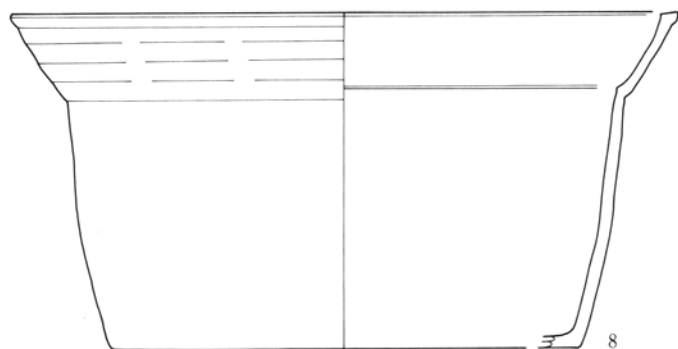
B-1種 口舌部は平坦であるものが基本となり、やや内向・外向するものがみられる。頸部は「く」字状に外反し、頸部下に凹線を有するものも多い。内面には、頸部屈曲部に明瞭な稜ないし段を有するものが圧倒的に多い。この稜ないし段で区分される口縁部は、器高の約1/4前後となる。器厚は、全体に薄く、内耳部もA種に比べて大きくやや細い。整形は、胴部上位ないし頸部から口縁・内面にかけては丁寧な横撫で、胴部中位以下は粗い撫で調整が施される。この種の代表的なものとして、8・9・20・22・34・35・37・41が上げられ、2~4・10~15・23~30等もこの種に含まれるものと考えられるが、底部を欠くため定かではない。

B-2種 基本的な成・整形は、B-1種と同様であるが、器高が低いという点で大きく異なる。むしろ



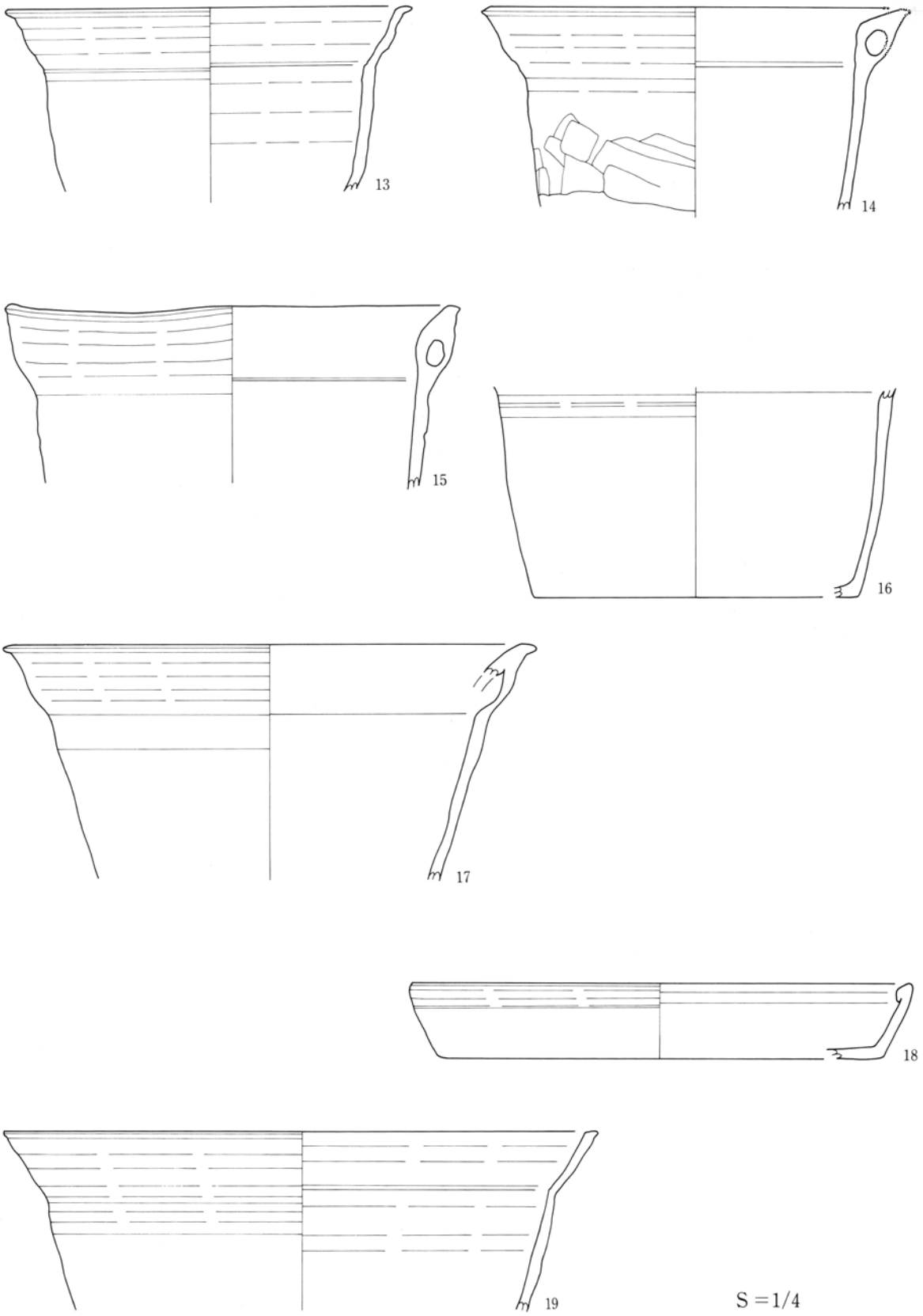
S=1/4

第799図 中世出土遺物 内耳鍋(1)



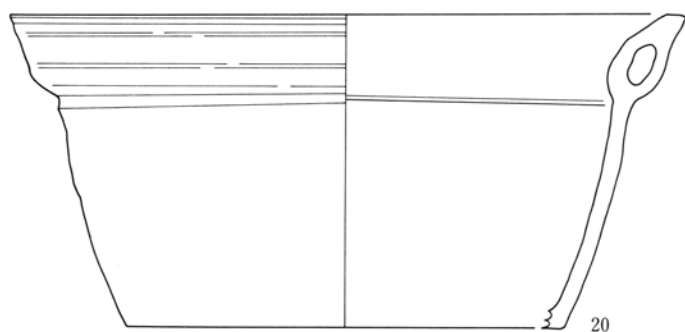
S=1/4

第800図 中世出土遺物 内耳鍋（2）

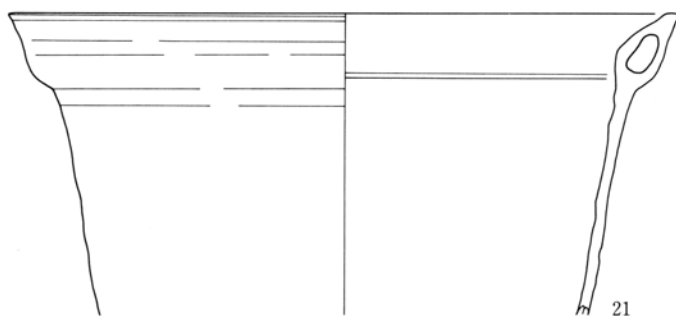


第801図 中世出土遺物 内耳鍋（3）

第3章 検出された遺構と遺物



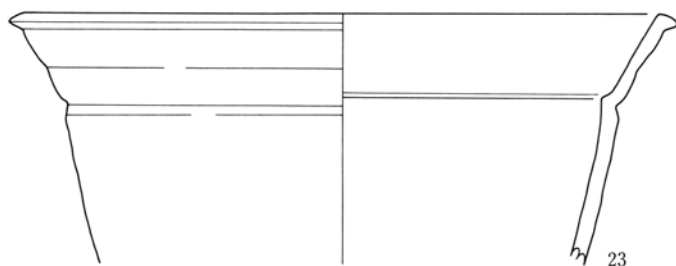
20



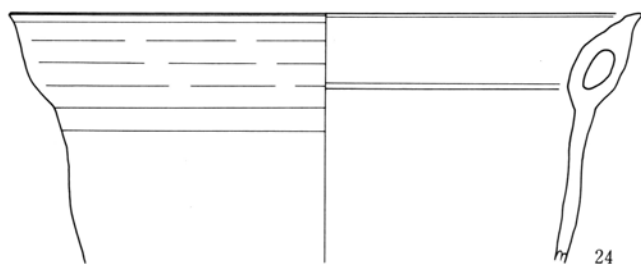
21



22



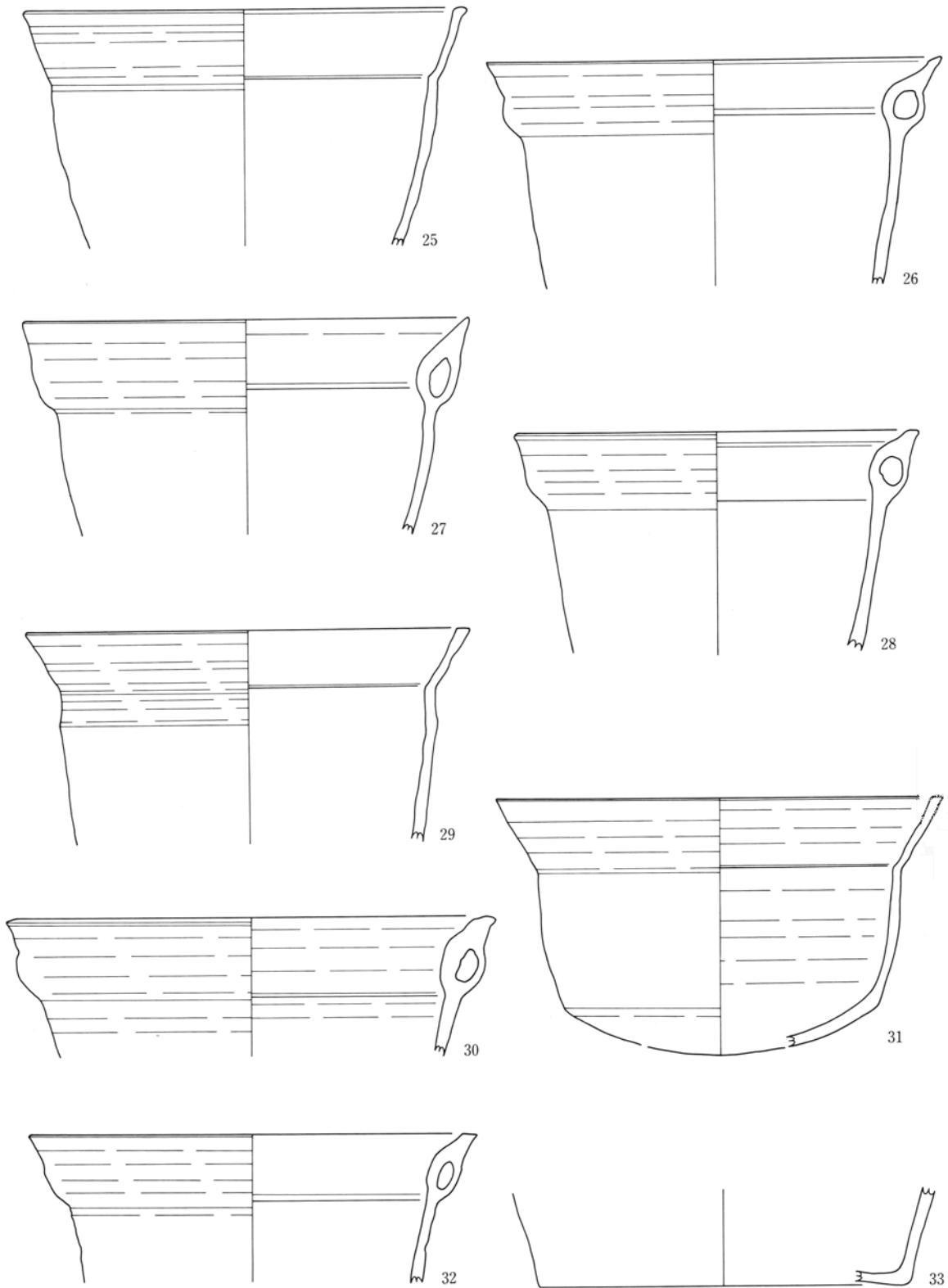
23



24

S = 1/4

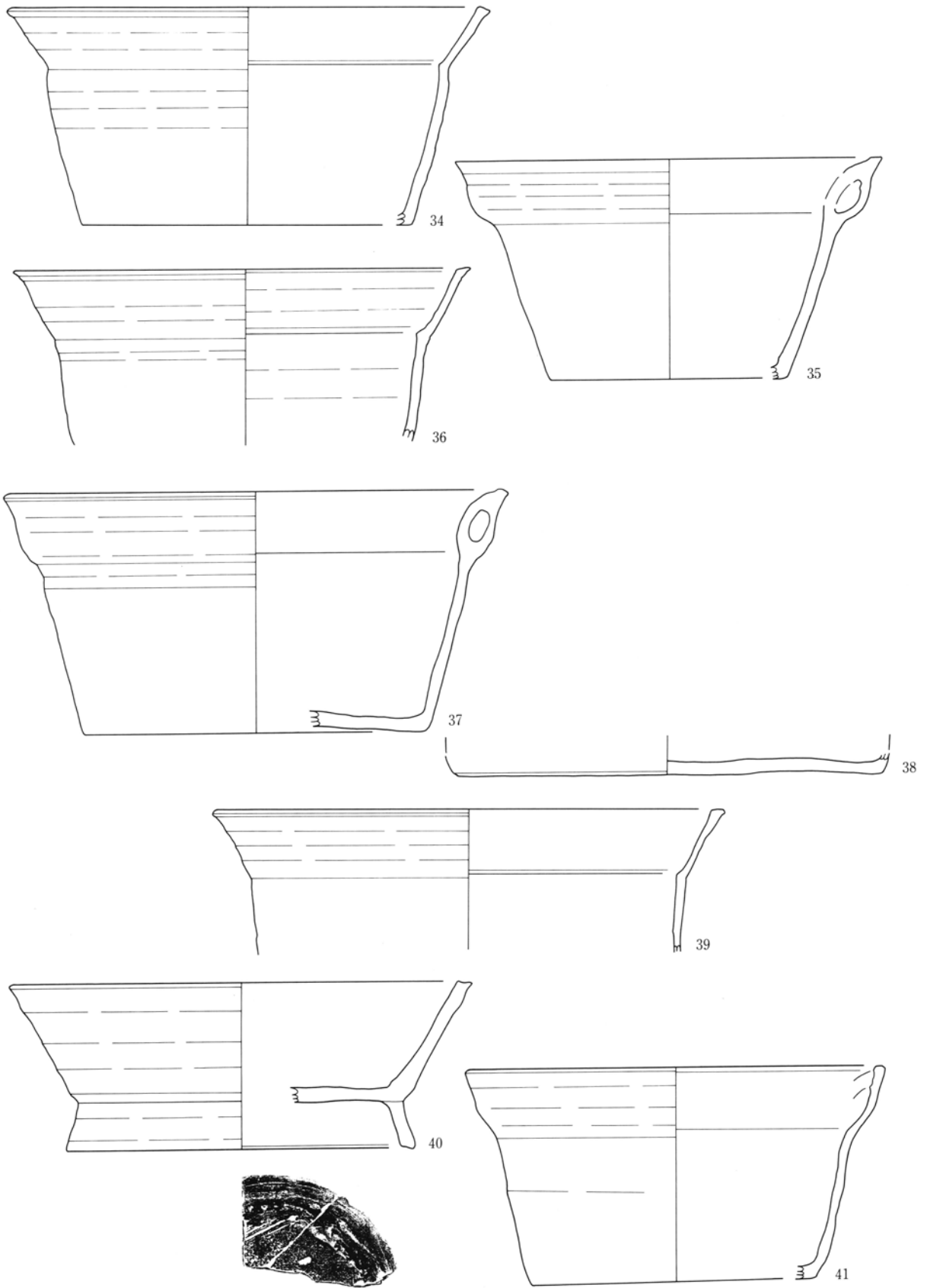
第802図 中世出土遺物 内耳鍋 (4)



S = 1/4

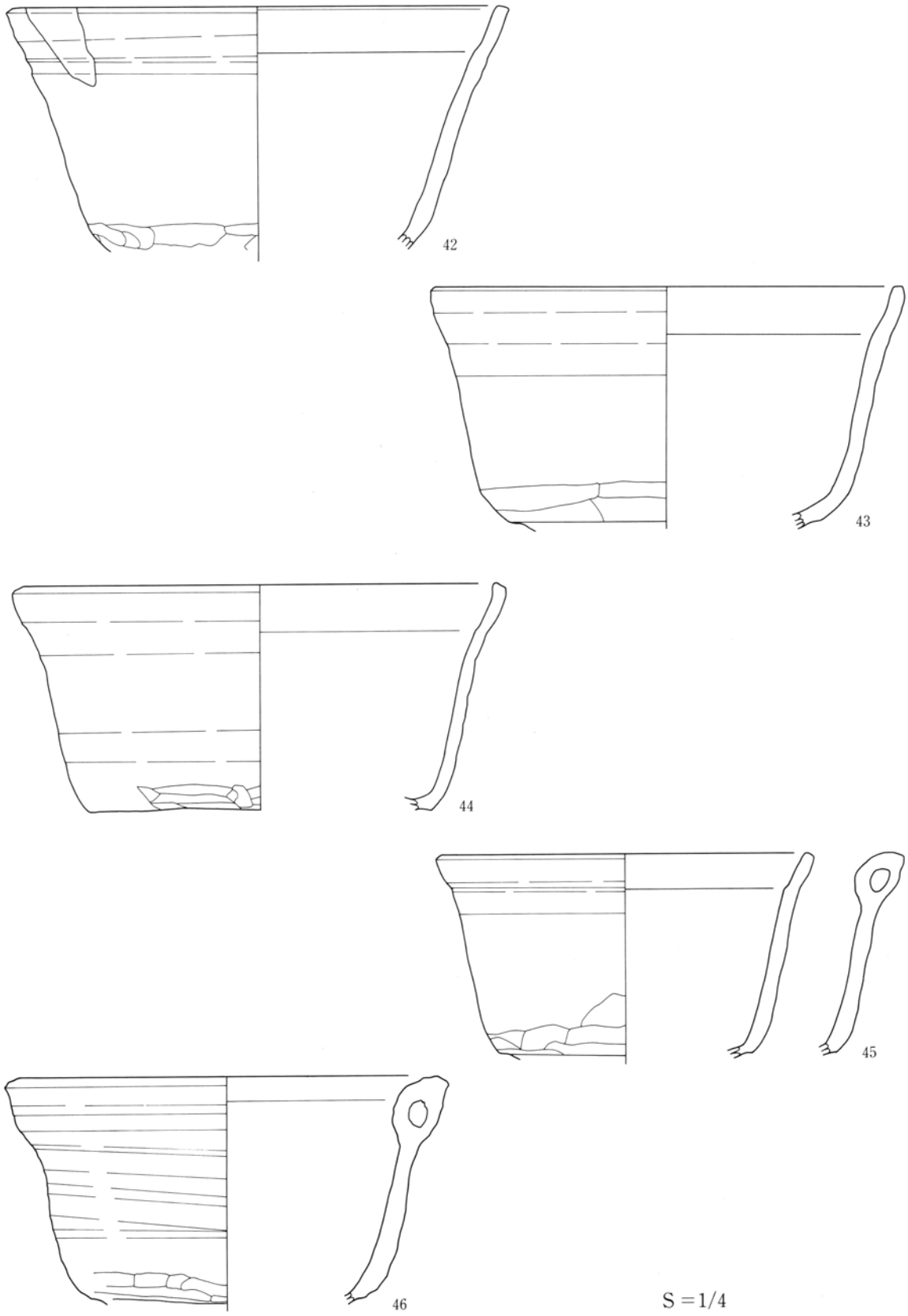
第803図 中世出土遺物 内耳鍋 (5)

第3章 検出された遺構と遺物

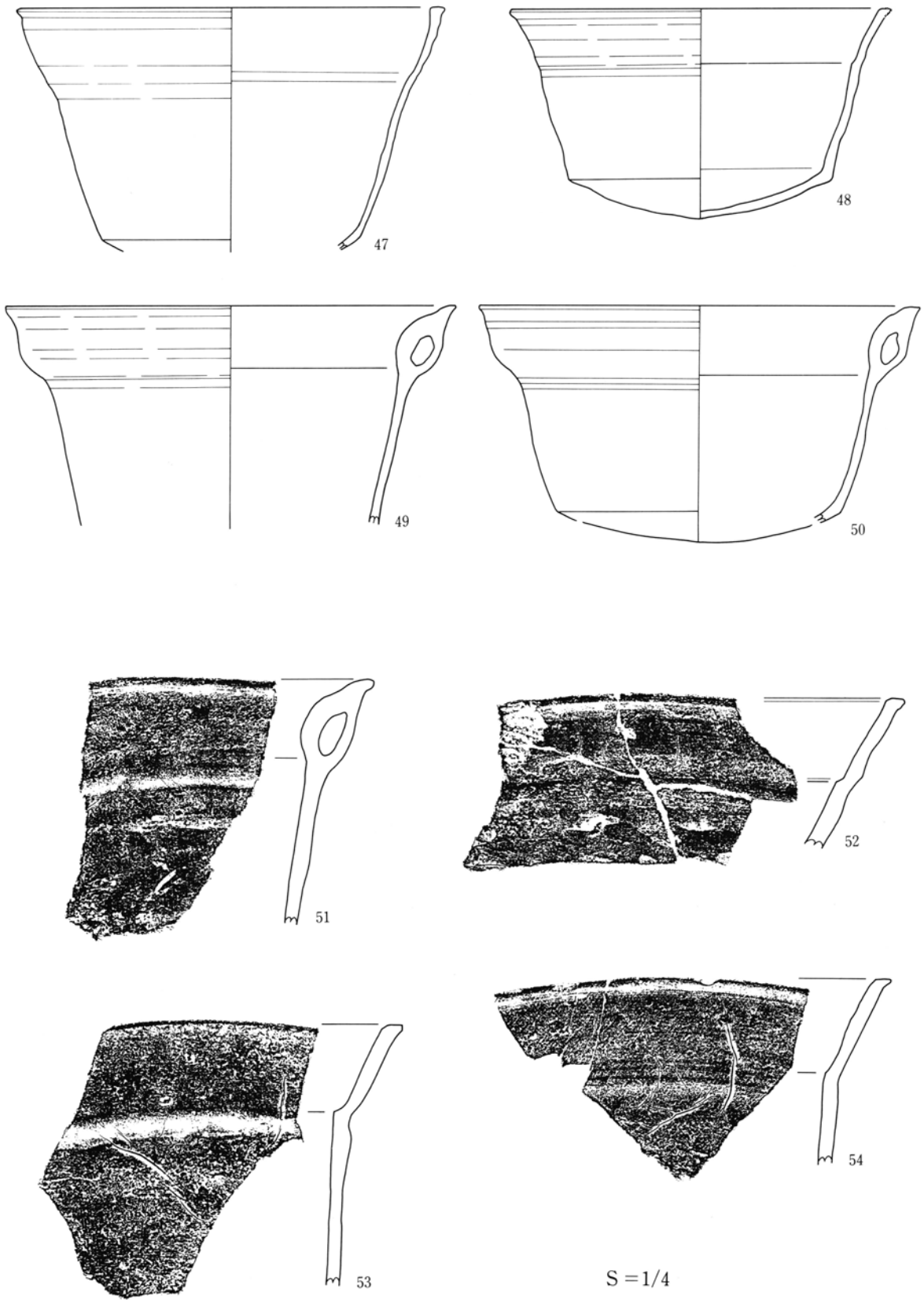


S = 1/4

第804図 中世出土遺物 内耳鍋 (6)



第805図 中世出土遺物 内耳鍋（7）



第806図 中世出土遺物 内耳鍋 (8)



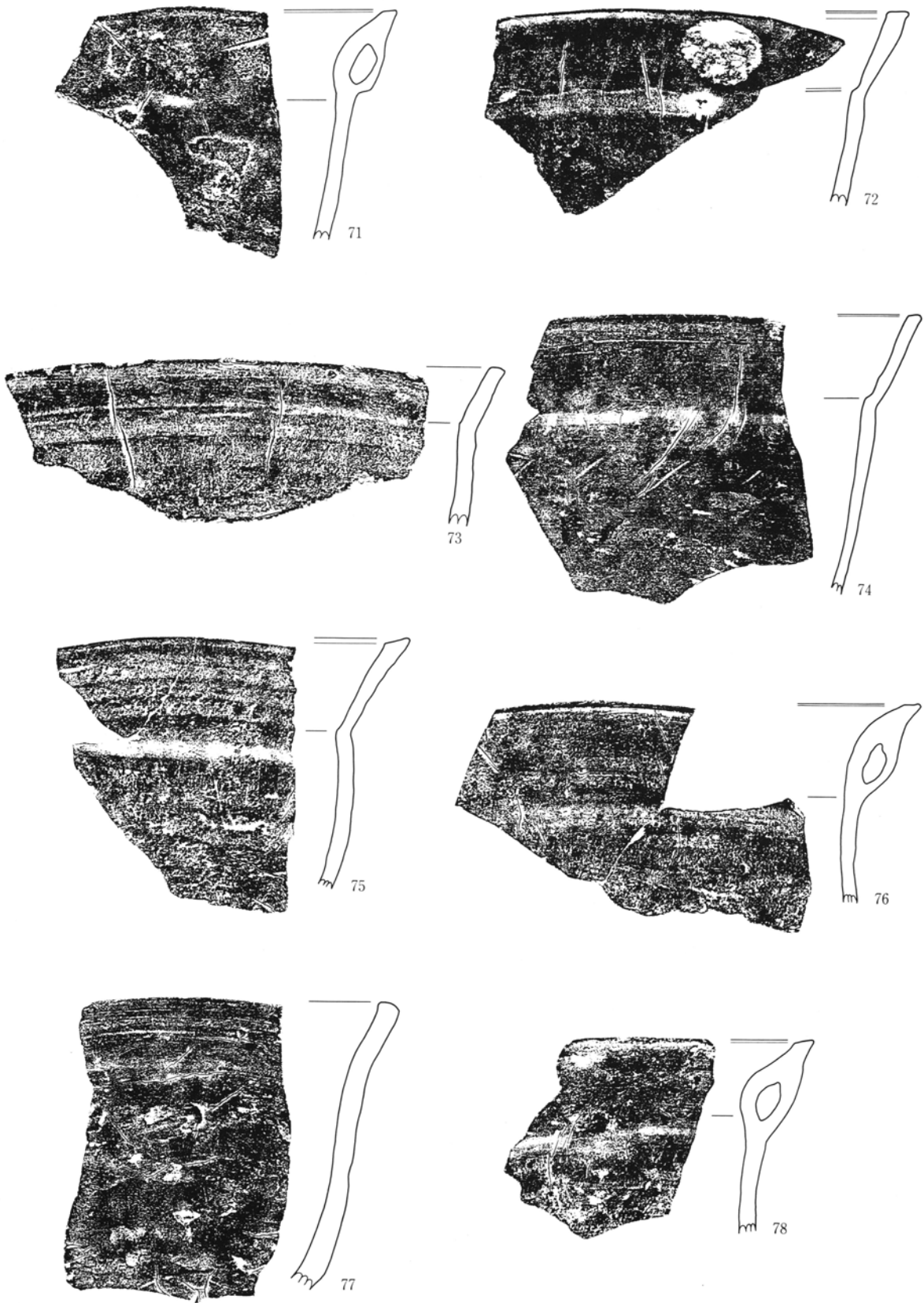
S = 1/4

第807図 中世出土遺物 内耳鍋 (9)



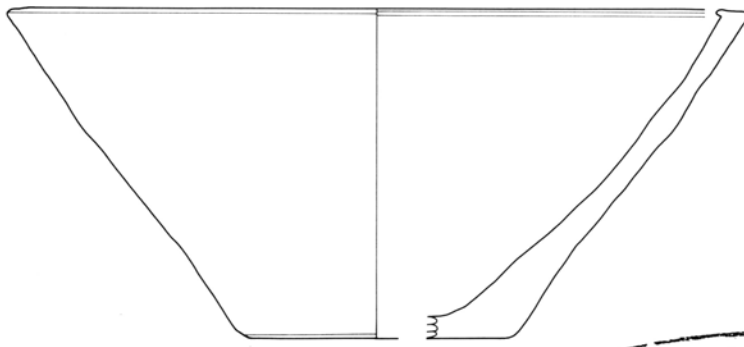
S = 1/4

第808図 中世出土遺物 内耳鍋 (10)

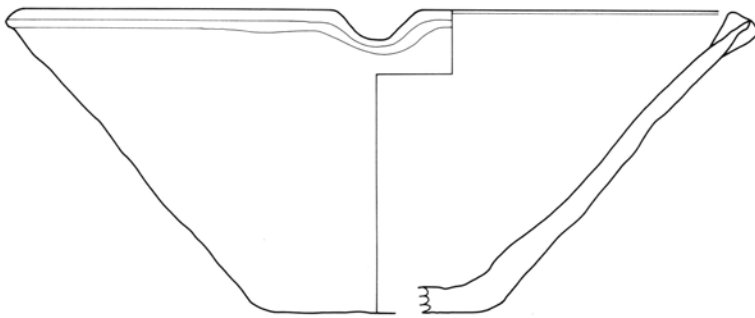
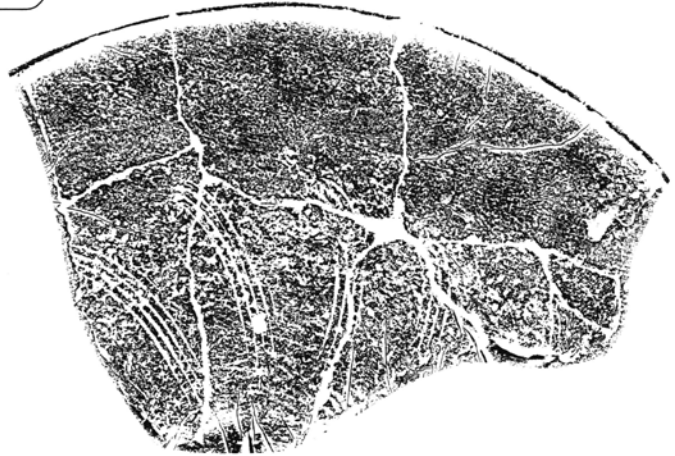


S=1/4

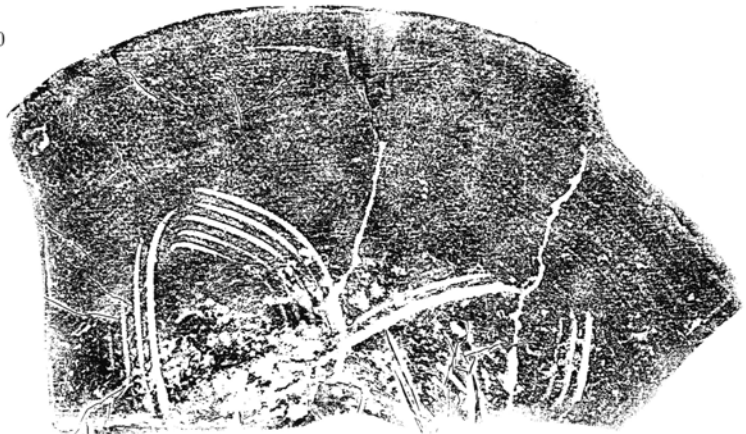
第809図 中世出土遺物 内耳鍋 (11)



79

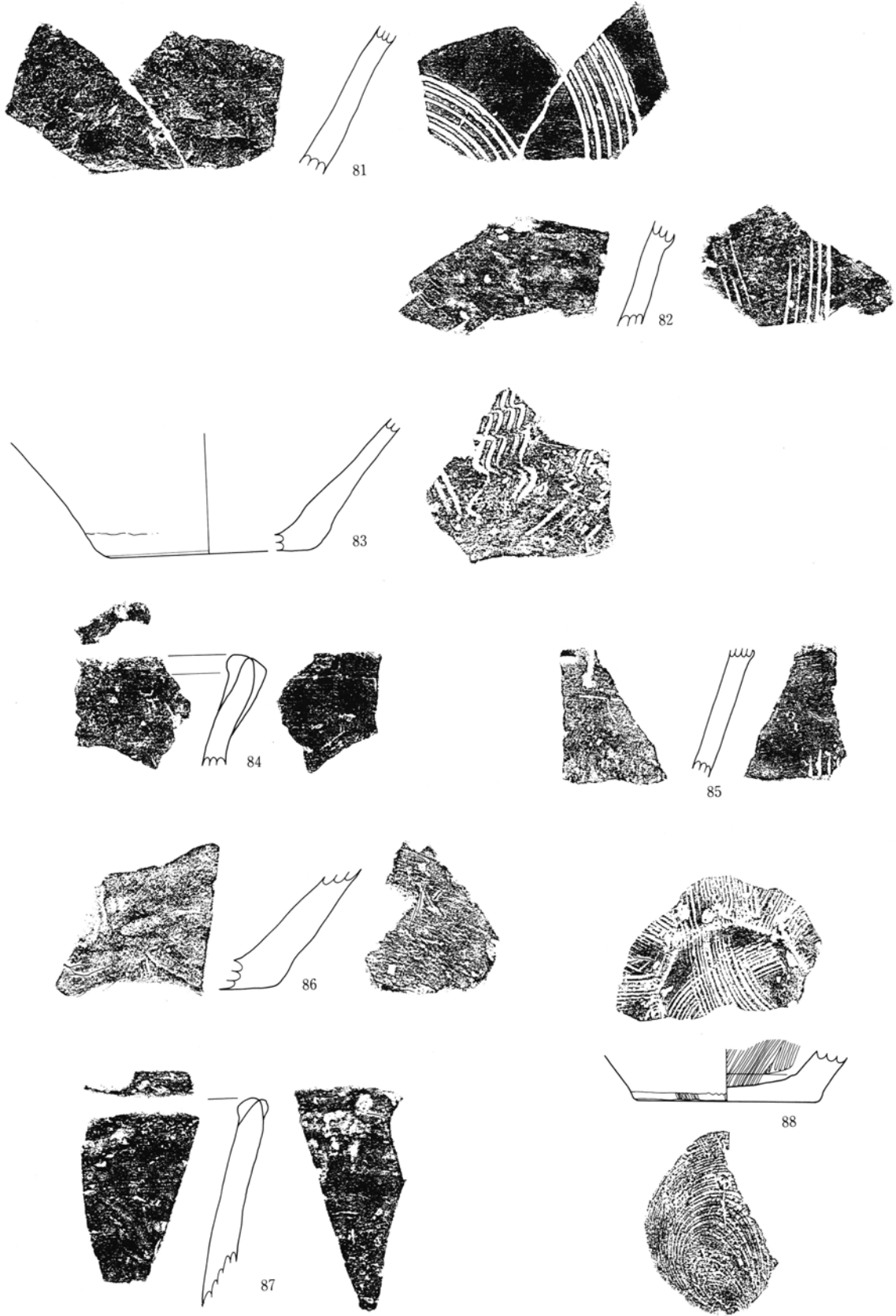


80



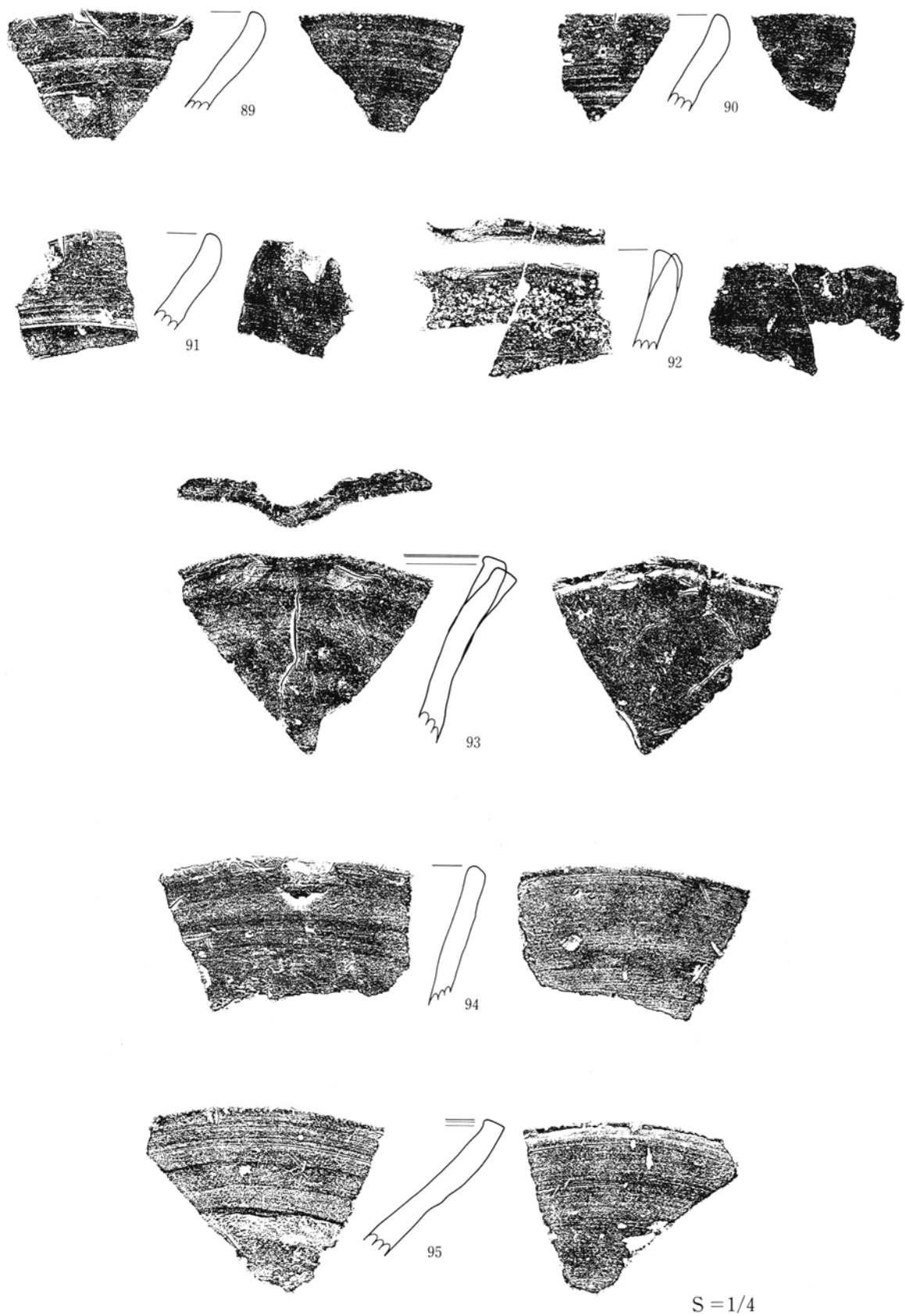
S=1/4

第810図 中世出土遺物 播鉢(1)

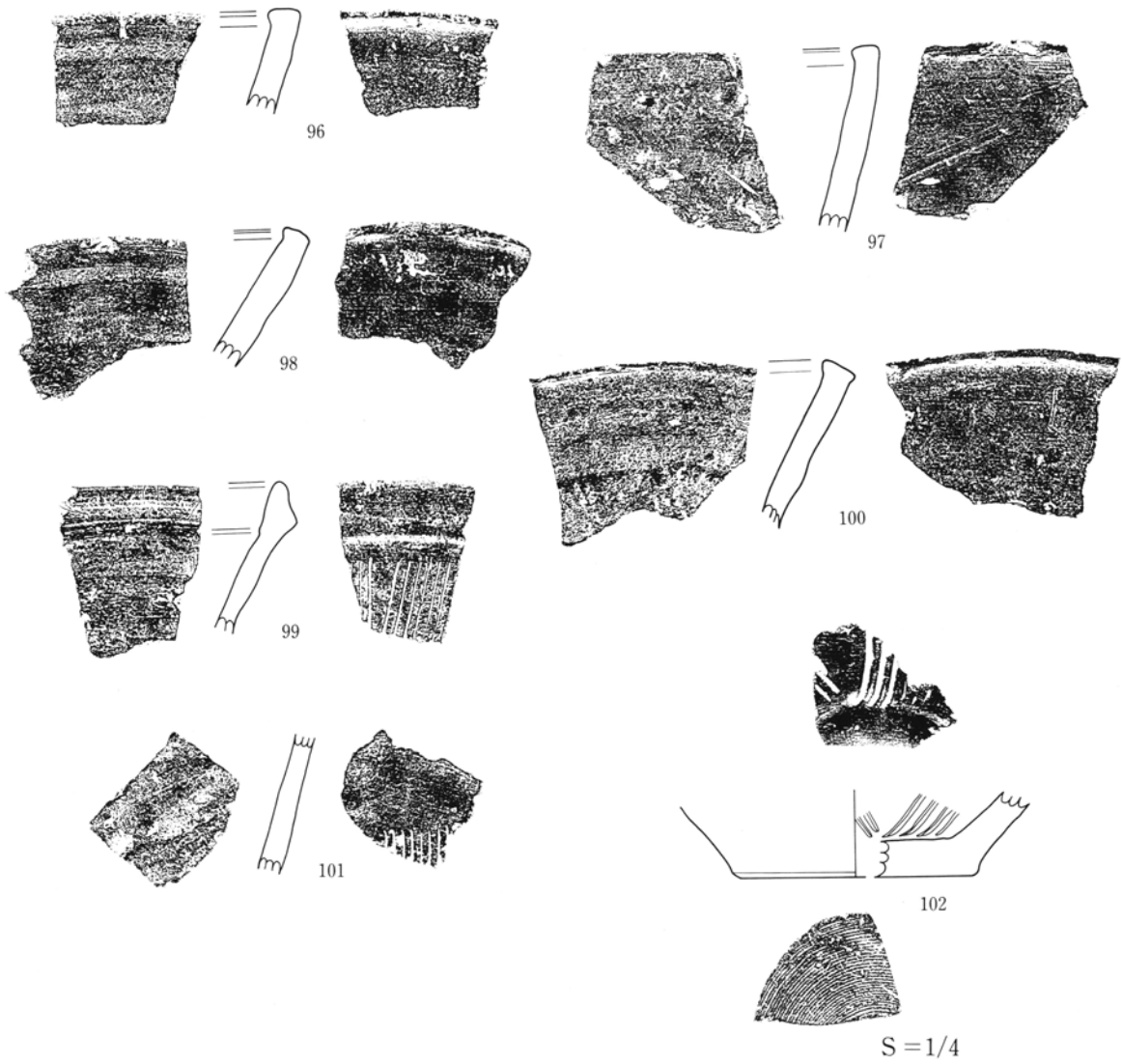


S = 1/4

第811図 中世出土遺物 播鉢(2)



第812図 中世出土遺物 播鉢(3)

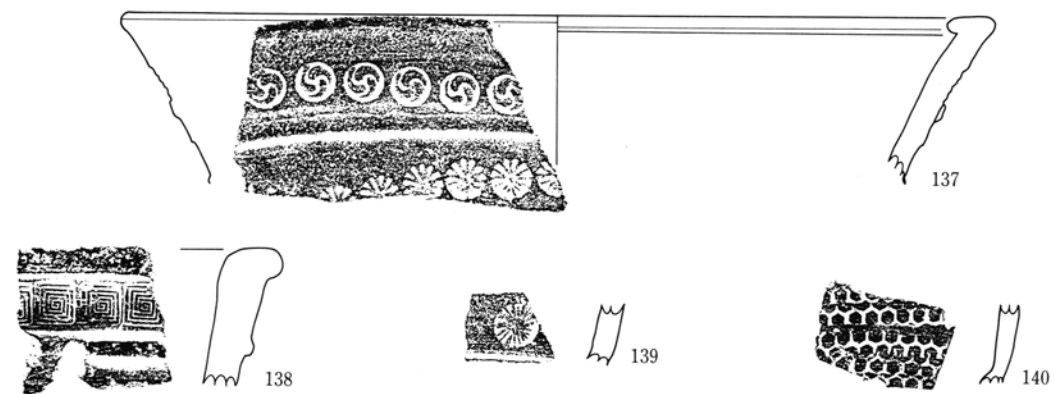
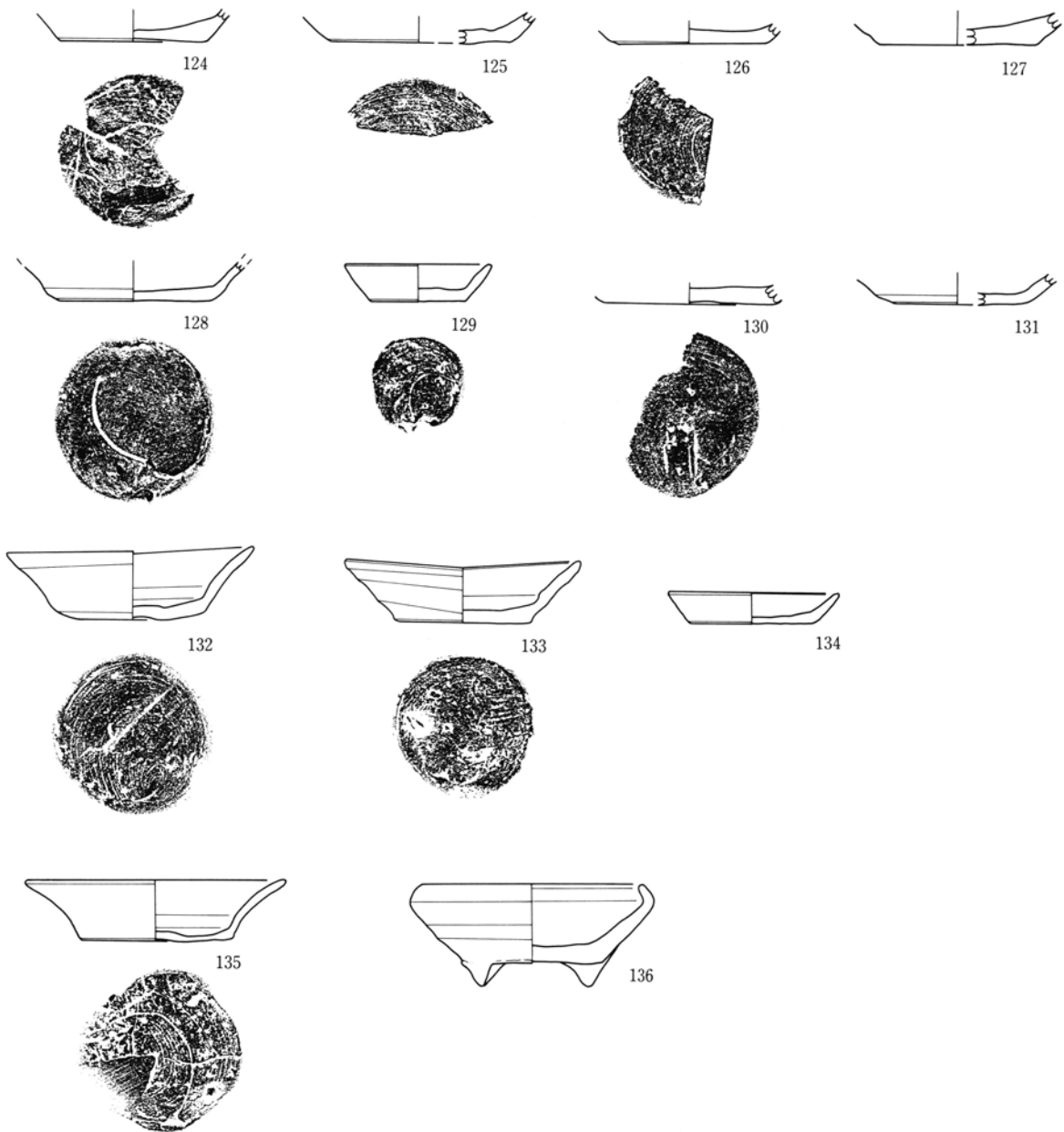


第813図 中世出土遺物 挿鉢（4）



S = 1/3

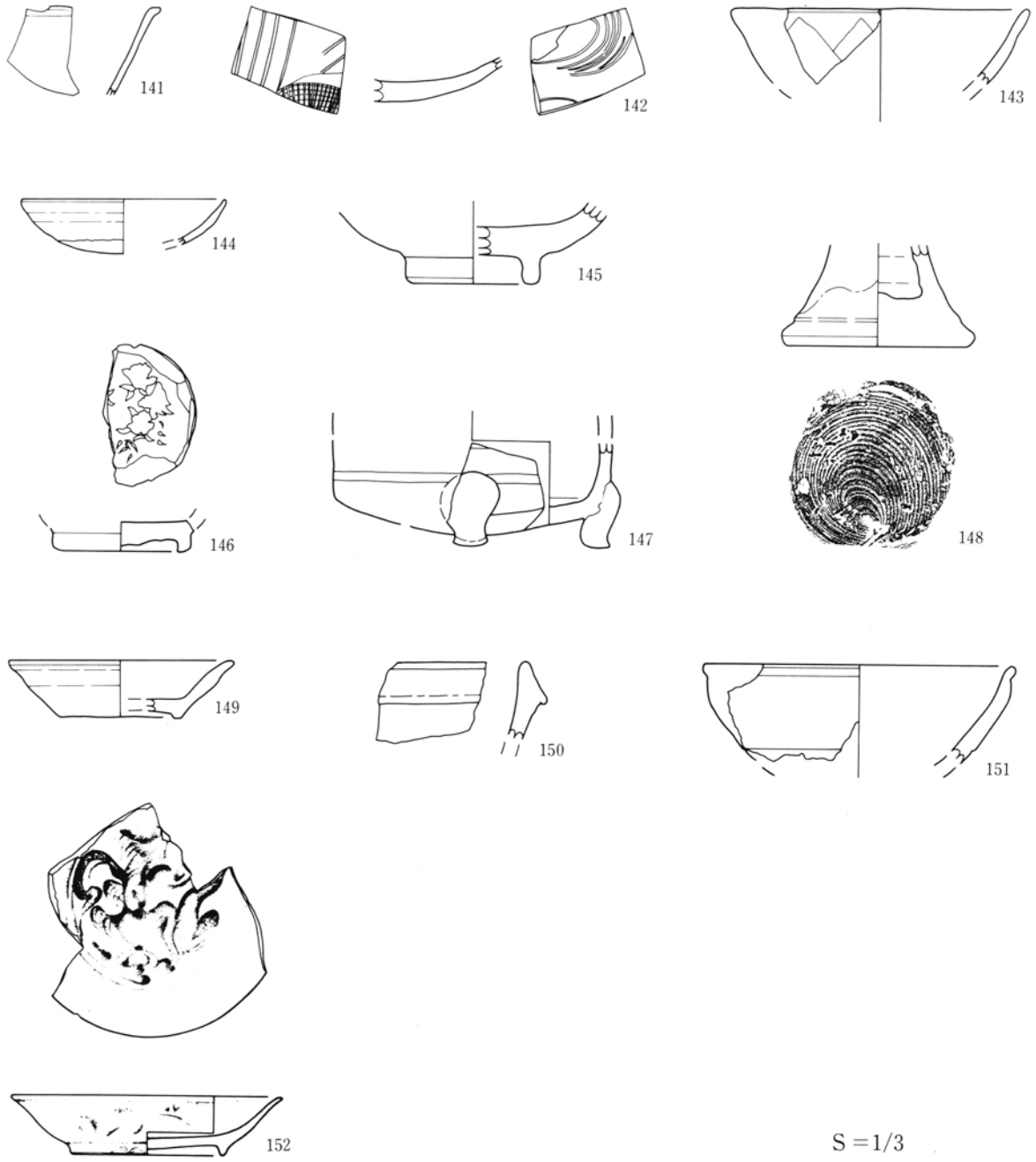
第814図 中世出土遺物 カワラケ (1)



S = 1/3

第815図 中世出土遺物 カワラケ(2)・香炉・火鉢

第3章 検出された遺構と遺物



第816図 中世出土遺物 磁器

第6節 中世の遺構と遺物

表119 中世遺物観察表

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第799図 1	内耳鍋	ほぼ 完形	1号堀	30.4・— (17.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐橙	口舌部は平坦で、頸部は屈曲する。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部は粗い撫で。底部は丸底。
第799図 2	内耳鍋	口縁か ら胴部	1号堀	(26.8)・— (11.1)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒灰	口舌部は丸身のある外向で、頸部は外反し凹線を有する。口縁から頸部に横撫で。胴部は粗い横撫で。
第799図 3	内耳鍋	口縁	1号堀	36.4・— (8.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段有り。口縁から胴部の整形は煤付着のためはつきりしない。
第799図 4	内耳鍋	口縁か ら胴部	1号堀	(35.0)・— (8.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段有り。口縁から頸部に横撫で。胴部に粗い横撫で。
第799図 5	内耳鍋	頸部か ら胴部	1号堀	—・(19.0) (10.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	頸部は横撫で。胴部は粗い撫で。底部は丸底となる可能性がある。
第799図 6	内耳鍋	胴部か ら底部	1・3 号堀	—・(28.0) —	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰橙	胴部は粗い横撫で。底部は平底。
第799図 7	内耳鍋	口縁か ら胴部	1号堀	(42.0)・— (10.1)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段有り。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部は粗い横撫で。
第800図 8	内耳鍋	ほぼ 完形	2号堀	(35.7)・(25.0) 17.7	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒灰	口舌部は平坦で、内面は屈曲している。口縁から頸部及び内面は横撫で。※内外面ともに剝落が多い。
第800図 9	内耳鍋	ほぼ 完形	2号堀	(36.4)・(32.6) 16.4	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒灰	口舌部は平坦で外向し、内面は屈曲する。口縁から頸部内面は横撫で。胴部は粗い横撫で。
第800図 10	内耳鍋	口縁か ら胴部	2号堀	(39.6)・— (14.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部に横撫で。胴部は凹凸があり整形粗い。
第800図 11	内耳鍋	口縁か ら胴部	2号堀	(33.0)・— 11.8	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒灰	口舌部は内面側が折り返し状に丸身を持つ。頸部は外反し内面に有段あり。口縁から頸部に横撫で。
第800図 12	内耳鍋	口縁か ら胴部	2号堀	(34.0)・— (12.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部は部分的に斜位の撫で。
第801図 13	内耳鍋	口縁か ら胴部	2号堀	(27.2)・— (12.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部に筥撫・横撫であり。
第801図 14	内耳鍋	口縁か ら胴部	2号堀	29.0・— (13.4)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦で外向する。頸部は外反し、内面に段状の稜線あり。口縁から頸部にかけて横撫で。
第801図 15	内耳鍋	口縁か ら胴部	2号堀	30.8・— (11.9)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦で外向する。頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。
第801図 16	内耳鍋	胴部か ら底部	2号堀	—・(10.9) —	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	頸部に横撫でがあり内面に段を有すると思われる。胴部にやや粗い、横撫でがあり。
第801図 17	内耳鍋	口縁か ら胴部	2・3 号堀	(36.0)・— (15.6)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰白	口舌部は平坦で外向する。頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。
第801図 18	内耳鍋	ほぼ 完形	2・3 号堀	(34.0)・(30.0) 5.0	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 橙	口舌部は平坦で内向する。口舌部は内側に折り返しとなる。口縁部に横撫であり。胴部は撫でがやや粗い。
第801図 19	内耳鍋	口縁か ら胴部	2・5 号堀	40.0・— (11.9)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部に横撫であり。胴部に粗い撫であり。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第802図 20	内耳鍋	ほぼ 完形	3号堀	(36.2)・(23.4) 16.6	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒灰	口舌部は平坦で外向し、頸部がはっきりしている。口縁から頸部、及び内面は横撫で。胴部は粗い撫で。
第802図 21	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	(36.1)・ (15.9)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部は平坦でやや外向している。頸部は外反し、内面に有段あり。胴部に比較的丁寧な横撫であり。
第802図 22	内耳鍋	ほぼ 完形	3号堀	35.8・23.6 16.5	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦で外向する。頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。全体に煤付着。
第802図 23	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	(35.6)・ (13.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐	口舌部は平坦で外向する。頸部は外反し屈曲する。内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。
第802図 24	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	(33.8)・ (13.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。
第803図 25	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	29.0・ (15.3)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐黒	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部に粗い撫で。
第803図 26	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	(29.8)・ (14.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒灰	口舌部は平坦で、頸部は外反し、屈曲している。口縁から頸部及び内面は横撫で。
第803図 27	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	(29.2)・ 13.8	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦で、鋭く内向している。頸部は外反し内面に有段あり。
第803図 28	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	(26.4)・ (14.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部はやや丸身をおび外向している。頸部は外反し内面に段状の稜線あり。口縁から頸部に横撫で。
第803図 29	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	29.0・ (13.7)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部に粗い撫で。
第803図 30	内耳鍋	口縁	3号堀	32.0・ (14.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙灰	口舌部は平坦で、やや外向している。頸部は外反し有段あり。口縁から頸部に横撫で。胴部も粗い横撫で。
第803図 31	内耳鍋	ほぼ 完形	3号堀	(29.0)・(20.3) (16.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し、屈曲している。口縁から頸部及び内面に横撫で。底部は丸底を成す。
第803図 32	内耳鍋	口縁か ら胴部	3号堀	29.2・ (14.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部に粗い撫で。
第803図 33	内耳鍋	底部	3号堀	—・(24.0) (6.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	胴部に粗い横撫で。全体に煤付着。
第804図 34	内耳鍋	ほぼ 完形	4号堀	(34.0)・(23.0) 15.1	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦で、外向している。頸部は外反し内面ははっきり屈曲している。口縁から頸部に横撫で。
第804図 35	内耳鍋	ほぼ 完形	4号堀	(30.0)・ (15.3)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦で、頸部は外向し、内面は屈曲する。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部に粗い撫で。
第804図 36	内耳鍋	口縁か ら胴部	4号堀	(32.0)・ (12.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐	口舌部は平坦で、頸部は外反し、内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部に粗い撫で。
第804図 37	内耳鍋	ほぼ 完形	B区	34.5・24.0 16.7	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 橙灰	口舌部は丸身をおび、やや外向している。頸部は外反し、口縁から頸部にかけて横撫で。
第804図 38	内耳鍋	底部	B区	—・(29.0) —	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐	底部に寛撫であり。底部は平底。

第6節 中世の遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第804図 39	内耳鍋	口縁から胴部	城12・ 9 G	36.0・— (10.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部は平坦で、やや丸身をおびる。頸部は外反し内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫であり。
第804図 40	内耳鍋	ほぼ 完形	遺構外	(32.3)・(24.3) 11.5	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部は平坦で、片口口縁となる可能性もある。口縁から底部に横撫であり。底部に櫛書き状の沈線あり。
第804図 41	内耳鍋	ほぼ 完形	B区土 壘下	29.4・— (14.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦で、やや内向気味。頸部は外反し有段あり。口縁から頸部にかけて横撫であり。
第805図 42	内耳鍋	ほぼ 完形	225 土坑	34.0・— (16.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部はやや丸身のある厚口。頸部形状が不明瞭。口縁から頸部に横撫であり。底部角は丸い。
第805図 43	内耳鍋	ほぼ 完形	225・235 土坑	(32.0)・— (16.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部はやや丸身のある厚口。頸部形状が不明瞭。口縁から頸部に丁寧な横撫であり。
第805図 44	内耳鍋	ほぼ 完形	225・235 土坑	(33.4)・(22.8) (15.1)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部はやや丸身のある厚口で内向気味。頸部形状ははっきりしない。口縁から胴部にかけて横撫であり。
第805図 45	内耳鍋	ほぼ 完形	225 土坑	(25.6)・(17.0) (13.7)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部はやや丸身のある厚口。頸部はやや外反し内面に有段あり。頸部幅が短かく内耳は太く短い。
第805図 46	内耳鍋	ほぼ 完形	225 土坑	30.0・(20.0) (15.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐	口舌部はわずかに内向し、やや丸身のある厚口。頸部は不明瞭。内耳は太く短い。
第806図 47	内耳鍋	ほぼ 完形	4号 竪穴	(29.0)・(17.2) (16.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し内面に緩い段がある。口縁から胴部に横撫で。底部は丸底と考えられる。
第806図 48	内耳鍋	完形	4号 竪穴	26.0・— 14.0	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し内面に有段あり。口縁から頸部横撫で。底部は丸底で段状を成す。
第806図 49	内耳鍋	口縁から胴部	4号 竪穴	(30.6)・— (14.4)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰橙	口舌部は平坦で、やや内向する。頸部は外反し内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫であり。
第806図 50	内耳鍋	ほぼ 完形	J区	30.0・(19.2) (14.4)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦で、頸部は外反し内面に有段あり。口縁から頸部にかけて横撫で。胴部は粗い横撫で。
第806図 51	内耳鍋	口縁	1号堀	(12.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦でわずかに内反する。口縁はやや丸味があり厚口。
第806図 52	内耳鍋	口縁	1号堀	(7.4)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第806図 53	内耳鍋	口縁	1号堀	(12.9)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部は平坦。頸部は外反し凹線を有する。頸部内面に有段あり。
第806図 54	内耳鍋	口縁	1号堀	(9.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第807図 55	内耳鍋	口縁	1号堀	(11.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第807図 56	内耳鍋	口縁	1号堀	(7.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部はやや凹がある。頸部は外反し内面に有段あり。
第807図 57	内耳鍋	口縁	2号堀	(9.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部は平坦。口縁はやや丸身のある厚口。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第807図 58	内耳鍋	口縁	2号堀	(13.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 橙	口舌部は平坦でやや外向する。頸部は外反し内面にゆるい有段あり。口縁から頸部に横撫であり。
第807図 59	内耳鍋	口縁	2号堀	(8.8)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第807図 60	内耳鍋	底部	2号堀	(30.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰	底部は平底。
第807図 61	内耳鍋	口縁	3号堀	(14.8)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰橙	口舌部は平坦でやや外向する。頸部は外反し内面に有段あり。口縁から頸部に横撫であり。
第807図 62	内耳鍋	口縁	3号堀	(11.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰黒	口舌部は平坦でやや内向する。頸部は外反し内面に有段あり。
第808図 63	内耳鍋	口縁	3号堀	(12.1)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰黒	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第808図 64	内耳鍋	口縁	3号堀	(12.3)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦でやや外向する。頸部は外反し内面に有段あり。
第808図 65	内耳鍋	口縁	3号堀	(12.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰黒	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第808図 66	内耳鍋	口縁	3号堀	(11.4)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 橙	口舌部は平坦でやや内向する。頸部は外反し内面に段状の稜線あり。
第808図 67	内耳鍋	口縁	3号堀	(6.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐	口舌部は平坦でやや内向し、厚みがある。
第808図 68	内耳鍋	口縁	3号堀	(6.2)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 橙	口舌部は平坦でやや外向する。口縁内・外面に凹線を有する。
第808図 69	内耳鍋	口縁	3号堀	(12.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐橙	口舌部は平坦でやや外向する。口縁はやや丸味があり厚口。
第808図 70	内耳鍋	口縁	3号堀	(14.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒橙	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第809図 71	内耳鍋	口縁	3号堀	(11.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰黒	口舌部は平坦で、厚みがある。外面全体に煤付着。
第809図 72	内耳鍋	口縁	3号堀	(9.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 褐灰	口舌部は平坦。頸部は外反し内面に有段あり。
第809図 73	内耳鍋	口縁	3号堀	(8.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 橙	口舌部はやや丸身がある。頸部は外反し内面に有段あり。
第809図 74	内耳鍋	口縁	4号堀	(14.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 灰黒	口舌部はやや丸身がある。頸部は外反し内面に複数の有段あり。
第809図 75	内耳鍋	口縁	5号堀	(12.5)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒褐	口舌部は平坦でやや内向する。頸部は外反し内面に有段あり。
第809図 76	内耳鍋	口縁	6号堀	(10.0)	1. 砂粒 3. 還元焰	2. 黒灰	口舌部は平坦でやや内向する。口縁は厚みがある。

第6節 中世の遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第809図 77	内耳鍋	口縁	2号墳	(14.3)	1. 砂粒 2. 灰褐 3. 還元焰	口舌部は平坦でやや外向する。頸部は緩やかに外反する。口縁から頸部にかけて横撫であり。
第809図 78	内耳鍋	口縁	2号墳	(9.5)	1. 砂粒 2. 黒灰 3. 還元焰	口舌部は平坦で厚みがある。頸部は緩やかに外反する。
第810図 79	播鉢	ほぼ 完形	3号堀	(29.6)・(11.2) 13.0	1. 砂粒 2. 褐橙 3. 還元焰	口舌部は平坦で、内側に凹線を有する。内面に4本単位の弧状の掻き目が施される。
第810図 80	播鉢	ほぼ 完形	3号堀	(30.0)・(10.0) 11.9	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口縁部は平坦で外向する。片口あり。内面に5本単位の弧状の掻き目が施される。
第811図 81	播鉢	胴部	2号堀	(7.4)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	胴部内面に6本単位の弧状の掻き目が施される。
第811図 82	播鉢	胴部	2号堀	(5.0)	1. 砂粒 2. 褐橙 3. 還元焰	胴部内面に5本単位の平行の掻き目が施される。
第811図 83	播鉢	胴から 底部	2号堀	(10.5) (6.4)	1. 砂粒 2. 黒灰 3. 還元焰	胴部内面に5本単位の波状の掻き目が施される。
第811図 84	播鉢	口縁	3号堀	(5.5)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は丸身があり厚い。片口あり。
第811図 85	播鉢	胴部	3号堀	(6.4)	1. 砂粒 2. 橙 3. 還元焰	内面に5本単位の平行の掻き目が施される。
第811図 86	播鉢	胴から 底部	7号堀	(5.8)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	内面に掻き目があるが単位がはっきりしない。
第811図 87	播鉢	口縁	B区	(10.2)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は丸く、内側に凹線を有する。片口あり。
第811図 88	播鉢	胴から 底部	C区	(9.2) (2.3)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	胴部内面に平行ないし弧状の掻き目が施される。底部内面に弧状の掻き目が交差する。底部外面に糸切痕あり。
第812図 89	播鉢	口縁	2号墳	(5.0)	1. 砂粒 2. 褐灰 3. 還元焰	口舌部は丸く外向している。
第812図 90	播鉢	口縁		(4.8)	1. 砂粒 2. 褐灰 3. 還元焰	口舌部は丸く外向している。
第812図 91	播鉢	口縁	E区	(4.8)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は丸く外向している。
第812図 92	播鉢	口縁		(4.9)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は丸く外向している。片口あり。
第812図 93	播鉢	口縁	E区	(9.5)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は平坦でやや外向している。内側に凹線を有する。片口あり。
第812図 94	播鉢	口縁	E区	(7.0)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は丸く外向している。
第812図 95	播鉢	口縁	E区	(7.0)	1. 砂粒 2. 褐橙 3. 還元焰	口舌部は平坦でやや外向している。内側にゆるい凹線を有する。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第813図 96	播鉢	口縁	E区	(4.2)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は平坦で内側に凹線を有する。
第813図 97	播鉢	口縁	E区	(7.4)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は平坦で内側に凹線を有する。
第813図 98	播鉢	口縁	E区	(5.5)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	口舌部は平坦で外向する。内側に凹線を有する。
第813図 99	播鉢	口縁から 胴部	E区	(6.0)	1. 砂粒 2. 橙 3. 還元焰	口舌部は丸く外向する。内・外面に緩い凹線を有する 胴部内面に7本単位の平行な掻き目が施される。
第813図 100	播鉢	口縁	E区	(6.8)	1. 砂粒 2. 褐橙 3. 還元焰	口舌部は平坦で外向する。内外面に緩い凹線を有する
第813図 101	播鉢	胴部	E区	(5.6)	1. 砂粒 2. 褐橙 3. 還元焰	内面に8本単位の平行な掻目が施される。
第813図 102	播鉢	胴から 底部	E区	(10.2) (3.5)	1. 砂粒 2. 灰 3. 還元焰	胴部内面に6本単位の平行な掻目が施される。底部に ロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 103	カワラケ	完形	1号堀	(10.2)・(6.0) 2.9	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	口縁内部に煤付着。
第814図 104	カワラケ	完形	2号堀	7.6・5.2 2.0	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 105	カワラケ	完形	2号堀	6.7・5.4 1.4	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 106	カワラケ	胴から 底部	2号堀	—・(5.6) 1.1	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 107	カワラケ	口縁から 胴部	3号堀	(16.6)・(10.8) 2.9	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 108	カワラケ	完形	3号堀	(10.2)・(6.2) 2.4	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 109	カワラケ	完形	3号堀	10.7・6.0 3.4	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 110	カワラケ	口縁から 底部	3号堀	(11.4)・(5.5) (3.0)	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 111	カワラケ	口縁から 底部	3号堀	(9.3)・(6.2) 2.2	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 112	カワラケ	完形	3号堀	8.4・5.5 1.8	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 113	カワラケ	口縁から 底部	3号堀	(12.6)・(8.1) 2.4	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 114	カワラケ	口縁から 底部	3号堀	(10.0)・(6.0) (2.5)	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。

第6節 中世の遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 3. 焼成	2. 色調	成・整形の特徴
第814図 115	カワラケ	胴から 底部	3号堀	—・(7.5) 2.4	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 116	カワラケ	ほぼ 完形	3号堀	(8.8)・(5.4) 2.0	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 117	カワラケ	完形	3号堀	7.9・4.5 2.1	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 118	カワラケ	胴から 底部	3号堀	—・7.6 1.2	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 119	カワラケ	完形	3号堀	(7.8)・(5.2) 1.6	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 120	カワラケ	完形	3号堀	(8.2)・(4.9) 1.6	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 121	カワラケ	胴から 底部	3号堀	—・(7.0) 1.5	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 122	カワラケ	完形	3号堀	(8.0)・4.0 2.0	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第814図 123	カワラケ	完形	3号堀	(8.2)・(5.0) 1.9	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 124	カワラケ	底部	3号堀	—・6.5 1.4	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 125	カワラケ	底部	3号堀	—・(8.0) 1.3	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 126	カワラケ	底部	3号堀	—・(7.0) 0.9	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 127	カワラケ	底部	3号堀	—・(7.0) 1.4	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 128	カワラケ	胴から 底部	4号堀	—・6.8 1.7	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 129	カワラケ	完形	7号堀	(7.0)・(4.3) 1.6	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 130	カワラケ	底部	7号堀	—・(7.4) (0.9)	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 131	カワラケ	胴から 底部	7号堀	—・(6.0) 1.3	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 132	カワラケ	完形	B区	10.9・6.4 3.2	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 133	カワラケ	完形	不明	(10.4)・(6.0) 2.7	1. 砂粒 3. 酸化焰	2. 橙	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。

第3章 検出された遺構と遺物

遺物番号	器種	部位	出土位置	口径・底径 器高(cm)	1. 胎土 2. 色調 3. 焼成	成・整形の特徴
第815図 134	カワラケ	完形	B区	7.5・5.4 1.4	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	口縁部外面に煤付着。
第815図 135	カワラケ	完形	4号 竪穴	(11.4)・(6.8) 3.1	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	底部にロクロ整形。回転糸切り痕あり。
第815図 136	香炉	完形	4号 竪穴	(9.8)・(6.4) 4.4	1. 砂粒 2. 橙 3. 酸化焰	口縁部くの字に内反する。底部にロクロ整形。3本の脚あり。
第815図 137	火鉢	口縁	B区	(35.0) (6.6)	1. 砂粒 2. 黒橙 3. 還元焰	口舌部は平坦で、口縁は外反する。口縁下に段を有する。印文あり。
第815図 138	火鉢	口縁	城北 台地	(5.3)	1. 砂粒 2. 黒灰 3. 還元焰	口舌部は平坦で、口縁は外反する。口縁下に段を有する。印文あり。
第815図 139	火鉢	胴部	C区	(2.5)	1. 砂粒 2. 黒灰 3. 還元焰	印文あり。
第815図 140	火鉢	胴部	城北 台地	(3.0)	1. 砂粒 2. 黒灰 3. 還元焰	印文あり。
第816図 141	白磁 壺	口縁	C区		1. 緻密 2. 白色 3. 良	中国産白磁。12世紀後半。
第816図 142	青磁 壺	体部	C区		1. 緻密 2. 黄青色 3. 良	中国産青磁。12世紀後半。内・外面に文様あり。
第816図 143	青磁 壺	口縁	B区 1A郭	13.4 (3.3)	1. 緻密 2. 青緑色 3. 良	中国産青磁。13世紀中から後半。外面に文様あり。
第816図 144	白磁 壺	口縁	3号堀	(9.2)・ (2.0)	1. 緻密 2. 白色 3. 良	中国産白磁。13世紀中から後半。
第816図 145	青磁 壺	底部	3号堀	—・(6.0) (3.1)	1. 緻密 2. 青色 3. 良	中国産青磁。14・15世紀。
第816図 146	青磁 壺	底部	表採	—・(6.2) —	1. 緻密 2. 青色 3. 良	国産青磁。17世紀代。
第816図 147	青磁 香炉	底部	3号堀	—・(12.5) (4.7)	1. 緻密 2. 青色 3. 良	中国産青磁。14・15世紀。3本の脚を有する。
第816図 148	陶器 花生か	底部	3号堀	—・8.0 (4.5)	1. 緻密 2. 淡緑色 3. 良	瀬戸産。15世紀前半。燈火器の可能性あり。底面に糸切痕あり。
第816図 149	陶器 皿	半完形	C区	(10.0)・(5.4) (2.5)	1. 緻密 2. 茶黒色 3. 良	瀬戸・美濃産。16世紀代。
第816図 150	陶器 壺	口縁	C区		1. 緻密 2. 茶褐色 3. 良	瀬戸・美濃産。16世紀代。
第816図 151	陶器 壺	口縁	B区 1A郭	14.0 (4.3)	1. 緻密 2. 茶黒色 3. 良	瀬戸・美濃産。16世紀代。
第816図 152	磁器 皿	半完形	4号 竪穴		1. 緻密 2. 白色 3. 良	中国産。16世紀。内・外面に染め付けあり。

内耳鍋ではなく、内耳盤形である。この種の代表的なものに、7が上げられる。B-1種とした中の胴部下半を欠くものの中には、この種のもが含まれている可能性がある。

B-3種 内耳鍋ではなく、いわゆる焙烙鍋である。18の1点だけが、出土している。

II類

底部形状が、丸底となるものを、この類とする。口縁部形状および器体の成・整形から、次の2種類に文別される。

A 種 口縁部から胴部に至る器体の成・整形は、I類A種と同様であるが、底部形状が丸底となるものである。この種の代表的なものに、42・43・45・46が上げられる。

B 種 口縁部から胴部に至る器体の成・整形は、I類A種と同様であるが、底部形状が丸底となるものである。この種の代表的なものとして、1・5・31・47・48・50が上げられる。

III類

底部に、高台がつくものを、この類とした。40の1点だけであり、その形状から内耳鍋とは異なるもので、むしろ盤形鉢ないしは盤形片口鉢、あるいは盤形火鉢である可能性が高い。

以上のように類別してみたが、各種別の特徴から、I類A種とII類A種が同時期のものと考えられ、I類B1種およびB2種とII類B種が概ね同時期であるものと考えられる。

こうした内耳鍋については、従来より大江正行氏らによって、群馬県内の編年研究が進められてきた。先頃刊行された「高崎市史 資料編3」(1996)での編年に、本遺跡出土の内耳鍋を併せると、前者のI・II類A種は15世紀前半、後者は15世紀後半から16世紀代の所産ということになる。但し、この編年では、丸底から平底への形態および成・整形技法の変化が画期であるとしているが、本遺跡ではII類B種のような新しい様相を示す丸底が存在している点で、相違をきたしている。むしろ、底部形状の変化は、時期判定の基準にはなし得難いと思われる。

播鉢 (第810～813図 表119)

出土した播鉢は、24点出土しており、復元できたものは79・80の2点だけである。これらの内、中世遺構に伴って出土しているのは、2号堀から出土した81～83、3号堀から出土した79・80・84・85であり、それ以外は遺構外出土の資料である。これらの多くは、口舌部が平坦で、器厚の薄いものが主体を成す。中には数少ないが、口舌部が丸身を持ち、肉厚なものも含まれている。15・16世紀の所産であろうと考えられるが、主体は16世紀と思われる。

カワラケ (第814・815図 表119)

いわゆる土師質土器皿とされるもので、本遺跡から数多く出土している。その中でも図化できたものを、第814・815図に示した。城郭に伴う各堀から出土したものが多く、図化したものでは3号堀出土のものが最も多い。135は、4号縦穴状遺構から、他の遺物と共に出土している。これらは、概ね15・16世紀の所産によるものと考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物

香炉 (第815図 表119)

ここに示す香炉は、酸化焰焼成による土師質のもので、4号竪穴状遺構から出土している。同遺構からは、内耳鍋、カワラケ、陶磁器類が、共に出土している。

口縁部は平縁で、短く屈曲するように内反し、底部には3個の突起状の足がつく。体部の内外面は、横撫による丁寧な整形が施されている。同様の香炉は、県内でも多々出土している。

火鉢 (第815図 表119)

出土した火鉢は、5点であるが、遺構に伴うものはない。このうちの1点は、底部から脚部にかかる部分で、剥落がひどく図化できなかった。図示できたのは、137~140の4点である。137は、1B郭内から出土したものである。体部には、それぞれ巴や菊花形等の印文が施されている。

陶磁器類 (第816図 表119)

出土した陶磁器類は、かなり少なく、小片が目立つ。その中でも比較的大形片を、第816図に示した。3号堀内から出土した144・145・147・148の4点以外は、遺構外出土のものである。これらは、輸入(中国)陶磁器である白磁・青磁・染め付けと、国産陶器類からなり、碗を主体に皿・香炉・花生ないし燈火器・大型の壺甕類で構成されている。141・142は12世紀後半、143・144は13世紀中頃から後半、145・147は14・15世紀代、148は15世紀前半、149~151は16世紀代、146は17世紀代頃の所産と考えられる。なお、図示できなかった資料には、14・15世紀の所産と考えられる、知多窯(常滑)産の大甕片がある。

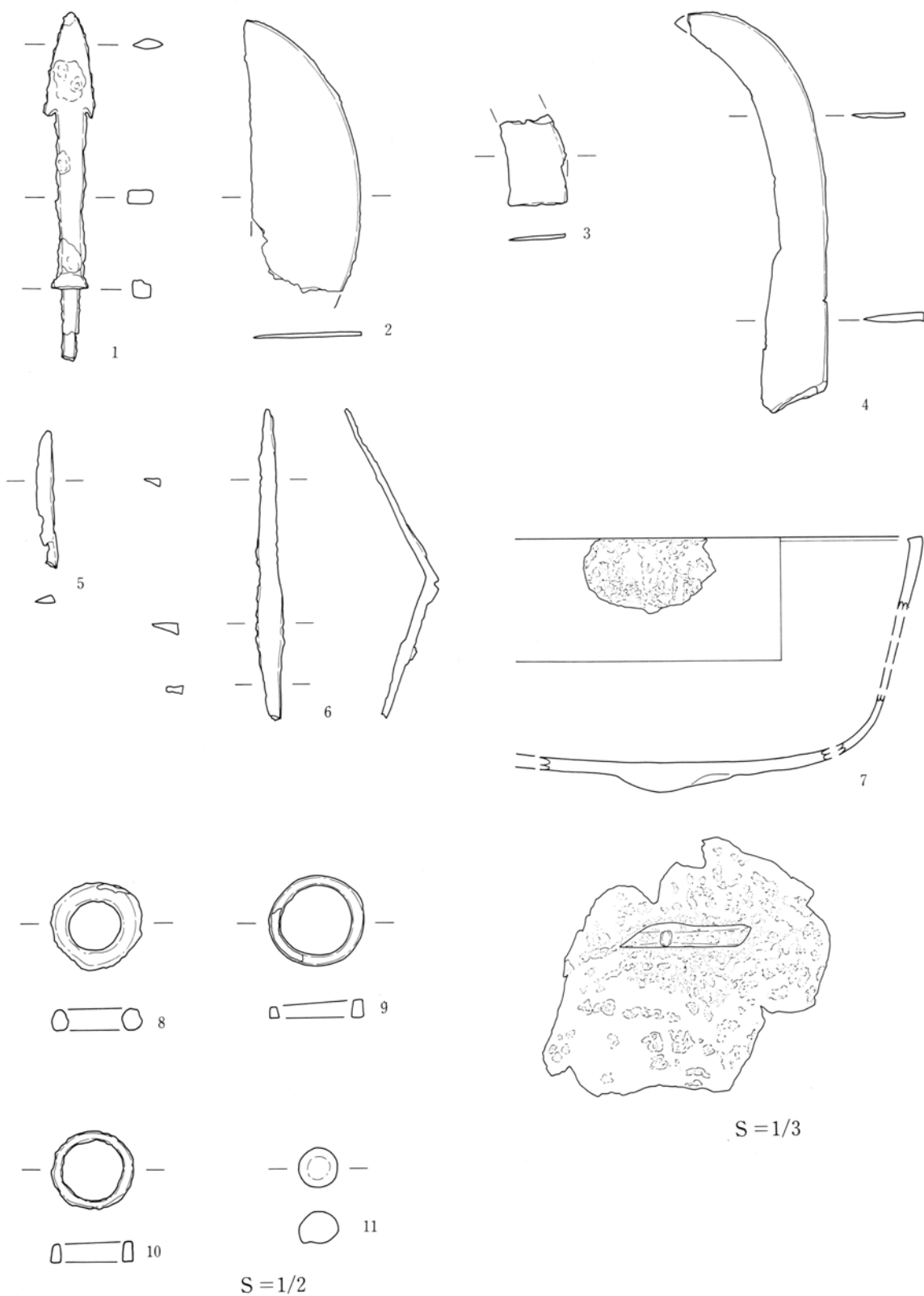
古銭 (第817図 表120)

出土した古銭は、25点以上を数えるが、図示できたものは第817図に示すものである。その多くは渡来銭であり、北宋銭(太平通寶、咸平通寶、祥符元寶、天禧通寶、皇宋通寶、至和元寶、熙寧元寶、元豊通寶、聖宋元寶、大観通寶)の10種16枚、明銭(洪武通寶、永楽通寶)2種4枚がみられる。また、江戸時代のものとして、寛永通寶が5点出土している。

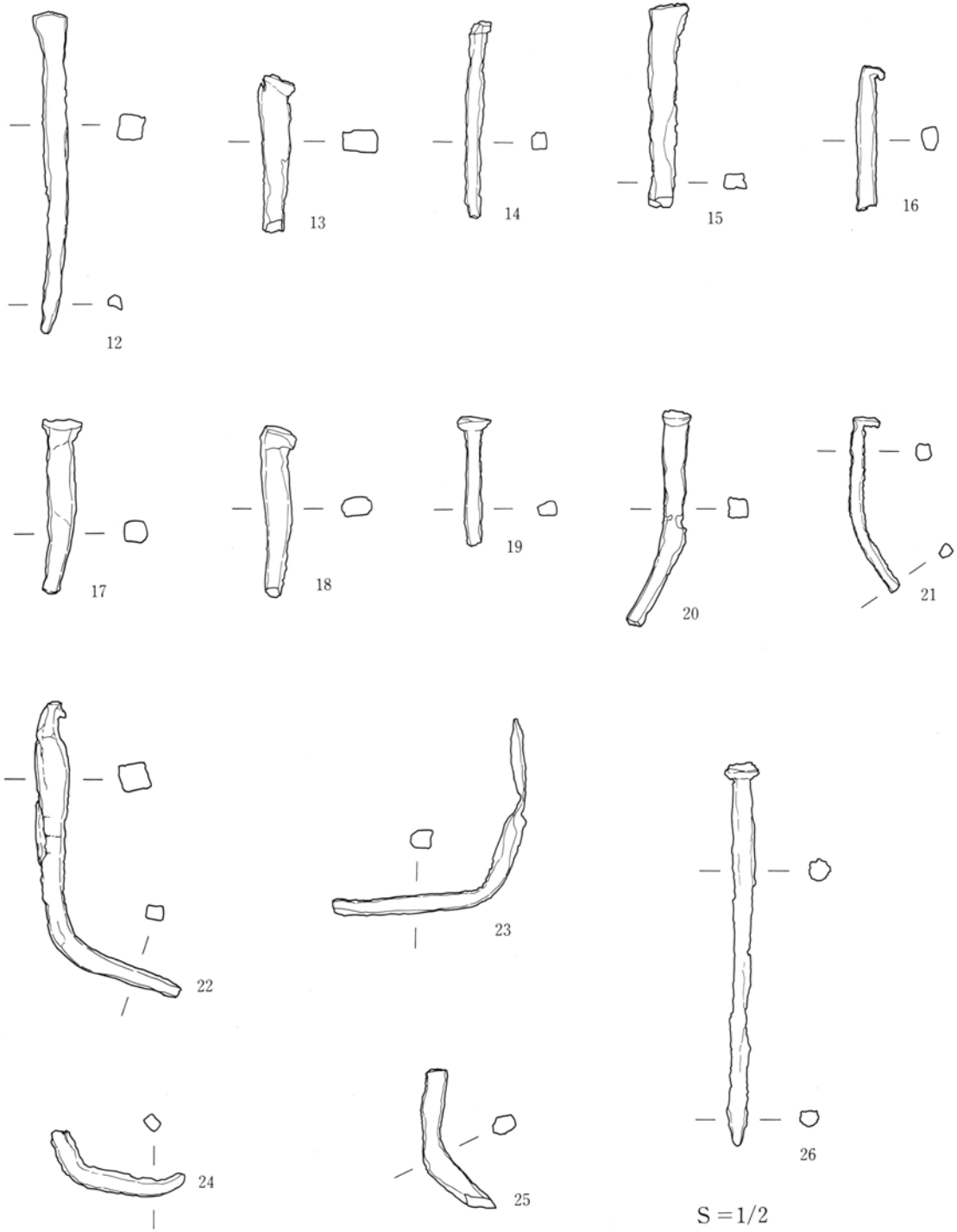
表120 古銭観察表

No.	出土位置	銭銘	鑄造年代	径(m)	重さ(g)	素材
1	表 採	太平通寶	(北宋) 976	2.4	2.76	銅
2	31号土坑	咸平通寶	(北宋) 998	2.3	2.16	銅
3	31号土坑	祥符元寶	(北宋) 1009	1.7	1.56	銅
4	C 区	天禧通寶	(北宋) 1017	2.2	2.24	銅
5	H 区	天禧通寶	(北宋) 1017	2.5	2.23	銅
6	H 区	皇宋通寶	(北宋) 1038	2.5	1.77	銅
7	H 区	皇宋通寶	(北宋) 1038	2.4	2.78	銅
8	表 採	至和元寶	(北宋) 1054	2.4	2.53	銅
9	表 採	熙寧元寶	(北宋) 1068	2.3	2.95	銅
10	H 区	元豊通寶	(北宋) 1078	2.4	3.28	銅
11	H 区	元豊通寶	(北宋) 1078	2.4	3.49	銅
12	A 区	成宋元寶	(北宋) 1101	2.3	2.39	銅
13	E 区	大観通寶	(北宋) 1107	2.4	2.95	銅

No.	出土位置	銭銘	鑄造年代	径(m)	重さ(g)	素材
14	表 土	洪武通寶	(明) 1368	2.4	3.45	銅
15	C 区	洪武通寶	(明) 1368	2.4	3.25	銅
16	表 採	永楽通寶	(明) 1408	2.5	3.19	銅
17	H 区	永楽通寶	(明) 1408	2.5	1.76	銅
18	E 区	寛永通寶	(江戸)	2.2	2.19	銅
19	E 区	寛永通寶	(江戸)	2.2	2.15	銅
20	A 区	寛永通寶	(江戸)	2.5	3.48	銅
21	H 区	寛永通寶	(江戸)	2.3	2.30	銅
22	表 採	寛永通寶	(江戸)	2.8	4.18	真鍮
23	31号土坑	元□□寶		2.3	1.79	銅
24	2号堀	□□通寶		2.2	0.80	銅
25	表 採	元□□寶		1.0	1.02	銅



第818図 鉄製品 (1)



第819図 鉄製品(2)

第3章 検出された遺構と遺物

表121 鉄製器観察表

No.	出土位置	器種	材質	長さ(m)	巾(m)	厚さ(m)	No.	出土位置	器種	材質	長さ(m)	巾(m)	厚さ(m)
1	2号墳	鉄鎌	鉄	11.3	1.7	0.6	14	C区	釘	鉄	6.1	0.6	0.6
2	E区2号墳	鎌	鉄	(13.2)	5.3	0.2	15	C区32号住	釘	鉄	4.9	1.2	0.7
3	C区32号住	鎌	鉄	(4.5)	3.3	0.2	16	C区	釘	鉄	4.5	0.8	0.8
4	96号土坑	鎌	鉄	(19.6)	3.2	0.4	17	1号堀	釘	鉄	5.3	1.3	0.7
5	17号住	刀子	鉄	(6.7)	0.9	0.4	18	D区30号掘立	釘	鉄	5.3	1.1	0.6
6	H区B下	刀子	鉄	(15.2)	1.4	0.6	19	D区30号掘立	釘	鉄	4.0	1.1	0.5
7	不明	鍋	鉄	—	—	—	20	C区	釘	鉄	(6.8)	0.9	0.7
8	2号堀	鉄輪	鉄	3.0	1.7	0.7	21	C区	釘	鉄	(5.5)	0.7	0.5
9	6号堀	鉄輪	鉄	2.7	2.0	0.7	22	C区32号住	釘	鉄	11.2	1.1	0.8
10	4号竪穴	鉄輪	鉄	3.1	2.3	0.6	23	不明	釘	鉄	(10.2)	0.6	0.7
11	C区17溝	鉛玉	鉛	1.3	1.3	1.1	24	C区32号住	釘	鉄	(4.8)	0.7	0.5
12	C区	釘	鉄	9.8	1.1	0.8	25	C区	釘	鉄	(5.0)	0.9	0.6
13	C区	釘	鉄	(6.3)	1.3	0.5	26	E区172号土坑	釘	鉄	11.7	1.1	0.7

遺構に伴い出土したものとしては、31号土坑から2の咸平通寶、3の祥符通寶と23の判読不明銭の3点がある。23は銭質と書体から北宋銭と考えられ、いずれも北宋銭である。

寛永通寶は、5枚とも寛文期以降に鑄造された新寛永に属する。22の四文銭は従来の方穿を加工して円穿にしている。県内では大島上城遺跡より出土し、中世備蓄銭にもみられる加工銭である。

鉄製品 (第818・819図 表121)

本遺跡で出土した鉄製品を、この項でまとめて扱っている。全体に、出土量は少ない。1は、E区中央に位置する2号古墳から出土した鉄鎌で、古墳に伴うものと考えられる。2～4は、平安時代の鎌と考えられる。5・6も、平安時代と考えられる刀子である。7は鉄製の内耳鍋であり、口縁部片の口舌部は平坦で、底面中央部には蹄状の突起をもつ。比較的、小型の鍋と思われる。遺存状態は、余り良くない。8～10は、リング状のものであり、9・10の断面は四角状を呈する。11は、本遺跡で唯一の鉛玉である。12～26は釘であるが、丸釘と思われ、明治以降のものである可能性が高い。

石臼 (第820～824図 表122)

本遺跡で出土した石臼は、17点である。このうち完形個体に近いものは、1・4・11の3点がある。使用される石材には、牛伏砂岩と粗粒輝石安山岩の2種類であり、他の石材のものは見あたらない。遺構から出土したものとしては、3が225号土坑から、15が281号土坑から出土した以外は、堀から出土したものが主体である。出土した石臼には、穀臼と考えられる大型のものと、茶臼と考えられる小型のものがあり、それぞれの特徴について記す。

穀臼

穀臼と考えられるものには、1～10・14～17があり、このうち上臼は1～7・9・10で、下臼は8・14～17である。石材は、1と16の2点が粗粒輝石安山岩で、それ以外は牛伏砂岩が使用されている。

上臼の特徴としては、上面の周縁が一段高くなり、面は平坦となる。中央脇には、穀物を入れる穴を有し、下面まで貫通している。下面は、凹状を呈し、中央に孔をもつが上面まで貫通するのは1のみである。また、中央孔脇の上面から貫通する穴を先端に、弧状の浅い溝を有する。さらに、挽目をもつものには、4・5・

7の3点がある。挽手穴は側面に設けられているが、側面中央に位置するものと、下端に位置するものがある。なお、1は2箇所挽手穴をもつ。

下臼は、上面が凸状を呈し、挽目をもつものに8・15・16がある。下面は、凹状を呈するものと、平坦となるものがあり、中央の孔が貫通するものが多い。これらの内、8の下面には、上臼下面と同様の弧状の浅い溝を有し、中央の孔は上半だけで、貫通していない。

茶臼

茶臼と考えられるものは、11～13の3点であり、全て上臼である。使用される石材は、3点共に粗粒輝石安山岩が用いられている。上臼の形状は、穀臼と同様に上面周縁が一段高く、下面は凹上を呈し、挽目をもつものもある。中央孔は全て貫通し、挽手穴は側面にもつが、11は一对に有することから、他も同様の可能性がある。なお、挽手穴部分には、飾り模様が施されており、11は丸、12は四角となる。

凹石 (第825図 表123)

ここに示した凹石は、素材となる石の中央部に、径10cm前後の大きく深い凹孔をもつもので、縄文時代の凹石および多孔石とは異なると考えられるものである。出土した場所は、全て城郭の堀からであり、中世遺物である可能性が高い。使用されている石材は、牛伏砂岩ないし砂岩が用いられており、4は孔が貫通している。また、縄文時代の多孔石を素材としたものに、1がある。

板碑 (第826～837図 表124)

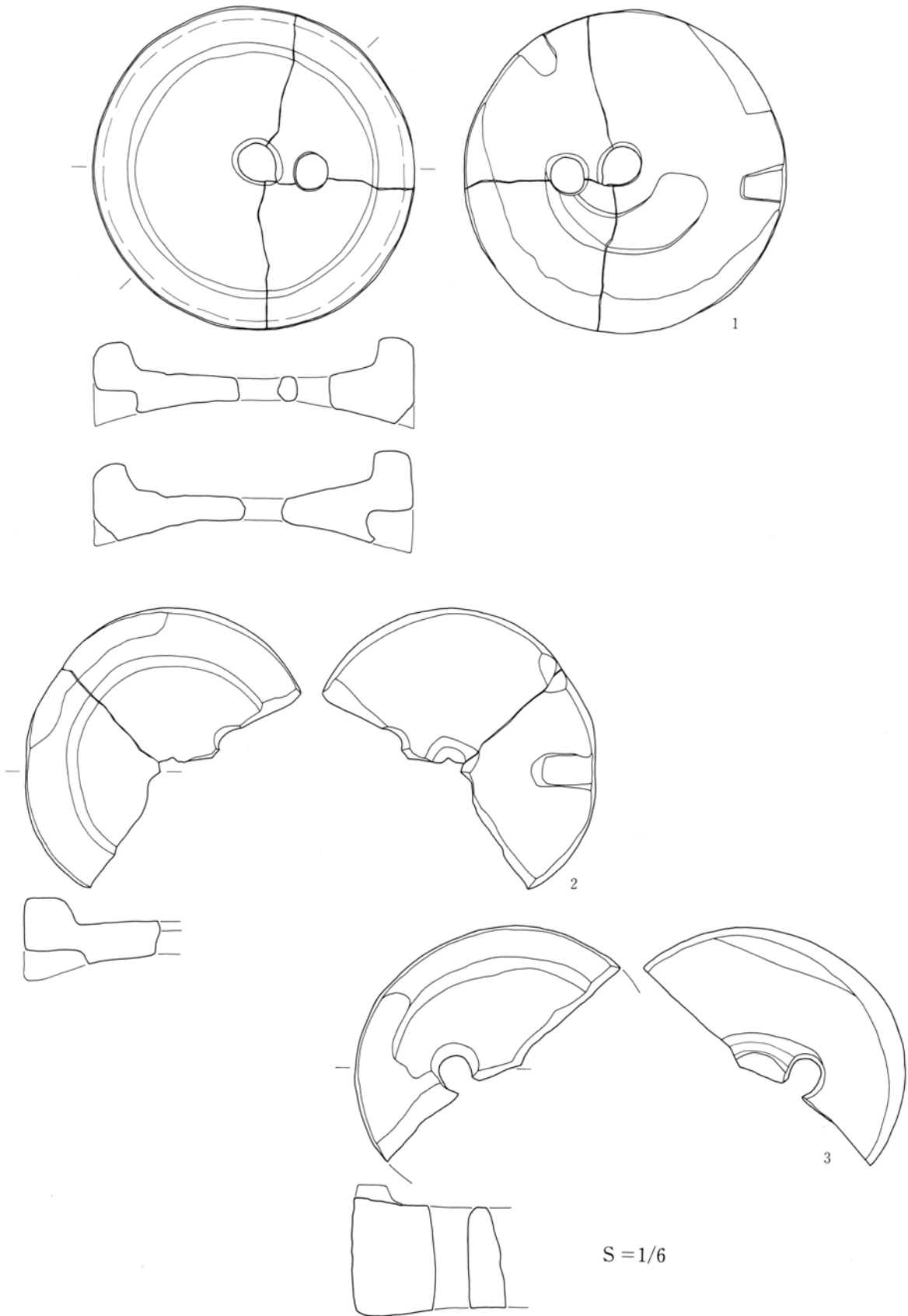
出土した板碑は、42基を数える。このうち完形となるものは少なく、3点を数えるのみである。使用される石材には、緑色片岩、黒色片岩、雲母石英片岩、蛇紋石片岩があるが、緑色片岩の使用頻度が最も高い。これらの板碑は、堀から出土したものが多く、土坑から出土したものもみられる。4は289・465号土坑、9は17号土坑、10は32号土坑、12・41は375号土坑、17は376号土坑、25は410・411号土坑、33は749号土坑、37は373号土坑、39は465号土坑から出土している。また、1号堀から出土した板碑の中には、土橋を含めた1B郭側に被覆された石積みに使用されたものもあると考えられる。

板碑の頭部形状は、多くのものが三角状を呈するが、4のように丸い形状となるものも存在する。碑面には、一尊ないし三尊の梵字をもつが、14のような梵字をもたないものも存在する。また、梵字の他に、枠線や記念名を刻むものもあり、「永徳四年」、「正和四年」の年号がみられる。さらに、30には光明真言が記されているものもある。

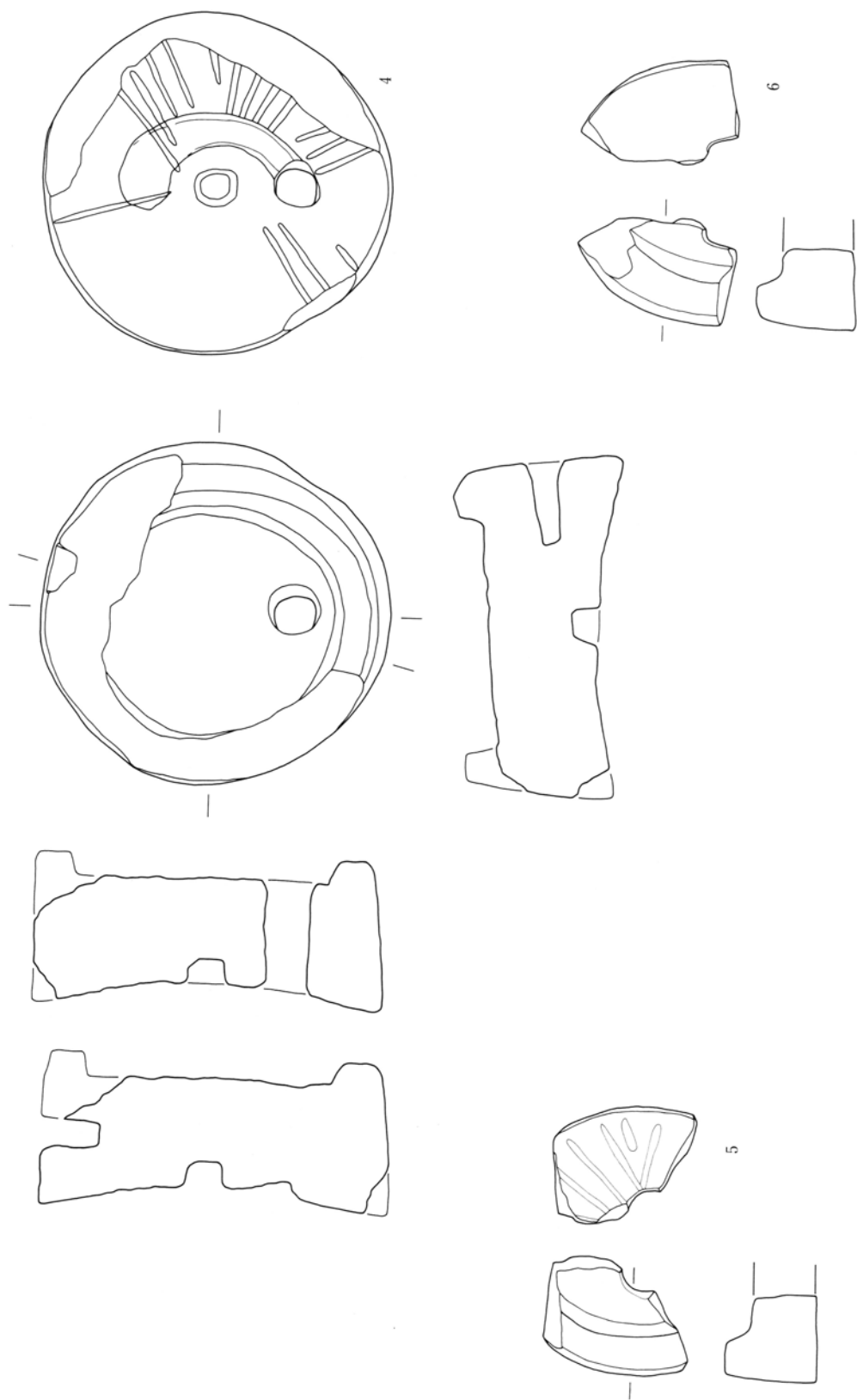
五輪塔 (第838～841図 表125)

出土した五輪塔には、宝珠(空・風輪)が1点、笠(火輪)が3点、塔身(水輪)が1点、基礎(地輪)が2点、さらには礎石と思われるもの2点が出土している。8に示したものは、板碑の破損品である可能性がある。使用される石材は、6の角閃石安山岩を除いて、他は全て牛伏砂岩が用いられている。これらは、先の板碑と同様に、1号堀から出土しているものが多く、5だけが426号土坑から出土している。やはり、板碑と同様に、石積みに使用された可能性をもつ。

火輪には、梵字が一面のみに刻まれ、この面が正面となる。水輪および地輪には、4面に梵字が刻まれている。

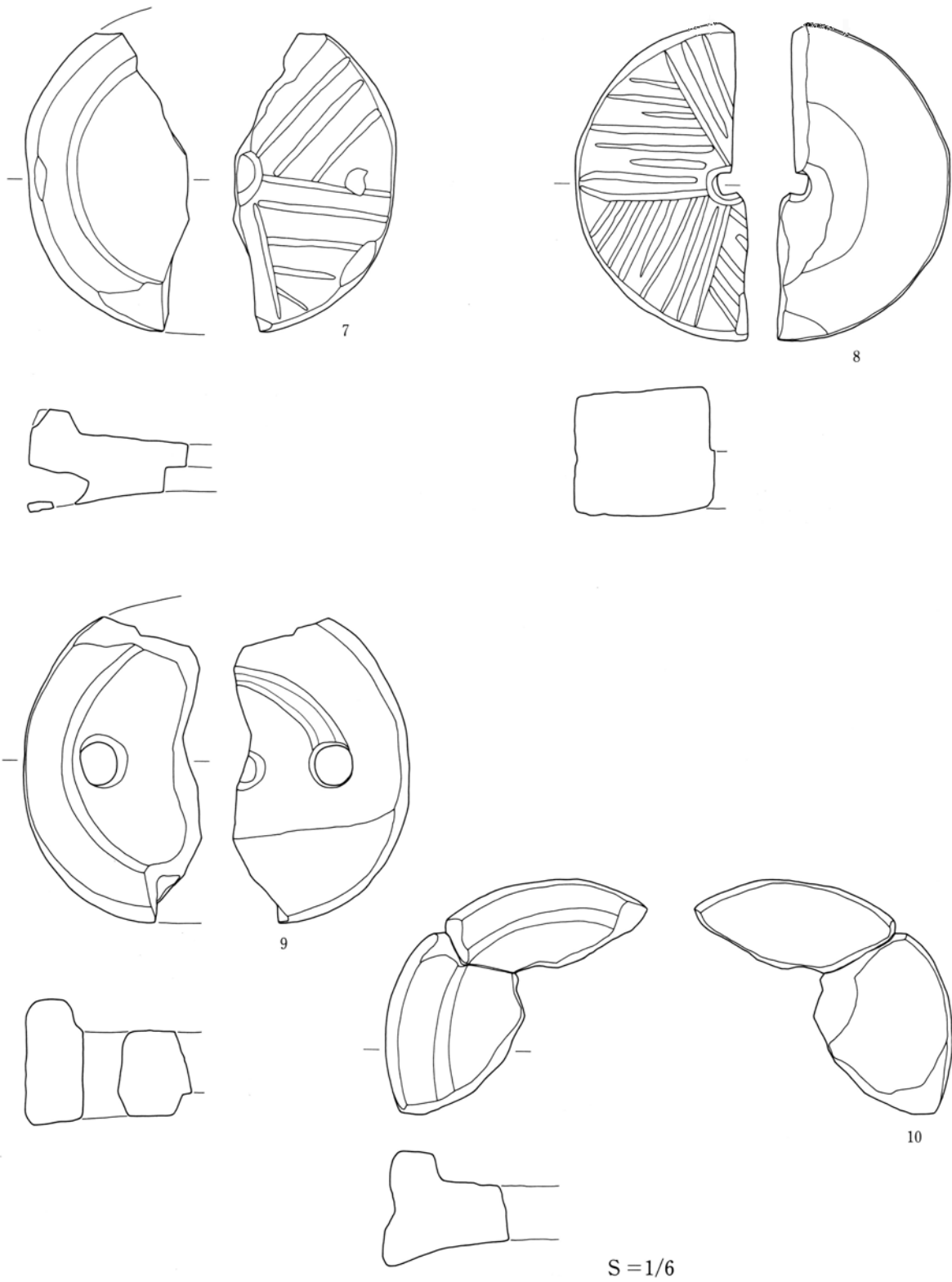


第820図 石臼 (1)

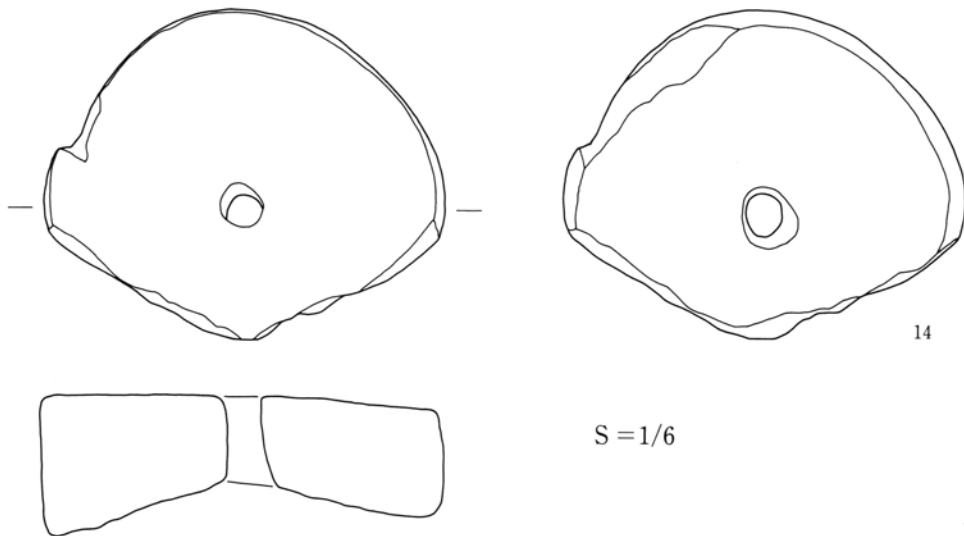
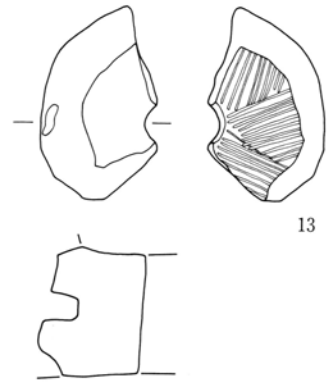
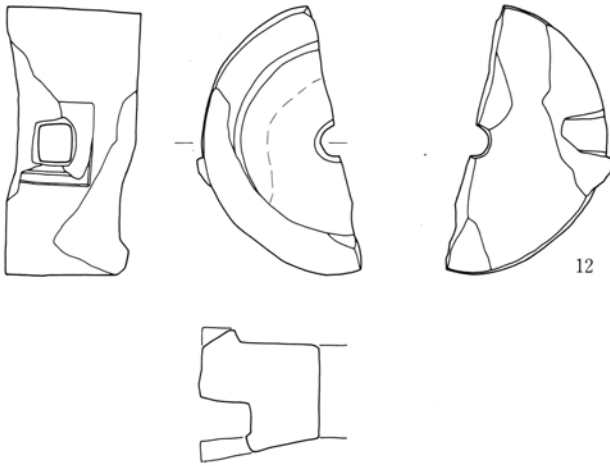
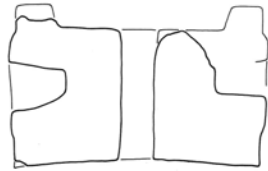
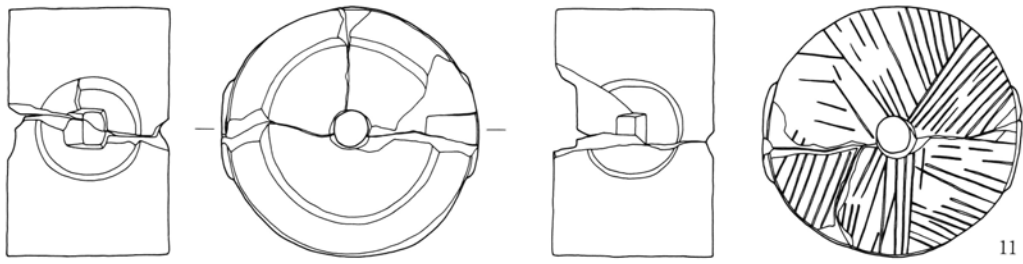


S = 1/6

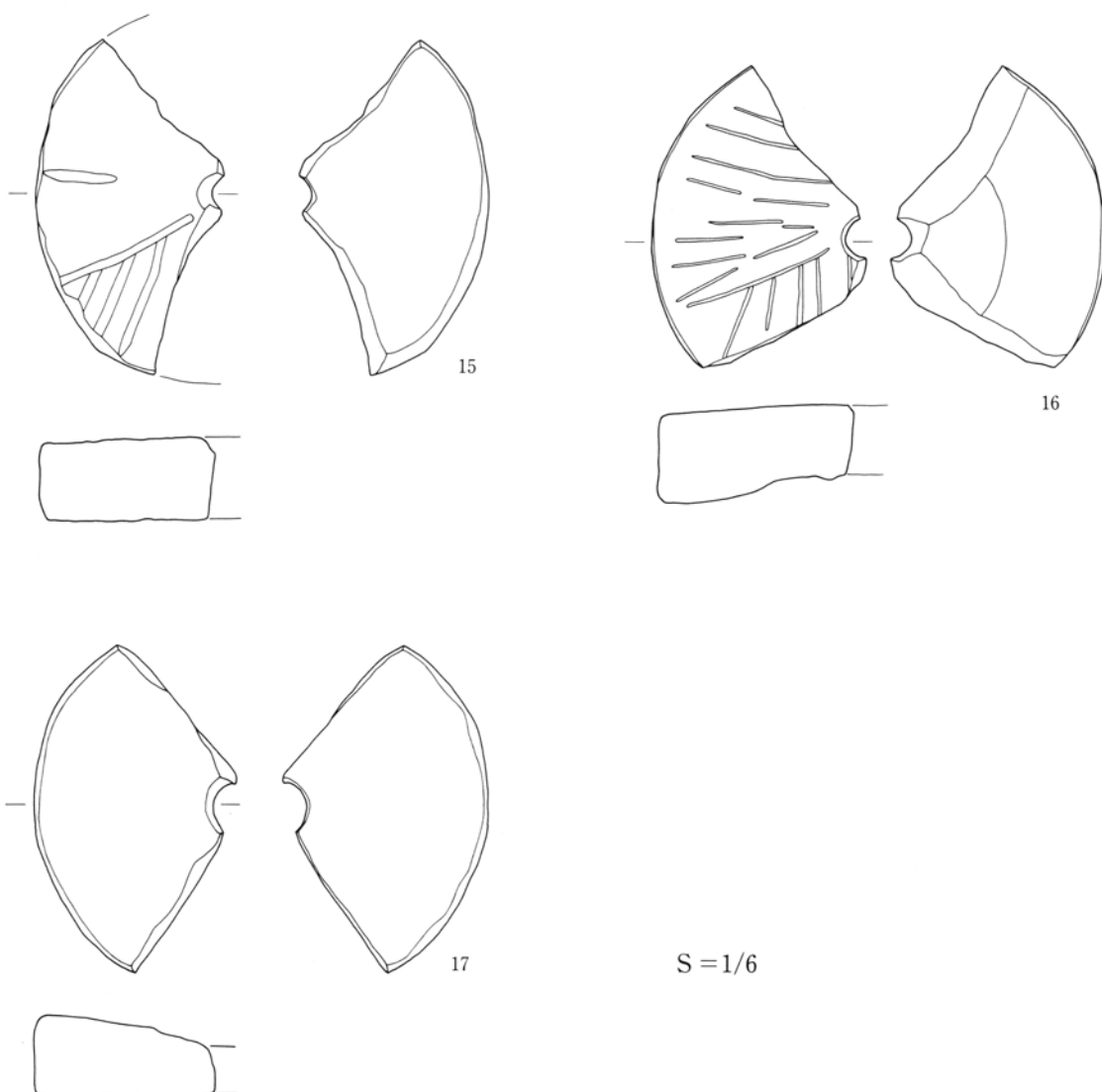
第82図 石臼 (2)



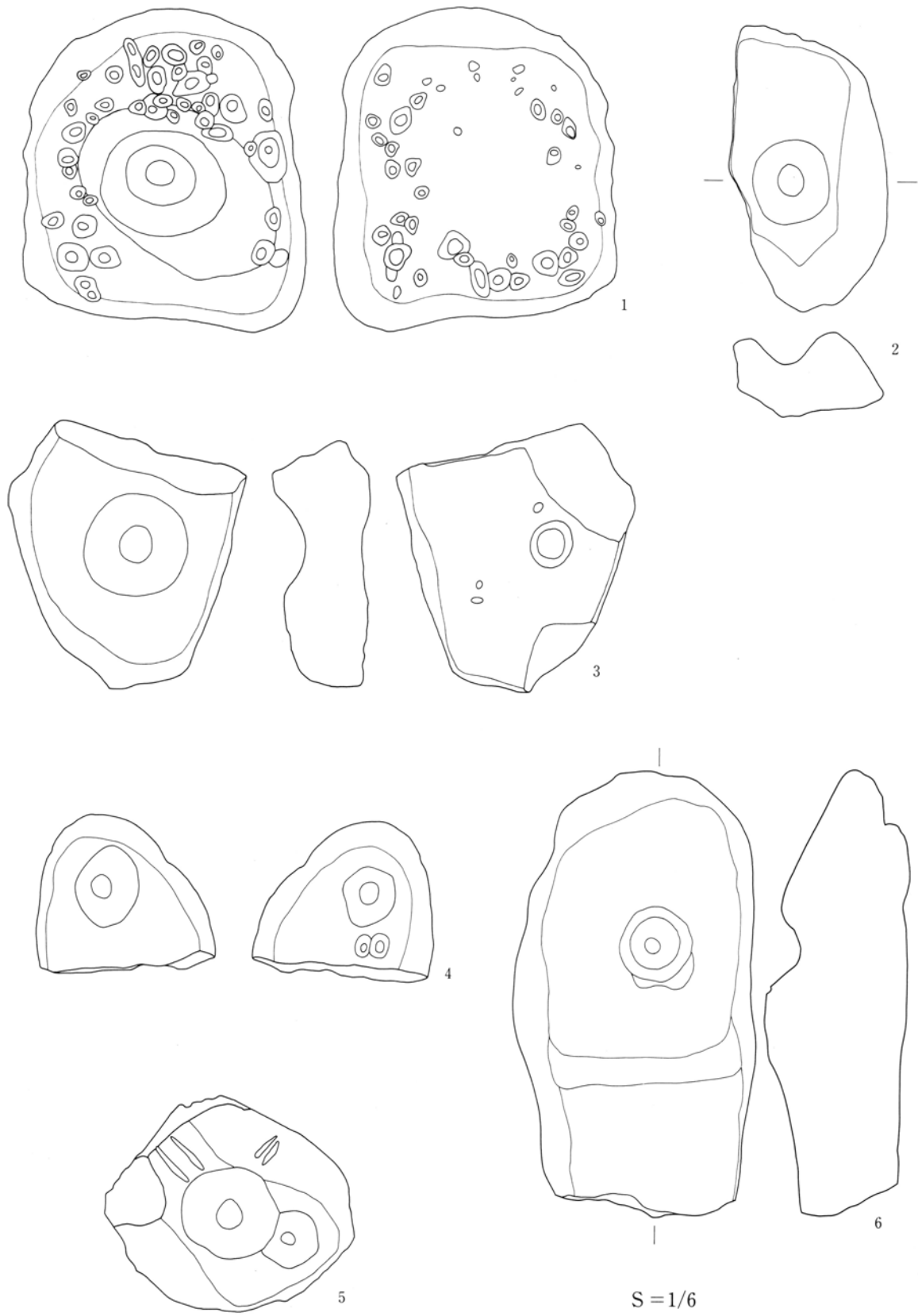
第822図 石臼 (3)



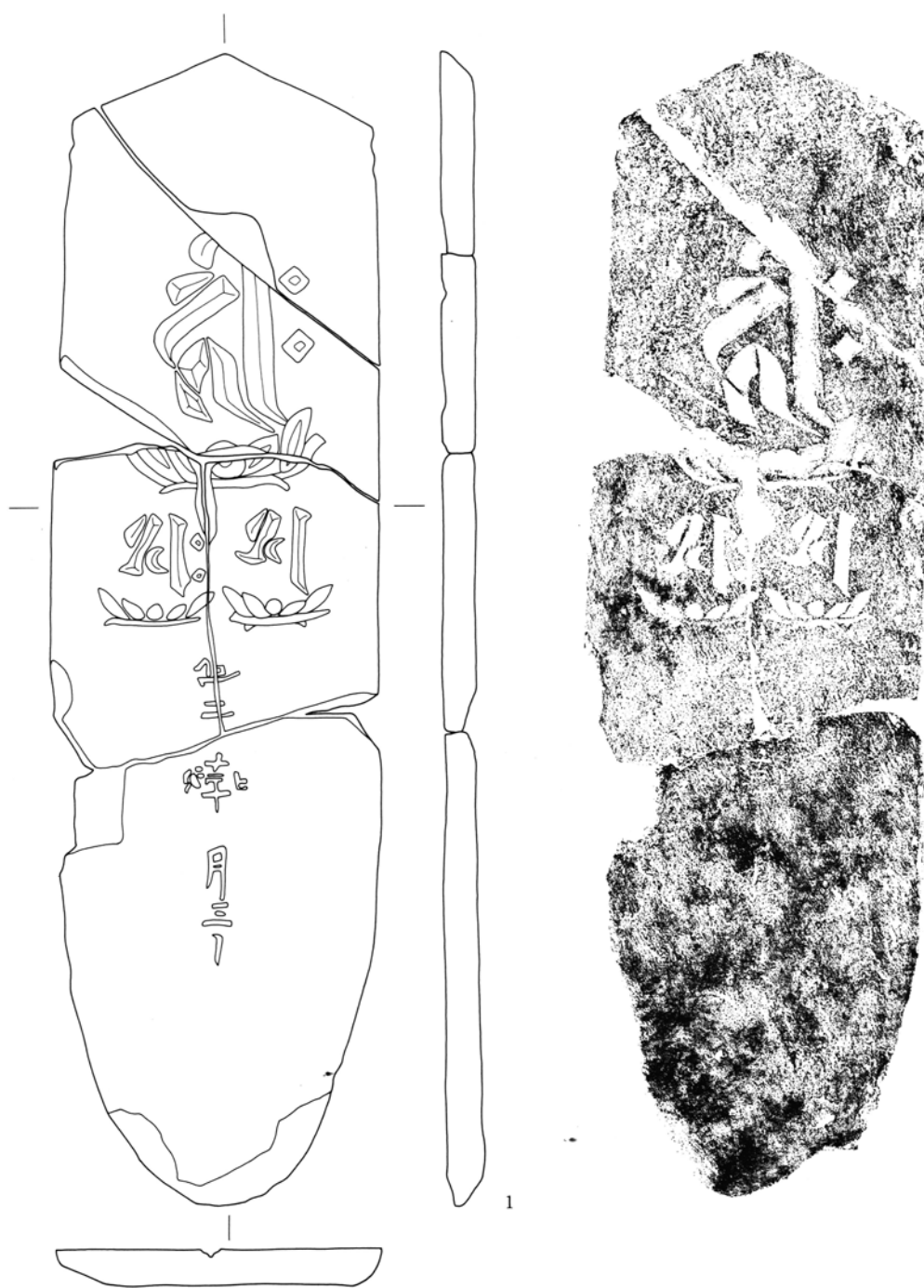
第823図 石臼(4)



第824図 石臼（5）

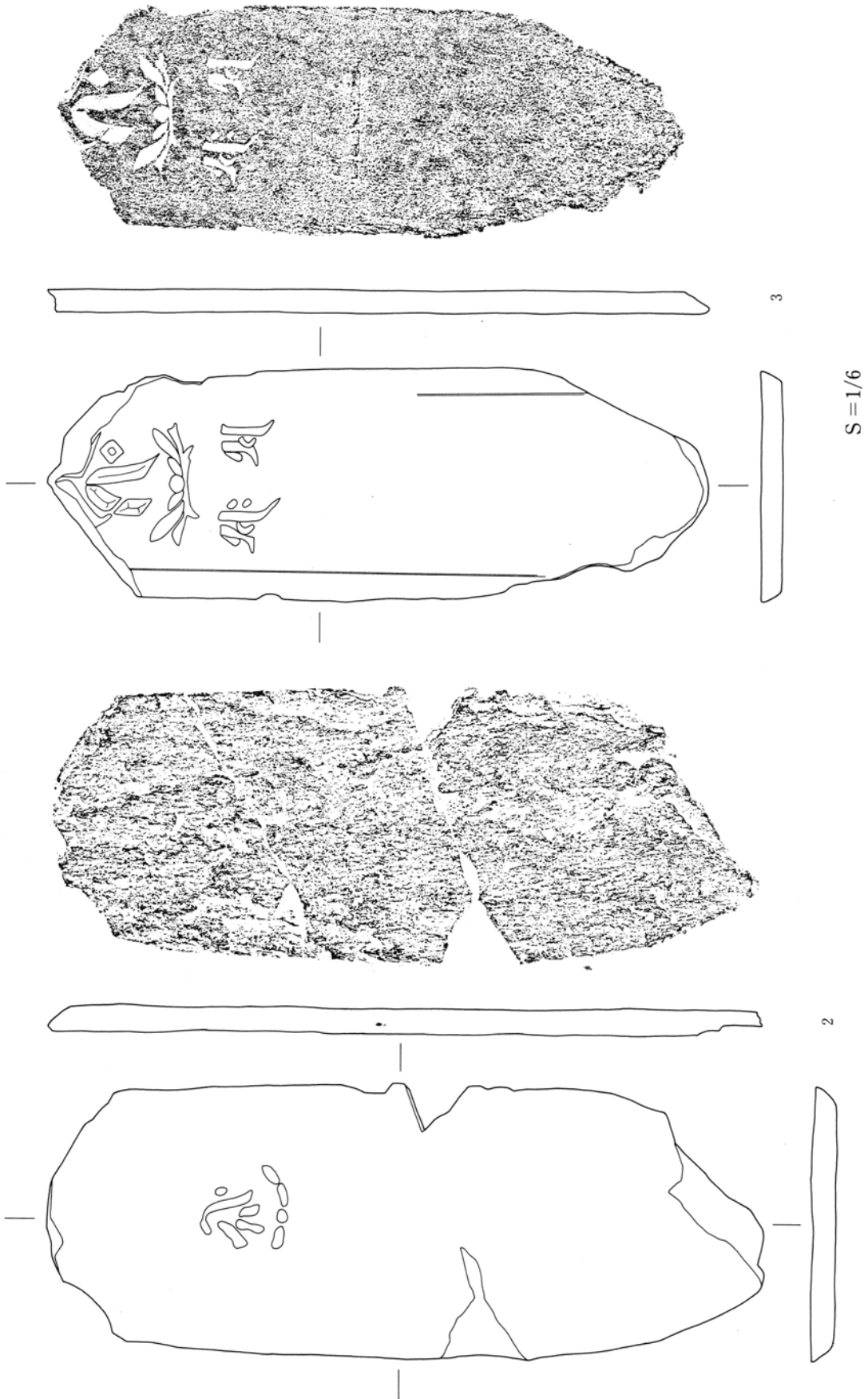


第825図 凹石

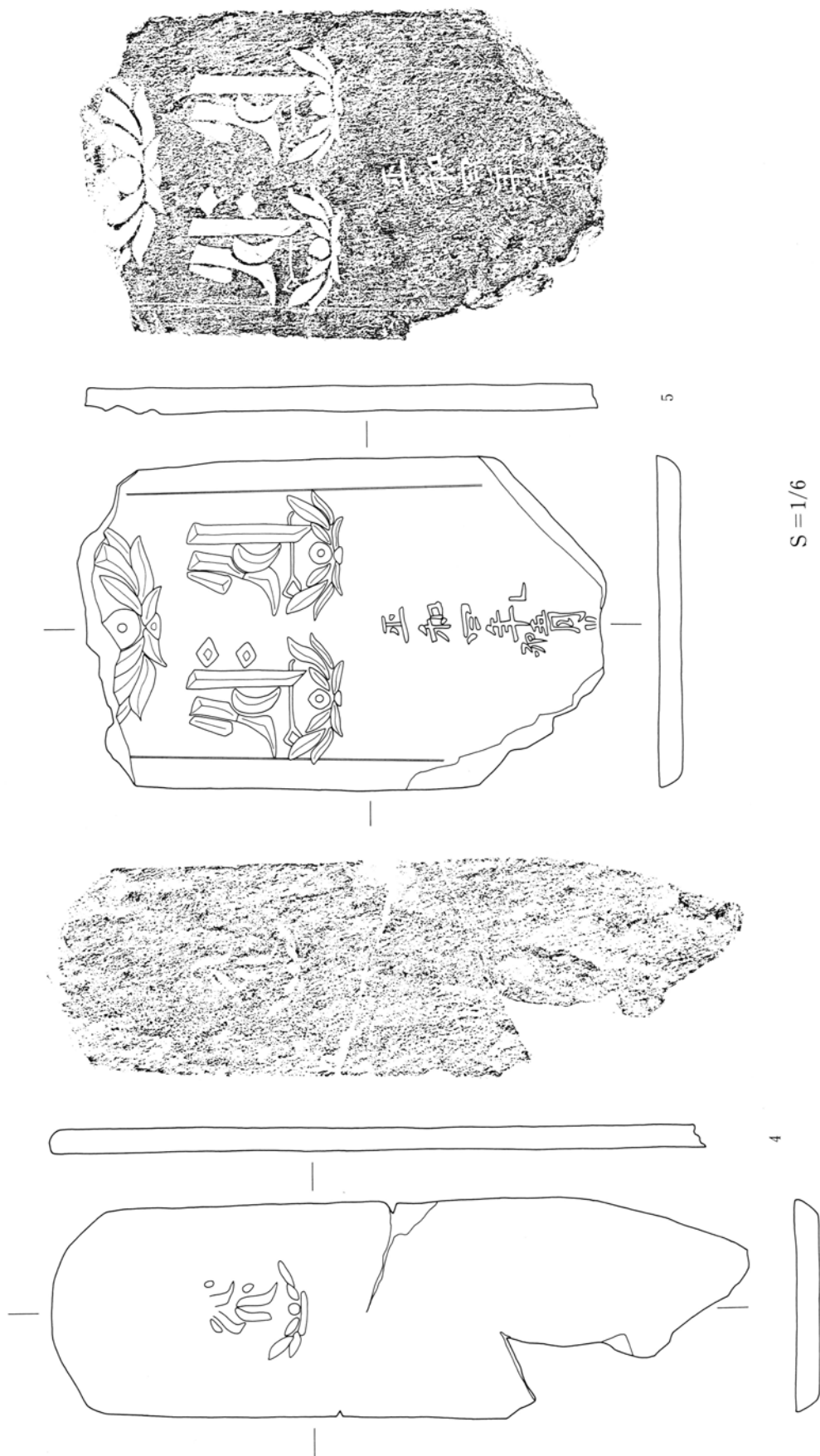


S=1/6

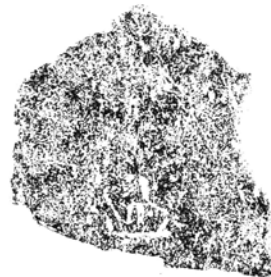
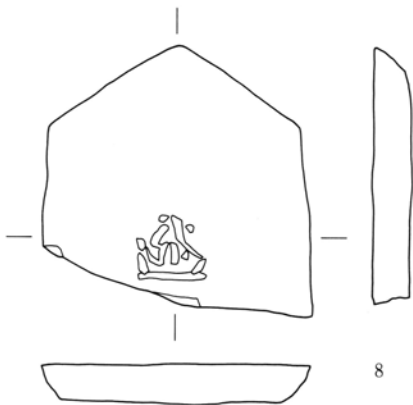
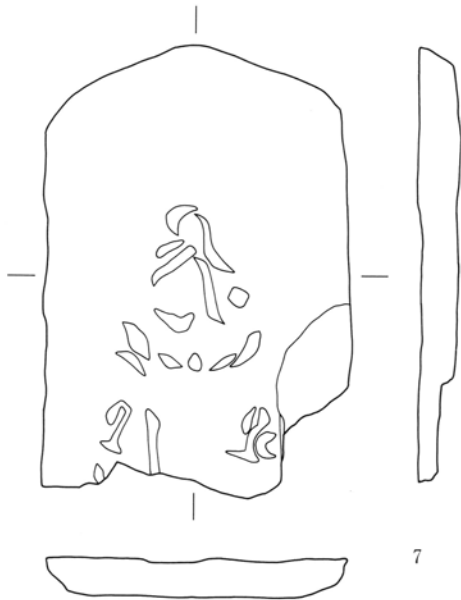
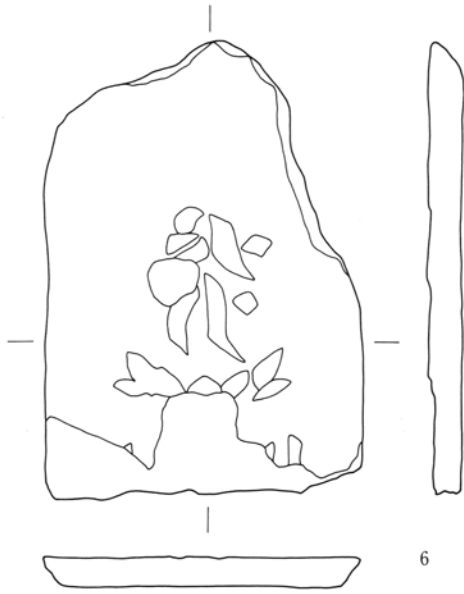
第826図 板碑（1）



第827図 板碑(2)

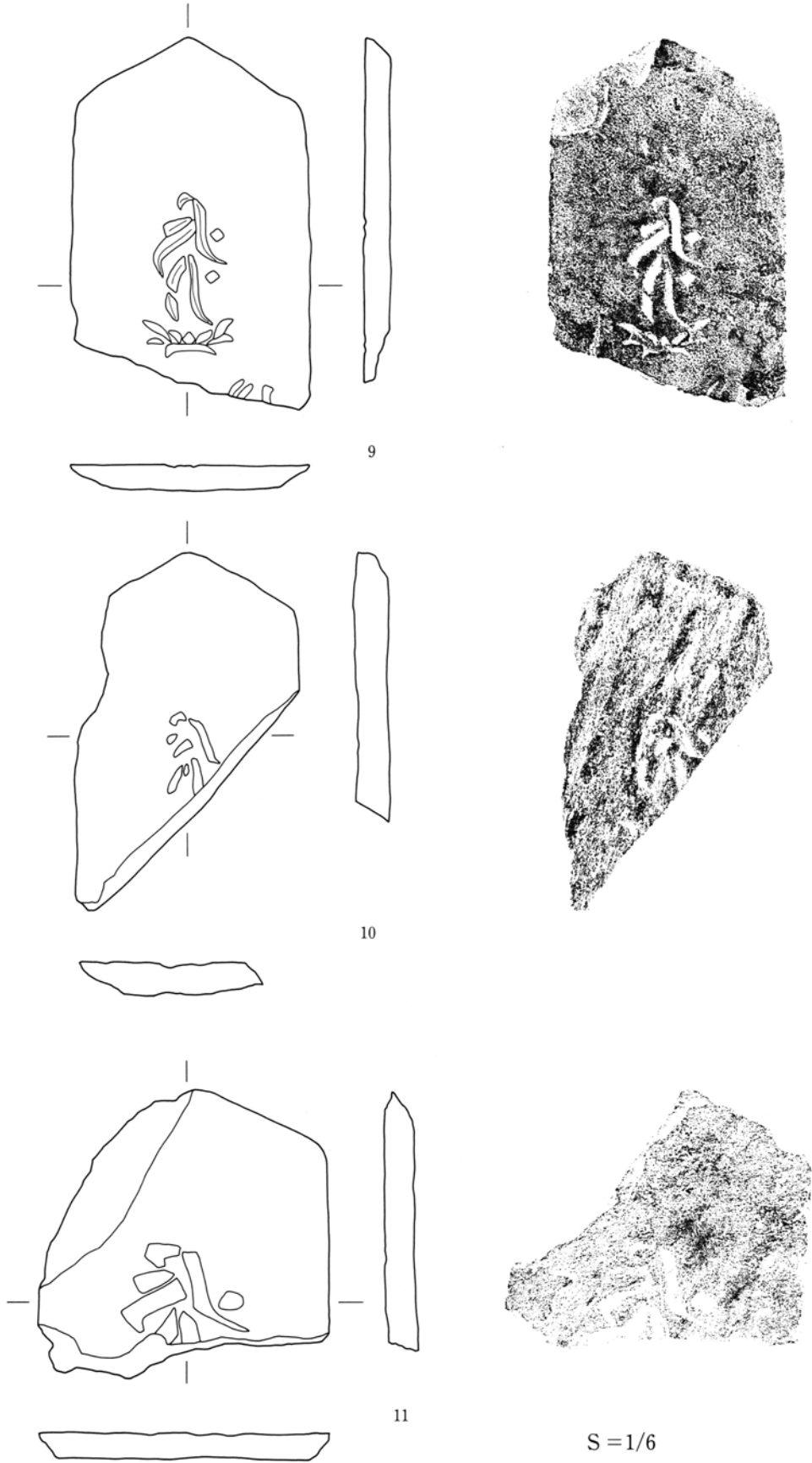


第828図 板碑(3)

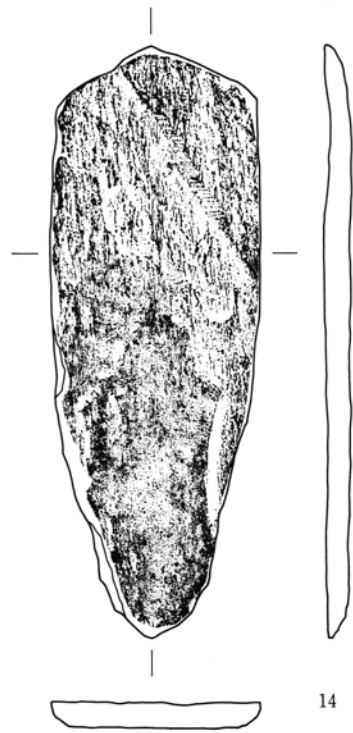
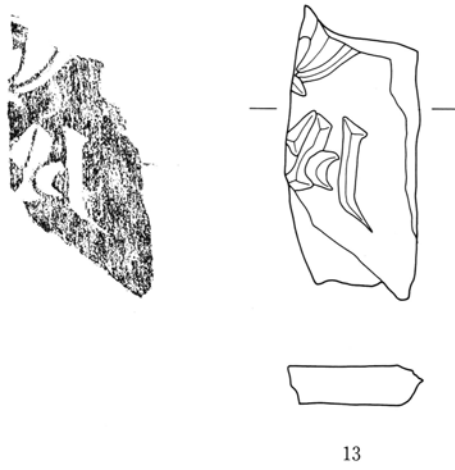
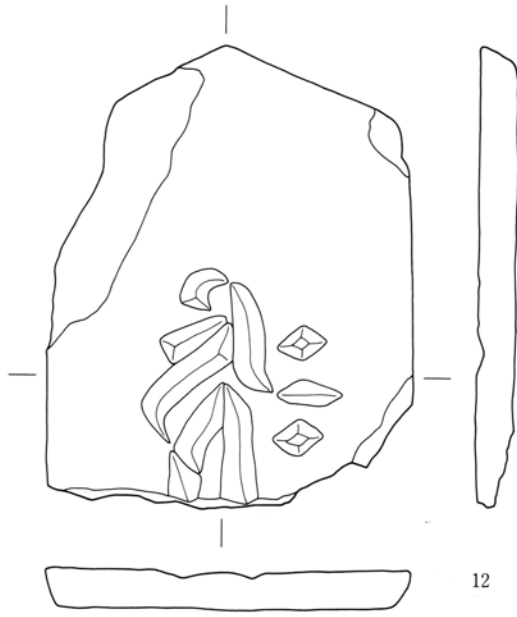


S = 1/6

第829図 板碑(4)

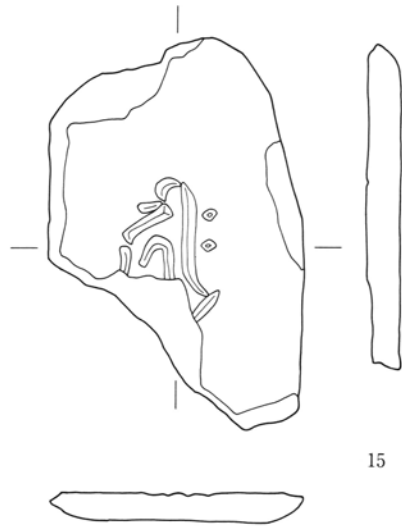


第830図 板碑(5)

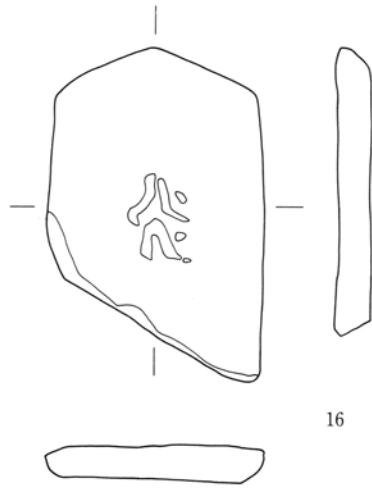


S=1/6

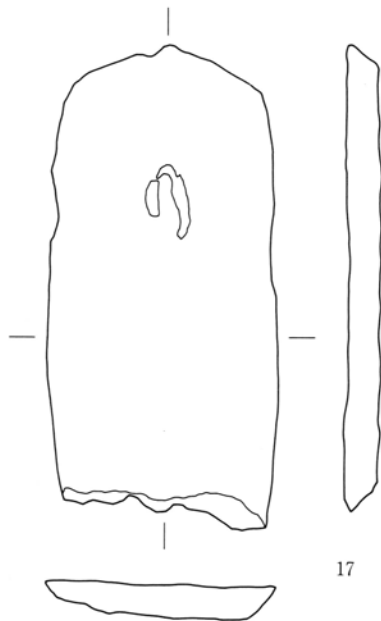
第831図 板碑(6)



15



16

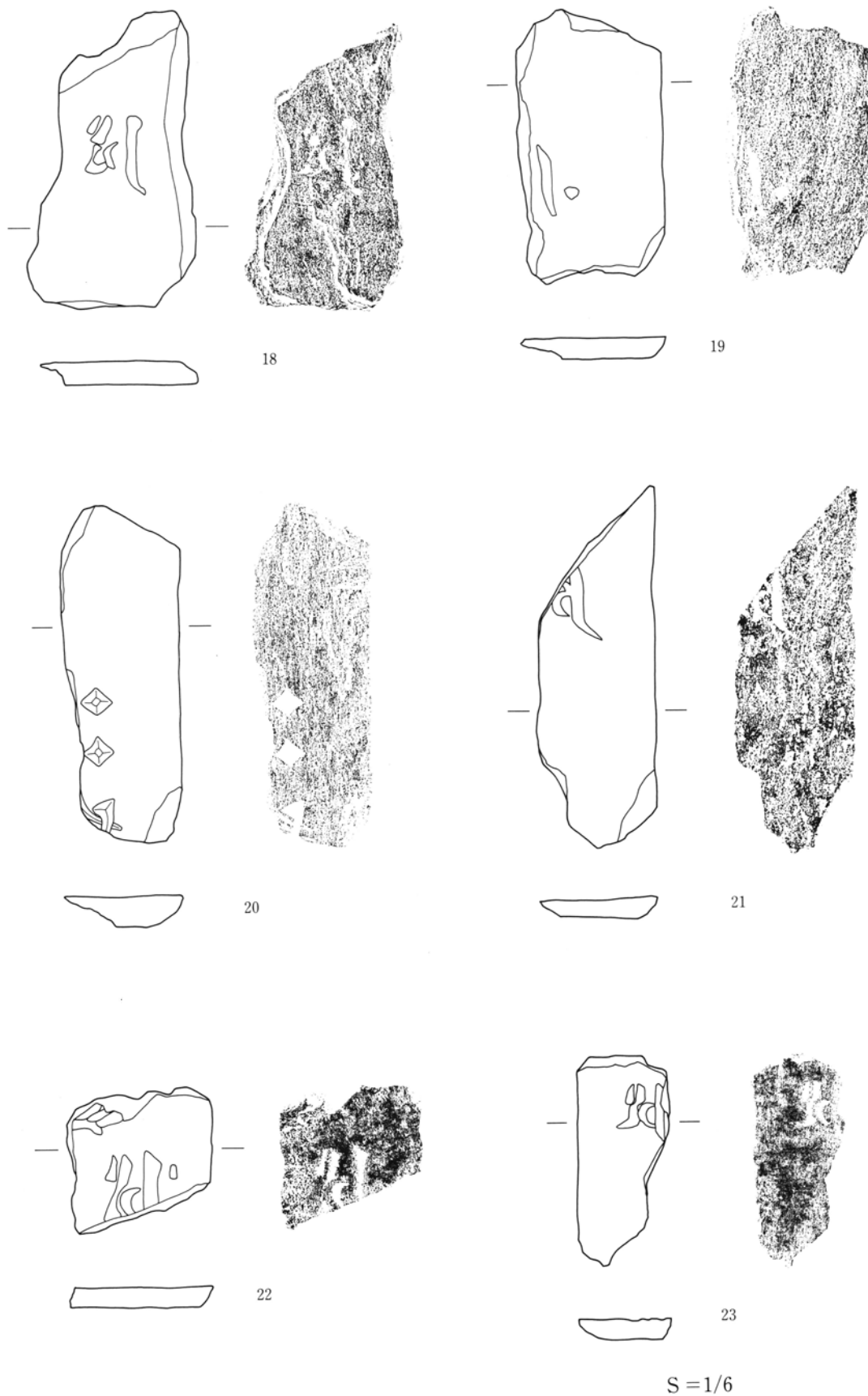


17



S=1/6

第832図 板碑(7)



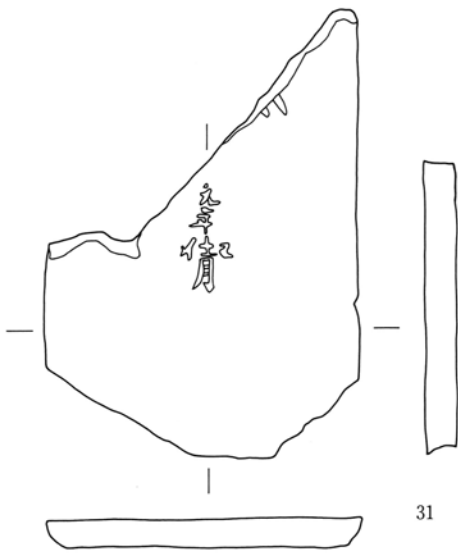
第833図 板碑（8）



第834図 板碑 (9)



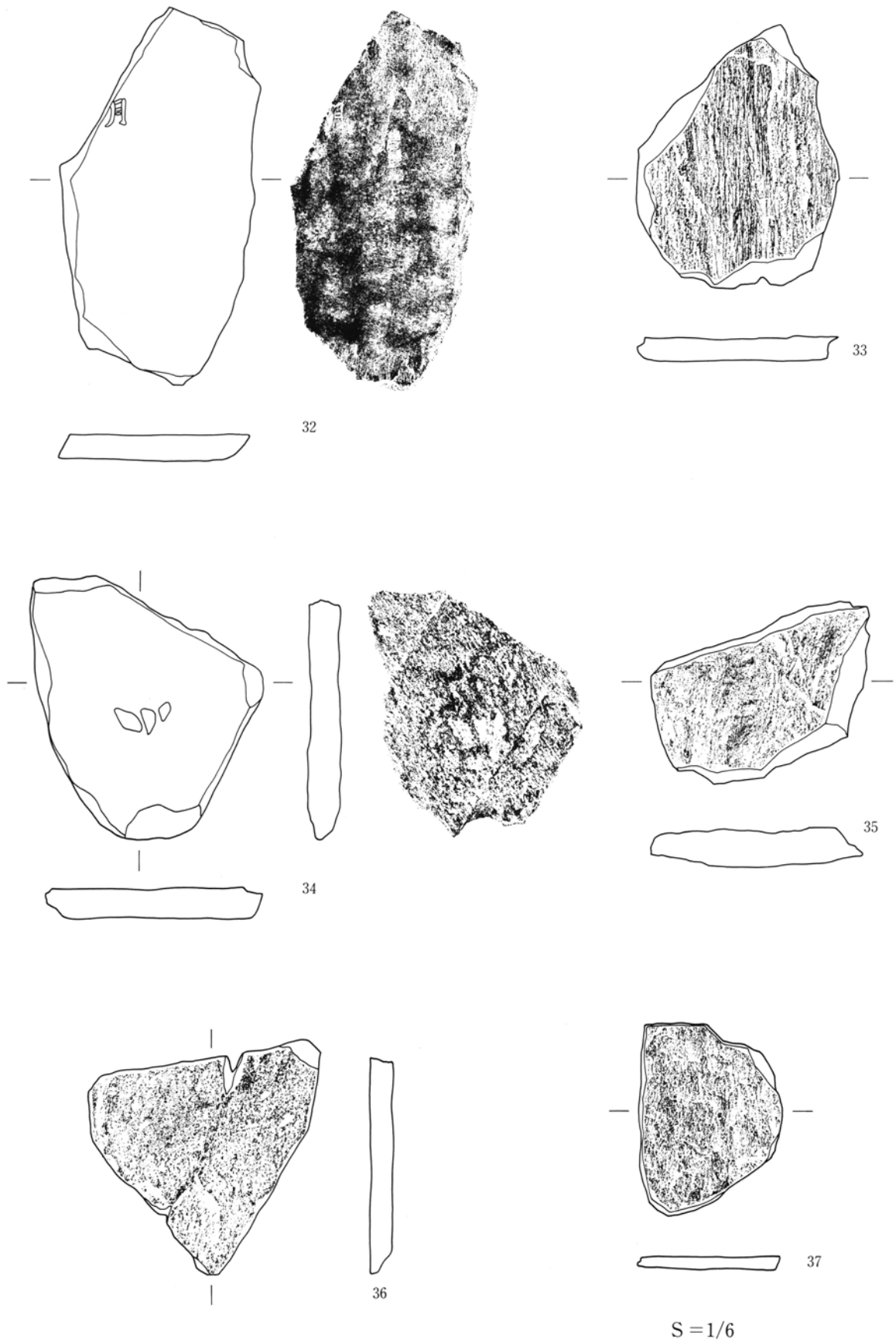
30



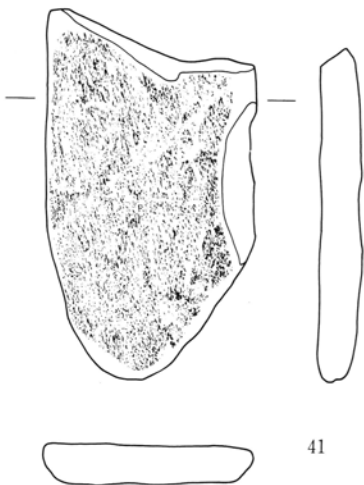
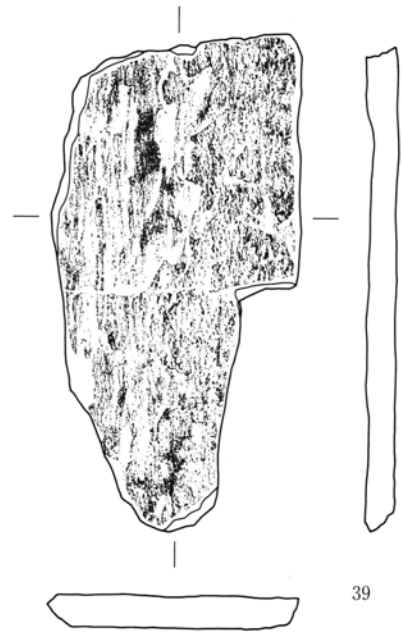
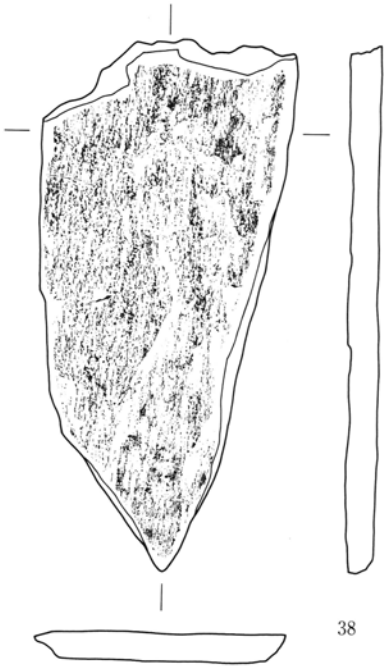
31

S = 1/6

第835図 板碑 (10)

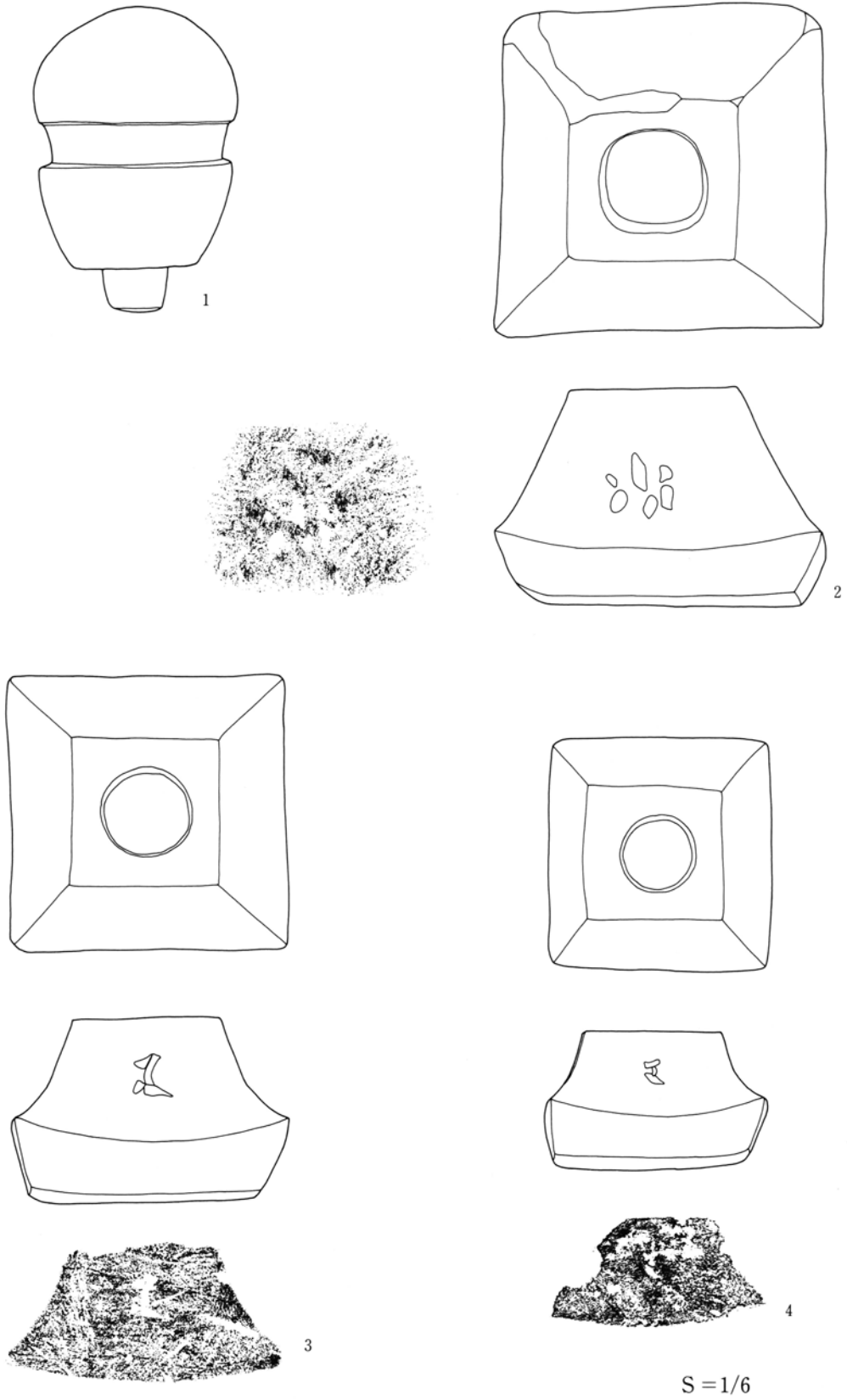


第836図 板碑 (11)

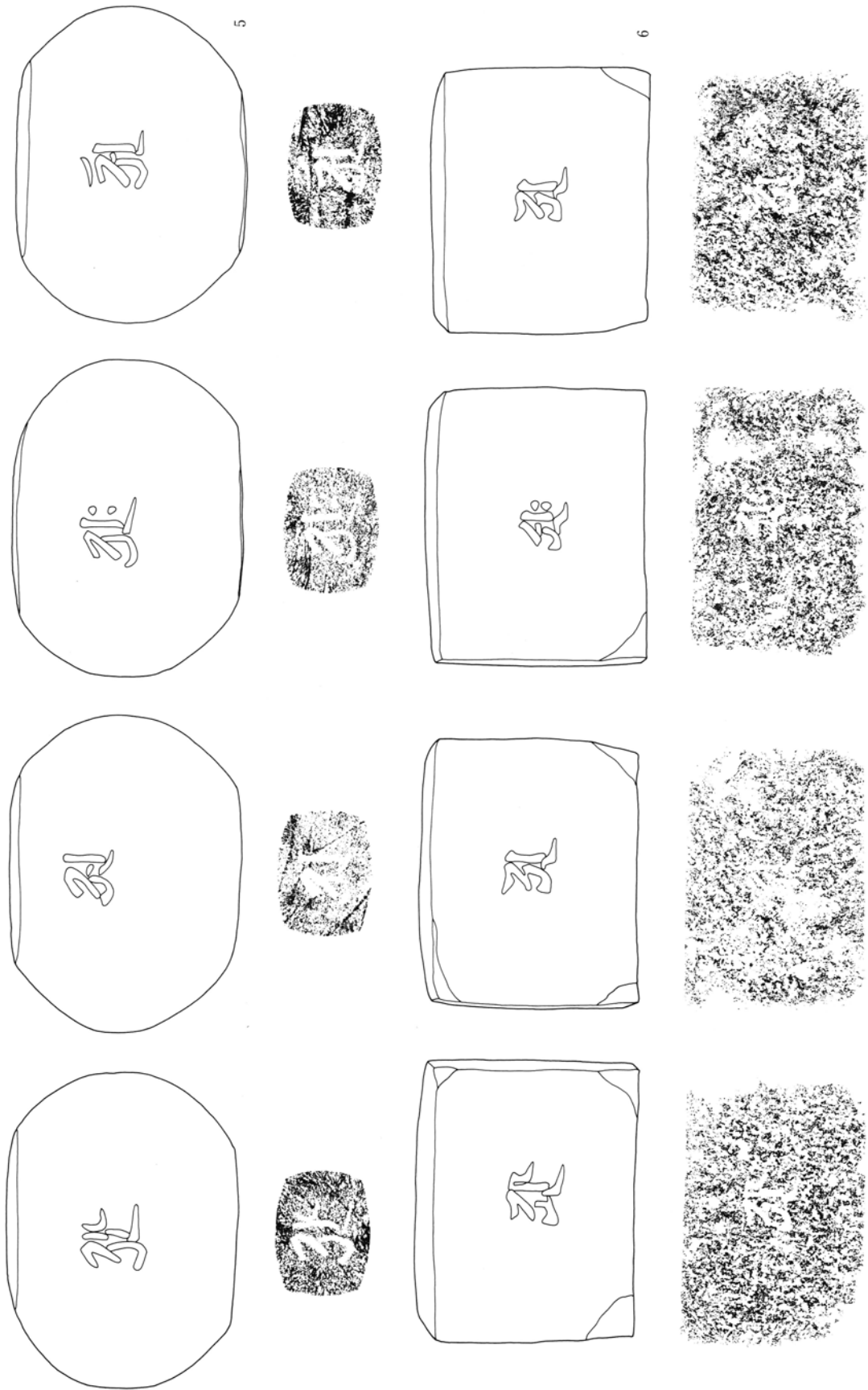


S = 1/6

第837図 板碑 (12)

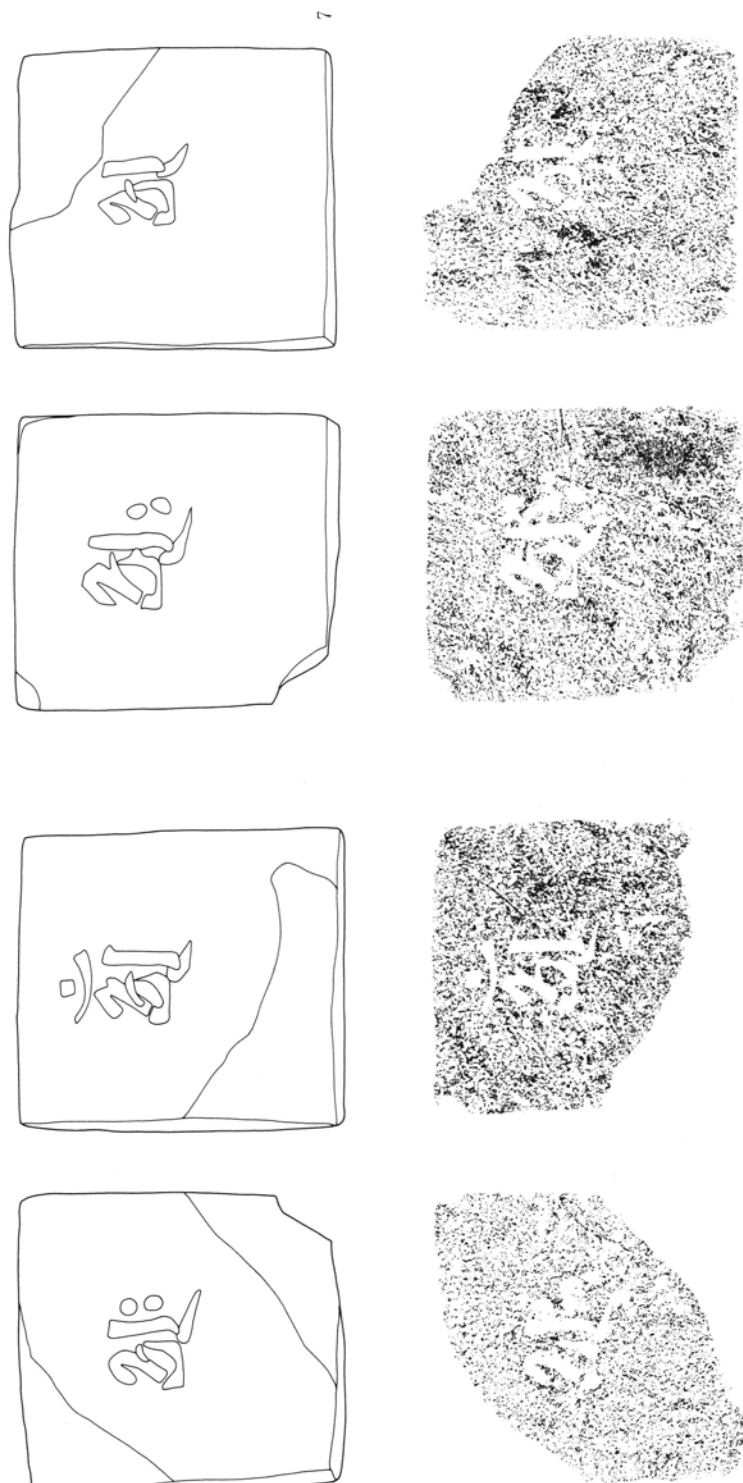


第838図 五輪塔 (1)



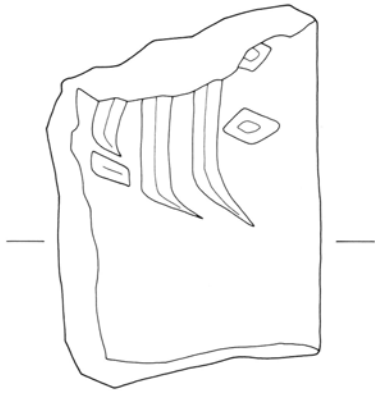
S = 1/6

第839図 五輪塔 (2)

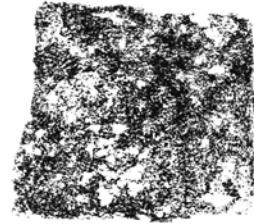
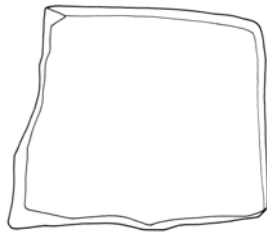
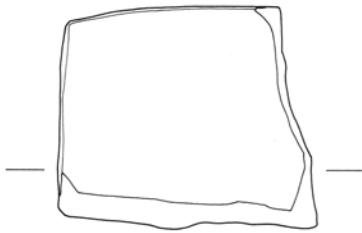
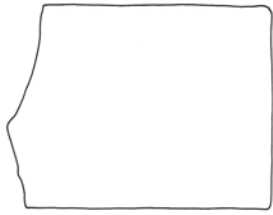


S = 1/6

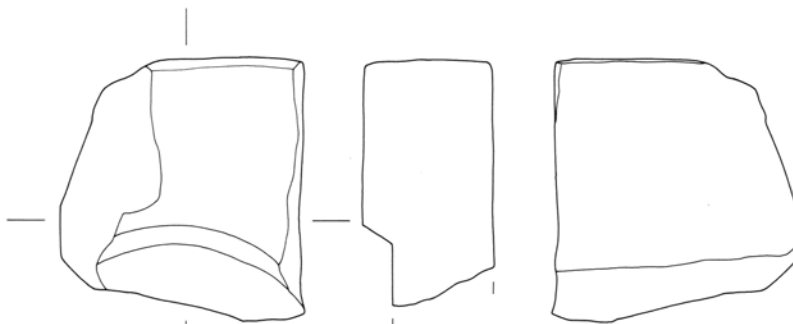
第840図 五輪塔 (3)



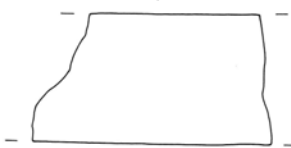
8



9



10



S=1/6

第841図 五輪塔(4)

第3章 検出された遺構と遺物

表122 石臼観察表

番号	出土位置	径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石 材	備 考
1	J区	32.7	7.7	8,000.0	粗輝安山岩	穀上臼。挽手穴は2穴。
2	1号堀	30.8	7.0	5,770.0	牛伏砂岩	穀上臼。挽手穴は1穴。
3	225号土坑	30.3	12.0	6,900.0	牛伏砂岩	穀上臼。
4	J区	32.0	16.0	17,500.0	牛伏砂岩	穀上臼。挽手穴は1穴。挽目有り。
5	1号堀	17.0	8.7	1,250.0	牛伏砂岩	穀上臼。挽目有り。
6	1号堀	—	9.2	1,400.0	牛伏砂岩	穀上臼。
7	2号堀	31.0	9.8	4,600.0	牛伏砂岩	穀上臼。挽手穴は1穴。挽目有り。
8	4号堀	30.5	12.3	8,700.0	牛伏砂岩	穀下臼。挽目有り。
9	3号堀	34.0	11.0	6,200.0	牛伏砂岩	穀上臼。
10	3号堀	—	11.0	4,350.0	牛伏砂岩	穀上臼。
11	3号堀	20.0	11.8	6,750.0	粗輝安山岩	茶上臼。挽手穴飾模様は丸。挽目有り。
12	7号堀	21.2	10.0	2,200.0	粗輝安山岩	茶上臼。挽手穴飾模様は四角。
13	2号堀	18.0	10.2	1,400.0	粗輝安山岩	茶上臼。挽目有り。
14	3号堀	32.5	11.4	10,200.0	牛伏砂岩	穀下臼。
15	281号土坑	30.0	6.5	3,000.0	牛伏砂岩	穀下臼。挽目有り。
16	3号堀	34.0	7.5	2,800.0	粗輝安山岩	穀下臼。挽目有り。
17	2号堀	33.0	6.3	3,500.0	牛伏砂岩	穀下臼。

表123 凹石計測表

No	出土位置	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重 さ (g)
1	2号堀	牛伏砂岩	32.0	28.1		10,500.0
2	1号堀	牛伏砂岩	28.9	15.9	8.4	3,160.0
3	7号堀	牛伏砂岩	17.8	15.6	6.6	1,720.0

No	出土位置	石 材	長さ (cm)	巾 (cm)	厚さ (cm)	重 さ (g)
4	3号堀	牛伏砂岩	15.3	18.2		2,000.0
5	3号堀	砂 岩	21.3	25.2		4,350.0
6	6号堀	牛伏砂岩	44.5	24.3	14.5	16,800.0

表124 板碑観察表(・出土位置で ○○土としたものは 土坑のこと)

番号	出土位置	部 位	長さ(cm)	巾 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
1	1号堀	ほぼ完	98.0	28.0	3.3	17,100	緑 色 片 岩	三尊・三蓮座・記念名あり(年号不明)
2	3号堀	基部欠	71.3	27.0	2.7	11,800	雲母石英片岩	一尊・一蓮座
3	2号堀	頭部欠	66.0	23.0	2.4	7,100	緑 色 片 岩	三尊・一蓮座・枠線あり
4	289・465土	ほぼ完	66.6	21.0	2.4	6,500	緑 色 片 岩	一尊・一蓮座
5	1号堀	体 部	50.8	31.7	2.6	8,400	緑 色 片 岩	三尊・三蓮座・記念名(正和四年□卯五月)・枠線
6	1号古墳	頭 部	36.3	25.0	2.8	4,400	緑 色 片 岩	三尊・一蓮座
7	1号堀	頭 部	35.5	24.3	3.2	5,000	緑 色 片 岩	三尊・三蓮座
8	1号堀	頭 部	21.2	21.0	3.1	2,040	雲母石英片岩	一尊・一蓮座
9	17号土坑	頭 部	34.5	22.3	2.5	3,060	緑 色 片 岩	三尊・蓮座
10	32号土坑	頭 部	33.0	20.0	3.4	2,760	緑 色 片 岩	一尊・蓮座
11	B区	頭 部	26.7	27.0	3.0	2,850	緑 色 片 岩	一尊
12	375土坑	頭 部	36.3	28.9	3.0	5,710	緑 色 片 岩	三尊・一蓮座
13	1号堀	体 部	23.0	10.5	3.1	1,060	緑 色 片 岩	12と同一個体
14	1号堀	完 形	46.5	16.5	2.0	2,820	緑 色 片 岩	
15	2号堀	頭 部	30.6	20.2	2.6	3,010	緑 色 片 岩	一尊
16	2号堀	頭 部	26.0	17.3	2.7	2,060	緑 色 片 岩	一尊
17	376号土坑	上半部	38.0	18.3	2.7	2,600	雲母石英片岩	一尊
18	1号堀	体 部	28.5	16.5	2.2	2,100	黒 色 片 岩	三尊
19	A区	体 部	26.5	14.2	2.1	1,560	緑 色 片 岩	一尊
20	1号堀	体 部	32.5	11.5	3.0	1,640	緑 色 片 岩	一尊
21	2号堀	体 部	35.0	11.6	2.3	1,410	緑 色 片 岩	三尊
22	3号堀	体 部	13.4	14.0	2.0	650	緑 色 片 岩	三尊
23	C区	体 部	20.3	9.0	2.0	700	緑 色 片 岩	三尊
24	3号堀	体 部	25.3	15.2	2.8	1,800	緑 色 片 岩	三尊・三蓮座
25	410・411土	体 部	22.8	12.5	2.4	1,350	緑 色 片 岩	三尊
26	1号堀	体 部	33.3	21.7	2.7	2,350	緑 色 片 岩	三尊・三蓮座
27	3号堀	体 部	32.0	15.0	3.0	2,460	緑 色 片 岩	枠線あり
28	1号堀	体 部	42.0	18.5	2.9	3,800	緑 色 片 岩	三尊・一蓮座
29	3号堀	体 部	19.5	15.6	2.7	900	緑 色 片 岩	枠線あり

第3章 検出された遺構と遺物

番号	出土位置	部位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
30	1号堀	体 部	48.5	38.0	3.5	14,550	緑 色 片 岩	記念名(永徳四年甲子二月・金剛佛子・廣精)・光明真言・枠線あり
31	2号堀	体 部	35.5	24.7	2.5	2,720	緑 色 片 岩	三尊・記念名(年号不明元年十月 <small>圓</small>)
32	2号堀	下半部	38.8	19.5	2.6	3,190	緑 色 片 岩	記念名(月のみ)
33	749号土坑	体 部	27.5	20.5	2.5	2,290	雲母石英片岩	
34	1号堀	基 部	27.2	23.5	3.1	3,100	雲母石英片岩	
35	1号堀	体 部	18.7	22.2	3.9	2,050	黒 色 片 岩	
36	1号堀	基 部	24.3	23.5	2.4	1,360	緑 色 片 岩	
37	373号土坑	体 部	19.5	24.5	1.5	800	黒 色 片 岩	
38	1号堀	下半部	41.7	20.3	2.5	2,790	雲母石英片岩	
39	465号土坑	下半部	39.0	19.7	2.6	2,310	黒 色 片 岩	
40	1号堀	下半部	30.0	24.0	2.6	2,450	緑 色 片 岩	
41	375号土坑	下半部	29.0	16.5	3.4	2,200	蛇紋石片岩	
42	1号堀	下半部	52.3	25.5	3.6	7,740	緑 色 片 岩	

表125 五輪塔観察表

番号	出土位置	部位	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
1	1号堀	宝 珠	28.5		19.3	10,500	牛 伏 砂 岩	空輪・請花風輪
2	1号堀	笠	20.2	31.0		21,950	牛 伏 砂 岩	火輪・種字一面
3	1号堀	笠	17.0	26.0		12,800	牛 伏 砂 岩	火輪・種字一面
4	3号堀	笠	13.0	21.0		7,350	牛 伏 砂 岩	火輪・種字一面
5	426号土坑	塔 身	23.0	31.2	31.0	25,300	牛 伏 砂 岩	水輪・種字四面
6	B区	基 礎	21.5	26.4	27.5	27,400	角閃石安山岩	地輪・種字四面
7	2号堀	基 礎	26.0	24.0	23.2	25,400	牛 伏 砂 岩	地輪・種字四面
8	1号堀		30.5	22.0	16.0	11,000	牛 伏 砂 岩	板碑?
9	1号堀	礎 石	17.5	20.7	11.6	5,300	牛 伏 砂 岩	
10	1号堀	礎 石	20.7	19.2	10.3	6,050	牛 伏 砂 岩	

7. 神保城（植松城）について

本城郭は、城郭研究の第一人者であった(故)山崎一氏によって「群馬県古城址の研究一下巻一」(1972)で「植松城」として紹介され、昭和56年(1981)に城郭内に予定された送電線鉄塔建設に伴い吉井町教育委員会が調査を行っている。調査が行われた鉄塔の位置は、上信越自動車道の路線の南隣で、今回の調査で検出された主郭であるI B郭内に位置することがわかった。

では、鉄塔調査ではどのような遺構が検出できたのか、1986年に刊行された調査報告書には、次のことが記載されている。(第842図参照)

1. 調査は鉄塔の建設される一辺16mの範囲である。表土下には黒褐色土があり、さらに黒色の比較的粘りの強い土層があって、ロームに至る。東半分には、かなり広い範囲に白色粘土とロームブロックとの混土層が認められた。
2. 検出された溝は、上幅2.4~3.2m、深さ1.5~1.8mを測り、断面形がV字状を呈する薬研堀である。調査部分のほぼ中央に上幅1.4mの土橋を削り残している。この土橋近くには、河原石が多量に埋没している。また、土橋のやや北側には、石組による橋状の構造が認められた。
3. 検出された井戸は、上端直径1.4mの井戸である。地山井筒だが、覆土中にはかなり多くの河原石が認められるため、井桁には石組が伴ったかもしれない。2.5m程まで掘り進めたが、底面は確認できなかった。
4. 検出された土坑は2基である。1号土坑は、長辺3m、短辺1.4mほどの歪んだ長方形で、東南部隅だけがしっかりとした立ち上がりをもつ。2号土坑は、1.6m、1.2mの方形で、深さは20cmを測る。出土遺物はない。
5. 検出された柱穴は、33基である。溝にかかる土橋の周辺にやや集中し、また傾斜の変化に添って北東部に散在する。出土遺物はない。

以上の調査結果を下に、(故)山崎一氏は同書の中で、次のような考察を行っている。

「東北から西北に弧を画いて下る幅25mないし50mの窪地の西南端から崖端までの間に長さ170m、幅10m、深さ2.5ないし5の空堀を掘って曲玉状の城域を劃す。南北200m、東西の最大幅125mの崖端城である。南の崖端に東北—西南75m、幅60mの外郭もあったと思われる。北部は段下がり地形に四段の腰郭が設けられ、最下段のものは、北の自然壕内側に添って弧状に240mも続き、西南端は掘された空堀の北端に達している。その北東端の坂戸口から入った通路は西に廻って西北戸口まで各腰郭をたどる。これらのことから考え、腰郭を除く平坦部が郭画で、その外縁に土居が築かれていたと推定する。現在は南側の高土居だけが残存している。西北戸口には、自然壕の土橋から下段腰郭を通してはいる。その腰郭入口にも木戸が設けられ、馬出し様の施設があったのではあるまいか。南面中央にも戸口があり、空堀の土橋から斜坂ではいるが、木戸は土居上に設けられ、土居を超えて出入りする形式になっている。城外に高所のある場合、各所に同例がみられる。藤岡常岡城北戸口、長野原羽根尾城北戸口、沼田高王山城本丸戸口、膳城北郭戸口がそれに当たる。この戸口の土橋を出ると石垣で被覆された高さ2.5mの段が南に70mつづき、その東下の南端は戸口状となり東に折れて、長さ70mの豎堀状部を大沢川谷に下る。発掘調査等によりこの外郭部には何等かの遺構が検出されるのではあるまいか。今回の発掘調査で、郭内東南よりに空堀跡と弧状の石垣状石組等が発見された。かねてから、西北戸口を入った通路が土居らしい部分の上を通るので、内部に中仕切のあることが推定されていたが、今回発見された空堀をたよりに50m四方の別郭のあることがほぼ認められた。しかしこの別

第3章 検出された遺構と遺物

郭は堀の規模が3.4mであまりに小さく、郭内も狭くこの内側に高さ2m程の土居を盛っただけでも、懐は方40mにすぎず本郭としての作戦には用立ちえない。おそらく、高崎市浜川町の矢島城の別郭や、同市島名城本丸内の別郭等のような、城主等居宅の区劃に過ぎぬものと思われる。発掘の際の石組は、堀を渡る土橋側面の被服らしく、南に偏して異様に感じるが、そこから東の崖端に戸口跡があり、中段に踊り場も認められるので、この位置でも差支えないであろう。」

この考察と共に掲載された縄張り図(第843図)をみると、城郭の北縁には数段の腰郭が設けられ、南側から西側へ廻り込む外堀は北側からの自然の谷頭へ続くように城郭を画する。主郭は城郭のほぼ中央に位置し、方形に掘りで画されるようにあり、その東南隅付近に鉄塔が調査で検出された土橋をもつ堀が斜めに取り付くことが読みとれる。さらに、城郭の出入り口については、現有の農道の位置を想定して記述されている。

今回の調査では、先述してきたように東の崖を背に、城域を画する外堀が南側から西側へ廻り込み、さらに北縁を巡り、自然の谷をも取り込んで二重堀の構造をもつことがわかった。城郭外となる西側についても、整地等がなされ、城郭の周辺域への整備の様子が窺える。城郭内は、堀でいくつかの郭が区画され、主郭を中心に2・3郭がコ字状に取りまき、2郭の北側には4郭が設けられる。主郭は、堀で東西に区画され、土橋でつながっていることも判明した。また、確認できた出入り口部は、追手口に当たる部分が城郭の西辺中央部に若干出張るように位置し、西側主郭(1A郭)の北辺にも2郭への入り口部が存在する。土居は、2・3郭の周縁に巡り、東西に区画された両主郭内にも存在し、東側主郭(1B郭)には石垣様の石積みが周囲に被覆されていたことも確認できた。さらに、検出された建物は主郭内に密集し、西側主郭(1A郭)では南寄りに、東側主郭(1B郭)では北側に寄って数時期の建物が重複している。なお、部分的ではあるが、堀を幾度かの改修した痕跡も確認できた。(第844図参照)

こうした状況から、鉄塔下で検出された遺構を考えると、鉄塔下での土橋をもつ堀の走向が第842図と第843図で異なる点、第842図の南北方向の走向である場合に今回の調査では検出されていない点に疑問が生じる。むしろ、山崎氏の縄張り図に従うならば、第842図の方位が逆になるものとも考えられる。また、この堀が東側主郭内でどのような意味をもち、どのような区画をするかについては不明な点が多い。先述したように、本城郭の存続時間幅の中で、ある時期に伴う堀と考えるならば、その解釈もし得ないでもないと思われる。いづれにしろ、今回の調査結果から、第844図に示した姿が、本城郭の最終時期の縄張りの姿であると考えられる。

遺物からみた年代観は、15世紀から16世紀にかけて存続した城郭ではないかと考えられる。これは内耳鍋からみた年代観であり、出土した陶磁器類の中には、もう少し古く遡るものも少量ある。また、出土した内耳鍋資料のうち、西側主郭の土居下からは16世紀代のものがあり、主郭を区画する内堀の改修時(1号堀とした主郭を東西に区画する堀を、堀幅を広げ、堀底を嵩上げし、東側主郭の周囲に石積みを巡らせる改修)の埋め土内からも16世紀代の内耳鍋が出土している。むしろ、改修後の堀内からは、16世紀代の遺物が多量に出土している。

このことから、主郭を中心に改修を行った時期が、16世紀頃であるものと想定される。ただし、こうした改修が一度だけでなく、幾度か行われていた様子も調査中の所見として部分的に窺え、その詳細は不明である。ちなみに、各郭を画する堀形状が、断面V字状を呈する薬研堀や、底が平らとなる箱堀となるものがあり、これら全ての堀が一時期に形成されたものとは考え難い。

建物についてしてみると、主郭を取りまく2・3郭にも建物の存在は確認できたが、大形の建物はなかつ

たようである。東西に分割された両主郭には、多くの建物が重複して密集する。

1 A郭とした西側主郭では、東西40m、南北55mの方形な郭内に21棟が検出され、郭内の空間利用に規制されるかのように、若干のずれを見せながらも同じ様な場所に位置し、全体的には郭中央から南側へ集中する(路線外となる未調査地を南側に僅かに残すが、想定される建物はほぼ確認できたものと考えられる)。この郭の入り口部と考えられる北辺東寄りには、門の存在が考えられ、49号建物等にその可能性が高い。北東隅では、鍵の手状の土居と建物が検出され、重複の状況から土居の方が新しいものと確認されたが、この部分に土居をもつ時期と建物が存在する時期とがあったようである。郭中央部と南側に集中する建物には、大形の建物の存在も確認され、その重複状況および建物の方向性等から6期ないし7期の立て替えが想定でき、最も新しい時期の建物として27・30号建物が存在したのと考えられる。東側主郭との入り口部となる土橋西側(1 A郭側)にも、柵ないし板塀と一体となるように入り口施設としての門が検出されている。さらには、建物ないし空間等の目隠し様(蔀状)の板塀と考えられるものも確認されており、先の入り口施設と共に新しい時期に伴うものも存在するようである。

1 B郭とした東側主郭では、東西35m、南北55mの方形な郭内に18棟が検出され、郭内の空間利用に規制されるかのように、若干のずれを見せながらも同じ様な場所に位置し、全体的には郭中央から北側へ集中する。路線外となった未調査地は南側約半分にあぶが、先述した鉄塔下の調査結果では建物を想定できる柱穴は見あたらず、今回の調査でも南側寄りでは極端に柱穴が減少することが確認されており、南側での建物の存在の可能性は極めて少ないものと考えられる。西側主郭との入り口部となる土橋東側(1 B郭側)には、土橋の付け根部および土橋から数m離れて、入り口施設としての木戸ないし門跡が検出されている。郭北側に集中する建物には、大形の建物が数棟確認され、その重複状況および建物の方向性等から6期ないし7期の立て替えが想定でき、最も新しい時期の建物として11号建物が存在したのと考えられる。

これら検出された建物は、その多くが掘立建物であり、中には礎石立建物の様相を窺わせるものもあるが、明らかに礎石立建物であると確認されたものはない。

このような主郭内での建物のあり方は、6期ないし7期という時間幅、大形の建物の存在等から、遺物にみる15・16世紀にかけての城郭であることを裏付けるものであり、戦を目的とした城というよりは、居館的な要素を強くもった城と理解できよう。むしろ、館城とでも呼ぶ性格ではなかろうか。

なお、先述してきた本城郭の縄張りおよび内部構造・建物を復元した結果、写真図版編に復元イラスト図を掲載した。図版2・3は北西側から鳥瞰した図であり、図版4・5は北東側から、図版6は主郭部を拡大した図である。分割された主郭については、西側主郭を公的な郭、東側主郭を私的な郭として想定し描いている。

次に、本城郭の在城者について触れてみる。

まず、本城郭の所在地は大字名で「神保」に位置している。この神保には小字名として、「上神保」と「下神保」に分かれており、上神保に「辛科神社」が鎮座している。この辛科神社は、鎌倉時代以前から存在していたものと考えられており、社名である「辛科」は和銅4年(711)に新設建群された際に、甘楽郡から多胡郡へ編入された「韓級郷」の名前に由来されるものとされている。そうした状況を考えると、この「神保」というのは、「神」の「保」として神領を意味する荘園であった可能性が極めて高くなる。

鎌倉時代に記された『吾妻鏡』には、承久三年(1221)の「宇治川の合戦」の記述の中で、多くの上野武士団と思われる中に「神保与三」と記された神保性の人物がみられる。また、文和二年(1335)には、神保

第3章 検出された遺構と遺物

太郎左衛門尉、小串四郎左衛門尉、瀬下宮内左衛門尉らの在地領主層が、多胡地頭職である佐々木道誉に抵抗するとして、神保氏の名前がみられる。

戦国期になると、越後に長尾（上杉）氏、甲斐に武田氏、小田原に後北条氏と列強の戦国大名が上野を取りまき、その中に関東管領として山内上杉氏が藤岡市に所在する平井城に在った。この上杉氏に服属していた諸氏は、永禄四年（1561）の「関東幕注文」（上杉家文書）に名を連ね、その中に白井衆として「神保兵庫助」の名前が記されている。永禄十年（1567）には、武田氏への服属を示す西上野諸氏の起請文があり、「武田家諸氏起請文」として現在も生島足島神社（長野県）に残されている。この中に、長根衆として神保小次郎昌光と小河原右馬助重清の二者連盟による起請文が含まれている。

享禄四年（1531）に関東管領・上野守護となった上杉憲政は、天文十年（1541）に神流川合戦、天文十五年（1546）に川越で北条氏に敗れ、天文十六年（1547）に信州（佐久）で武田氏に敗れ、さらに天文二十一年（1552）には北条氏康に攻められて、平井城を捨てて越後の長尾景虎（上杉謙信）のもとへ逃れる。天文二十二年（1553）になると国峰城（甘楽町）に在った小幡氏は、武田晴信（武田信玄）に服属し、武田氏の西上野攻略が始まる。永禄六年（1563）には、緑野・甘楽地方が武田氏の支配下となり、永禄九年（1566）に箕輪城を落城させ、武田信玄の西上野攻略が達成された。

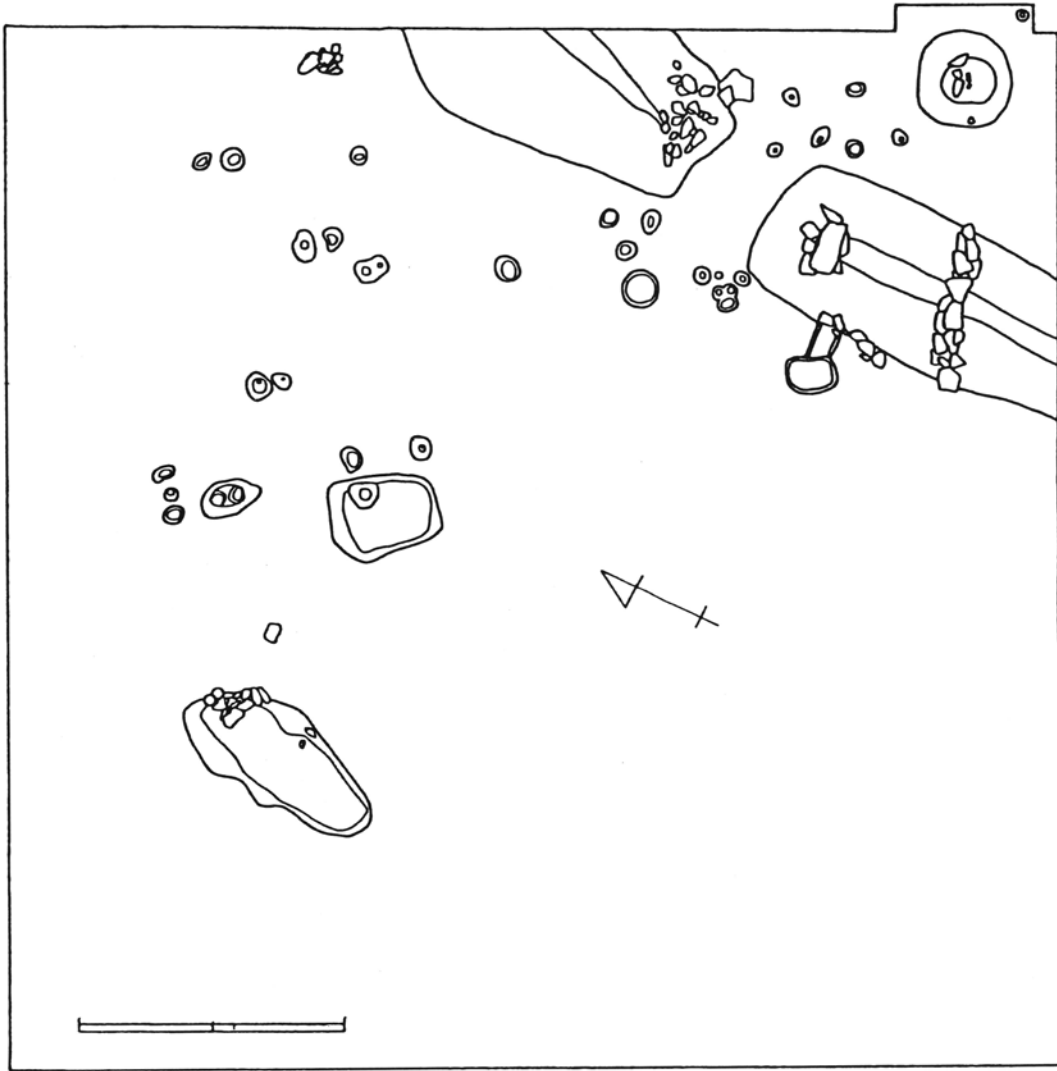
このように、神保性を名乗る武将が歴史の各所に登場してくる。順当に考えるならば、この神保性の武将が、この神保に帰属する在地領主・在地豪族でたつたものと推測でき、その拠点は周辺の城館跡の中でも本城郭に可能性は高い。出土した遺物からすれば、「関東幕注文」にみる神保兵庫助・起請文にみる神保小次郎昌光が城主ということになる。ただし、鎌倉期の神保氏、南北朝期の神保氏、さらには戦国期の神保氏が、同一族の直系であったかどうかは、定かではない。

また、こうした歴史背景を考えると、本城郭は関東管領の山内上杉氏の服属下にあったものが、永禄六年には武田氏への服属へと代わっていく様子が窺え、16世紀代の改修という点では、こういった時流の中で城郭の改修が行われていったものと推測できよう。

なお、神保氏の武田氏への服属から推測すると、本城郭の終焉は、武田勝頼が天目山で自殺して滅ぶ天正十年（1582）頃と考えられ、それ以降の神保氏の名前は文献上には見あたらない。まして、天正十八年以降まで城郭が存続したことは考え難い。それは、出土遺物をみても理解しやすい。

以上の点を要約すると、次のことが言えよう。

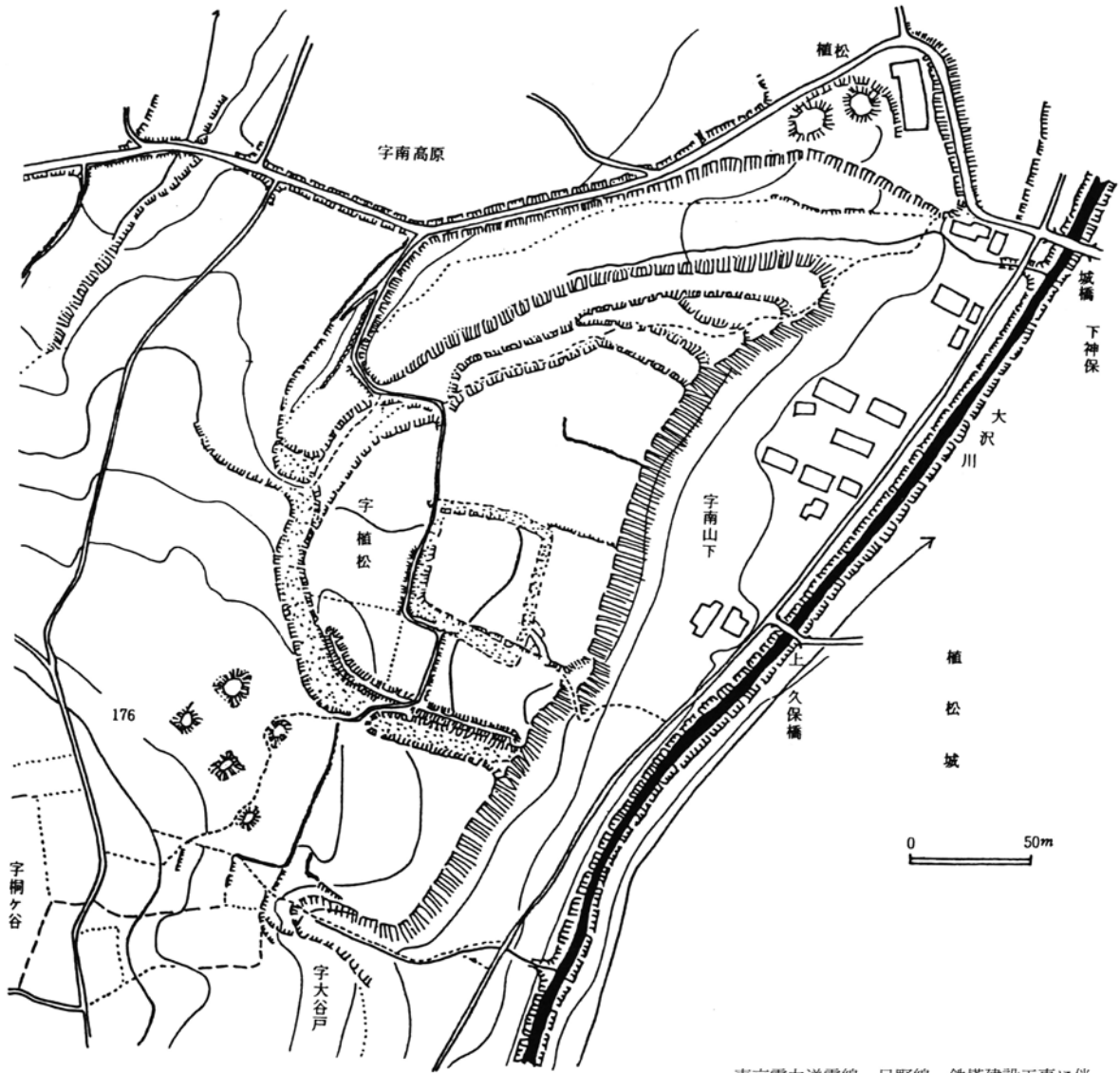
1. 本城郭の縄張りや城としての体裁を整えているが、城郭自体の性格は居館的な要素が強い。
2. 城郭の存続年代は、15・16世紀と考えられるが、16世紀後半には廃城となるものと推測される。
3. 城主については、戦国期にみる神保氏であったものと考えられる。



東京電力送電線一日野線—鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書（1986）より転載

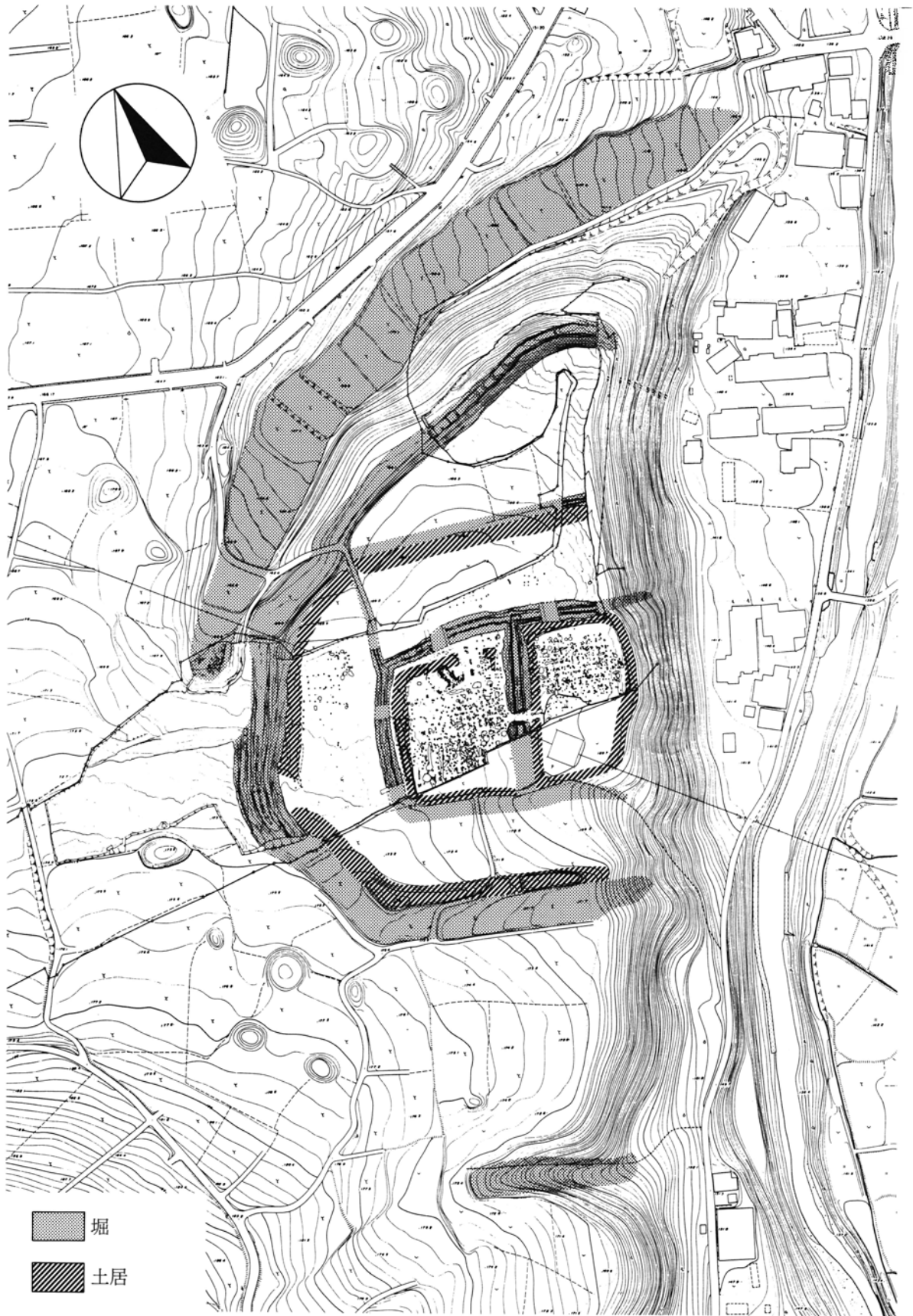


第842図 第5地点平面図と本調査地との位置関係



東京電力送電線一日野線一鉄塔建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書(1986)より転載

第843図 城郭縄張り図



第844図 城郭推定縄張り図

第7節 近世土坑

検出された土坑は、全体で800基余を数えるが、このうち堆積土等から明らかに近世以降の所産と考えられるものは3基である。後述する不明土坑として扱った中にも、近世土坑のものが含まれる可能性はあるが、その分別は難しく、ここでは堆積した覆土中に浅間山を給源とするA軽石（天明三年）が混入する土坑のみを扱った。

3号土坑（第845図）

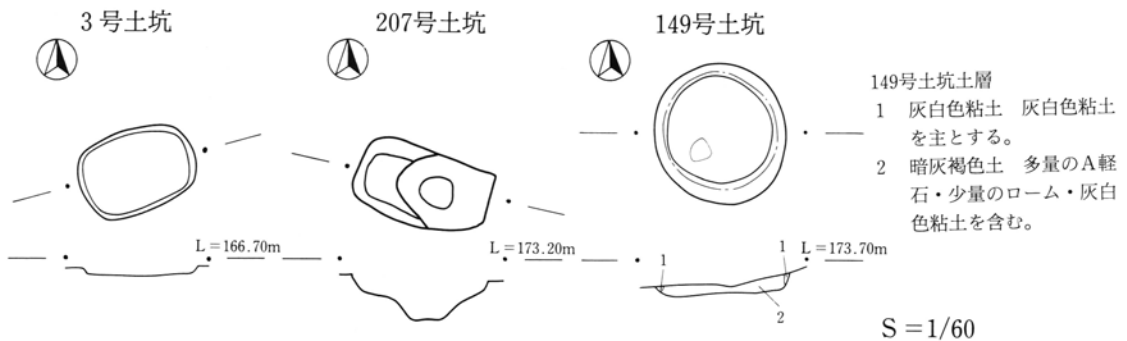
本土坑はA区にあり、26-25グリッドに位置する。平面形状は、長軸0.94m、短軸0.66mの長方形を呈し、深さは8cmと浅い。覆土中には、多量のA軽石を混入する。遺物の出土はない。

149号土坑（第845図）

本土坑はE区にあり、13-73グリッドに位置する。平面形状は、長軸1.1m、短軸1.02mの円形を呈し、深さは13cmと浅い。掘込みプランの内側には、粘土帯が巡り、覆土中にはA軽石を混入する。遺物には、石が1点のみ出土している。

207号土坑（第845図）

本土坑はE区にあり、13-55グリッドに位置する。平面形状は、長軸1.06m、短軸0.62mの長方形を呈するが、中央に円形に一段深くなっており、深さは37cmを測る。覆土中には、多量のA軽石を混入する。遺物の出土はない。



第845図 近世土坑平面図

表126 近世土坑一覧表

土坑Na	グリッド位置	平面形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(cm)	備考
3	26-25	長方形	0.94	0.66	8	
149	13-73	円形	1.10	1.02	13	
207	13-55	長方形	1.06	0.62	37	

第8節 時期不明の遺構と遺物

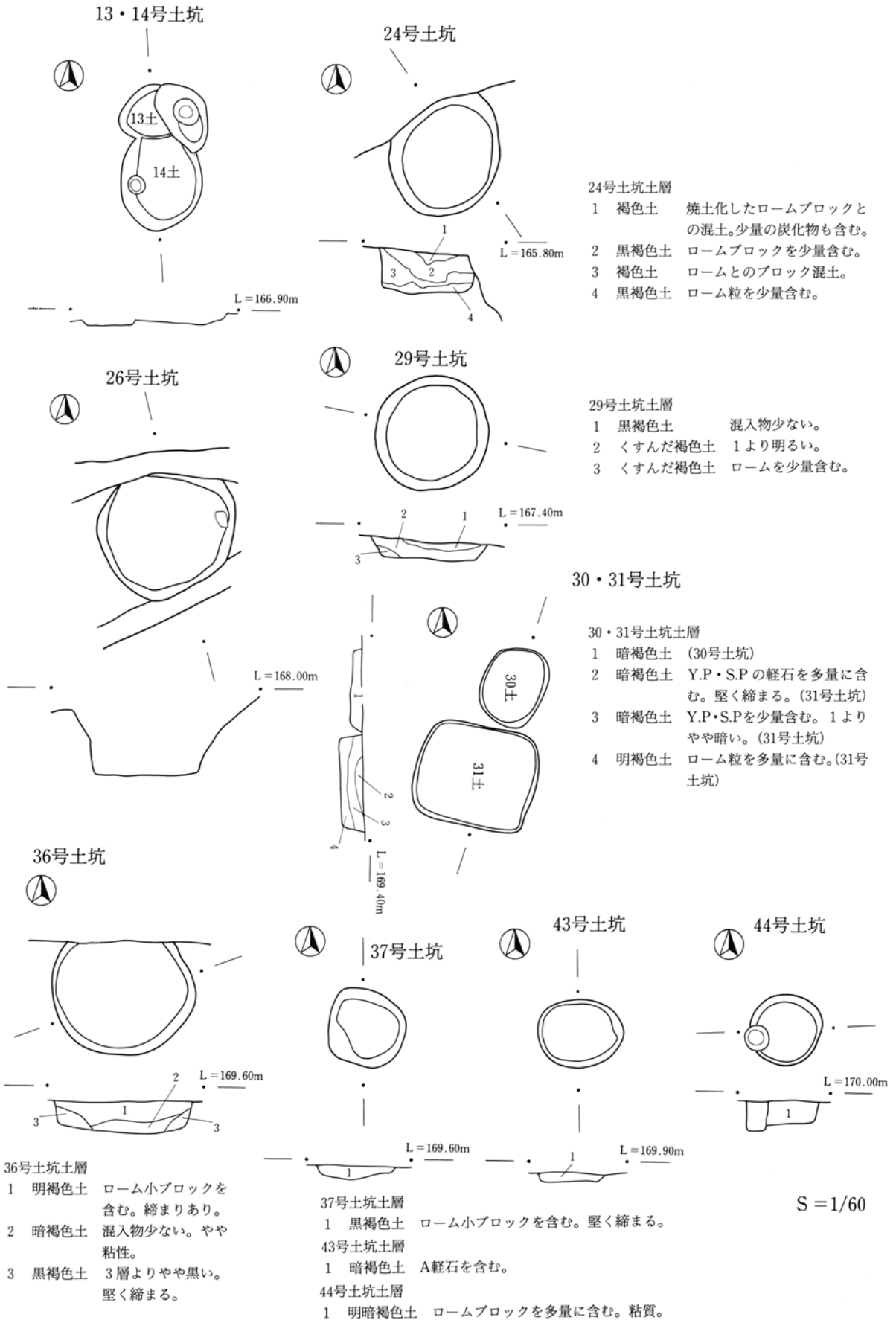
本節では、時期の特定できなかった土坑について取り上げる。また、最後となってしまったが、追加資料として縄文時代の埋甕を扱った。

1. 土坑（第846～866図、表127）

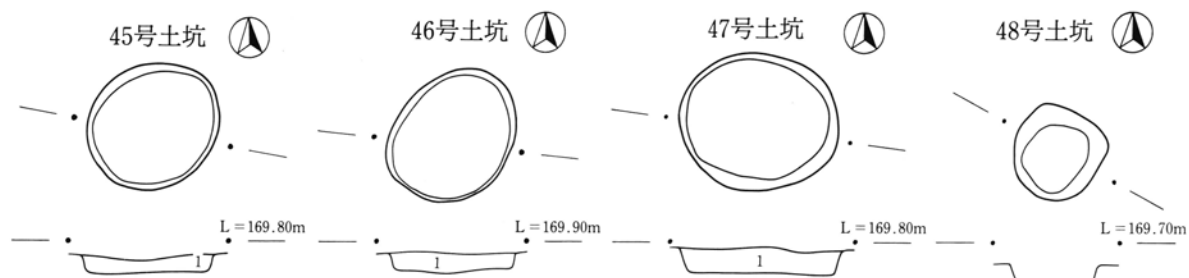
検出された土坑は、全体で800基余を数えるが、このうち時期不明土坑として扱ったものは247基にのぼる。時期不明土坑としたものの中には、縄文時代・弥生時代・古墳時代・平安時代・中世等の時期の所産と考えられるものも含まれていると思われるが、各時代の遺物が雑多に混入しており、その分別は難しく、本項でまとめて扱うこととした。

なお、各土坑の規模等については、土坑一覧表として表127に示す通りである。出土した遺物については、図示することができなかったが、その概要について触れておく。

- 2号土坑 凹石が1点出土。
- 24号土坑 弥生時代中期の土器、土師器片等が若干出土。
- 44号土坑 縄文時代中期初頭の土器、土師器・須恵器片等が若干出土。
- 48号土坑 縄文時代前期の土器、瓦片等が出土。
- 81号土坑 縄文時代の土器片、土師器、中世内耳鍋片等および凹石が1点が出土。
- 183号土坑 縄文土器片、土師器、須恵器大甕片等が出土。
- 214号土坑 縄文土器、土師器片等が若干出土。
- 254号土坑 凹石が1点出土。
- 273号土坑 縄文土器、土師器片等が若干出土。
- 278号土坑 縄文時代前期の土器片、土師器・須恵器片等が出土。
- 281号土坑 凹石が1点出土。
- 286号土坑 凹石が1点出土。
- 302号土坑 縄文時代前期の土器片、土師器・須恵器片等が出土。
- 310号土坑 縄文土器、土師器・須恵器片等が若干出土。
- 311号土坑 縄文土器、弥生時代中期の土器、土師器・須恵器片等が若干出土。
- 319号土坑 縄文時代前期の土器片、土師器・須恵器片等が出土。
- 323号土坑 磨き石が1点出土
- 326号土坑 縄文時代中期、弥生時代中期の土器片、土師器・須恵器片等および凹石2点が出土。
- 342号土坑 縄文時代中期の土器片、土師器・須恵器片等が出土。
- 350号土坑 縄文土器、土師器片等が若干出土。
- 354号土坑 剝片素材のスクレイパーが1点出土。
- 358号土坑 縄文土器、土師器片等が若干出土。
- 376号土坑 凹孔をもつ磨き石が1点出土。
- 438号土坑 縄文土器、土師器、中世内耳鍋片等が若干出土。
- 470号土坑 縄文土器、土師器・須恵器片等が若干出土。



第846図 時期不明土坑平面図(1)



45号土坑土層

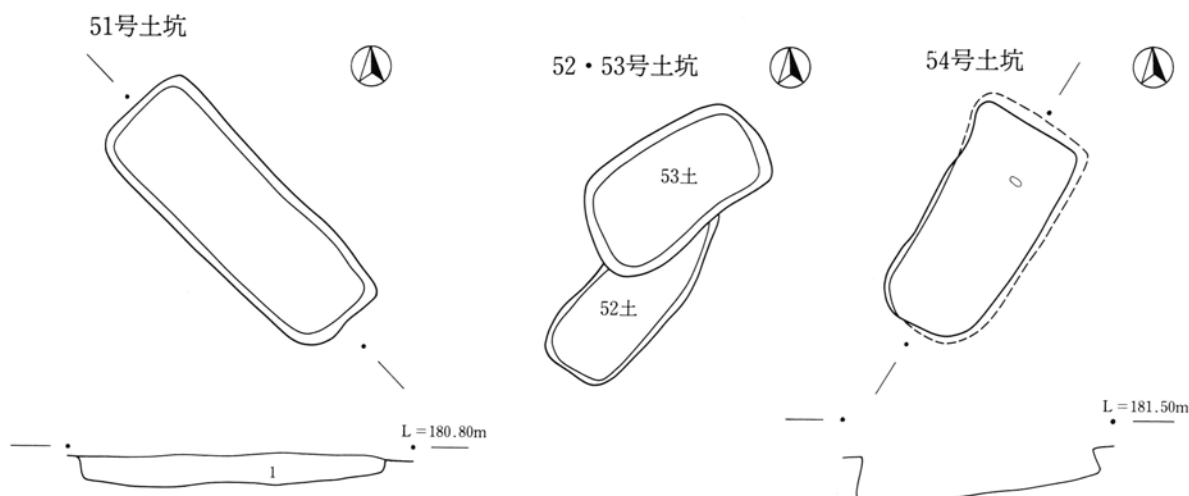
1 明暗褐色土 軽石を含む。
粘性有り。

46号土坑土層

1 明褐色土 軽石を少量含む。
やや粘性有り。

47号土坑土層

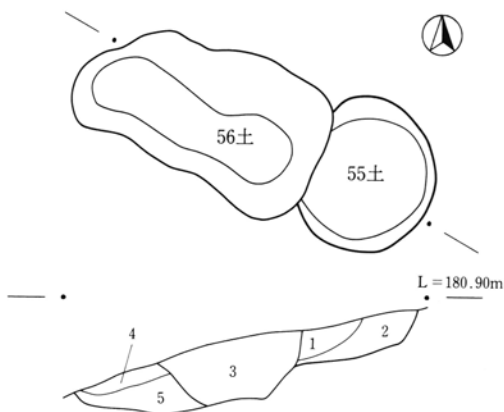
1 褐色土 ロームブロック含
む。やや粘性あり。



51号土坑土層

1 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
やや堅く締まる。

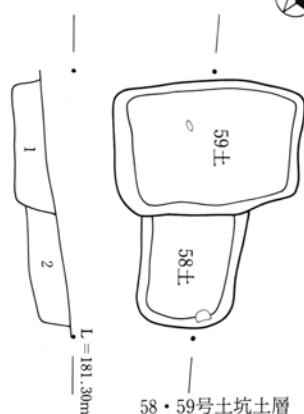
55・56号土坑



55・56号土坑土層

1 褐色土 ローム小粒多量に含む。(55号土坑)
2 暗褐色土 ローム小粒含む。やや締まりあり。(55号土坑)
3 暗褐色土 ロームブロックを含む。粘性弱い。(56号土坑)
4 褐色土 ローム粒を含む。(56号土坑)
5 明褐色土 ロームブロック多量に含む。(56号土坑)

58・59号土坑



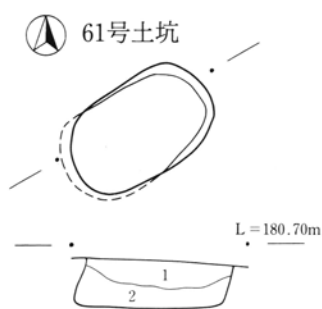
58・59号土坑土層

1 暗褐色土 ロームブロック混在。
2 褐色土 ローム混在。やや締まりあり。

S=1/60

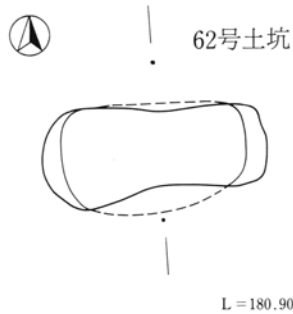
第847図 時期不明土坑平面図(2)

第3章 検出された遺構と遺物



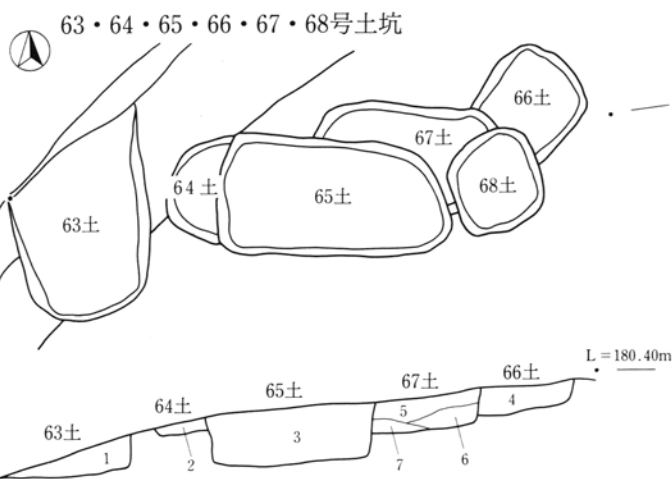
61号土坑土層

- 1 褐色土 ローム小ブロック混在。やや軟質。
- 2 暗褐色土 ローム小粒混在。



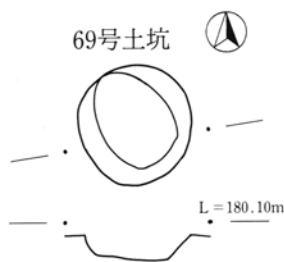
62号土坑土層

- 1 明褐色土 ローム小粒含む。軟質。
- 2 褐色土 ロームブロック少量含む。
- 3 明褐色土 軟質。

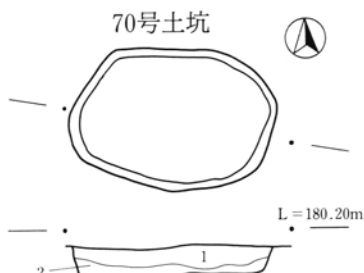


63・64・65・66・67号土坑土層

- 1 暗褐色土 ロームブロック混在。(63号土坑)
- 2 黄色土 ソフトロームを主とする。(64号土坑)
- 3 明暗褐色土 ソフトローム・ロームブロックを多量に含む。粘性弱い。(65号土坑)
- 4 暗褐色土 小ロームブロックを少量含む。(66号土坑)
- 5 明褐色土 ロームブロックを多量に含む。(67号土坑)
- 6 褐色土 ロームブロックを少量含む。(67号土坑)
- 7 明褐色土 ソフトローム含む。(67号土坑)



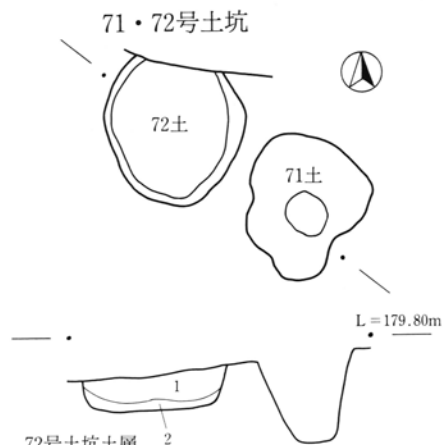
69号土坑



70号土坑

70号土坑土層

- 1 褐色土 ローム小粒少量混在。軟質。
- 2 暗褐色土 堅く締まる。



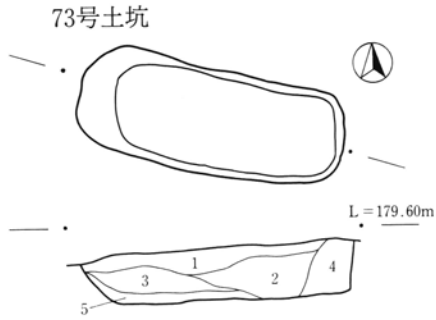
71・72号土坑

72号土坑土層

- 1 明褐色土 ロームブロックを含み軟質。
- 2 褐色土 やや堅く締まる。

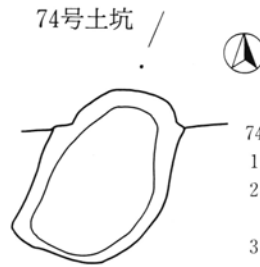
S = 1/60

第848図 時期不明土坑平面図(3)



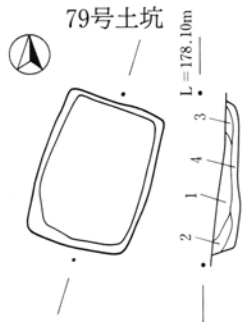
73号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム小粒少量混在。やや締まりあり。
- 2 明褐色土 ローム小粒多量に混在。
- 3 褐色土 ローム小粒少量混在。やや粘質。
- 4 褐色土 やや軟質。
- 5 暗褐色土 やや締まりあり。



74号土坑土層

- 1 暗褐色土 ローム粒子・Y.Pを多く含む。
- 2 明褐色土 ローム粒子・ブロックを多く含む。明るい。
- 3 明褐色土 大型のロームブロック含む。やや粘性あり。



79号土坑土層

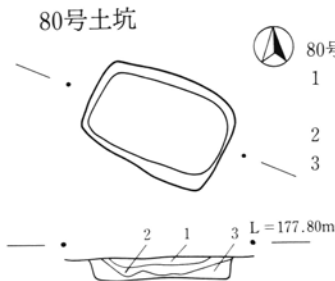
- 1 褐色土 炭化物・焼土少量含む。
- 2 明褐色土 焼土含む。
- 3 明褐色土 炭化物・焼土含む。
- 4 暗褐色土 炭化物・焼土多量に含む。



77号土坑

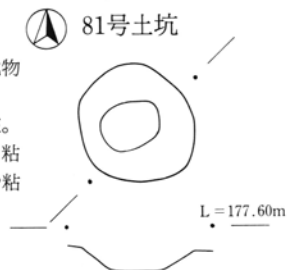
77号土坑土層

- 1 明褐色土 ロームブロック少量含む。
- 2 暗褐色土 やや締まりあり。
- 3 褐色土 強く締まる。粘性あり。



80号土坑土層

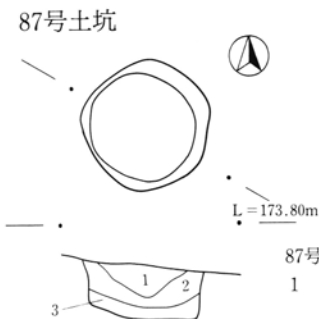
- 1 褐色土 焼土小粒・炭化物小粒混在。
- 2 褐色土 焼土多量に混在。
- 3 暗褐色土 焼土・炭化物・粘質土混在。やや粘質。



81号土坑



85号土坑



87号土坑

87号土坑土層

- 1 黒褐色土 2層がブロック状に含まれ軽石も多量に混在。硬質。粘性が弱い。
- 2 くすんだ灰褐色土 ローム粒・軽石・焼土を少量含む。硬質。粘性が弱い。
- 3 くすんだ灰褐色土 ロームブロック少量含む。硬質。



88号土坑

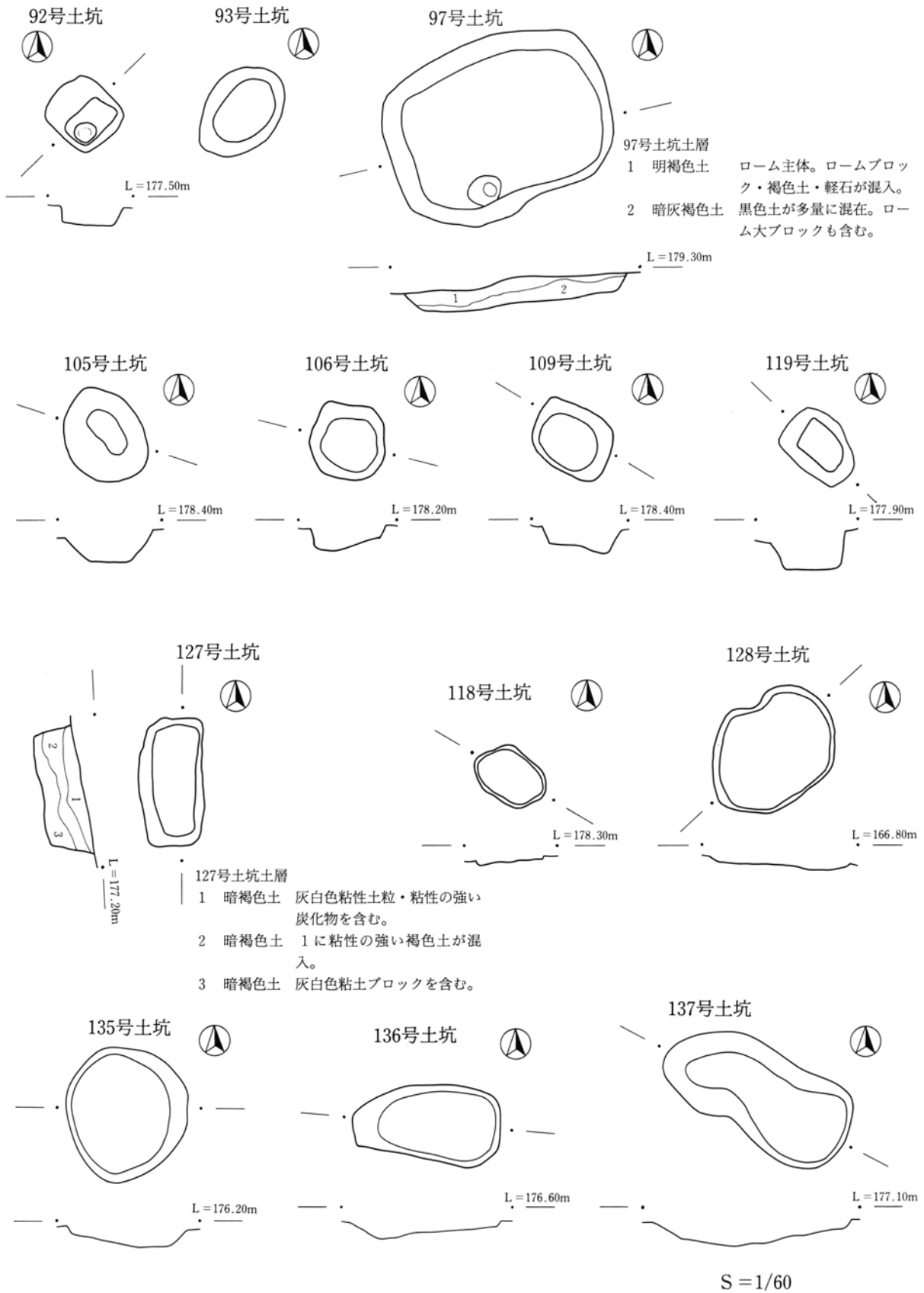


91号土坑

S = 1/60

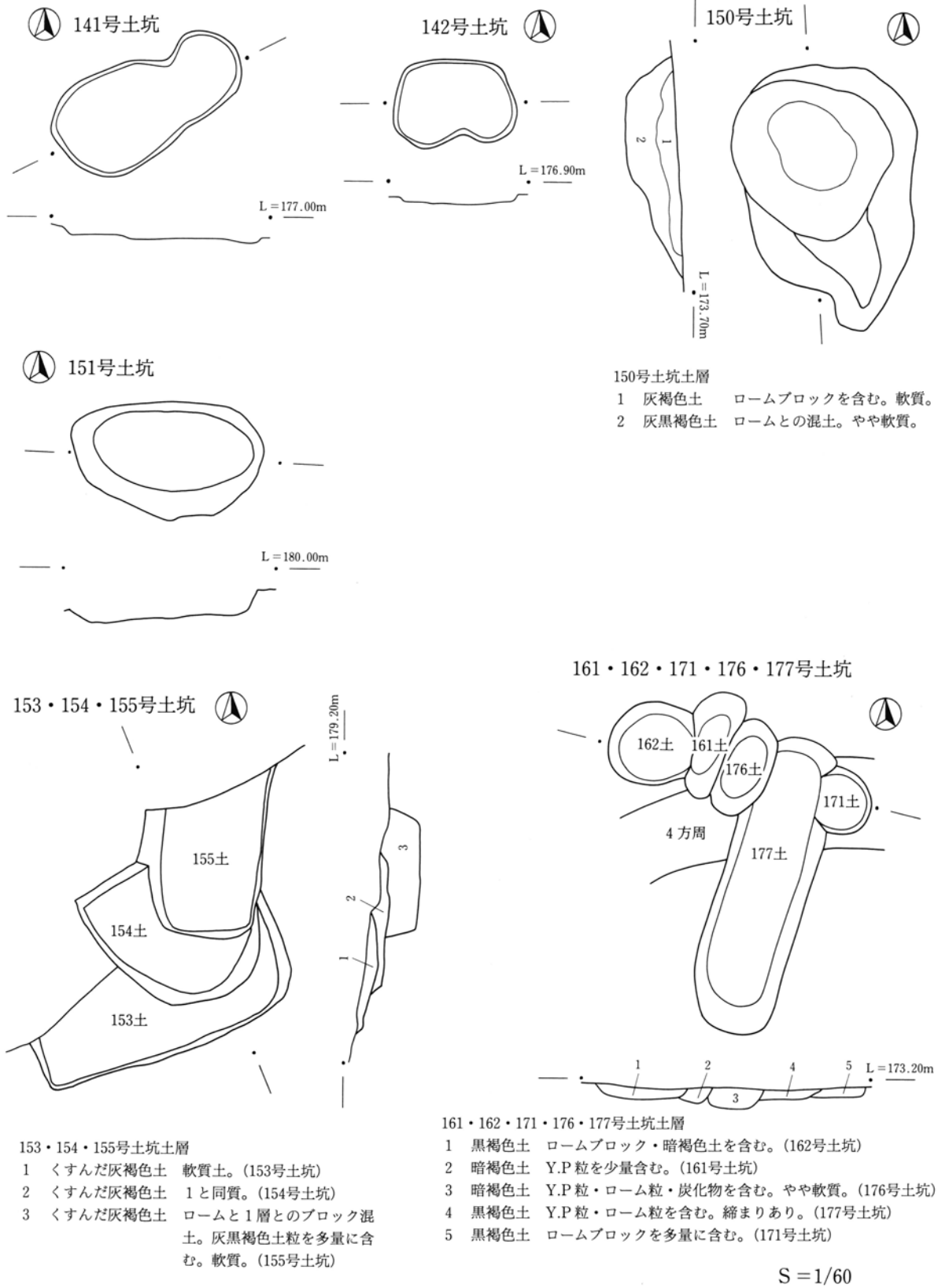
第849図 時期不明土坑平面図(4)

第3章 検出された遺構と遺物



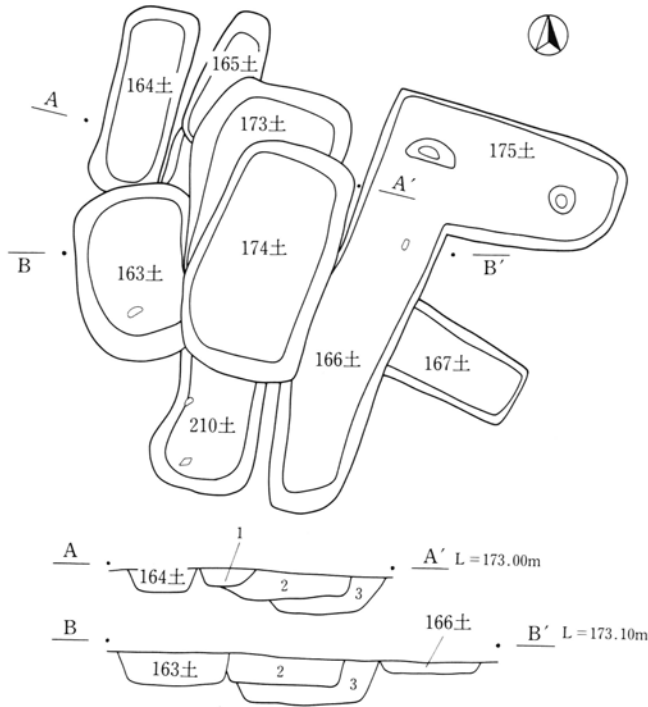
第850図 時期不明土坑平面図(5)

第8節 時期不明の遺構と遺物



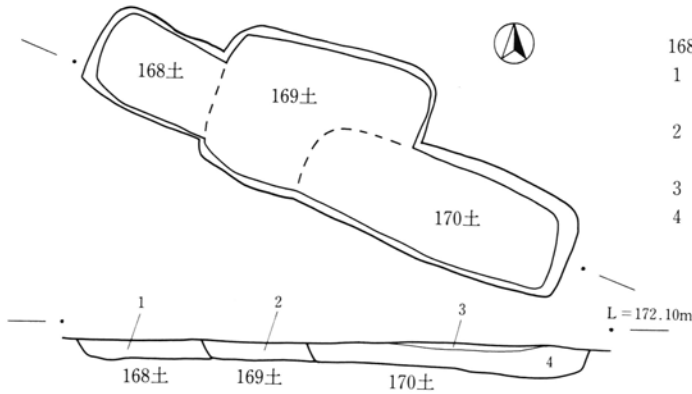
第851図 時期不明土坑平面図(6)

165・167・173・174・210号土坑



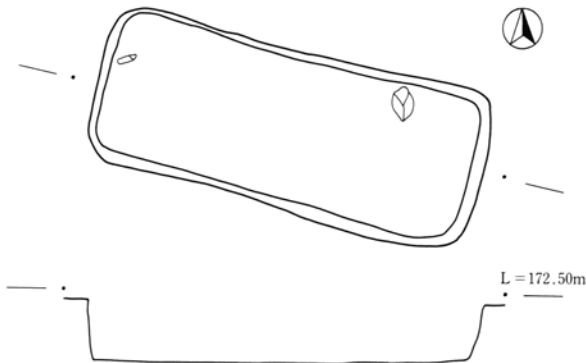
- 165・167・173・174・210号土坑土層
- 1 黒褐色土 ローム粒を微量に含む。(165号土坑)
 - 2 黒褐色土 Y.P・炭化物を微量に含む。粘性弱い。(173号土坑)
 - 3 暗褐色土 ローム粒・Y.P粒を多く含む。粘性弱い。173号土坑より混入物多い。(174号土坑)

168・169・170号土坑

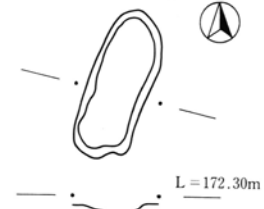


- 168・169・170号土坑土層
- 1 黒褐色土 Y.P粒・ロームの大形ブロックを多量に含む。粘性弱い。(168号土坑)
 - 2 黒褐色土 ローム粒を微量に含む。混入物少ない。粘性弱い。(169号土坑)
 - 3 黒褐色土 混入物含まず粘性なし。(170号土坑)
 - 4 黒褐色土 ローム粒・ブロックを多く含む。2層よりやや明るい。粘性なし。(170号土坑)

172号土坑

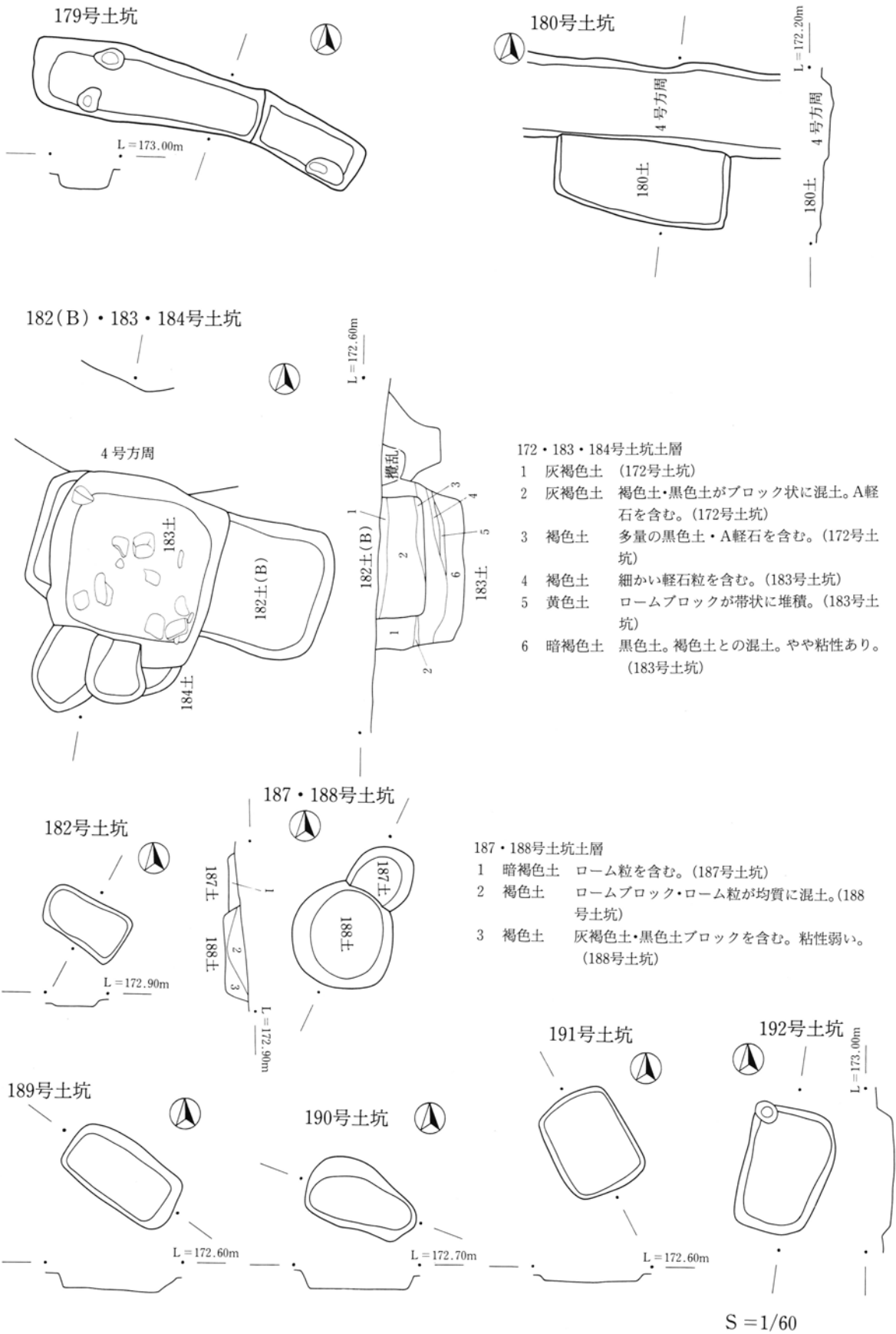


178号土坑

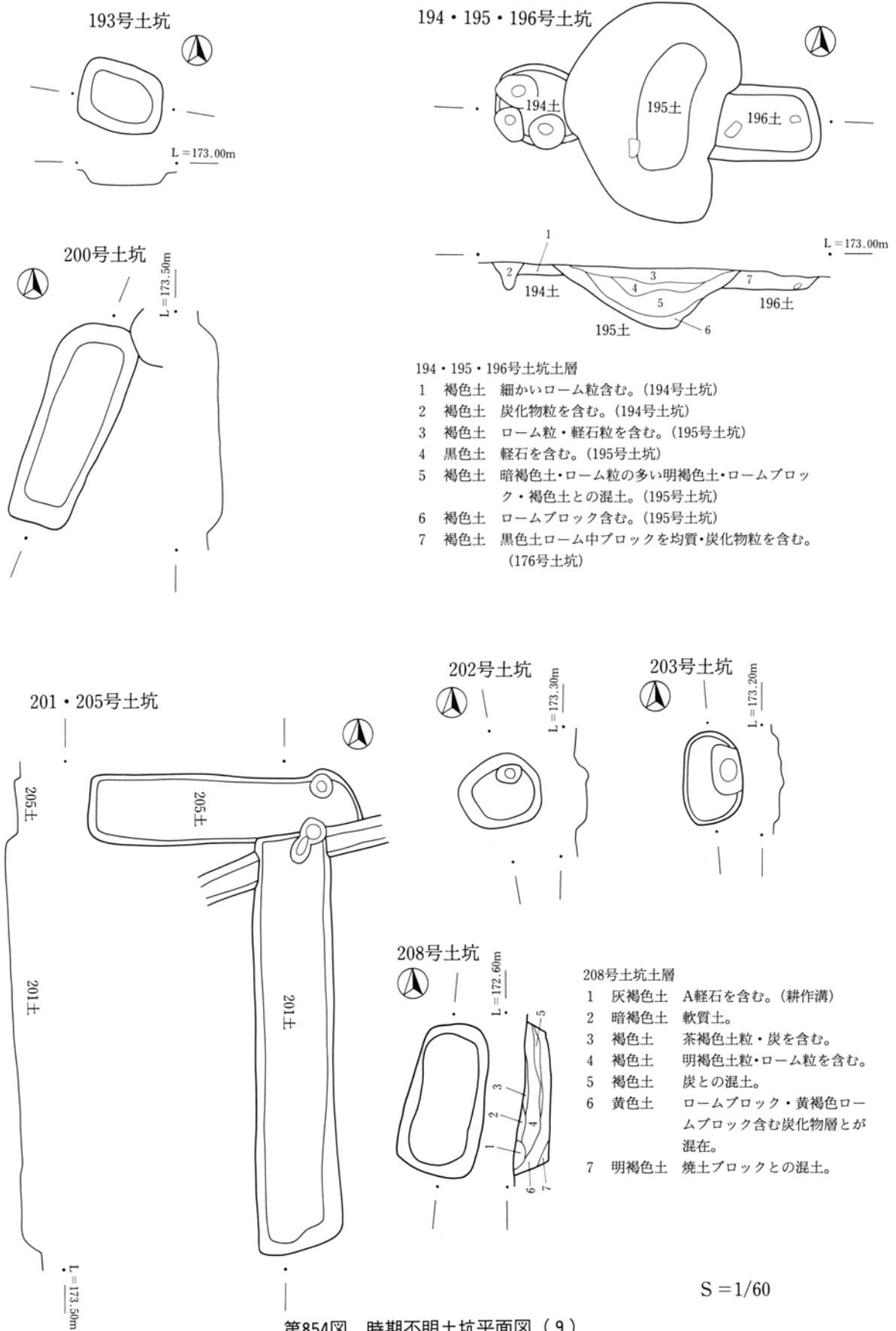


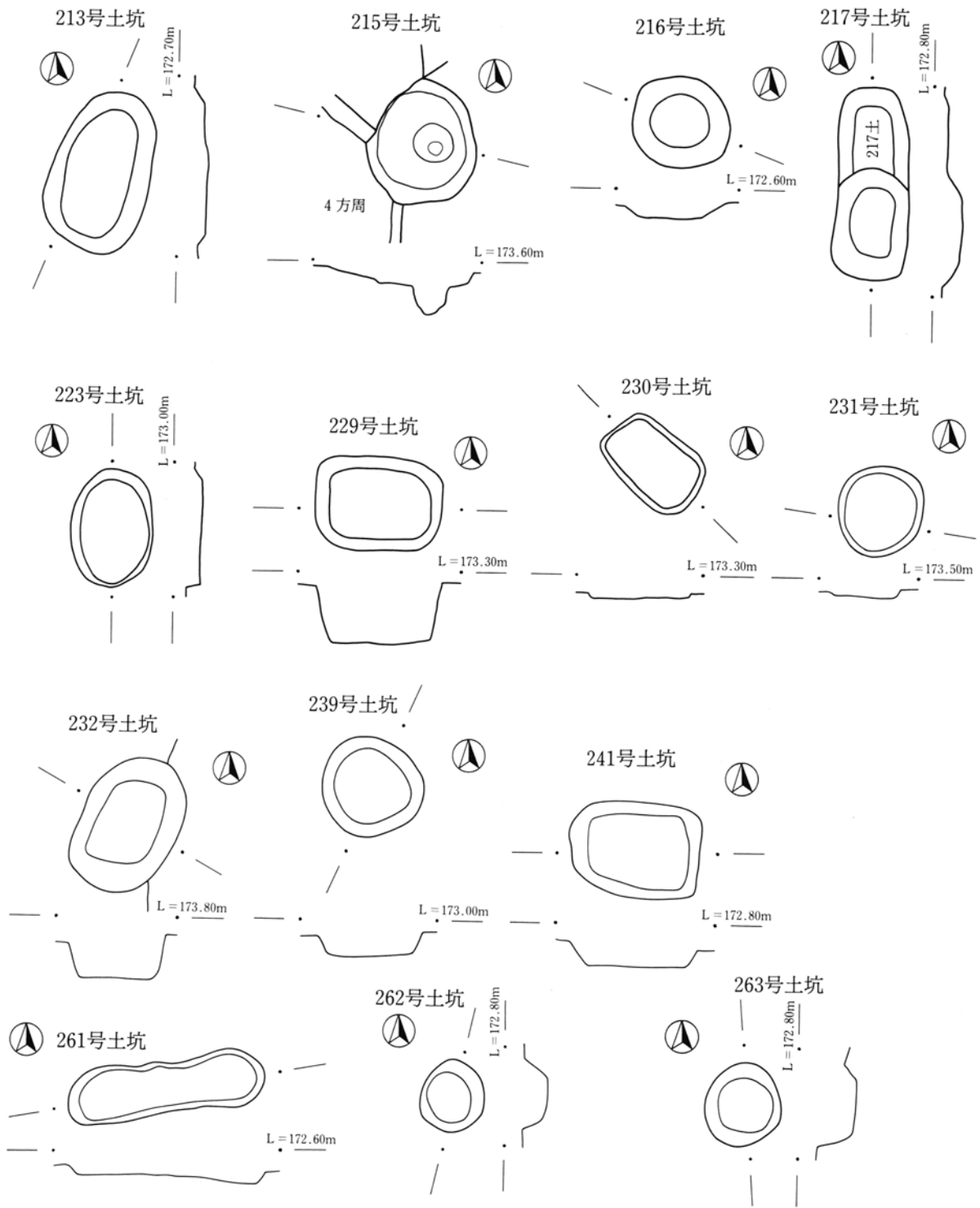
第852図 時期不明土坑平面図(7)

S = 1/60



第853図 時期不明土坑平面図(8)

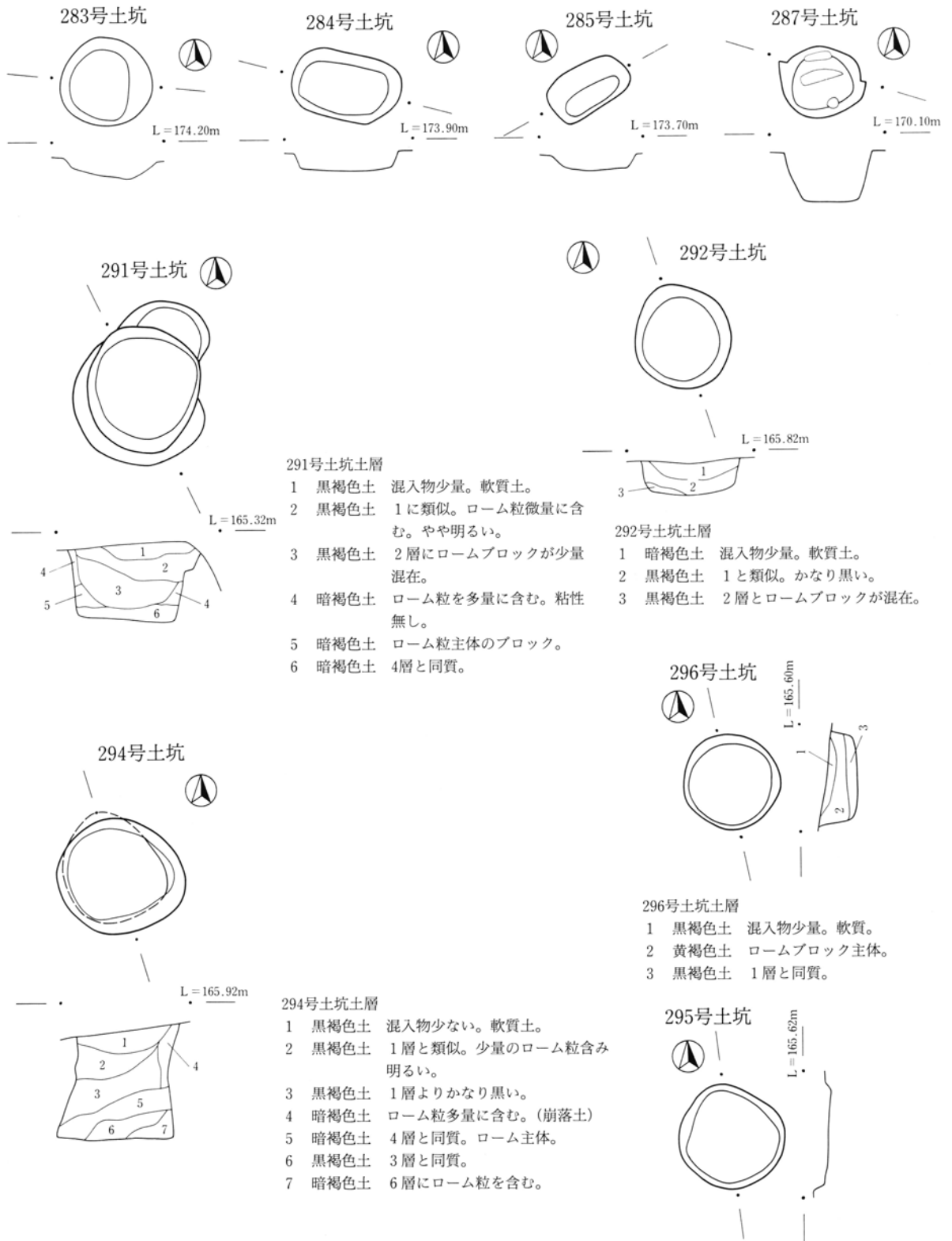




第855図 時期不明土坑平面図 (10)

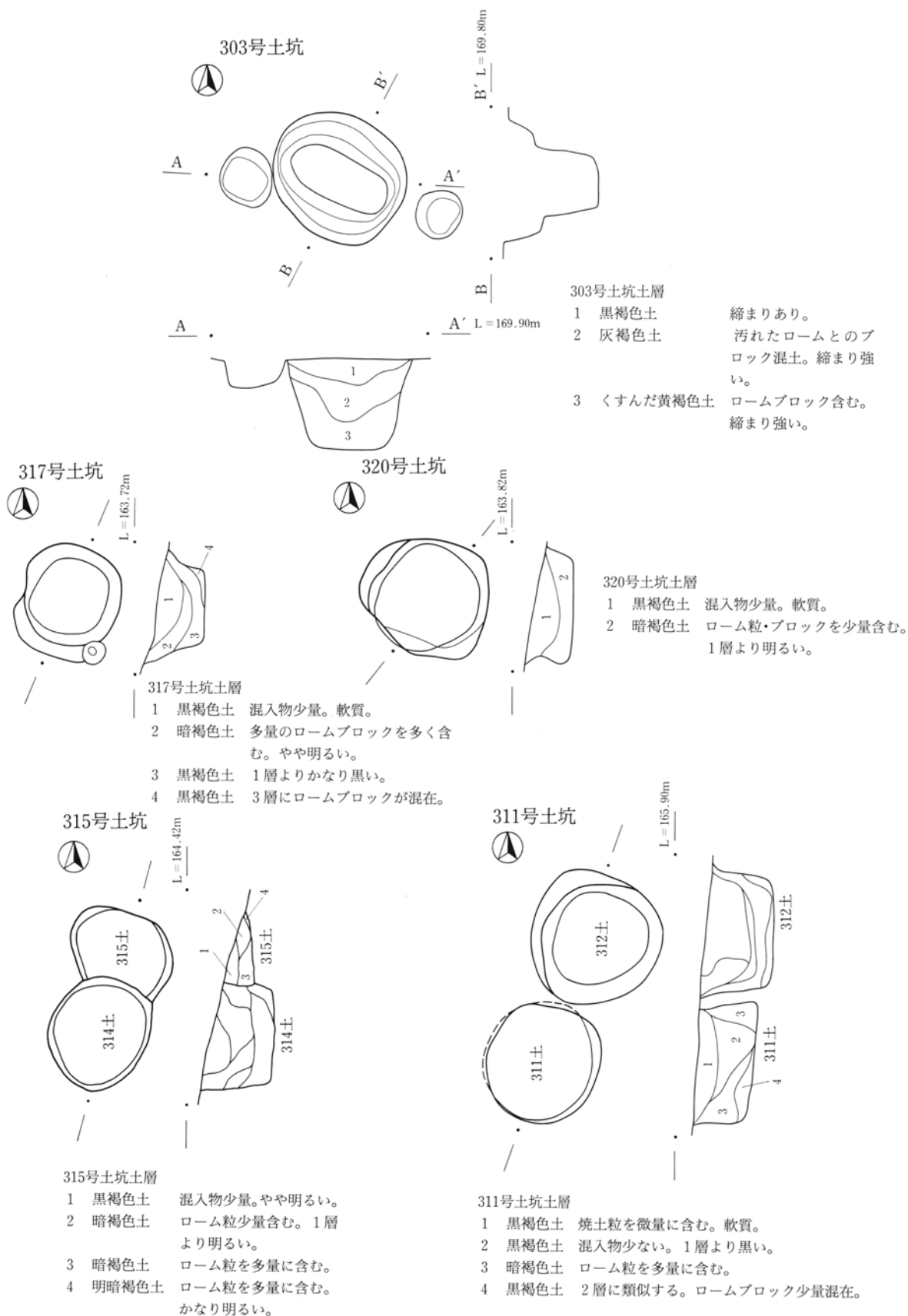
S = 1/60

第3章 検出された遺構と遺物



第856図 時期不明土坑平面図 (11)

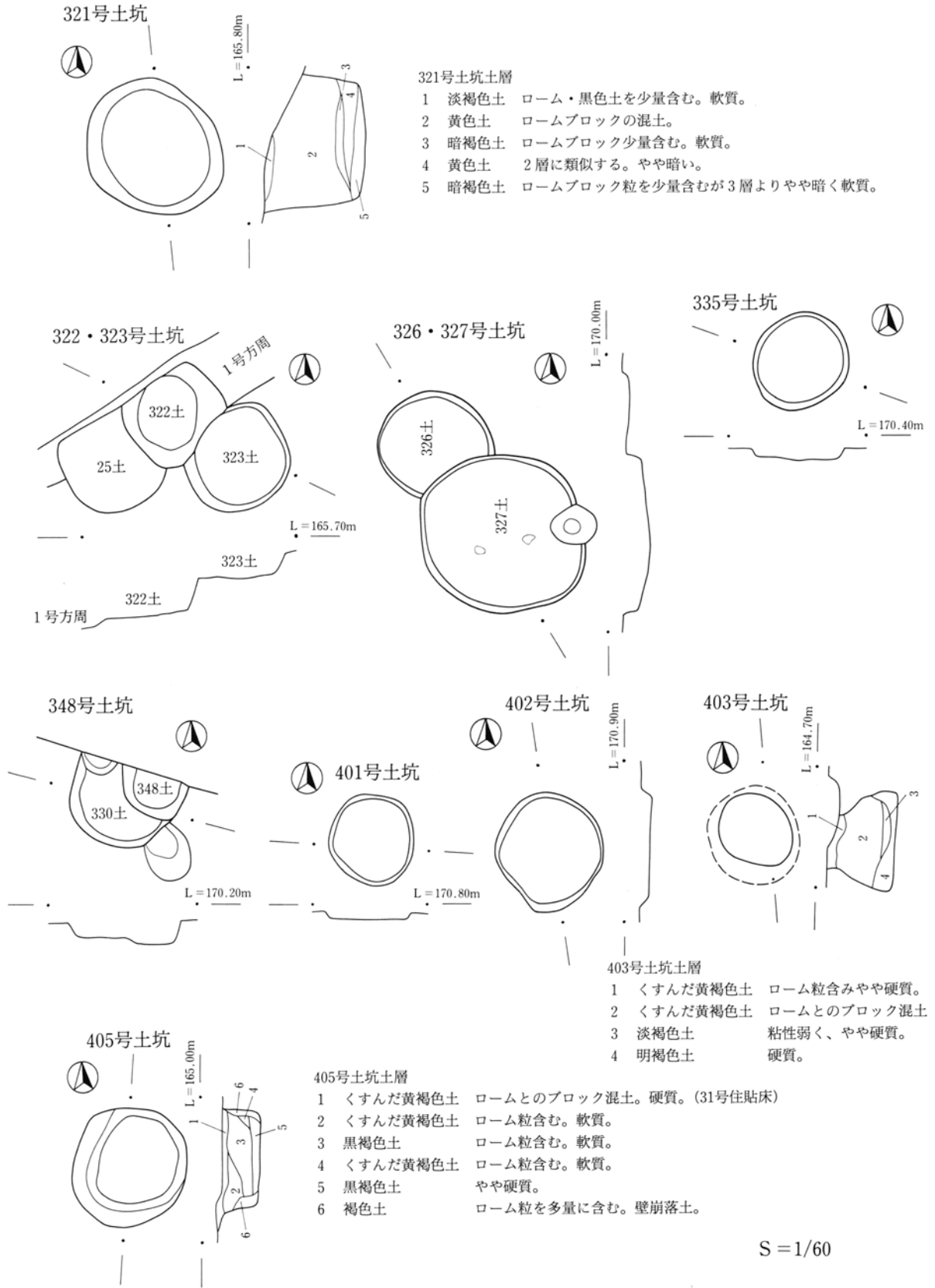
S=1/60



第857図 時期不明土坑平面図 (12)

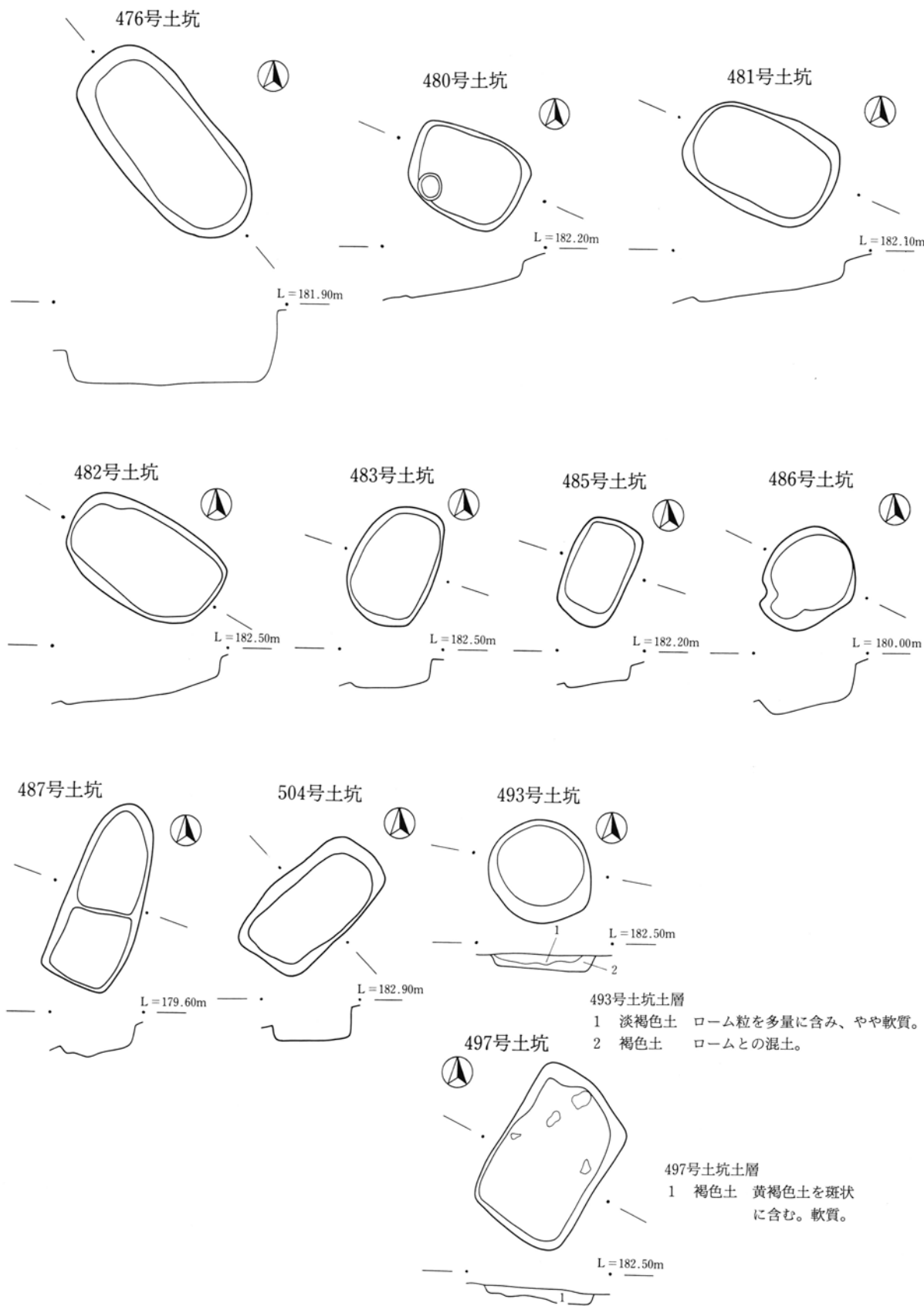
S = 1/60

第3章 検出された遺構と遺物



S = 1/60

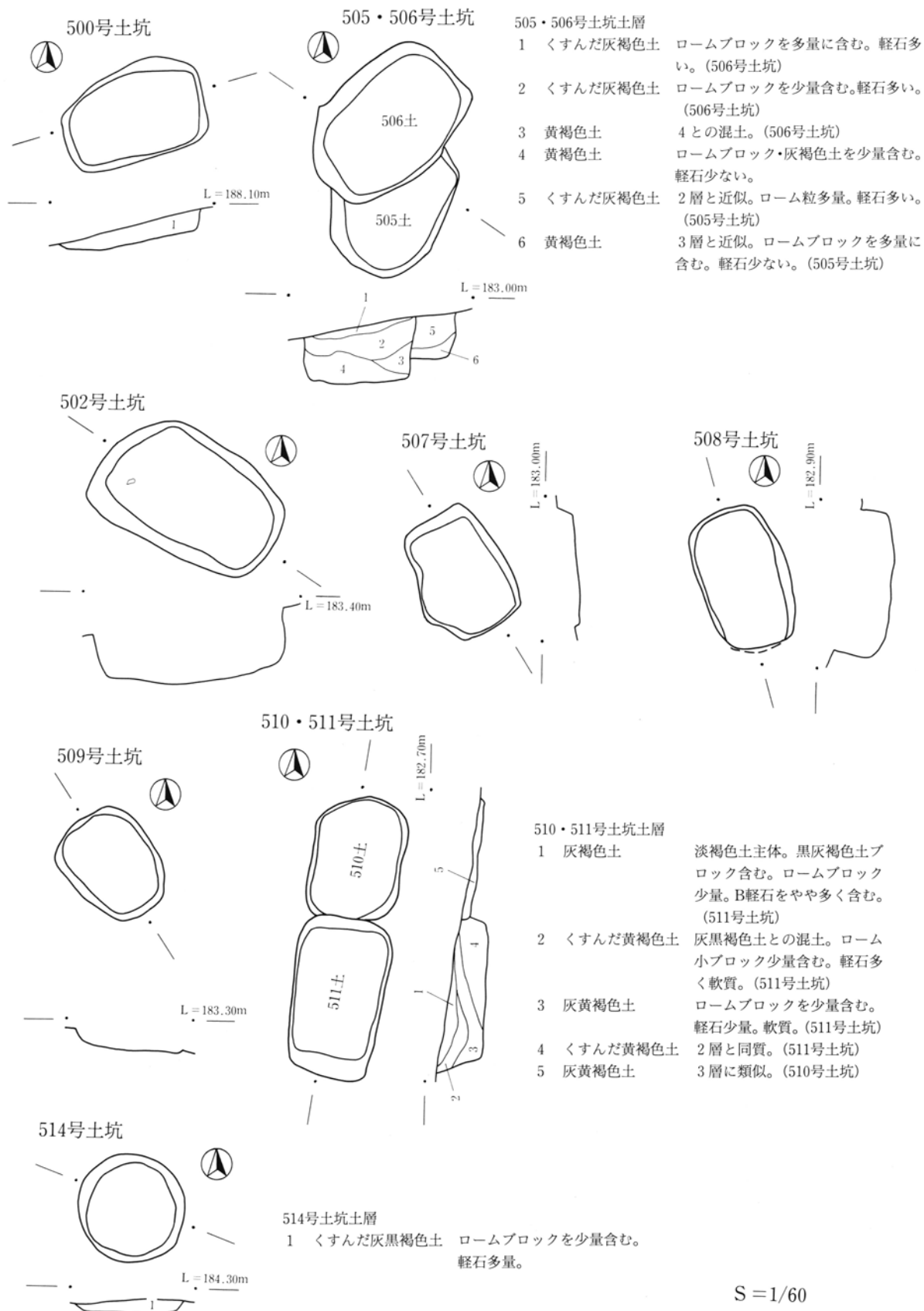
第858図 時期不明土坑平面図 (13)



S = 1/60

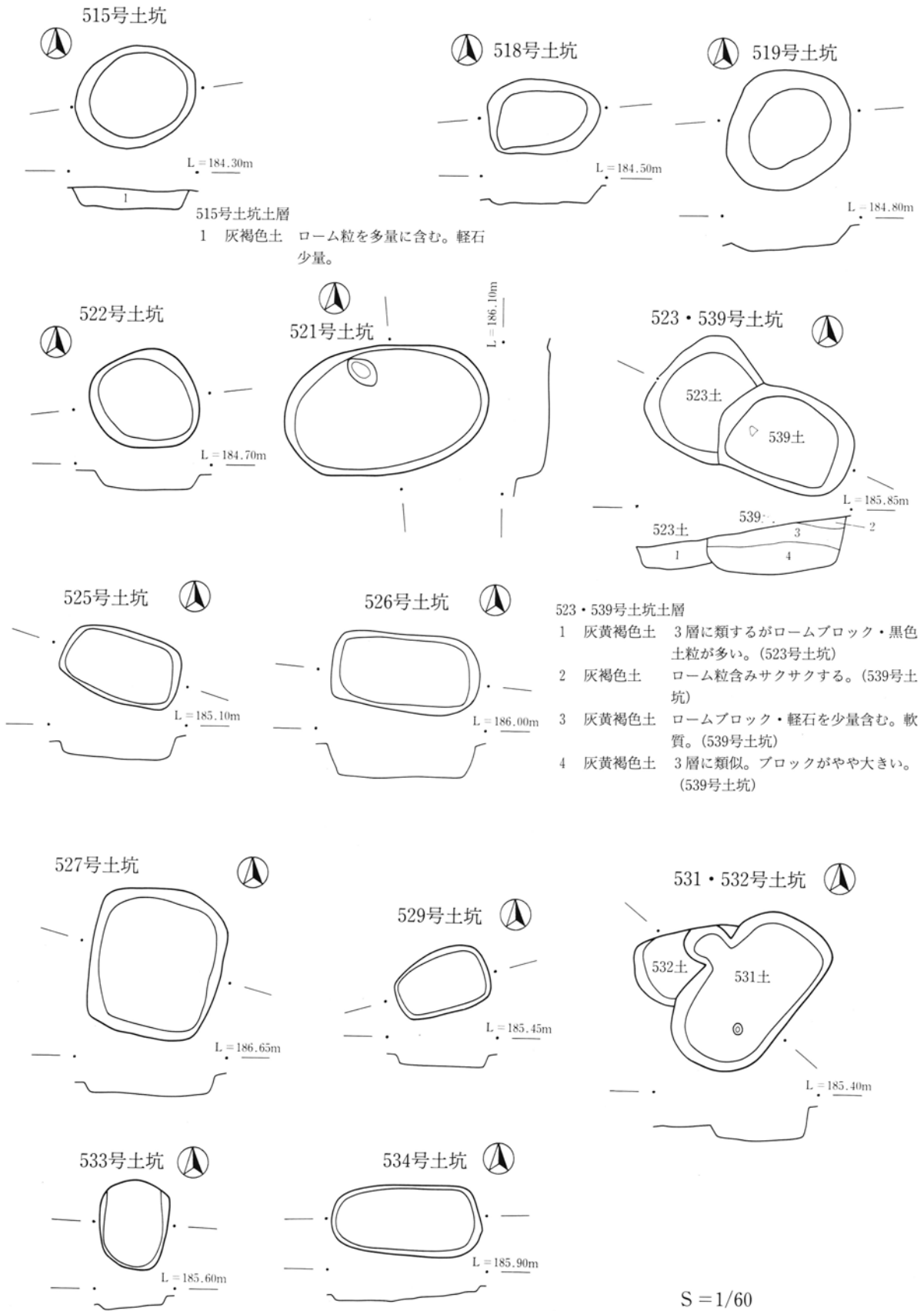
第859図 時期不明土坑平面図 (14)

第3章 検出された遺構と遺物



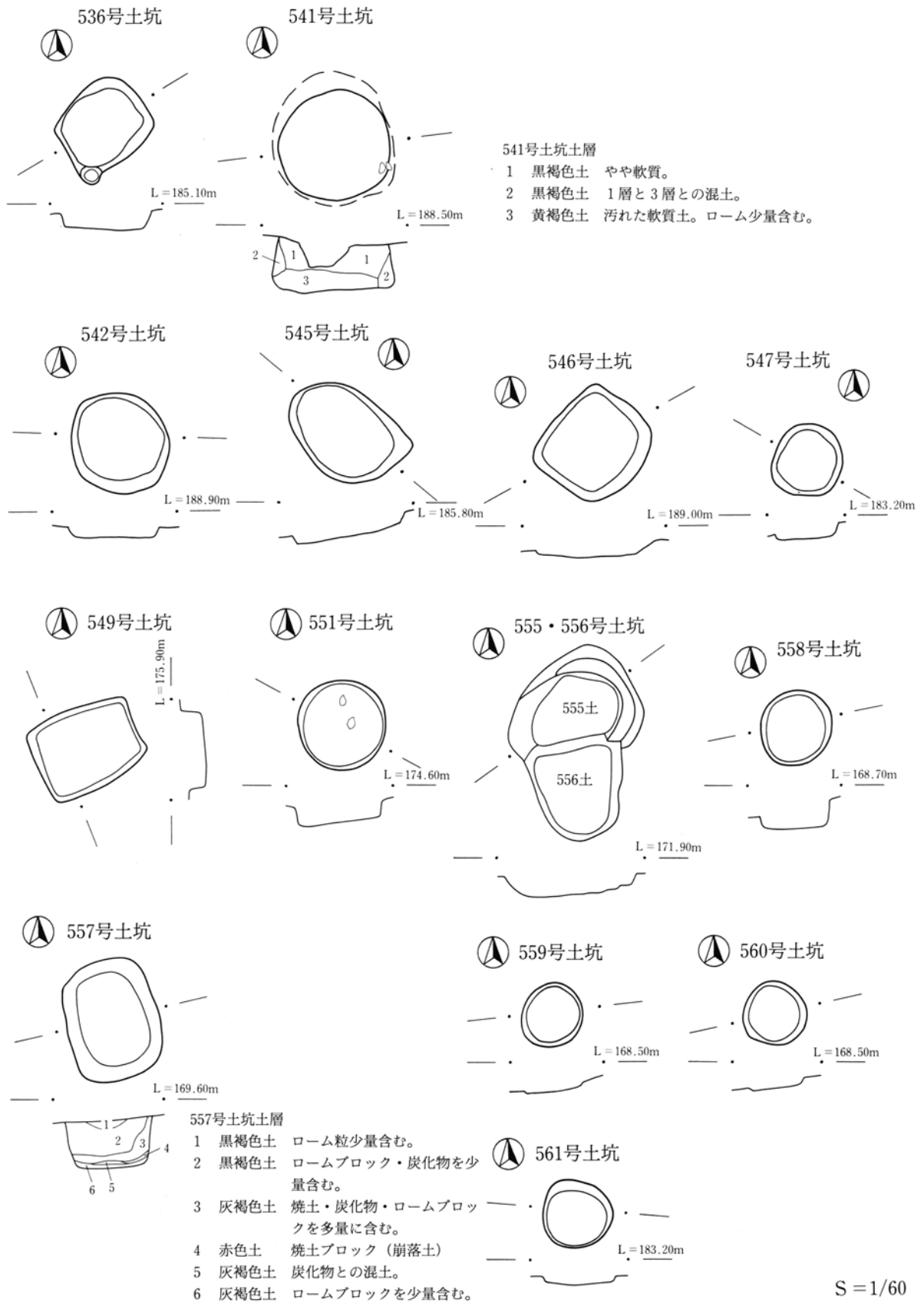
S = 1/60

第860図 時期不明土坑平面図 (15)



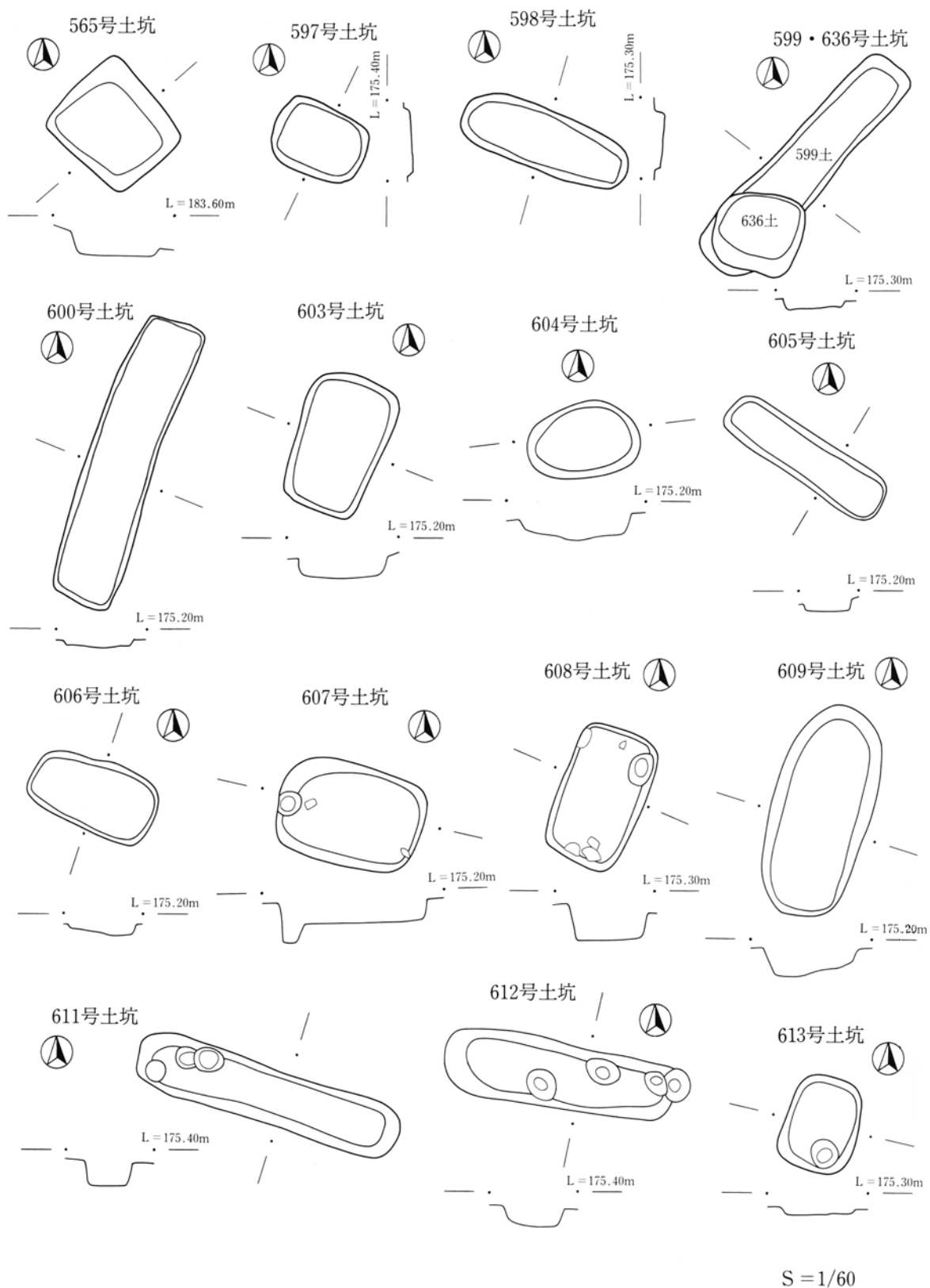
第861図 時期不明土坑平面図 (16)

第3章 検出された遺構と遺物

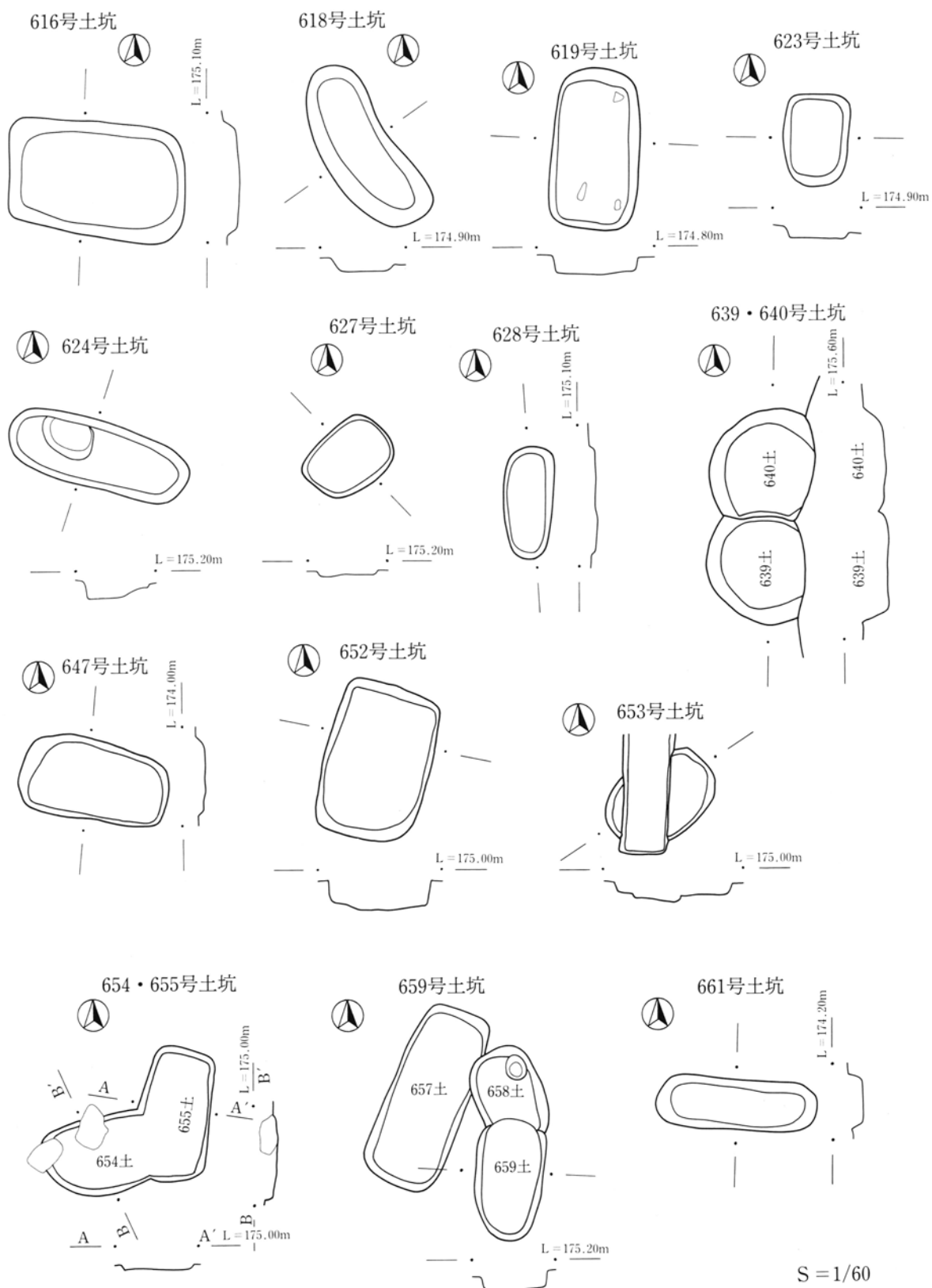


S = 1/60

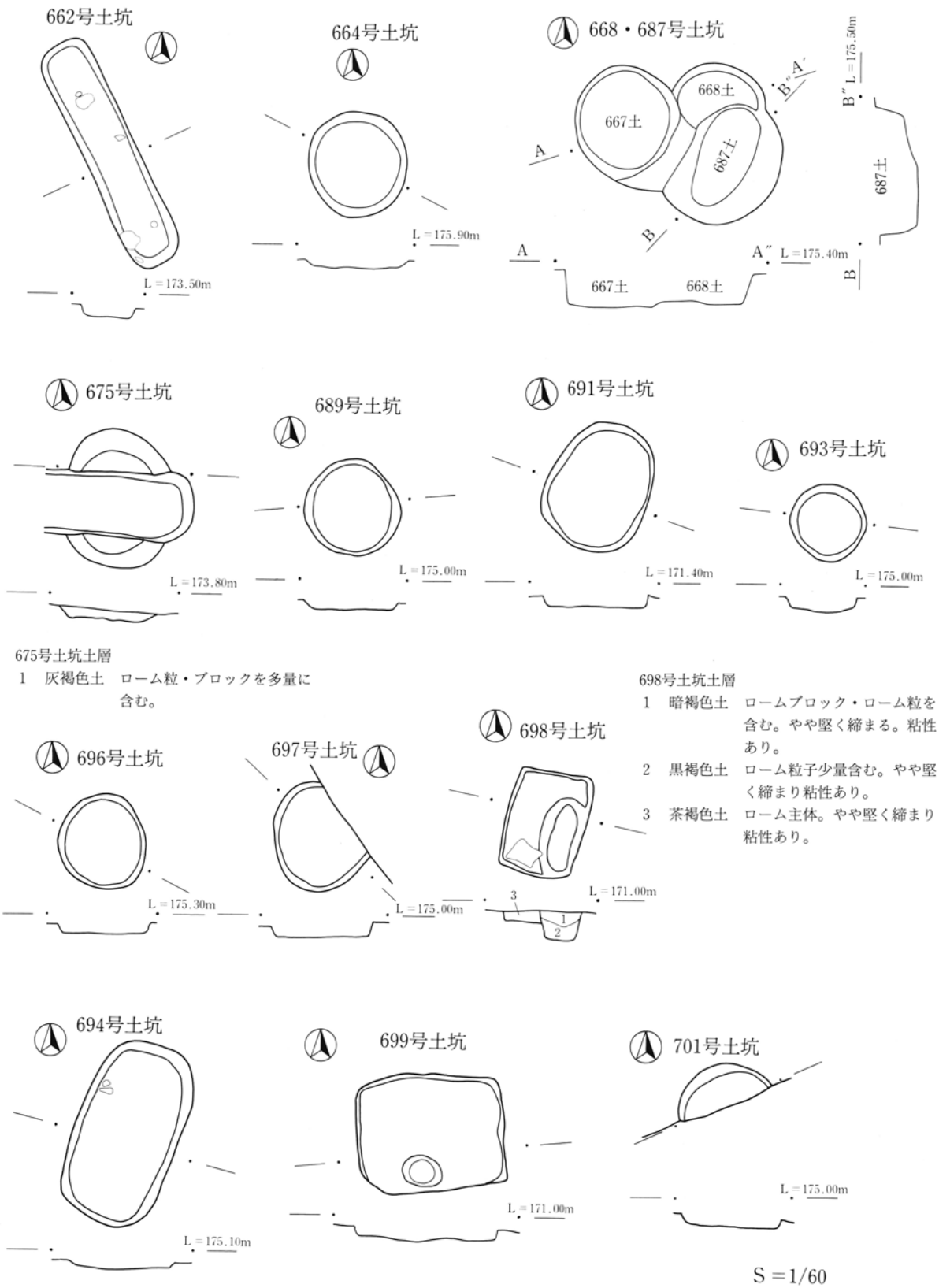
第862図 時期不明土坑平面図 (17)



第863図 時期不明土坑平面図 (18)

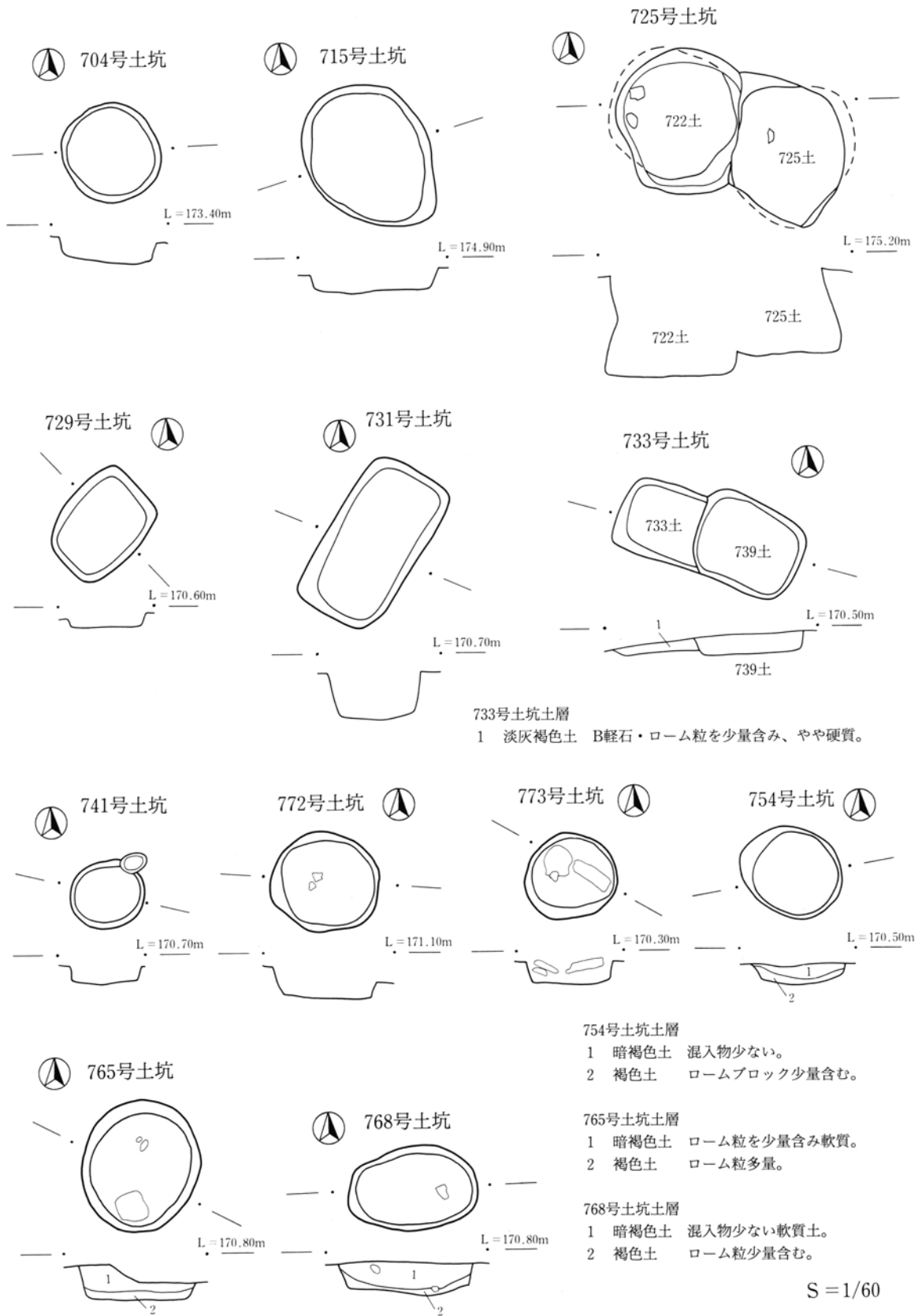


第864図 時期不明土坑平面図 (19)



第865図 時期不明土坑平面図 (20)

第3章 検出された遺構と遺物



第866図 時期不明土坑平面図 (21)

第 8 節 時期不明の遺構と遺物

表127 時期不明土坑一覧表

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
13	27-22	楕 円	0.78	0.48	51	
14	27-22	楕 円	1.52	0.90	23	
24	27-17	楕 円	1.20	(1.14)	49	
26	28-17	円 形	1.47	(1.34)	70	
29	22-19	円 形	1.24	1.20	30	
30	16-23	楕 円	0.84	0.66	18	
36	17-27	円 形	1.50	(1.23)	32	
37	15-24	不 整 円	0.84	(0.78)	15	
43	17-29	楕 円	0.91	0.72	9	
44	16-32	円 形	0.78	0.75	28	
45	16-34	円 形	1.02	1.00	24	
46	16-34	楕 円	1.04	0.96	17	
47	16-35	楕 円	1.28	1.06	24	
48	17-36	円 形	0.74	0.74	33	
51	8-94	長 方 形	2.40	0.84	39	
52	8-94	長 方 形	(1.66)	1.08	18	
53	8-94	長 方 形	1.54	0.86	19	
54	8-94	長 方 形	1.82	0.86	50	
55	9-94	円 形	2.00	1.04	36	
56	9-94	不 整 楕 円	1.22	(0.94)	44	
58	8-93	長 方 形	(0.90)	0.80	37	
59	8-93	長 方 形	1.46	1.06	36	
61	9-93	楕 円	1.28	0.72	49	
62	9-93	楕 円	1.76	0.61	78	
63	9-93	長 方 形	1.44	1.16	27	
64	9-93	楕 円	0.83	(0.39)	13	
65	9-93	楕 円	1.82	0.92	65	
66	9-93	方 形	0.78	(0.62)	26	
67	9-93	楕 円	1.42	(9.60)	29	
68	9-93	方 形	0.96	7.20	49	
69	10-94	楕 円	0.92	0.84	20	
70	10-92	楕 円	1.58	1.12	37	
71	10-93	円 形	1.12	0.94	91	
72	10-93	楕 円	1.12	(1.10)	42	
73	11-93	長 楕 円	2.14	0.84	49	
74	11-92	不 整 楕 円	1.44	1.06	65	
77	10-91	楕 円	1.10	0.78	33	
79	12-90	長 方 形	1.20	0.86	21	
80	12-88	長 方 形	1.14	0.80	22	
81	13-88	円 形	0.98	0.90	16	
85	17-86	長 楕 円	1.08	0.40	18	
87	16-82	円 形	1.02	0.98	53	
88	15-81	長 楕 円	(1.94)	(0.76)	46	
91	13-88	円 形	0.94	0.96	20	
92	13-88	方 形	0.74	0.66	21	
93	16-77	楕 円	1.04	0.76		
97	10-94	方 形	2.32	1.83	40	
105	12-91	楕 円	1.04	0.46	31	
106	12-91	不 整 円	0.89	0.80	24	
109	11-90	楕 円	0.84	0.69	26	
118	11-89	楕 円	0.78	0.78	6	
119	12-90	楕 円	0.83	0.83	35	
127	13-89	長 方 形	1.32	1.32	48	
128	14-90	不 整 楕 円	1.46	1.46	8	
135	15-89	楕 円	1.40	1.40	18	

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
136	14-89	楕 円	1.54	0.82	17	
137	13-88	不 整 楕 円	2.06	0.92	30	
141	13-87	不 整 楕 円	1.99	0.97	9	
142	13-88	不 整 楕 円	1.21	0.83	10	
150	13-72	不 整 楕 円	2.73	1.83	50	
151	10-94	楕 円	1.91	1.18	23	
153	10-94	方 形	(1.38)	1.21	26	
154	10-94	楕 円	1.65	(0.60)	28	
155	10-94	長 方 形	2.72	(1.10)	54	
161	14-57	楕 円	1.13	(0.58)	15	
162	14-57	楕 円	0.93	0.84	16	
165	15-57	長 楕 円	1.66	0.39	13	
167	15-56	長 方 形	(1.10)	0.58	9	
168	14-55	長 方 形	(0.96)	0.72	19	
169	14-55	長 方 形	1.67	1.26	18	
170	14-55	長 方 形	2.28	0.85	20	
171	14-56	円 形	0.86	(0.38)	28	
172	15-55	長 方 形	3.14	1.32	40	
173	15-56	長 方 形	(2.04)	1.09	21	
174	15-57	長 方 形	1.90	1.08	29	
176	14-57	楕 円	0.99	0.57	24	
177	14-56	長 楕 円		0.96	28	
178	15-58	長 楕 円	1.22	0.47	8	
179	15-56	長 方 形	3.93	0.53	24	
180	14-56	長 方 形	1.78	0.82	7	
182	15-56	長 方 形	0.92	0.51	10	
183	15-54	方 形	1.77	1.65	91	
184	15-54	不 整 円	0.60	0.58	22	
187	14-52	楕 円	0.63	0.62	20	
188	14-52	円 形	1.08	0.92	27	
189	14-52	長 方 形	1.28	0.67	20	
190	13-52	不 整 楕 円	1.18	0.68	22	
191	13-52	長 方 形	1.04	0.84	10	
192	13-54	長 方 形	1.27	0.87	21	
193	14-54	方 形	0.90	0.72	18	
194	14-54	楕 円	0.89	0.73	8	
195	14-54	不 整 楕 円	2.27	1.65	65	
196	14-54	長 方 形	(1.05)	0.78	21	
200	14-56	長 方 形	2.24	0.80	23	
201	13-55	長 方 形	4.34	0.81	22	
202	14-56	円 形	0.83	0.76	23	
203	13-55	楕 円	0.98	0.62	65	
205	13-55	長 方 形	2.86	0.67	9	
208	14-61	長 楕 円	1.60	0.88	35	
213	12-57	長 楕 円	0.78	0.50	9	
215	12-57	円 形	1.04	0.85	40	
216	12-57	円 形	0.96	0.90	14	
217	12-58	長 方 形	1.70	0.72	20	
223	13-53	楕 円	1.14	0.80		
229	12-54	楕 円	0.88	0.63	60	
230	12-54	長 方 形	0.70	0.48	6	
231	15-57	円 形	0.90	0.76	8	
232	12-57	楕 円	1.36	0.96	42	
239	12-57	円 形	1.00	0.92	29	
241	12-50	長 方 形	1.28	0.91	24	

第3章 検出された遺構と遺物

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
261	14-52	長 楕 円	1.92	0.58	12	
262	16-56	円 形	0.68	0.63	26	
263	16-57	円 形	0.82	0.75	34	
283	13-62	円 形	0.93	0.46	23	
284	13-61	楕 円	1.08	0.66	20	
285	14-62	楕 円	0.81	0.45	14	
287	15-40	円 形	0.78	0.70	55	
291	28-19	円 形	1.70	1.38	83	
292	29-19	円 形	0.98	0.96	35	
294	29-19	円 形	1.30	1.14	121	フラスコ状
295	29-19	円 形	1.06	1.06	16	
296	28-19	円 形	0.98	0.95	21	
303	17-39	楕 円	1.42	1.25	13	
311	16-29	円 形	1.25	1.25	60	フラスコ状
315	16-30	円 形	0.96	0.94	35	
317	15-30	不 整 円	1.17	1.02	67	
320	14-29	不 整 円	1.34	1.20	40	
321	30-17	円 形	1.48	1.30	107	
322	28-17	円 形	1.00	(0.98)	69	
323	28-17	円 形	1.06	1.00	28	
326	15-39	円 形	1.10	(0.84)	44	
327	15-39	円 形	1.70	1.60	16	
335	14-41	円 形	1.02	0.96	13	
348	14-41	楕 円	0.70	(0.41)	28	
401	11-38	円 形	0.91	0.89	9	
402	11-39	不 整 円	1.40	1.10	13	
403	29-17	円 形	0.73	0.71	77	フラスコ状
405	29-17	円 形	1.23	1.14	43	
476	7-94	長 楕 円	2.21	1.02	73	
480	6-95	長 方 形	0.99	0.94	36	
481	6-96	長 楕 円	1.40	1.06	42	
482	5-96	長 楕 円	1.62	1.00	48	
483	4-96	楕 円	1.24	0.86	30	
485	4-96	長 方 形	1.12	0.67	22	
486	5-97	円 形	1.10	0.96	48	
487	5-98	長 楕 円	1.32	0.78	27	
493	2-89	円 形	1.07	1.03	28	
497	4-85	長 方 形	1.74	1.10	29	
500	5-95	長 方 形	1.50	0.95	42	
502	5-95	長 楕 円	1.94	1.24	64	
504	6-96	長 方 形	1.56	0.84	28	
505	6-95	不 整 楕 円	1.43	1.04	62	
506	6-95	楕 円	1.74	1.09	68	
507	6-95	長 方 形	1.36	1.02	23	
508	6-93	長 楕 円	1.52	0.92	50	
509	6-94	楕 円	1.17	0.94	24	
510	7-93	楕 円	1.16	0.92	10	
511	7-93	長 方 形	1.62	0.98	45	
514	5-92	円 形	1.12	1.10	23	
515	5-92	円 形	1.28	1.04	33	
518	4-95	楕 円	1.16	0.78	21	
519	4-95	円 形	1.39	1.22	26	
521	4-93	楕 円	2.12	1.34	34	
522	4-92	円 形	(1.40)	1.00	20	
523	3-94	円 形	1.27	(0.91)	30	

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
525	4-91	長 方 形	1.26	0.75	23	
526	3-92	長 方 形	1.53	0.82	42	
527	3-92	方 形	1.54	1.40	35	
529	4-92	長 方 形	1.00	0.66	20	
531	4-93	長 方 形	1.84	1.04	30	
532	4-93	楕 円	(1.10)	(0.74)	5	
533	3-93	楕 円	0.92	0.74	18	
534	3-93	楕 円	1.52	0.75	18	
536	4-93	不 整 円	0.94	0.82	29	
539	3-94	楕 円	(1.23)	0.97	50	
541	0-92	円 形	1.39	1.25	65	フラスコ状
542	0-91	円 形	1.12	1.04	30	
545	3-94	楕 円	1.34	0.90	15	
546	4-95	方 形	1.12	1.02	30	
547	5-95	円 形	0.77	0.76	12	
549	7-75	方 形	1.10	0.84	26	
551	9-76	円 形	0.94	0.90	20	
555	25-90	不 整 円	1.35	(1.05)	22	
556	24-90	不 整 楕 円	0.92	(0.91)	20	
557	26-92	楕 円	1.25	0.94	57	
558	25-96	円 形	0.80	0.70	26	
559	26-97	円 形	0.68	0.62	7	
560	26-97	円 形	0.67	0.66	4	
561	6-89	円 形	0.75	0.71	10	
565	5-84	方 形	1.12	0.01	19	
597	7-58	方 形	0.96	0.74	10	
598	7-58	長 楕 円	1.76	0.60	13	
599	7-58	長 方 形	2.70	0.60	24	
600	7-58	長 方 形	2.98	0.68	9	
603	8-57	長 方 形	1.40	0.94	28	
604	8-57	楕 円	1.10	0.76	28	
605	8-57	長 方 形	1.80	0.50	6	
606	7-57	楕 円	1.28	0.72	6	
607	8-56	楕 円	1.46	1.00	24	
608	8-56	長 方 形	1.40	0.86	16	
609	7-56	長 楕 円	2.40	0.96	9	
611	6-56	長 楕 円	2.74	0.56	22	
612	6-56	長 楕 円	2.34	0.70	23	
613	6-55	楕 円	0.98	0.74	10	
616	5-53	長 方 形	1.78	1.10	20	
618	5-53	長 楕 円	1.80	0.72	15	
619	5-52	長 方 形	1.60	0.88	27	
623	6-53	長 方 形	0.92	0.66	10	
624	8-56	長 楕 円	1.86	0.66	14	
627	7-58	楕 円	0.88	0.64	8	
628	6-54	楕 円	1.10	0.48	9	
636	7-58	楕 円	(0.83)	(0.78)	(29)	
639	6-61	円 形	(1.10)	(1.00)	24	
640	6-61	円 形	(1.04)	(1.02)	26	
647	8-52	楕 円	1.50	0.80	10	
652	8-58	長 方 形	1.52	1.06	35	
653	9-58	楕 円	1.18	0.70	13	
654	9-59	楕 円	1.40	0.76	12	
655	9-58	長 方 形	1.30	0.72	13	
659	7-57	楕 円	(1.20)	0.68	19	

第8節 時期不明の遺構と遺物

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
661	7-54	長 楕 円	1.60	0.50	20	
662	8-52	長 楕 円	1.44	0.54	18	
664	7-63	円 形	1.08	0.56	10	
668	8-62	円 形	0.90	(0.58)	15	
675	6-53	円 形	1.36	1.22	12	
687	8-62	楕 円	1.30	(0.94)	36	
689	7-55	円 形	0.98	0.94	11	
691	11-44	楕 円	1.32	1.04	14	
693	7-55	円 形	0.80	0.74	12	
694	7-56	楕 円	1.86	1.02	19	
696	7-56	円 形	0.96	0.90	10	
697	7-56	円 形	1.10	(1.00)	12	
698	10-39	方 形	1.04	0.80	16	
699	10-39	方 形	1.50	1.20	15	

土坑 No	グリッ ト位置	平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (cm)	備 考
701	7-54	円 形	0.96	(0.28)	10	
704	6-49	円 形	1.00	0.98	26	
715	9-54	不整楕円	1.62	1.24	23	
725	9-56	不整 円	1.40	(1.22)	90	フラスコ状
729	13-42	長 方 形	1.09	0.89	14	
731	13-42	長 方 形	1.78	0.94	48	
733	13-42	長 方 形	0.80	0.75	11	
741	12-38	円 形	0.72	0.68	19	
754	13-39	円 形	1.06	0.85	24	
765	12-40	楕 円	1.32	1.15	37	
768	10-39	楕 円	1.29	0.84	36	
772	10-41	円 形	1.07	1.00	34	
773	13-38	円 形	0.88	0.87	24	

- 497号土坑 弥生時代に伴うと考えられる、大形の打製石斧が1点出土。
- 511号土坑 弥生時代に伴うと考えられる、大形の打製石斧が1点出土。
- 571号土坑 縄文土器、土師器・須恵器片等が若干出土。
- 590号土坑 凹石が1点出土。
- 608号土坑 縄文土器、弥生時代中期の土器、土師器片等が若干出土。
- 619号土坑 凹石が1点出土。
- 633号土坑 弥生時代中期の土器片、土師器・須恵器片、瓦片等および打製石斧1点、有溝石製品が出土。
- 638号土坑 円筒埴輪片、土師器片、中世内耳鍋・カワラケ片等が出土。
- 677号土坑 弥生時代中期、古墳時代初頭の土器片、土師器片等および大形打製石斧が1点出土。
- 699号土坑 縄文土器、弥生時代中期の土器片、土師器・須恵器片等が出土。
- 707号土坑 縄文土器、土師器・須恵器片等が出土。
- 708号土坑 縄文時代中期初頭の土器片、土師器片等が若干出土。他に、凹石が2点出土。
- 709号土坑 縄文土器、弥生時代中期の土器片、土師器片、中世内耳鍋片等が出土。
- 718号土坑 弥生時代中期の土器片、土師器・須恵器片等が若干出土。
- 724号土坑 縄文土器、弥生時代中期の土器片、土師器・須恵器片等が若干出土。
- 717号土坑 弥生時代中期の土器片、土師器片、中世内耳鍋片等が出土。
- 726号土坑 縄文土器、土師器片等が若干出土。
- 752号土坑 縄文土器、弥生時代中期の土器片、土師器・須恵器片等が出土。
- 762号土坑 縄文時代中期の土器片、土師器・須恵器片等が出土。

2. 追加資料

縄文時代の埋甕である。本来ならば、第2節の縄文時代の中で扱う資料であるが、資料作成の都合からここで扱った。

埋甕は3箇所検出され（1・2号埋甕としたものは、その後欠番となった）、全て縄文時代中期の土器である。C区とした東側台地の西寄りに位置し、検出された土器（埋甕）の周囲を精査したが、これに伴う掘込み状の遺構は認められなかった。包含層中からの出土であり、包含遺物の可能性もあるが、直立して出土していること等から、単独の埋甕として取り扱った資料である。

以下、個々の土器について記す。

3号埋甕（第867図1）

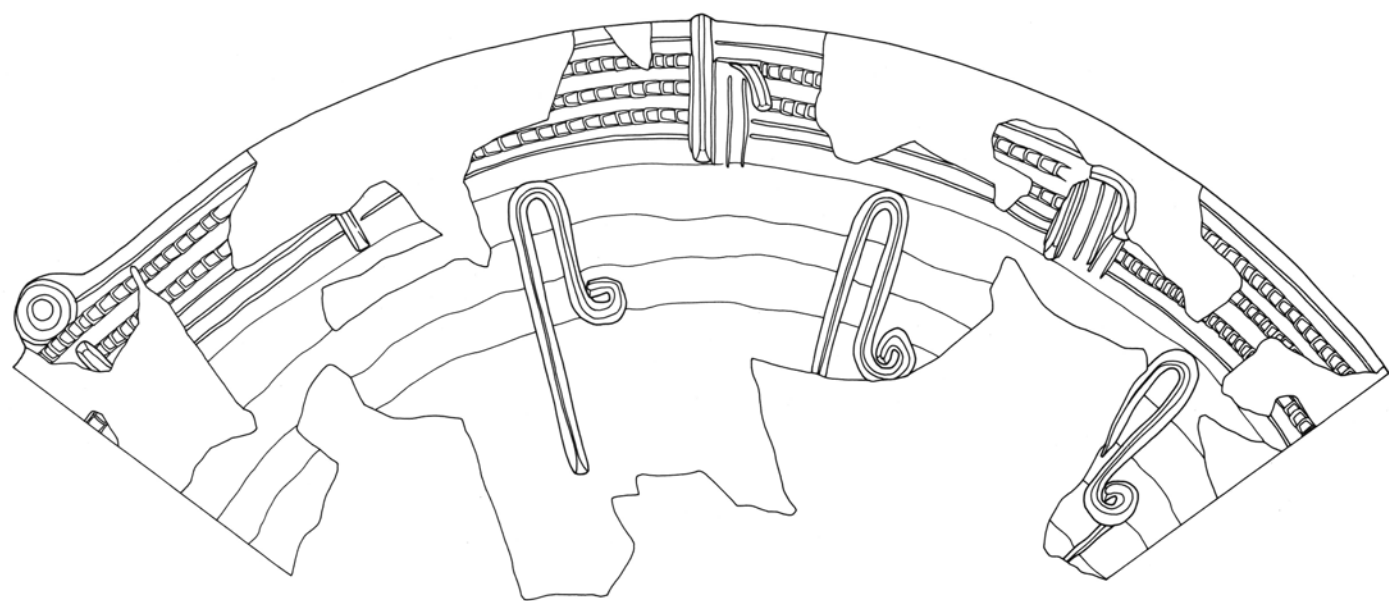
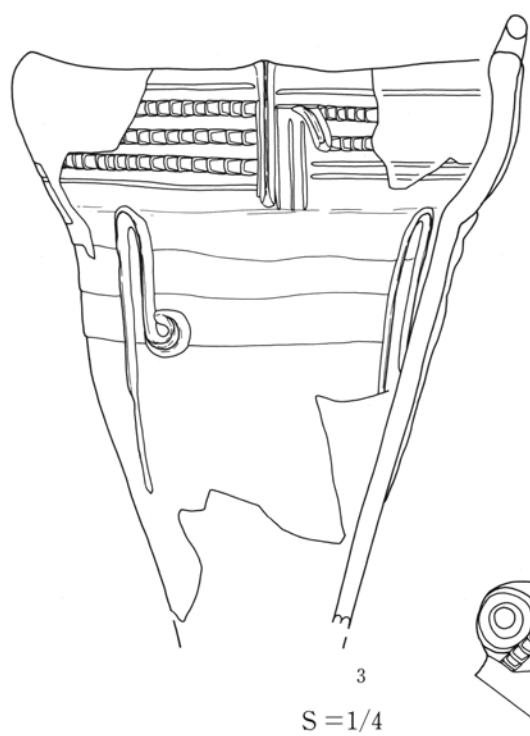
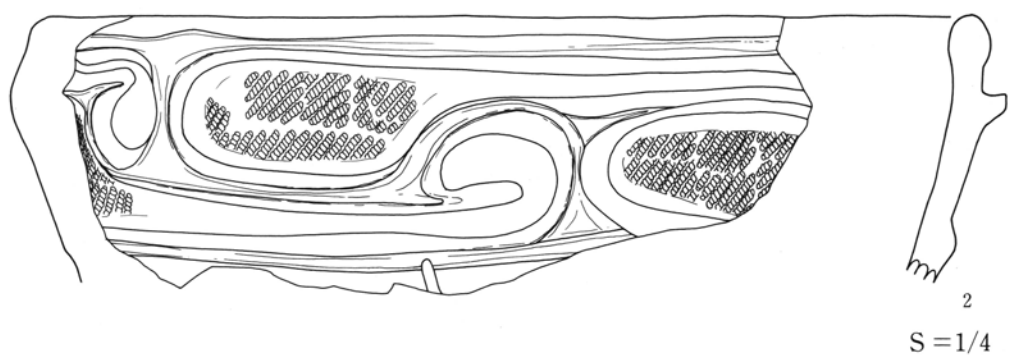
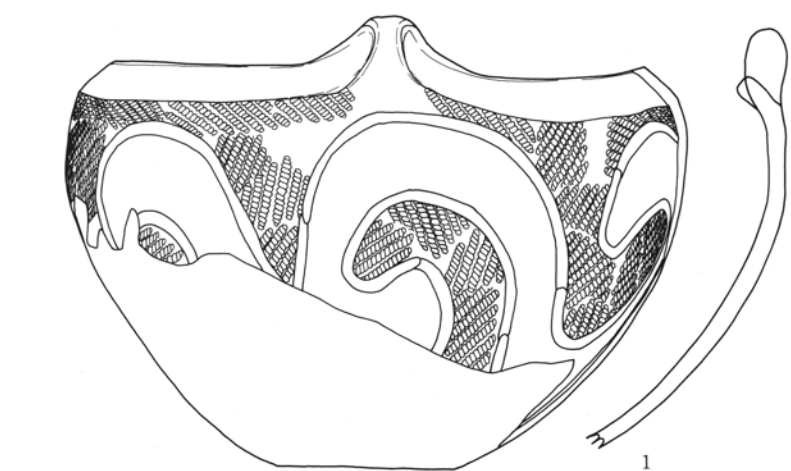
出土した埋甕は、内反する平口縁の鉢形を呈し、口縁に突起状の波頂部を1箇所もつ。波頂部は隆帯状に盛り上がり、口縁下には無文帯が巡る。胴部には、沈線で横位のS字状の文様を描き、文様内を無文とし、それ以外にRLの縄文を横位・縦位回転により充填している。底部付近を欠損しているが、胴部の傾きから深鉢形にはならないものと考えられる。

4号埋甕（第867図2）

出土した埋甕は、平口縁となる大形の深鉢形を呈するもので、胴部を欠損する口縁部のみが出土した。口縁部には、隆帯と太い沈線で渦巻き状の文様が描かれ、さらに渦巻き間に楕円状の文様を描く。楕円状の文様内には、LRの縄文が施され、口縁部文様帯を太い沈線で区画している。

5号埋甕（第867図3）

出土した埋甕は、平口縁となる口縁部が膨らむ深鉢形を呈するもので、口縁部には円形の孔を有する突起をもつ。口縁部には、半裁竹管による平行沈線と押し引き状の連続爪形をもつ沈線を横位に数状巡らせ、縦位および曲線的な隆帯を4単位に配する。胴部には、口縁部の各単位間に垂下する逆U字状の隆帯を施すが、片方が直線的に垂下するのに対し、もう一方は途中で渦状となる。また、胴部上半には、輪積み痕が横位に段状となって残されている。



第867図 縄文時代 埋甕

第4章 考 察

1 縄文時代前期中葉土器群について

縄文時代前期中葉土器群については、これまで多くの研究者の論考が発表されてきたが、未だ混沌としている状況が続いていると言えよう。特に、この時期の鍵とも言える有尾式土器にいたっては、胎土への繊維の有無の問題も含め、混迷を深めている土器であると言える。本遺跡においても、II期とした土器群の中に、IV群の有尾式土器が含まれており、櫛歯状工具による連点状刺突で文様を描く類の土器も存在している。

ここでは、この有尾式土器について、群馬県内での出土の実態を検討し、その文様変遷からの細分、および周辺地域での様相について考えてみたい。

研究の動向

有尾式土器の研究は、一つの画期として1977年に発表された戸田・渋谷両氏による論文「神ノ木式・有尾式土器の研究」、1979年の新井氏による「黒浜式土器小考」を皮切りに活発となり、これまでに多くの論考が相次いで発表されてきた。1990年に埼玉県考古学会によるシンポジウム「大木、有尾、そして黒浜」、1997年2月には縄文セミナーの会による第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」が開催されたのは、周知の通りである。

有尾式土器は、1956年に『信濃考古綜覧 下巻』で型式設定され、1957・1958年の樋口昇一氏、1965年の林茂樹氏、1970年の大久保知己氏、1978年には「巾田式」を設定した福島邦男・森嶋稔氏、1979年の戸田哲也・渋谷昌彦氏、1982年の金井正三氏と、長野県を中心に研究が進められてきた土器群であった。その後の、群馬県内での膨大な資料増加を見るに至っては、むしろ北関東を中心とした群馬県・埼玉県側での論議へと研究の場が移っていった経緯がある。

関東地方、群馬県内での有尾式土器の存在を最初に示したのは、「群馬県における有尾式土器」(秋池 1965)である。その後、埼玉県内の資料として「荒川流域における有尾式類似土器」(高野 1974)が発表される。

1979年には、黒浜式土器の細分を提示した「黒浜式土器小考」(新井)が発表され、この中で黒浜式土器とは異なる、関東地方(埼玉県比企周辺)の有尾式土器に近似する土器を「有尾系土器」と呼称した。さらに、有尾式土器は神ノ木式土器に出自を求めることのできる土器群として、氏の黒浜式土器の5細分案の中で、第Ⅲ段階までに対比させる考えを示している。

1983年の「群馬県における神ノ木式・有尾式土器について」(秋池・新井)では、多量の繊維を含んだ土器について、地域差という観点から黒浜式土器との関係が強い有尾式土器とし、細分の必要性については否定している。

翌1984年の「群馬県における縄文時代前期の土器研究(1)」(谷藤・関根・他)では、施文される縄文原体の差異を含め、有尾式土器の細分の可能性を示唆すると共に、福井県鳥浜貝塚出土の土器が有尾式土器と類似することを示唆した。

この頃を前後して群馬県内では概期の遺跡が相次いで調査され、膨大な資料の蓄積が成された。主な遺跡に、分郷八崎遺跡、見立溜井遺跡、中棚遺跡、糸井宮前遺跡、善上遺跡、三後沢遺跡等が上げられる。この内、見立溜井遺跡(鳥羽 1995)の報告の中で、第7群I類土器を「見立式土器」として型式設定し、中部

第4章 考 察

地方の有尾式土器は無繊維土器群を主体にしているのに対し、見立式土器は有尾式土器との類縁関係を有するが関東地方における繊維土器の伝統下に成立するとしている。

1986年の糸井宮前遺跡（谷藤・関根）の報告では、それまでの各報告書の報文内容を検討し、有尾式土器が櫛歯状工具による連点状刺突をもつ類と、半裁竹管具による爪形刺突を主体とする類に時間差があることを示唆し、細分できることを報じ、関根氏がその変遷図を提示した。

1987年には、第1回縄文セミナー「縄文前期の諸問題」が開催され、森嶋稔・児玉卓文の両氏の発表の中で、以前に森嶋氏が提唱した「巾田式」を解消する発言があった。

1988年には、「北関東における有尾式土器の変遷」（谷藤）が発表され、戸田・渋谷（1977）の神ノ木式土器から有尾式土器へ系統変遷するとして延長上から、有尾式土器の細分を行っている。また、有尾式土器を繊維の有無で分別することは無理とし、別型式名の設定を否定している。

1989年には、「羽状縄文系土器の文様構成（点描）1」（黒坂）、「黒浜式土器成立の背景について」（細田）、「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」（金子）の各論文が相次いで発表された。これらの論文に共通している点は、「有尾式土器」とする型式名称を使わずに「大形菱形文系土器群」と呼称していることと、それぞれの扱う各土器群の系譜を東北南部に求めていることが最大の特徴と言えよう。しかしながら、個々の土器の変遷観は、それぞれ微妙に異なっているようである。

この3氏の論文と奥野麦生氏の論文「黒浜式土器の系統性とその変遷」（1989）をベースに、1990年の埼玉県考古学会によるシンポジウム「大木、有尾、そして黒浜」が開催されたわけである。

翌1991年には、このシンポジウムを受けて「縄文時代前期中葉土器群の編年と地域性」（鳥羽）が発表された。この論文では、先の金子論文およびシンポジウムに対し、鳥羽氏が以前に提唱した「見立式土器」を再設定しなおしたものである。

1992年の「千葉県勝浦市上長者台遺跡」（新井）の報告の中で、「…（前略）…北関東に分布するものをも含め、有尾式土器として扱う意見もある（註11）。その方がむしろ自然であろう。…（後略）…」とし、それまでの「有尾系土器」とした呼称を「有尾式土器」へ統一する考えを示した。また、「見立式土器」をはじめとする新型式の設定の必要性は否定している。

1997年2月には第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」が開催された。このセミナーでは、有尾式土器を中心に、近年新潟県で提唱された「根小屋式土器」（寺崎1996）をめぐる、東北地方ならびに北陸地域での土器様相のあり方について検討がなされた。

以上が、有尾式土器をめぐる動向である。有尾式土器、見立式土器、大形菱形文系土器群といった混迷した土器群であったが、第10回縄文セミナーでの検討で、ある程度の整理が図れたと言える。また、新たな問題として、地域間の土器編年のずれが見出された観もあり、今後の課題と言えよう。

有尾式土器の出土実態

北関東、特に資料の豊富な群馬県内の各遺跡での概期土器の出土のあり方について、再度検討してみる。

群馬県西部

甘楽町白倉下原遺跡（木村1994）

3軒の住居が検出、86号住は爪形刺突を出土。土坑からは、爪形刺突・平行沈線が出土する。遺構外からは、縦位連点状刺突の土器が数点見られるが、遺跡の主体は爪形刺突である。

富岡市南蛇井増光寺遺跡（伊藤1992）

豊富な遺物量を出土させる住居が4軒検出。いずれも、爪形刺突と沈線による土器群で構成されている。連点状刺突の土器は見あたらない。

安中市清水Ⅰ遺跡（長井1996）

J1・2・3号住からは、連点状刺突および関山Ⅱ式・神ノ木式が混在して出土しているが、その主体は爪形刺突と沈線であると考えられる。

安中市吉田原遺跡（関根1993）

J12号住からは、関山Ⅱ式・神ノ木式および連点状刺突が出土しているが混在と見られ、爪形刺突と沈線を主体と考えられる。176号土坑でも、爪形刺突と沈線の土器が出土している。

吉井町神保植松遺跡（本書）

遺構外からの土器であるが、神ノ木式的な文様構成をもつ関山Ⅱ式と、多量の連点状刺突の土器を出土させ、爪形刺突や沈線、連続爪形文および黒浜式土器をも出土させている。また、上の坊式土器と考えられる土器も1点ある。

群馬県北部

北橋村西ノ平遺跡（富沢1996）

調査されたのは、J1号住の1軒だけである。関山Ⅱ式を主体とする住居であるが、清水ノ上Ⅱ式土器を伴出させている。

北橋村下箱田向山遺跡（飯島1990）

5・8号住および44号土坑は、関山Ⅱ式が主体となるが、5・8号住からは神ノ木式（束の縄文）が伴出している。また、3・4号住は爪形刺突を主体とする住居であり、3号住からは口縁部に縄文帯をもつ土器が出土している。連点状刺突の土器は見られない。

北橋村分郷八崎遺跡（柿沼1986）

6号住は爪形刺突と連続爪形・沈線が主体をなし、関山Ⅱ式や連点状刺突の土器を混在させている。8号住も同様に爪形刺突と連続爪形・沈線が主体をなし、関山Ⅱ式と連点状刺突の土器は混在している。この8号住のうち、櫛歯状工具による縦位の連点状刺突をもつ土器は、住居の覆土上層からの出土であることが、報告書の分布図から読みとれる。つまり、この分郷八崎遺跡では、連点状刺突の土器と連続爪形の土器とは共伴していないことが解る。

赤城村見立溜井遺跡（鳥羽1985）

J7号住では、口縁部に縦位沈線と爪形刺突、縄文帯と爪形刺突、爪形刺突・沈線のみの土器から構成され、関山Ⅱ式や連点状刺突の土器を混在させている。J9号住においても、縄文帯と爪形刺突・条線、爪形刺突のみの土器が主体で、関山Ⅱ式や連点状刺突の土器が混在している。J5・6号住においても同様の状況といえよう。198・142号土坑は、連点状刺突の土器で構成され、194号土坑では連点状刺突と爪形刺突、沈線、粗い縄文施文の土器が共伴している。この状況から、この見立溜井遺跡では、連点状刺突の土器を出土させる遺構と、爪形刺突を主体にする遺構とが異なることが解る。また、全体的には、爪形刺突の土器を主体とする遺跡であり、連点状刺突の土器は見られるが、連続刺突の土器はほとんど見られない。

赤城村見立大久保遺跡（上同）

検出された遺構は土坑だけであるが、5基の土坑からは全て連点状刺突の土器が出土しており、遺構外出

第4章 考 察

土器を見ても同様の土器が主体をなしている。このことから、この遺跡は連点状刺突の土器を主体としていたものと考えられよう。

赤城村勝保沢中ノ山遺跡（石坂1988）

1号住からは、爪形刺突の土器と、縄文帯・条線・連点状刺突の土器が出土している。また、他の遺構からは関山式土器が出土し、包含層遺物の中に口縁部へ神ノ木式的な縦位の櫛歯状連続刺突を施す土器が見られる。

昭和村糸井宮前遺跡（関根1978）

7号住は、連点状刺突の土器だけを出土させている。63号住では、小片が混在する形で良好ではないが、大木式土器や根子屋式土器が見られる。67号住では爪形刺突・沈線の土器が、98号住居では連点状刺突、爪形刺突、隆帯をもつ土器と共に、根子屋式土器が出土している。111号住は沈線と連続爪形の土器が主体をなす。116号住居では、沈線の土器を主に、黒浜式土器や大木式土器が出土している。135号住では連続爪形の土器を主体とし、143号住では黒浜式土器と網目状撚糸文土器・無文土器が出土している。112号土坑からは、連点状刺突の土器と、2個体の縄文施文土器が出土している。この糸井宮前遺跡を見ると、明らかに連点状刺突の土器が伴う遺構と、爪形刺突、連続爪形の土器を主とする遺構が存在していることが解る。

昭和村中棚遺跡（富沢1985）

2号住では波頂部に渦巻き状の隆帯をもち、沈線を施す土器と、爪形刺突の土器が出土している。12号住からは、波頂下に縦位の沈線をもつ土器、爪形刺突の土器、さらには黒浜式土器や大木式に近い土器が出土しており、併せて縄文施文土器の個体も多い。16号住では、縄文帯と爪形刺突をもつ土器で構成されるようである。遺構外出土の土器を見ると、関山Ⅱ式土器や連点状刺突の土器は極めて少なく、爪形刺突ないし連続爪形・沈線による土器が主となり、黒浜式土器や大木式土器が目につく。さらに、口縁部に横位の矢羽根状沈線帯をもつ土器が存在し、長野県松原遺跡の土器と近い観を受けるが、やや異質な土器である。

月夜野町三後沢遺跡（菊池1986）

J 4号住では、連点状刺突の土器も僅かに見られるが混在の可能性が高く、縄文帯と爪形刺突をもつ土器、爪形刺突のみの土器が主体を占めている。J 5号住では、連点状刺突、連点状刺突と沈線、連点状刺突と爪形刺突の土器と、縄文帯と爪形刺突及び条線、縄文帯と爪形刺突の土器、爪形刺突のみの土器、爪形刺突と沈線の土器、さらには沈線のみの土器で構成されている。なお、沈線間に施される爪形刺突が、一見すると連点状刺突風に見える土器も存在する。J 7号住は、一部の混在を見るが、関山Ⅱ式土器が主体を成していると言えよう。

月夜野町善上遺跡（中村1986）

J 11号住は、縄文施文の土器が主体を成し、明確に伴う有文の土器は不明であるが、大木式土器が混在している。J P 346では大木式土器と黒浜式土器がみられ、J P 42では大木式に近い胴部文様に沈線による菱形ないしは鋸歯状の文様をもつ土器が出土している。また、J P 34から出土した縄文を全面に施す浅鉢を呈する土器であるが、その器形、器厚の薄さから根子屋式土器とも考えられる。

群馬県東部

前橋市芳賀東部団地遺跡群（富沢1990）

J 12号住からは、沈線を施す土器が見られるものの、縄文施文の土器が主体である。J 17号住は、縄文施文の土器と黒浜式土器、さらには諸磯 a 式土器が出土しており、黒浜式でもかなり新しい状況を示している

ものと思われる。J 18号住では黒浜式土器と縄文施文の土器が出土し、J 19・23号住からは縄文施文土器を主体に沈線による土器が出土している。

宮城村柏倉大沢遺跡（水田1991）

1号住は破片資料だけであるが、縄文施文土器と共に、連続爪形や沈線による土器が出土している。17・20号土坑においても、縄文施文土器と共伴して沈線による土器が出土しているが、17号土坑出土の沈線で文様を施す土器は、有尾式の施文文様とはやや異なる観がみられる。

大間々町瀬戸ヶ原遺跡（竹内1994）

J 1号住の出土土器には、沈線による鋸歯状の文様を描く土器と、口縁部に縦位沈線帯をもち沈線による文様を描く土器、爪形刺突の土器が存在し、さらには大木2 a 式土器と考えられる土器が共伴している。

太田市賀茂遺跡（藤巻1984）

J 2号住からは、縦位の連点状刺突と爪形刺突・連点状刺突を施す土器、爪形刺突のみの土器、口縁部に縦位沈線をもつ土器が見られ、一部には関山式土器等の混在が認められる。J 3号土坑では縄文施文土器のみで構成され、J 4号土坑からは口縁部に縦位沈線をもち、平行沈線、胴部のくびれ部に隆帯をもち、爪形刺突を施す土器が出土している。

以上のように、各遺跡の出土実態を検証してみると、次のようなことが言えよう。

- 1 関山II式（組紐段階）に神ノ木式が伴い、併せて清水ノ上II式が共伴する。また、この段階には連点状刺突の土器は伴わず、同様に爪形刺突・連続爪形を施す土器は見られない。
- 2 連点状刺突を主とする遺構・遺跡には、見立大久保遺跡、見立溜井遺跡198号土坑・196号土坑・142号土坑、糸井宮前遺跡7号住・112号土坑が上げられる。
- 3 連点状刺突の土器と爪形刺突の土器が共存する例には、三後沢遺跡J 5号住が上げられるが、このような例は多くは見られない。むしろ、爪形刺突を主体とした遺構・遺跡の方が圧倒的に多い。その良例には、三後沢遺跡、見立溜井遺跡、清水I遺跡等が上げられよう。また、連点状刺突・爪形刺突の土器と、連続爪形の土器が共伴する例は、ほとんど見られない。
- 4 連点状刺突ないし爪形刺突の土器には、口縁部に縄文帯をもつ土器が共存する。この口縁部縄文帯の土器には、爪形刺突による文様が組み合わされるが、中には連点状刺突と同様の櫛歯状工具による条線を施すものもある。下箱田向山遺跡3号住・36号土坑、見立溜井遺跡J 7号住・J 9号住、勝保沢中ノ山遺跡1号住、糸井宮前遺跡142号住・98号土坑、中棚遺跡16号住、三後沢遺跡J 4号住・J 5号住。
- 5 波状口縁土器の中でも、特異な2単位の波状口縁の土器は、連点状刺突ないし爪形刺突の土器の段階に見られるようである。清水I遺跡J 3号住・4号土坑、分郷八崎遺跡1号住・302号土坑、見立溜井遺跡J 7号住・198号土坑、三後沢遺跡J 4号住・J 5号住、白倉下原遺跡44号土坑、下箱田向山遺跡36号土坑。
- 6 爪形刺突の土器と連続爪形の土器とが共伴する例があり、連続爪形を主体とする例も存在する。
- 7 個々の遺跡によっては、三後沢遺跡のように関山II式の住居、連点状刺突と爪形刺突の住居、爪形刺突を主体とする住居を検出させ、見立大久保遺跡のように連点状刺突を主体とする遺跡、さらには下箱田向山遺跡のように関山II式の住居と爪形刺突の住居が検出されている等、有尾式土器の文様要素である連点状刺突・爪形刺突・連続爪形の土器が、欠落・単独・共存している状況が見られる。
- 8 有尾式土器とは異なる、他型式の土器が共伴する例も多々見られる。黒浜式土器はもとより、大木式土器、根子屋式土器等が上げられる。調査件数に起因する観もあるが、群馬県でも西・北部に有尾式土器が

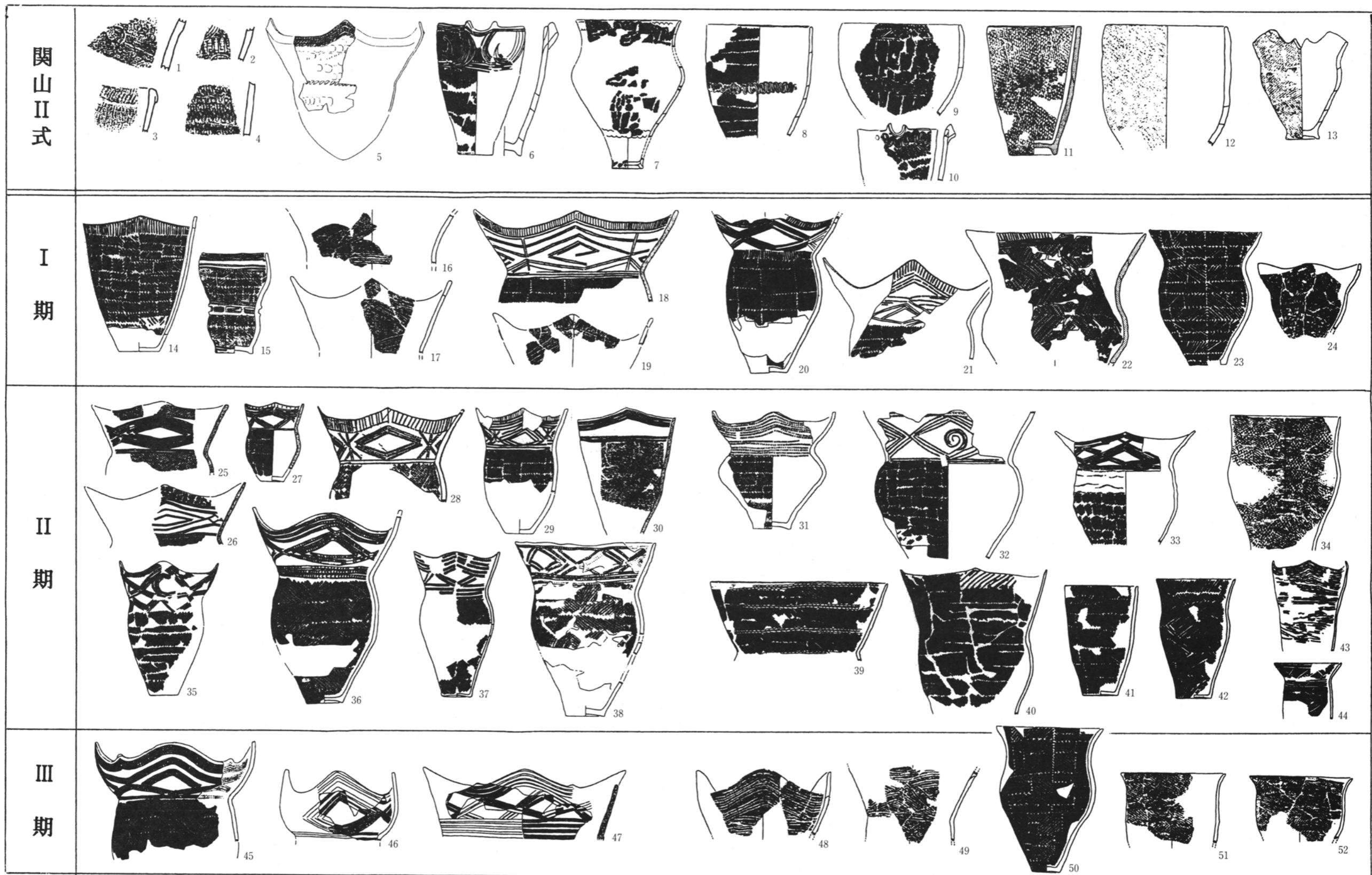
多く見られ、東部では比較的になく、むしろ黒浜式土器が多く存在するようである。また、大木式土器は、北部でも片品川周辺（中棚遺跡、糸井宮前遺跡、善上遺跡）、東部でも栃木県寄り（瀬戸ヶ原遺跡、加茂遺跡）に見られ、地域性を伺わせている。

有尾式土器の細分と変遷

先述した各遺跡での出土の実態をもとに、その施文方法と出土状況をまとめたものが、第868図に示した図である。関山Ⅱ式の組紐盛行期には、神ノ木式と清水ノ上Ⅱ式が共伴し、併行関係にあることは、群馬県内の出土事例から明らかである。特に、神ノ木式と清水ノ上Ⅱ式との関係については、長野県での出土事例か

	主 な 施 文 法	出 土 状 況
関山Ⅱ式	関山Ⅱ式 —— (共伴) —— (組紐盛行期) <ul style="list-style-type: none"> <li style="margin-left: 20px;">┌ 神ノ木式 <li style="margin-left: 20px;">└ 清水ノ上Ⅱ式 	
I期	<ul style="list-style-type: none"> ・縦位連点状刺突・横位連点状刺突 ・連点状刺突・櫛歯状条線・平行沈線 ※ 二単位の波状口縁 	
II期	<ul style="list-style-type: none"> ・縦位連点状刺突・縦位沈線・爪形刺突 ・縄文帯・櫛歯状条線・平行沈線 ※ 二単位の波状口縁 	
	<ul style="list-style-type: none"> ・縦位沈線・縄文帯・爪形刺突(幅広竹管連続ぎみ) ・平行沈線 ※ 二単位の波状口縁 	
III期	<ul style="list-style-type: none"> ・連続爪形・平行沈線 	

第868図 主な施文法と出土状況



第869図 北関東における有尾式土器変遷図

清水遺跡1~3、向山遺跡4・6~10・12・13・35、西ノ平遺跡5・11、見立溜井遺跡14・15・21・23・29・31~34、神保植松遺跡16・17・19・46、三後沢遺跡18・25~27・30、糸井宮前遺跡20・24・48・50・52、勝保沢中ノ山遺跡22、南大塚遺跡28、分郷八崎遺跡36・38・45、中棚遺跡37・39~44、甘粕原遺跡47

ら、以前より併行関係にあるものと考えられており、同様に関山Ⅱ式と神ノ木式が併行関係にあるものと考えられてきた。この関山Ⅱ式(組紐盛行期)、神ノ木式、清水ノ上Ⅱ式が併行関係に在ることを定点とするならば、有尾式とされる土器群は関山Ⅱ式の終末期から黒浜式にかかる時期の土器群と位置づけられる。

有尾式土器は、その施文文様から櫛歯状工具による連点状刺突・条線で文様を描く類と、半裁竹管具による平行沈線・爪形刺突・連続爪形で文様を描く類とに大きく分別でき、さらに口縁部直下に縦位の連点状刺突帯・沈線帯および縄文帯をもつものがあり、それらの組み合わせから構成される。施文される主文様には、波状口縁となる土器での4単位の大形の菱形文が目につくが、大形の菱形文だけで構成されているわけではない。鋸歯状(山形状)構成をとるものや、蕨手状の文様を描くものも存在する。施文工具である櫛歯状工具は、関山Ⅱ式にも見られるが、神ノ木式に特徴的に多用される工具であり、有尾式での櫛歯状工具により施文された土器が、より神ノ木式に近い位置に位置づけられるものと考えられる。このことは、有尾式での縦位連点状刺突が、神ノ木式の口縁直下(有段口縁上)へ施文される櫛歯状連続刺突(若干ずらせる手法)との施文工具の共通性、さらには同じ施文位置での連続刺突から連点状刺突への変化という点で、この口縁直下の縦位文様帯が神ノ木式から有尾式への系統下にあることは明らかである。また、口縁直下に巡る横位の連点状刺突については、少量ではあるが長野県中越遺跡2号住出土の中にも見られる等、その系譜も神ノ木式に求めることができ、むしろ有尾式に至って多く用いられる施文文様と言える。口縁部の主文様となる菱形状ないし鋸歯状の文様は、神ノ木式での菱形を構成する文様、関山Ⅱ式での鋸歯状を構成する文様に、それぞれ系譜を求めることができるものと考えられ、本遺跡出土の第116図2は菱形の交点に小さな円文を描くという神ノ木式的な文様構成を取っている。また、蕨手状の文様は、関山Ⅱ式に系譜を引くものと考えられる。本遺跡でのⅡ期Ⅳ群A類とした中に、波状口縁の波頂下への垂下する細い隆帯がみられ、これも神ノ木式にみられる垂下隆帯へ系譜を求めることができよう。

このように文様の系譜・系統性をみていくと、有尾式土器が神ノ木式土器の強い影響下のもと、関山Ⅱ式の要素も取り込んで成立していることが理解でき、その結果として櫛歯状工具による連点状刺突で文様を施文するものが、より古く位置づけられるものと考えⅠ期とした。

Ⅱ期は、Ⅰ期での文様構成をそのままに、半裁竹管による爪形刺突が新たに加わる点で異なる。Ⅰ期と同様の縦位連点状刺突文帯をもつ類と、この部分を縄文帯とするものが存在する。爪形刺突には、点列状に刺突を施すもの、平行沈線間へ器面に垂直に刺突を施すものがあり、一見すると連点状刺突に見えるものもある。また、幅広い爪形刺突も多い。施文文様の組み合わせは、口縁直下の縦位連点状刺突と、主文様に連点状刺突および爪形刺突をもつ平行沈線で菱状等の文様を描くもの。口縁直下への縦位沈線と、主文様に爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。口縁直下への縄文帯と、主文様に櫛歯状工具による条線および爪形刺突をもつ平行沈線で文様を描くもの。口縁直下への縦位・縄文等の文様帯をもたず、口縁直下へ横位に巡らせるように爪形刺突ないし爪形刺突をもつ平行沈線のみで文様を描くもの。幅広い爪形刺突をもつ平行沈線だけで、文様全体を描くものがあり、この類には連続ぎみとなる爪形刺突もみられる。この段階での傾向として、波状口縁となる波頂部の形状が三角状に尖るものと、やや丸みを帯びるものがあり、前者は櫛歯状工具を使用する土器に多く、後者は連続ぎみの幅広い爪形刺突を施す土器に多く見られる。なお、櫛歯状工具により施文される土器は、Ⅰ期の伝統を引くものと考えられ、このⅡ期の中でもより先行する可能性が高く、逆に幅広い連続ぎみの爪形刺突による土器の方が後出するものと考えられる。

Ⅲ期は、Ⅱ期までの朝顔状に大きく外反する口縁が全体に丸みをもち、波状口縁となる波頂部も緩い曲線へと変化する。施文される文様は、幅広い半裁ないし多裁竹管によりシュロ状に密な連続爪形で文様を描く

ものであり、Ⅱ期の連続ぎみの爪形刺突がさらに変化したものと考えられる。

以上、有尾式土器の3期区分について述べたが、先述した群馬県内での出土例からは、第868図に示した如く、関山Ⅱ式（組紐盛行期）からⅢ期までの各期が単独で出土している場合と、Ⅰ期とⅡ期、Ⅱ期とⅢ期が共伴する例もある。Ⅰ期とⅡ期の共伴例では、Ⅱ期の中でも先行すると考えられた櫛歯状工具により施文された土器、さらには点列状の爪形刺突、細い半裁竹管による爪形刺突をもつ平行沈線等であり、Ⅱ期とⅢ期の共伴例では、幅広い連続ぎみの爪形刺突、密な連続爪形で文様を描く土器である。この状況からすれば、Ⅱ期とした中をさらに分離できる可能性も指摘できるが、現段階では積極的な分離を見出すことは難しい。有尾式土器の変遷は、神ノ木式土器の強い系譜を引き、櫛歯状工具による連点状刺突から半裁竹管による爪形刺突、そして幅広竹管による連続爪形への変遷と見ることができよう。

なお、上述した系統・変遷は、筆者が以前に示した論文（谷藤1988）の延長線上にあるものであり、基本的には変わっていない。1988年の段階では関山式・黒浜式との関係を大枠で捉えていたが、1988年以降の資料増加により、神ノ木式と関山Ⅱ式の関係が明確となったため、若干改変した。

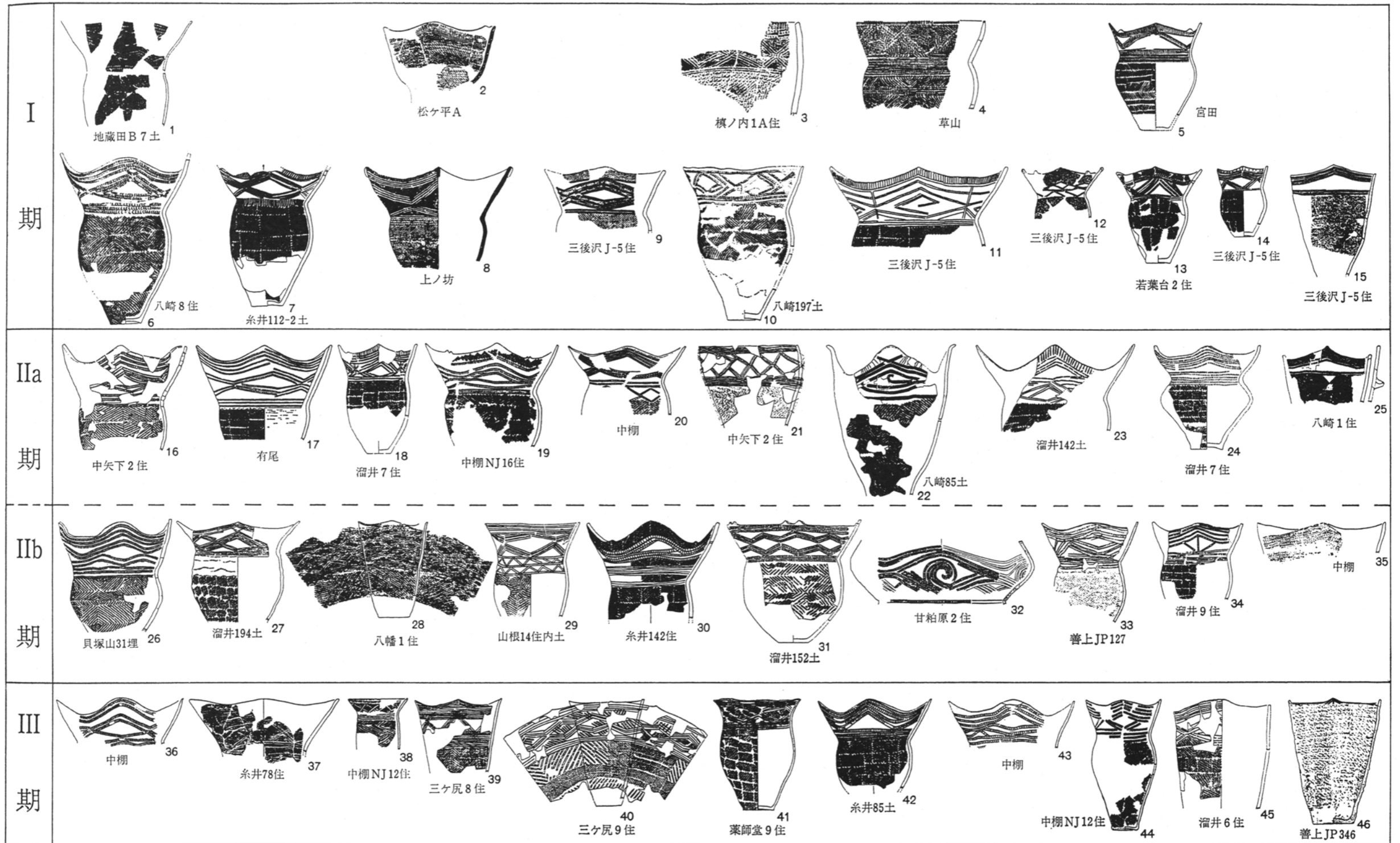
「見立式」・「大形菱形文系土器群」について

「見立式」は1995年に鳥羽氏によって提唱され、1991年に再考されているが、その設定の根元は胎土への繊維の有無によるものであり、無繊維の土器を長野県での神ノ木式からの系譜を引く有尾式とし、関東での繊維土器を関山式からの強い伝統のもとに成立したのが見立式としている。さらに、見立式を3細分している。

以前、筆者も調査中であった見立溜井遺跡等での繊維を含有する一群の土器に対し、それまでの有尾式とは異なる様相を示す土器群として、有尾式から分離した別型式の設定を考えたことがあったが、長野県での神ノ木式・有尾式土器に繊維を含む土器もあること等から、繊維の有無だけで別型式の設定は無理と判断し、繊維の有無に関わらず有尾式として扱ってきた。この点については、第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」（1997. 2）での討議の中でも語られたように、器形・施文される文様にほとんど差異が認められず、胎土だけで型式を分離し設定するのは無理であり、土器型式の混乱を招くだけである。現に、長野県内での繊維含有の神ノ木式・有尾式土器が増加していることは、近年の資料に明らかである。

なお、最近、同氏は「関山式から黒浜式へ ―古東京湾岸を中心に―」と題する論文を発表している（鳥羽1996『埼玉地域文化の研究』下津弘君・塚越哲也君追悼論文集）。この中で、仮称としながらも、「三枚町式」なる型式名を用いている。この「三枚町式」とした型式内容の記述はなく、神ノ木式と類似点はあるが、古東京湾岸で主体的に分布する関山式と区分する上で、別型式で呼称する必要があるとし、繊維混入の有無等を指摘している。やはり、「三枚町式」も「見立式」と同様の捉え方なのであろうか。

「大形菱形文系土器群」は、それまでの有尾式土器とされた菱形文施文の土器を呼称した名称であり、1989年に金子氏が論考している。凡東日本的な視点から、従来の型式枠にとらわれず、文様の系統性を大胆に論じたものである。その方向性は、黒坂氏の「羽状縄文系土器」に呼応する観がみられる。有尾式が、神ノ木式からの系統的変遷による土器群であるとする従来の考え方とは大きく異なり、大形菱形文系土器群は信州系列ではなく、東北地方南部にその系譜を求めている。その上で、3基4段階の変遷を示し（論文中第15図）、神ノ木式の最終末の段階で大形菱形文系土器群の影響を受けて折衷化した段階を第Ⅰ期とし、関山Ⅱ式の終末に位置づけられる相互刺突文土器の要素をもつ土器と井沼方遺跡段階の関山Ⅱ式の三者が接近した時間内



第870図 大形菱形文系土器群段階変遷図 (金子1989「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」より転載)

にあるものとして、関山Ⅱ式終末期から黒浜式への移行期に設定している。第Ⅱ期は、さらに a・b に 2 細分され、黒浜式の古段階に相当するとしている。第Ⅲ期は、黒浜式の中段階に対比させている。この編年案は、論文中の第16図に示されており、図の大形菱形文Ⅰ期とした中・南信地方の土器には、従来神ノ木式として認識されてきた土器が掲示されている。また、論文の最後に追記として、筆者の考え方（谷藤1988）とは根本的に異なると結んでいる。

1991年の埼玉考古シンポジウム「大木、有尾、そして黒浜」でもそうであったように、型式の枠をはずす方向性は、これまでの土器研究の方向性とは逆行するものであり、大形菱形文を東北部に求める必然性は理解できない。まして、大形菱形文系土器群が、東北部から東北部、北信を経て日本海側の北陸地方へと広汎な分布をもつに至り、南関東へも影響を及ぼして縄文時代前期中葉の一時期を席捲した土器群とは、考え難い。一見すると、似たような文様が広範囲に分布することは、この時期の土器群に限ったことではない。似て、非なる場合もある。その為だけではないが、各地域での出土のあり方、文様の差異等から、その変遷を系譜・系統性を含めながら思考し、周辺地域との比較、さらには広域での土器様相の検討といったことが、従来取られてきた土器研究の手順であり、筆者もそれに従っている。また、土器に見る地域の範囲（土器文化圏ないし土器分布圏）は、当然のことながら現在の行政単位とは異なるものであり、近年の土器研究からは常に一定した範囲を保っているのではなく、時期によってその範囲を変容する様子が見えつつある。例えば、関東地方にあっても、関東一区ではない。上越国境とか上信国境とか呼ばれるが、当時あってそれがどれほど境を画するものであったのか、疑問である。まずは、各地域での検討が必要であろう。

第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」で筆者が示した北関東での有尾式土器の変遷図（第869図）と、金子氏が示した大形菱形文系土器群段階変遷図（金子1989論文中第15図）を見比べると、3期の段階設定および編年的な位置づけについてはほぼ同様な捉え方と言えるが、系統性の考え方の違いから、各期に示された土器の配置が異なっている。特に、糸井宮前遺跡112号土坑出土の櫛歯状工具による連点状刺突の土器と、分郷八崎遺跡8号住出土の幅広竹管による連続ぎみの爪形刺突の土器の配置が、対照的に異なっている。筆者は先述したように、この両者の土器には時間差を見出し段階を違えているのに対し、金子氏は同一期としており、系統性・変遷観に大きく異なる考え方が見て取れる。出土量の豊富な群馬県内での事例では、両者が共存する例は見られない。

周辺地域での土器様相

第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」で発表・討議されたことであり、その詳細については第10回縄文セミナー記録集（近刊予定）に掲載されるであろうが、ここでも若干触れておきたい。

長野県では、神ノ木式に関山Ⅱ式・清水ノ上Ⅱ式が伴い、有尾式は神ノ木式の系譜を引く土器群であり、繊維の有無で文様等の差異は見出せないとし、有尾式を3段階の変遷が示されている。この変遷は、北関東北西部での有尾式の変遷（第869図）と同様のものであり、その位置づけも同じである。このことは、長野県でも北東信から北関東北西部での土器様相が、同次元で推移している様子が窺える。なお、長野県での第Ⅱ段階とした有尾式の古い部分には、北白川下層Ⅰb式、清水ノ上Ⅱ式が伴出し、さらに松原遺跡では朝日C式・根小屋式が出土しているという。また、神ノ木式には新潟県新谷遺跡にみられる土器が共伴する例もあり、今後新潟・北陸地域との関係が明らかにされていくものと思われる。同様に、清水ノ上Ⅱ式の細分の可能性（現状での細分は無理としている）も窺え、今後の新たな問題となりそうである。

新潟県では、有尾式土器が主体的に出土するものの、それに共存する一群の土器として「根小屋式」が近

年設定された(寺崎1996)。この根小屋式土器は、東北南部の大木2 a式といくつかの類似点をもつが、施文様および製作技法等では異なり、福島県内ではあまり例をみない(新潟県境寄りで出土)。むしろ、新潟県内はもとより、富山県、石川県の遺跡に点在していることが知られ、福井県鳥浜貝塚でも北白川下層式と共に出土しているという。群馬県内でも、沼田市周辺で有尾式と共に出土が確認されている。ただし、根小屋式は鉢形を呈する器種のみであり、この点にも今後の検討課題を内在しており、資料の増加が望まれる。

東北南部に位置する福島県では、関東の黒浜式に並行するとされる大木2 a式の資料増加が近年みられ、大木2 a式の細分が試みられている。この大木2 a式には、先述したように新潟での根小屋式が一部に共伴しているだけで、有尾式の出土例はみられない。しかし、隣接県である群馬県内では、有尾式と共に大木2 a式の出土例は多くみられ、並行関係にあるものと考えられる。また、根小屋式についても同様であろう。

北陸地域では、これまで不明な点の多い時期とされてきた前期中葉であったが、近年の資料増加も含めた本田秀生氏の発表により、ある程度の理解が得られた。資料の制限から、言及するまでには至らなかったが、北陸の早期末から前期前半期の土器群は東北との関係が極めて強いとし、前期中葉段階もその流れの中で捉えるのが妥当と結んでいる。南太閤山I遺跡では神ノ木式等が出土しており、関山式に並行する段階が示され、新潟県と同様の土器様相を示す部分も窺え、続く朝日C式段階を黒浜並行として、朝日C式が従来よりも古い段階も含めた時間幅をもつ土器群と捉えている。この朝日C式は、従来北白川下層II a式および黒浜式の新段階に並行するものとして考えられてきたものであるが(四柳1983・1986)、近年の石川県大津遺跡・通ジゾハナ遺跡での出土土器から朝日C式の文様系譜を求め、根小屋式土器の出土例や隣接地域の事例等から、黒浜式の古い段階も含む土器群とした。

さらに、福井県鳥浜貝塚で北白川下層式の細分編年を行った網谷克彦氏は、こうした日本海側の一連の状況の中で、寺崎氏から指摘のあった根小屋式土器の出土のあり方に触れ、刺突列点をもつ浅鉢形土器(鳥浜から北陸に分布する浅鉢で、朝日C式)は北白川下層II a式に伴うと考えてきたが、北白川下層のI b式に伴う可能性もあるとし、これまでの編年観に齟齬をきたしていることを指摘している。

以上、第10回縄文セミナーの成果を踏まえて述べてきたが、有尾式土器を巡り、各地域および地域間での土器様相・相互関係が明らかにされつつある。また、土器にみる地域圏の新たな視点も見えてきた。本遺跡においても、包含層中からではあるが、これまでに群馬県で例のなかった上ノ坊式土器等の出土をみるに至っては、地域間の広域編年の再検討作業が必要となっていることを痛切に感じる。黒浜式土器との関係についてはもとより、根小屋式、朝日C式、さらには北白川下層式等の周辺型式との検討が、今後の課題と言えよう。

最後ではあるが、本稿をまとめるにあたり、第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」のパネラー・参加者および関係者の多くの方々に指導・助言を頂いた。厚く、御礼申し上げたい。

主要文献

- 神田五六 1953 「長野県下水内郡飯山町有尾遺跡発掘概報」信濃5-8
 信濃史料刊行会 1956 『信濃考古綜覧』下巻
 秋池 武 1965 「群馬県における有尾式土器」栃木県考古学研究9
 森嶋 稔・笹沢 浩 1966 「長野県埴科郡中田遺跡調査報告」信濃18-6
 山本輝久 1976 「草山遺跡」神奈川県教育委員会
 山下勝年 1976 「清水ノ上貝塚」南知多町教育委員会
 戸田哲也・渋谷昌彦 1977 「神ノ木式・有尾式土器の研究(前)」長野県考古学会誌34
 並木 隆 1978 「甘粕原・ゴシン・露梨子遺跡」埼玉県遺跡調査会報告書第35集

1 縄文時代前期中葉土器群について

- 網谷克彦 1979 「鳥浜貝塚」福井県教育委員会
新井和之 1979 「黒浜式土器小考」日本考古学研究所集報Ⅱ
金井正三 1982 「縄文前期有尾式土器の再検討」信濃34-4
小林康男 1982 「舅屋敷」塩尻市教育委員会
松井正信 1982 「小泉遺跡」大門町教育委員会
秋池 武・新井順二 1983 「群馬県における神之木・有尾式土器について」信濃35-4
芳賀英一 1984 「冑宮西遺跡」会津高田町教育委員会
富沢敏弘 1985 「中棚遺跡・長井坂遺跡」昭和村教育委員会
鳥羽政之 1985 「見立溜井・見立大久保遺跡」赤城村教育委員会
柿沼恵介 1986 「分郷八崎遺跡」北橋村教育委員会
菊池 実 1986 「三後沢遺跡・十二原Ⅱ遺跡」群馬県埋蔵文化調査事業団
四柳嘉章 1986 「真脇遺跡」能都町教育委員会
山本正敏 1986 「南太閤山Ⅰ遺跡」富山県教育委員会
関根慎二・谷藤保彦 1987 「糸井宮前遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団
戸田哲也 1988 「横浜市三枚町遺跡発掘調査報告書」玉川文化財研究所
谷藤保彦 1988 「北関東における有尾式土器の変遷」考古学叢考下巻
奥野麦生 1989 「黒浜式土器の系統性とその変遷」土曜考古13
細田 勝 1989 「黒浜式土器成立の背景について」古代80号
金子直行 1989 「縄文前期中葉における大形菱形文系土器群の成立と展開」埼玉考古第25号
黒坂禎二 1989 「羽状縄文系土器の文様構成(点描)1」埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要6
埼玉考古学会 1990 シンポジウム「大木、有尾、そして黒浜」埼玉県考古別冊3
田中和之 1990 「縄文前期中葉土器群の問題点」埼玉考古27
友野良一 1990 「中越遺跡」宮田村教育委員会
鳥羽政之 1991 「縄文時代前期中葉土器群の編年と地域性」埼玉考古第28号
賛田 明 1992 「城之越遺跡」御代田町教育委員会
植村泰徳 1993 「宇輪台遺跡」福島市振興公社
芳賀英一 1994 「塩喰岩陰遺跡」福島県文化センター
巻 町 1994 『巻町史』資料編1 考古
本田秀生 1995 「大津遺跡」石川県立埋蔵文化財センター
寺崎裕助 1996 「清水上遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査事業団
縄文セミナーの会 1997 第10回縄文セミナー「前期中葉の諸様相」資料集

2 縄文時代前期終末土器群について

1 はじめに

本項で扱う前期終末とした土器は、26号住居址から出土している諸磯b式終末の土器以降、前期終末いわゆる十三菩提式土器平行期を対象とする。特に諸磯c式土器以後の土器については、県内でも資料が少なく、希少なものである。従来、県内でのこの時期の土器の位置づけについては、南関東の十三菩提式土器として一括した形で扱われている。「一般的にはその方法で研究に大きな支障はない。」(相沢1988)とする考えもある。しかし、少ない資料ながらも仔細に検討することで、南関東とは、異なった土器様相が認められた。すなわち、諸磯c式土器以降、中期初等に至るまで、神保植松遺跡をはじめとして群馬県地域では、様々な土器が入り込む地域である。南関東と一括して考えるのではなく、独自の地域性が認められる。現在のところこの時期の資料が少なく、このことが、群馬県地域の土器編年を難しくしている原因となっている。

神保植松遺跡からは、十三菩提式期の遺構は確認されず、諸磯c式土器以降の土器は、包含層出土のものである。遺構による出土土器の時期変遷の検討は、出来なかった。そのため本項では、包含層出土の土器と遺構出土の土器を同一レベルで扱い、土器文様から土器の変遷を検討し、地域性を考えてみたい。

包含層からは、諸磯c式土器の耳朶状貼付のついた土器と、結節浮線文系の土器が出土している。これらの土器については、一括して諸磯c式土器ととらえ、新旧の時期差があるという考え(今村1982)と、諸磯c式土器と下島式土器という二型式に分け、地域差ととらえる考えがある(三上・赤塩1994、関根1995等)。また、諸磯c式土器の中で装飾貼付文土器と(双)環状渦巻文類に分け地域差とした論考もある(細田1996)。本項では、細田氏の言う装飾貼付文土器を諸磯c式土器、(双)環状渦巻文土器を下島式土器として扱い、これらの土器を、今村氏の考える時期差ではなく地域差・系統差として捉えることとする。

神保植松遺跡からは、諸磯b式土器の浮線文系の土器と沈線文系の土器が出土している。これらの土器から諸磯c式土器、前期終末へとどのように変遷したのかを文様の系統的な差と、地域的な差を抽出することによって、その変遷過程を捉えた。ここで示す土器変遷は、あくまでもプロセス(過程)とスタンダード(標準)であり、実際の土器の出土状況を示すものではない。土器の出土状況としては、常に前後の時期が混じり合っていることを付記しておく。

2-1 土器群の分類

以下、神保植松遺跡の当該期の土器について、文様施文方法による分類を行い、その系統を追って考えてみたい。本文の土器原稿では、当該期の土器を第II期として前期とし、群を土器型式、類をその中の細別にしてしている。本項では、土器の変遷をより細かく扱う上で、前期終末の当該期の土器の時期区分として「期」を使用するが、本文とは対応しない。土器文様と器形の差異から、さらに細分も可能となるが、本項では、前期終末土器の系統変遷を見ることを主題としているため、より細かな細分はしなかった。

第I期 諸磯b式土器終末

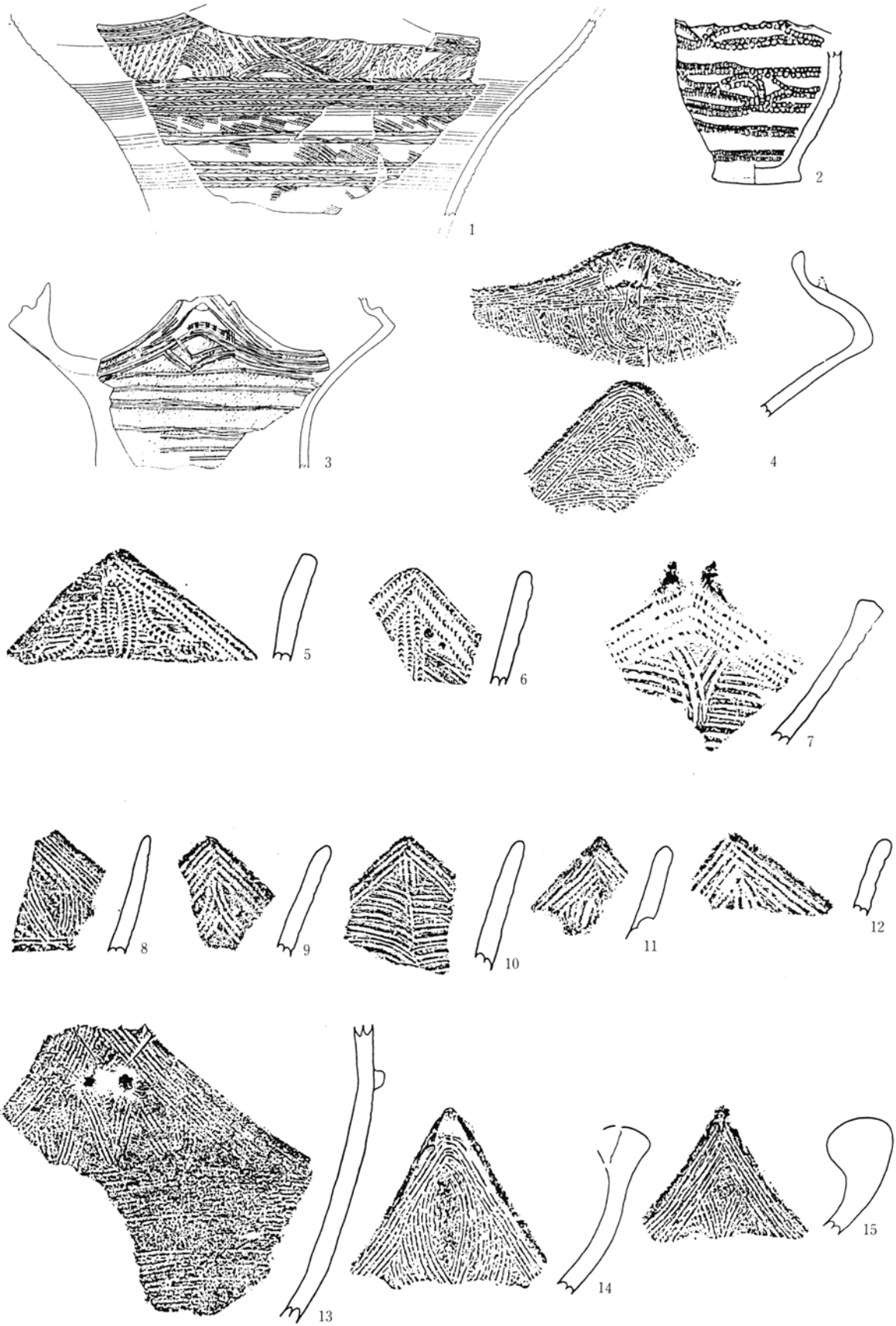
第II期 諸磯b式土器から諸磯c式土器・下島式移行期。

第III期 諸磯c式土器と下島式

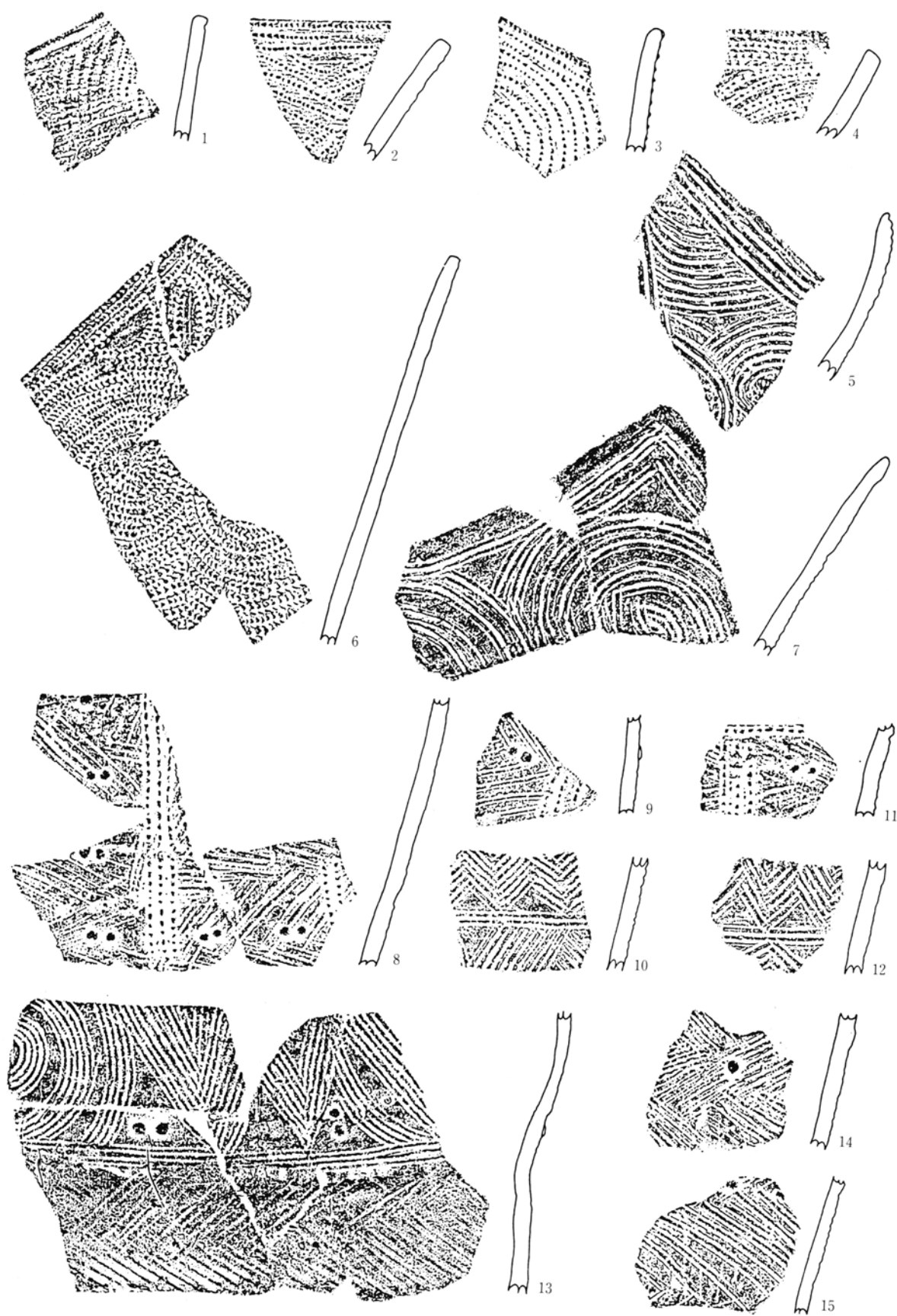
第IV期 諸磯c式土器以降の土器。十三菩提式・晴ヶ峯式等土器型式が一様ではなくなる。

のIV期に分けられる。各期に段階設定した中で、それぞれに土器文様構成要素があり、各群に分類される。

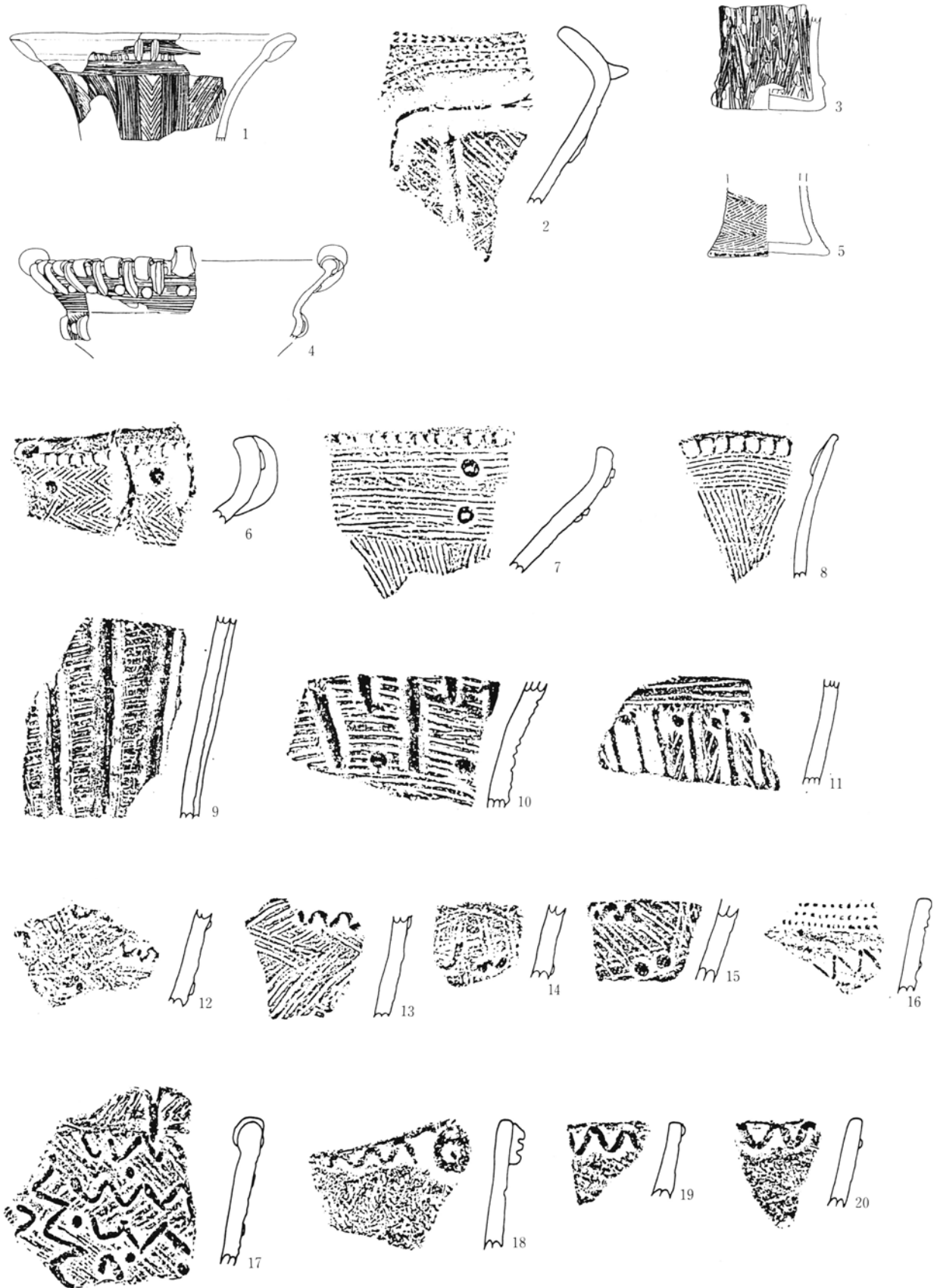
このうち第I期とした土器は、諸磯b式土器の文様構成が浮線文と沈線文からなる。この沈線文と浮線文の土器から、前期終末にかけての変遷過程を追ってみよう。



第871図 諸磯b式・下島式・諸磯c式土器



第872図 下島式土器



第873図 諸磯c式・鋸齒状貼付文土器

I期 浮線文径土器 (871図上段)

諸磯b式土器終末段階の浮線文土器。口縁部に文様帯が施文される。胴部には、横位に区画する沈線が数段施文され、区画された一段に文様が描かれる。口縁部文様帯の幅が広く、弧線や曲線で文様を描く。口縁が靴先上に屈曲したのでは、文様が二段に施文される。浮線は、2本対になり「ハ」の字状に刻みが施されるものが多い。図2のように円形の刺突が加えられるものや縄文が施文されるもの、浮線に直行するように刻みを加えられるものがある。

I期 沈線文系土器 (871図上段)

諸磯b式土器終末段階の沈線文土器。口縁部に文様帯が施文される。胴部には、横位に区画する沈線が数段施文され、区画された一段に文様が描かれる。口縁部文様帯は、2段に分けられ、入り組み状の渦巻や弧線が多く描かれる。沈線は、半截竹管を使った平行沈線で、沈線の中に刺突や爪形文を加えるものもある。

II期 下島式土器 (871図下段)

結節浮線と沈線による土器 土器文様は、I期の土器に似る。口縁部文様に()状の文様施文される。施文方法としては、結節浮線・沈線等による。6のように口縁に直線で∥状に施文し、小粒のボタン状の貼付をするものもある。神保植松遺跡をふくめ、この時期の土器は、完形土器がなく口縁部破片の土器から分類したため、実際には、III期の土器と分離するのは困難である。II期の諸磯c式土器とした土器の中に、口縁部文様が類似したものがあることから、下島式土器との対応関係をとるために土器変遷の過程として提示した。

II期 諸磯c式土器 (871図下段)

沈線による土器文様はI期の土器に似るが口縁部文様に新たに()状の文様が施文されるようになり、入り組み状の渦巻文がなくなる。胴部文様は、数段に分けられた横位区画。区画内には、矢羽根状の文様や入り組み状の渦巻文が施文される。下島式土器の沈線は比較的幅が広い平行沈線に対して、諸磯c式土器は、平行沈線の間隔がせまくなり、条線化されている。

III期 下島式土器 (872図)

下島式土器 口縁部文様帯が広がるのと同時に、胴部文様帯も広がる。口縁部文様帯には、同心円や渦巻の文様の上位に()状の文様が施文されたり、縦位に2から3条の縦位の結節浮線が付く。胴部文様は、縦位の区画内を諸磯c式土器と同様の文様が施文される。また、横位に区画するものもあるが、区画内の幅がII期諸磯c式土器のものより広くなり、鋸歯状・渦巻・矢羽根状の文様が施文される。

III期 諸磯c式土器 (873図)

諸磯c式土器 耳朶状・ボタン状の粘土瘤が器面に貼付される土器。基本的には、口縁部文様帯の幅は、狭く、胴部文様帯が広い。口縁部文様帯は、横位の沈線によって区画され、矢羽根状の文様が施文される。棒状や()状の粘土貼付も短い。なかには、口縁部文様帯が広がり、縦位に長い棒状の貼付文が付くものもある(9~11)。この土器の場合、地文に比較的まばらな横位の沈線が施文されることから、下島式土器と同様に口縁部文様帯を幅広くとる様式の土器と思われる。

III期 鋸歯状貼付文土器 (873図)

鋸歯状の貼付文土器。地文に矢羽根状の沈線や縄文が施文される。沈線による文様構成は、諸磯c式土器に似る。17のように、口唇部に棒状の貼付文があり、口縁部に鋸歯状貼付文と小粒のボタン状貼付文が付けられ、口縁部文様帯を広くとるものがある。16は、結節浮線文と鋸歯状貼付文が施文されている。18~20は、地文が縄文で鋸歯状貼付文が施文されている。



第874図 晴ヶ峯式・十三菩提式・異系統の土器

IV期 晴ヶ峯式土器 (874図1～7)

結節浮線・結節沈線・平行沈線による施文と三角等の印刻文の土器。口縁部は、下島式同様にIV単位の波状口縁が多い。口縁部文様は、渦巻や、鋸歯状の文様を沈線で描き、文様間を印刻する。胴部文様は、沈線で横位に区画し、鋸歯状の文様と印刻を施す。2のように鋸歯の向きを変えるものもある。諸磯c式土器・下島式土器の胴部文様が比較的広くとられ、多段化されないのに比べ、晴ヶ峯式土器は胴部文様が、多段に施文される。

IV期 十三菩提式土器 (874図8～12) 地文に縄文が施文され、結節浮線が貼り付けられる。本遺跡からの出土数は、少ない。出土量を比較すると、本遺跡では、晴ヶ峯式土器が主体となる。

IV期 異系統の土器 (874図)

その他、本遺跡からは、各地域の土器が、出土している。

鍋屋町式土器 (8～12) 胴部に印刻文が施文される土器。福浦式土器 (13～16) 結節浮線による文様施文の土器。器形は、金魚鉢形になる。口縁部と胴部上半に文様帯を持つ。粟島台式土器 (25～29)。口縁部を折り返し口縁にし、口唇直下に一条の沈線が入る土器。

2-2 下島式土器の系譜・諸磯c式土器の系譜 (875図)

前節では、神保植松遺跡における前期終末の土器変遷を概観した。その結果、諸磯b式土器の段階から次の段階では、諸磯c式土器・下島式土器の二系統の土器が本遺跡では主体となることが、確認された。では、諸磯b式土器から、諸磯c式土器・下島式土器が諸磯b式土器から変遷するのか、変遷モデルによって、検討してみたい。

下島式土器の系譜 (875図)

第I期では、図1の浮線文土器は文様モチーフなどから、2と同時期の土器である。口縁部文様帯に浮線による入り組み渦巻状の文様を持つ。胴部文様帯は、浮線による横位区画である。同様に871図1の土器は、口縁部文様を浮線によって、渦巻・弧線状のモチーフを描く。口縁は大きな波状口縁になり文様帯も図1に比べ広いものとなっている。第I期では、口縁部文様帯の広さによって、文様の構成作られる。

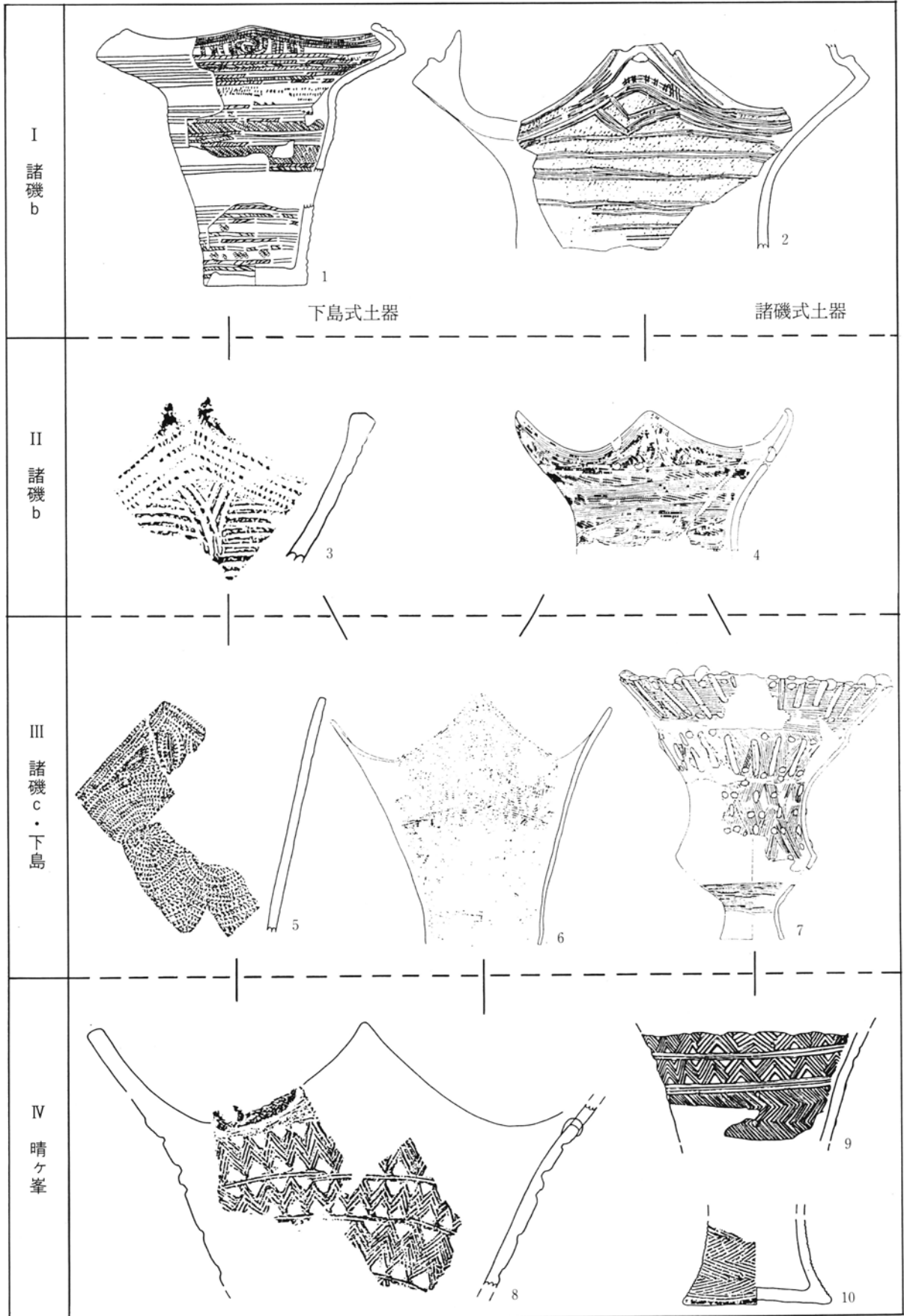
第II・III期では、比較的波状口縁の土器が多くなり、口縁部文様帯は広いものとなっている。図3は、波状口縁の土器片であるが、口縁に沿って結節浮線を施文し、文様帯内部を()状の沈線が区画し、横位の沈線が充填している。結節浮線で()状の文様を持つ。波状口縁で、渦巻き状の文様を持つ土器が見られる。結節浮線だけではなく、図5の土器にみられるように、沈線による渦巻の文様を持つ土器も多くなる。この段階になると、口縁部文様帯の幅が大きくなり、諸磯c式土器の口縁部文様とは、異なる独自の文様構成をとるようになる一方で、胴部文様帯に類似性を持つ。

第IV期の土器では、結節により文様を描き、文様間に沈線や印刻を施している。集合沈線による文様と、印刻が施文される。

諸磯c式土器の系譜

第I期の土器は、波状口縁になり、口縁部文様帯に沈線による文様を描く。波状口縁の器形にあわせるように三角や菱形の文様を施文する。また、波状口縁波頂部には、平行沈線による弧線や曲線を使った渦巻き文等が施文される。同じ器形の土器で浮線文系土器と比較すると、文様帯の幅や、文様モチーフが小さくなる。特徴がある。

第II期では、口縁に横位の沈線による文様区画をし、波状になる部分に()状の沈線が施文される。下島式土器の第II期と同様のモチーフを持つ。この段階で、沈線主体の土器と、結節浮線を主とする施文方法の



第875図 下島式・諸磯式土器の系譜

分離と、文様構成の分離が始まる。諸磯c式土器と下島式土器が分離していくのである。

第Ⅲ期の土器は、口縁部文様帯は、狭くなり、棒状の粘土紐がつけられる。反対に胴部文様が広がる。前段階の波状口縁の文様が胴部に移行した状態を示す。第Ⅳ期では、従来の文様構成を失い、晴ヶ峯式土器へと移行していく。図9・10のように、平行沈線による矢羽根状の文様が多段化したものが現れてくる。

3 諸磯b式土器から諸磯c式土器・下島式土器へ

沈線施文の諸磯b式土器から諸磯c式土器の変遷過程については、研究紀要12（関根1995）において、述べた通りで、諸磯b式土器の沈線文系土器から諸磯c土器への変遷感については、基本的に変わらない。本項では、前説を踏襲しながら、浮線施文の諸磯b式土器群と結節浮線施文の下島式土器群について、系統的につながりえるのか検討してみたい。

結節浮線の出自については、北白川下層系の土器群から鍋屋町式土器・福浦上層式土器と続く土器群を代表とする西日本・北陸系の土器を系譜とする考えが、主となっている。結節浮線を施文される下島式土器の分布の主体となる長野県でも、諸磯b式土器から下島式土器へとの変遷はスムーズなものではない。「モデル」と「コピー」という考え方で変遷をとらえようとしている（赤塩1996）。

鍋屋町式・福浦上層式土器では、口縁部文様帯を広くとり、上下2段構成をとる。また、胴下半部は、沈線による施文や縄文が施文されるのが特徴である。下島式土器でも同様に、口縁部文様帯が上下2段になり、上段分が狭く、下段部分の文様帯が広がる。

口縁部文様は、下島式土器が、口縁部文様帯上段に対弧「()」状及び棒状「||」状の結節浮線文を施文し、下段に渦巻文や双環状渦巻文が施文される。これに対して、鍋屋町式土器は、入り組み状の弧線が連結した文様構成をとる。口縁部文様構成については、本項でⅡ期とした諸磯c移行期の土器に、()状や||状の文様が施文される点と、諸磯b式土器の渦巻状の文様が残ったものと理解したい。諸磯b式土器の靴先状の屈曲する土器の屈曲部から上をとると、同様の文様効果になる。

これらのことから、下島式土器の結節浮線は、諸磯b式土器や、北白川下層式以来の浮線施文の土器から続くもので、鍋屋町式土器と同様の文様構成をし、諸磯b式土器からの文様モチーフを受け継いだ土器といえるのではないだろうか。

諸磯c式土器は、諸磯b式土器の沈線施文の土器から系統的に変遷したものである。その施文順序は、地文の縄文→主文様としての沈線→装飾としての棒状・ボタン状貼付文という構成をする。下島式土器は、結節浮線文の土器は、地文の沈線→主文様としての結節浮線。沈線施文の土器は、縄文→主文様としての結節浮線をまねた沈線が施文される。実際の土器については、地文の縄文が上部の施文によって消失しているものや、縄文の施文を省略したのもある。

今村氏は諸磯b後半から十三菩提式土器の変遷について、「文様施文順序と表現手段の置換」によって考察（今村1994）している。筆者も基本的には、この考え方で土器変遷が捉えられると思う。しかし、今村氏と異なるのは、文様施文順序と表現手段の置換の方法の段階的な捉え方が異なることである。

今村氏は、諸磯b式土器に見られた口縁部の動物形の小さな把手が、小さな粘土紐や粒の貼り付けに変わり、諸磯c式前半では口縁に多数並べて加えられるようになり、それが結節浮線文に変化したものであるとして、諸磯b式土器の浮線文とは直接繋がらないとしている。諸磯b式土器の浮線のなれの果ては、諸磯c式後半段階結節浮線文土器の下地になる平行線としている。

確かに、諸磯c式土器の地文が沈線と捉えると諸磯b式土器の浮線は、諸磯c式土器の下地の沈線になると考えられるが、今村氏の言う諸磯c式前半の土器（筆者の考える諸磯c式土器）の地文には、縄文が施文さ

れているのである。縄文の上に集合化された沈線が施文され、その上に粘土瘤が貼付されるのである。地文に縄文が見えないのは、沈線が密に施文されて、下地の縄文が消えてしまったのである。そして、地文の縄文が沈線によって消されたものから、「手抜き」によって施文されなくなっていくのである。少なくとも、群馬地域における諸磯c式土器は、縄文施文→沈線→粘土瘤が基本的な行程である。この順序を考えると諸磯b式土器の浮線は沈線になり、粘土瘤は動物形の小さな把手のなれの果てである。そして縄文が「手抜き」により省略される場合もあると考えた方が妥当であろう。

今村氏の言う諸磯c式土器後半（下島式土器）は、地文に縄文に縄文を持たず、諸磯b式土器との施文順序を対比すると、諸磯b式土器の地文である縄文が下島式土器の沈線に対応し、浮線文が結節浮線文と対応すると考える。ここに、諸磯c式土器と下島式土器の施文方法に差異が見られ、諸磯b式土器を出自とした土器が両極性を持つようになると考える。

4 おわりに

群馬地域においては、諸磯c式土器はⅢ期の土器を持って終わり、Ⅳ期以降は、信州系の晴ヶ峯式土器、十三菩提式土器が主として分布する地域となる。晴ヶ峯式土器は、下島式土器から主として変化したものにとらえられた。十三菩提式土器については、直接の系譜を繋ぐ土器は、今回確認できなかった。今後の課題となろう。本遺跡では、これらの土器に北陸系、東北系の土器が伴ってくる。異系統の土器の混じる割合が、他の時期に比べ多いことも特徴である。そのために、さらに前期終末の土器様相が混迷しているのである。今後、これらの土器の系統と、変遷を検討していくことで、当地域の様相を明らかにしていきたい。

引用参考文献

- 相沢貞順 1988 「解説 縄文時代」『群馬県史資料編1』p1051 群馬県史編さん委員会
 赤塩 仁・三上徹也 1994 「下島式・晴ヶ峯式の再提唱とその意義」中部高地の考古学Ⅳ 長野県考古学会
 赤塩 仁 1996 「諸磯b・c式土器の変遷過程」『長野県の考古学』長野県埋蔵文化財センター
 今村啓爾 1980 「伊豆七島の縄文文化」武蔵野美術大学考古学研究会
 今村啓爾 1981 「施文順序からみた諸磯式土器の変遷」考古学研究27-4
 今村啓爾 1982 「諸磯式土器」『縄文文化の研究3』
 今村啓爾 1994 「原始の造形」『日本美術全集第1巻』講談社
 石原正敏 1989 「諸磯c式土器再考」新潟史学22号
 加藤三千雄 1986 「真脇遺跡」能都町教育委員会
 金子直行 1996 「八木上/八木/八木前/上広瀬北/森坂北/森坂」埼玉県埋蔵文化財調査事業団
 金子正人 1990 「芳賀北曲輪遺跡」前橋市埋蔵文化財発掘調査団
 木村 收 1994 「白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 駒倉秀一 1990 「横俵遺跡群Ⅰ」前橋埋蔵文化財調査事業団
 縄文セミナーの会 1993 「前期終末の諸様相」
 鈴木敏昭 1980 「諸磯b式土器の構造とその変遷（再考）」土曜考古2
 鈴木徳雄 1979 「白石城」埼玉県遺跡調査会報告書36集
 関根慎二 1987 「糸井宮前遺跡Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 関根慎二 1994 「上栗須薬師裏遺跡」「上栗須寺前遺跡群Ⅱ」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 関根慎二 1995 「諸磯c式土器以前」「研究紀要12」群馬県埋蔵文化財調査事業団
 大工原豊 1994 「中野谷地区遺跡群」安中市教育委員会
 谷口康浩 1989 「諸磯式土器様式」縄文土器大観第1巻
 中島 宏 1980 「伊勢塚・東光寺遺跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集
 藤森栄一 1956 「中部」『日本考古学講座3』河出書房
 細田 勝 1992 「諸磯c式土器研究への一視点」『埼玉考古29』埼玉考古学会
 細田 勝 1996 「縄文前期終末土器群の研究」『先史考古学研究6』阿佐ヶ谷先史学研究会
 三上徹也 1987 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書1」長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書1
 茂木由行 1984 「黒熊遺跡群発掘調査報告書(3)」吉井町教育委員会
 山内清男 1939 「日本先史土器図譜」
 山内清男 1964 「日本原始美術Ⅰ」講談社
 山下歳信 1986 「上大屋 樋越地区遺跡群」大胡町教育委員会
 吉田 格 1956 「関東」『日本考古学講座3』河出書房

3 中世掘立柱建物について

八戸工業大学 高 島 成 佑

1. はじめに

植松遺跡の建物跡を見るようにという依頼を受けてからどのくらいの年数が過ぎたのか分からないほどである。発掘調査の現場を訪れたときは、かなり広い地域の発掘で大変なことだと思い、なるべく早く報告書を書ける 때가くることを願っていたのである。しかしその後、縄文時代の最大級の集落跡が発掘され、そこから検出された建物跡と関わっているうちに時を過ぎてしまった。なかなか思うように文章が進まないようなときを過ごしたのであるが、やっと文章を少しでも纏めることができた。

ここでは、郭の外から検出されたものと郭の内側（Ⅰ、Ⅱ）から検出されたものに分けて、植松遺跡から検出された多くの掘立柱建物跡を並べて、その平面形を書きあげて、そこから考えられる構造を想定し、その後で、城館期における建物跡の進展をたどってみたいと考えている。

2. 郭以外の建物跡（その1）

1号掘立柱建物跡；[2間に4間]という規模のものであるが、これですべてかどうかは不明である。[2間に3間]までは総柱の建物であり、倉庫のようなものを感じさせるのであるが、さらに1間が伸びて、続くようになっている。

2号掘立柱建物跡；[2間に3間]の総柱の単純な建物であり、倉庫などを考えておけばいいものであろう。

3号掘立柱建物跡；[2間に4間]という規模であり、[2間に3間]の部屋に1間の庇が取り付けられた形である。

4号掘立柱建物跡；[2間に1間]があり、さらに伸びそうな形である。これは調査区の外へ続く形であり、ここでは捉えられない。

5号掘立柱建物跡；一列に[2間]だけみることもできたものである。塀などを考えるほかは無いようであるが、不明である。

3. 東の郭内側の建物跡

6号掘立柱建物跡；[2間に3間]の建物であるが、これに[2間に4間]が連なっているように続いている。これを24号掘立柱建物跡として掲げており、一つの大きめの建物と考えているようである。

7号掘立柱建物跡；[1間に2間]という小さな建物であるが、柱位置が西に少し片寄っている。

8号掘立柱建物跡；[1間に2間]という小規模なものであり、Ⅰ郭の南東隅で検出された。

9号掘立柱建物跡；これも[1間に2間]という小規模なもので、8号掘立柱建物跡と同じ様なところで検出されたものである。

10号掘立柱建物跡；[1間に1間]ということであるが、その形は{1:2}位の長方形となっている。

11号掘立柱建物跡；かなり大きな建物であり、この城館跡のなかでもこれに匹敵するような建物は無いのではなかろうか。北側から[2間に4間]があり、[2間に2間]の部屋があり、もう一つの[2間に2間]は玄関に当たるのでなかろうか。さらにその東側に[2間に3間]の部屋と[2間に2間]の部屋が取られている。そしてそれらの部屋を繋いだり結んだり

している廊下かとみられる部分も大きく取られている。

[2間に4間]の区切りは大きなものであり、大勢の人々の集会所ともみられる。また東側の[2間に3間]の区切りも大きなものである。大きな部屋を2室も有する建物は、かなり重要なものと見られるのであろう。

12号掘立柱建物跡；ここにも[2間に4間]という大きな部屋がとられ、それに[1間に2間]の部屋が続き、それらに狭い[1間]の庇が取り付くという形である。

13号掘立柱建物跡；こちらでも[2間に4間]の部屋を北西隅に取り、その南東側に[2間に5間]という部屋を取っており、さらにその南に[2間に4間]という部屋を取っている。そしてさらにその東側に[1間に2間]という小部屋を取っているのである。南側の[2間に4間]の部屋とその北側の[2間に5間]の部屋とは、その梁行き方向において柱位置が不揃いであり、桁行が北側が[5間]となり南側が[4間]となっているが、これは当時としてはありうることであったのである。

14号掘立柱建物跡；西側から[2間に4間]と[1間に5間]と[1間に4間]と並んでいる形と見ることができ。もっとも西側の[2間に4間]をはじめ、すべての区画に部屋らしい仕切は見られないのであるが、二つ目の区画にはその南端に一つの区画を置いてみることもできようか。

15号掘立柱建物跡；[2間に3間]という規模であるが、柱位置が多少西へ片寄っており、その使われ方を考えるときには注意せざるを得ないような形である。

16号掘立柱建物跡；[1間に2間]という小規模なものである。

17号掘立柱建物跡；[1間に2間]という形ではあるが、[2間に2間]ということにもなりそうなものである。

19号掘立柱建物跡；[2間に3間]の形のものともみることができ。柱位置がやや東に片寄ってはいても、庇の取り付く形かどうかということは、ここに示された柱穴だけからはいえないようである。

20号掘立柱建物跡；[2間に5間]というやや大きめの建物である。しかしこれも、大きめの規模だけであり、その内部の間仕切などはみえずに、1室だけのものである。

21号掘立柱建物跡；東西棟で、[2間に5間]というだけの規模のものである。

22号掘立柱建物跡；[1間に3間]という小規模のものである。

23号掘立柱建物跡；[1間に2間]という形ではあるが、[2間に2間]という形を考えてもいいかもしれない形をしている。

24号掘立柱建物跡；[2間に4間]という規模のもので、さきの6号掘立柱建物跡とつながって一つの建物となると見られるものである。しかしこちらの側も、内部の間仕切などは見えずに、単に[2間に4間]の区画だけである。

25号掘立柱建物跡；[2間に4間]であるが、[2間に3間]の北側に狭い1間の庇が取り付いた形である。しかし、この庇部分は判然とは切れておらずにつながっている。

4. 西の郭内側の建物跡

26号掘立柱建物跡；[1間に4間]という規模のものであるが、ただそれだけのものである。

第4章 考 察

- 27号掘立柱建物跡；〔2間に3間〕という大きな部屋を中心として、その北・東・南側に〔1間〕の庇が廻り、西側には大きな出入口でも構えたような造りである。そしてさらに北の庇より北側に〔1間に2間〕の突き出しを付けている。古代の寝殿造の3面庇の建物を想わせるものではあるが、この時期には珍しい造りというべきものであろう。西の郭でもっともしっかりとした構えの建物であり、城館跡らしさをもつ建物である。
- 28号掘立柱建物跡；〔2間に4間〕という規模の大きな部屋を西側に置き、〔1間〕幅の廊下を挟んで〔2間に2間〕という規模の部屋を東側に置いている。しかしこれら二室での柱位置が取り合わずに、東側の部屋ではかなり無理をして南側の柱筋を合わせているようすが知られる。元来は別のものを無理に合わせたのかもしれない。西側の部屋からはさらに南に〔1間〕幅のものと半間幅のものとが突き出されている。全体の屋根構造を想定してみると、東西の間に挟まれた〔1間〕幅のところのポイントとなり、図に示したような分棟型の屋根が想定される。
- 29号掘立柱建物跡；〔2間に3間〕とみるか〔2間に4間〕とみるかという区画があり、その東側にやはり同様に見られる庇が付く形である。
- 30号掘立柱建物跡；〔2間に4間〕の区画を北側に置き、その南に1間幅の廊下のようなところを隔て、さらに南側に〔2間に4間〕の区画を取っている。そしてこれら両区画の西側にやや狭い庇といえるようなものを置いている。北の区画は総柱のものであり、南の区画ではその南西隅だけに〔3間に3間〕と割るような試みがなされているようなところも感じられるが、はっきりとはしていない。
- 31号掘立柱建物跡；〔2間に4間〕という大きな区画が東西に置かれてあり、その南西隅に1間の突き出しがある。
- 32号掘立柱建物跡；〔1間に1間〕ではあるが、その〔1間〕はかなり大きい。間に井戸跡があり、これへ屋根を架けるような柱を考えることができそうなものである。
- 33号掘立柱建物跡；〔1間に4間〕という規模のものであるが、南端の〔1間〕は狭いもので、小さな庇くらいが考えられるところである。
- 34号掘立柱建物跡；〔1間に1間〕のものが南東隅を共有して直角に交わるような形のものである。
- 35号掘立柱建物跡；〔1間に2間〕という東西棟の建物である。
- 36号掘立柱建物跡；〔2間に2間〕というものであるが、東西方向の中の柱が細いものとなっており、こちらが桁行方向かと思われる節がある。
- 39号掘立柱建物跡；〔2間に3間〕という形で総柱の建物である。
- 40号掘立柱建物跡；全体としては〔2間に3間〕ということで見られるのであるが、梁間の1間が極端に大きくて、〔1間に3間〕という形で2棟が並んでいる形である。
- 41号掘立柱建物跡；〔1間に1間〕の建物の南側に狭い〔1間〕幅の庇を取り付けたものである。
- 42号掘立柱建物跡；〔1間に2間〕という大きな区画へさらに1間の庇が取り付いた形である。
- 43号掘立柱建物跡；〔1間に2間〕という区画の南側に〔1間に3間〕のものが取り付いている形である。ここでも南側の桁行の柱間が乱れており、どのように取り付くのかは不明であるが、平面形ではそのようになっている。
- 44号掘立柱建物跡；東西棟の〔1間に2間〕というものである。

46号掘立柱建物跡；〔1間に2間〕という区画へ1間の隔たりをおいて〔2間に2間〕という大きな区画をもってきている。しかし、梁間方向の柱間寸法がまちまちであって、思うような形になりえないところである。

48号掘立柱建物跡；全体では〔2間に3間〕という形になるが、〔2間に2間〕という正方形のものへ1間の庇が取り付けられた形である。

49号掘立柱建物跡；〔1間に3間〕という形である。西側の柱筋に礎石を敷き並べており、それと対応して東の柱筋が検出されていることをみると、あるいは礎石を使用していた建物であることも考慮しなければならない。

50号掘立柱建物跡；〔2間に2間〕の建物であるが、その形からは東西棟のものとみられる。

5. 郭以外の建物跡（その2）

51号掘立柱建物跡；〔1間に3間〕という規模のものである。

52号掘立柱建物跡；〔1間に4間〕という形を示してはいるが、中央に〔1間に2間〕という区画をとり、その両端に〔1間に1間〕のものを取り付けているのである。端なる長方形の区画とは少しは異なっているものである。

53号掘立柱建物跡；〔2間に4間〕という形ではあるが、52号掘立柱建物跡と同様に中央には〔2間に2間〕という区画をもち、西側に〔2間に1間〕というものと、東側には〔1間に1間〕というものを取り付けている。

54号掘立柱建物跡；〔2間に3間〕という規模の区画である。

55号掘立柱建物跡；〔2間に2間〕という区画である。

56号掘立柱建物跡；〔1間に3間〕という空間を示している。

57号掘立柱建物跡；〔1間に3間〕という区画である。

58号掘立柱建物跡；〔1間に4間〕という区画ではあるが、桁行で西端の1間だけが梁間と同様の大きな柱間を取り、その東側は小さく3間に割られている。

59号掘立柱建物跡；〔一に2間〕と見られるが、梁間（桁行？）がどれほど行くのかは不明である。

60号掘立柱建物跡；〔一に2間〕となるが、これも上記の59号掘立柱建物跡と同様である。

61号掘立柱建物跡；〔3間に一〕であって、桁行が1間は確実にあるが、それ以上は不明なものである。

62号掘立柱建物跡；〔3間に一〕となり、これも桁行が2間以上は伸びてはいるが、その上は不明である。

6. むすび

以上で、植松遺跡の発掘調査によって検出された建物跡を見ることができた。この他に、塀や門などを想定したものも数多く検出されているが、ここではそれらを省略することとしてある。以下に二つほど、今の段階で気になったことなどを記して「むすび」とさせていただきたい。

東北地方の北部に居て、発掘される城館期の建物跡を多く見ている者としては、植松遺跡の建物跡は単純な形のもが多くて、複雑で、どう考えればいいのか、というようなものは少ない、という印象である。それは複雑に絡み付くような間取りを取るものが少なく、大きな区画（部屋）を単純に取るものが多いということであろうと考えている。

しかしながら、ここで一つ気になることは、〔3間〕という数字を梁間にもっている区画（部屋）がない、

第4章 考 察

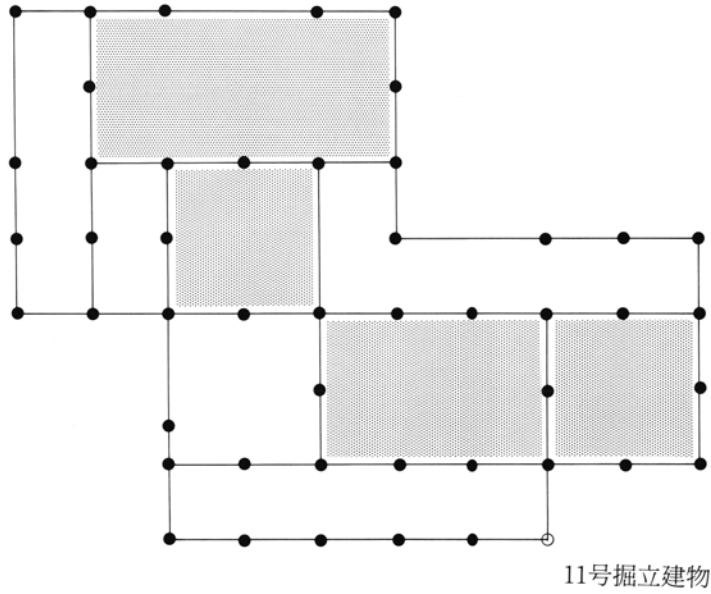
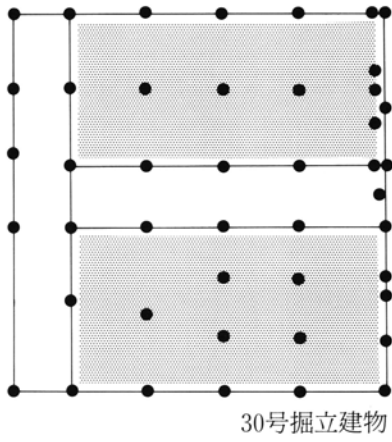
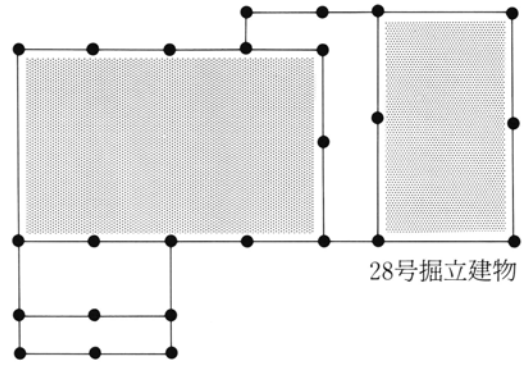
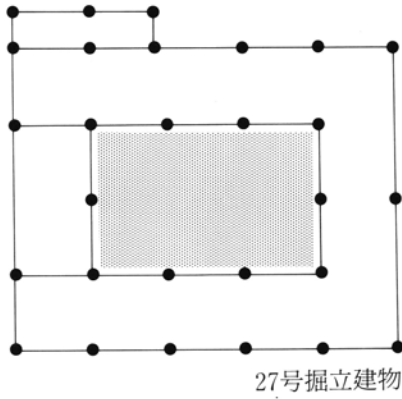
ということである。古代の建物の梁間が〔2間〕であったものが、いろんな条件から〔3間〕という梁間を得るまでの話は、けっこう面白いものではあるが、その〔3間〕の梁間をもつ区画（部屋）が見あたらないのであった。

東北地方の北部にあっては、建物の梁間が〔3間〕をもつようになるのは、15世紀後半から16世紀にかけてとみられている。ちょうど植松遺跡と重なるような時期であり、そのような区画（部屋）が見あたらないのが不思議であった。東北地方においては、〔3間に3間〕の「九之間（このま）」という部屋や、〔3間に4間〕の大部屋をもつものなどが出てくるのが、ちょうど、そういった頃と重なってくるのである。

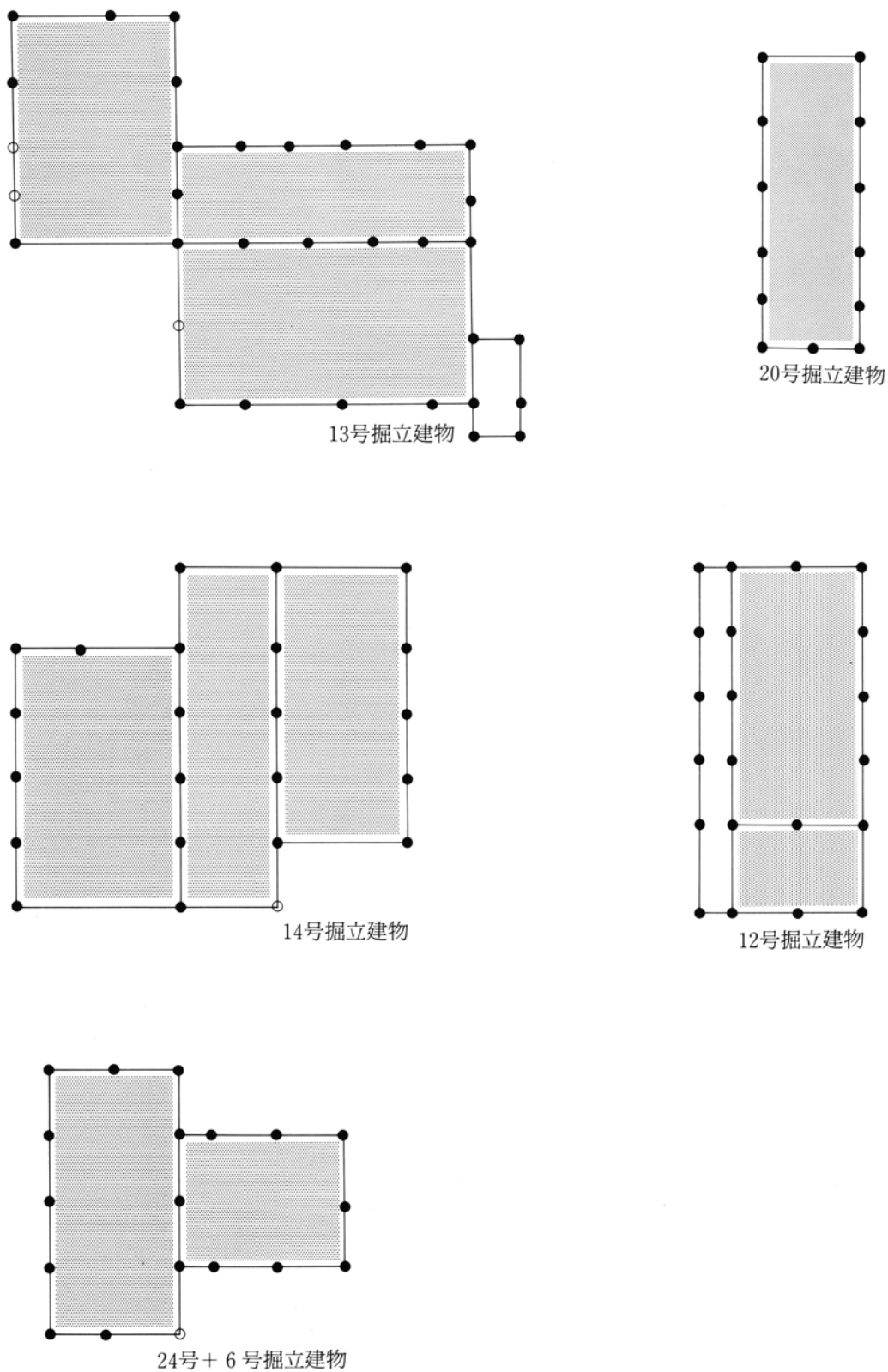
たまたまこちらでのその辺の事情については不案内でもあり、よく分かっていないということもあるが、これからしばらくは、その辺のところを調べてみたいと考えているところである。

いま一つは、今回検出されたもののなかに、掘立柱建物跡というだけではなくて、礎石建ちの建物もあったような、そんな感じがするのであるが、いかがであろうか？

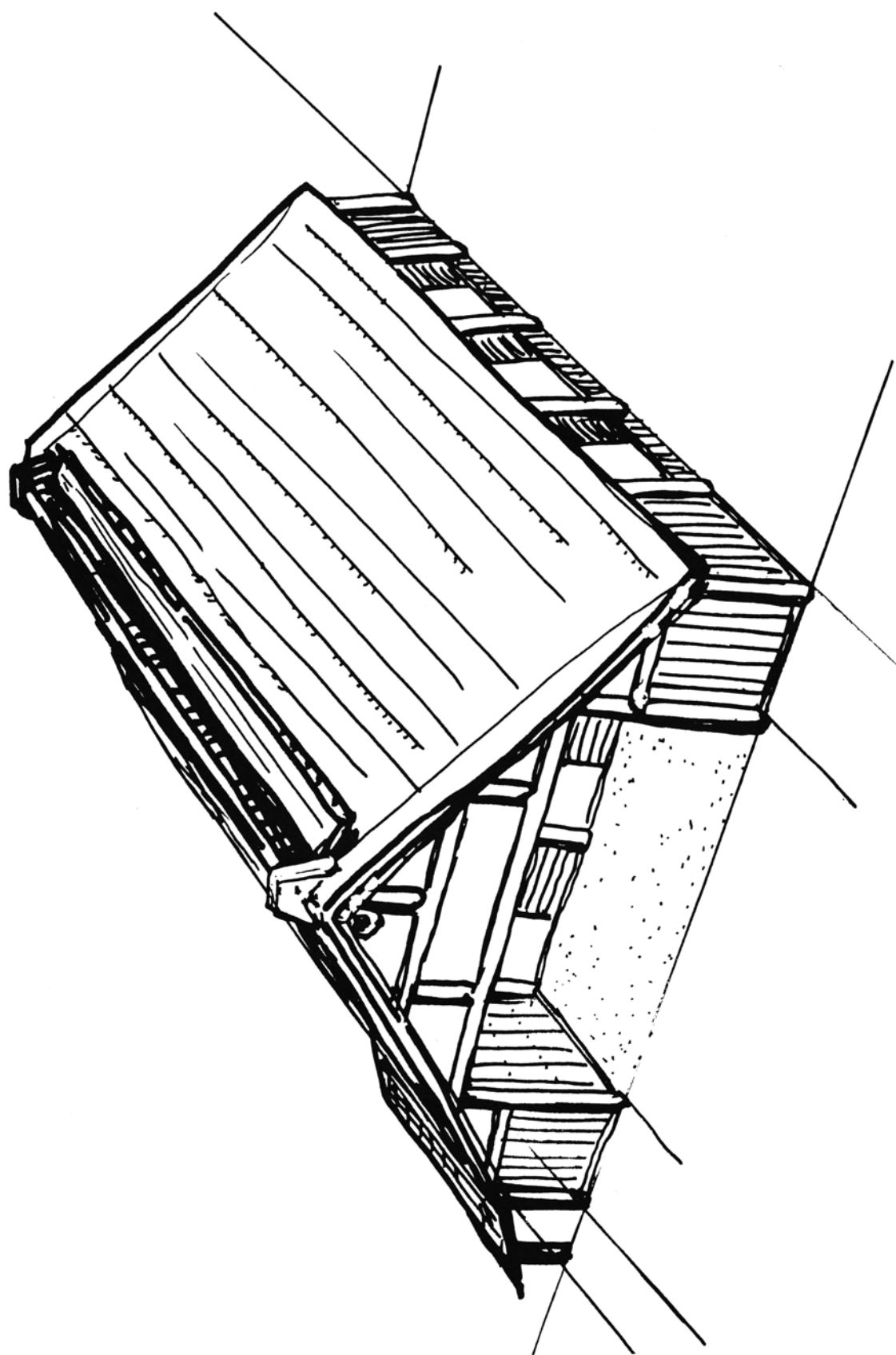
東北地方では、16世紀の終わりころには、青森県の根城跡や浪岡城跡では、礎石建ちのものもあるのであるが、そのことに関してはこちらの方が数段に早いような気がするのであるが、いかがなものであろうか。礎石建ちと掘立柱とは、その根本から考え方が異なっており、建築の構造的に相容れないもの同士という考えではあるが、中世の段階ではそんなことも無かったのであるか。



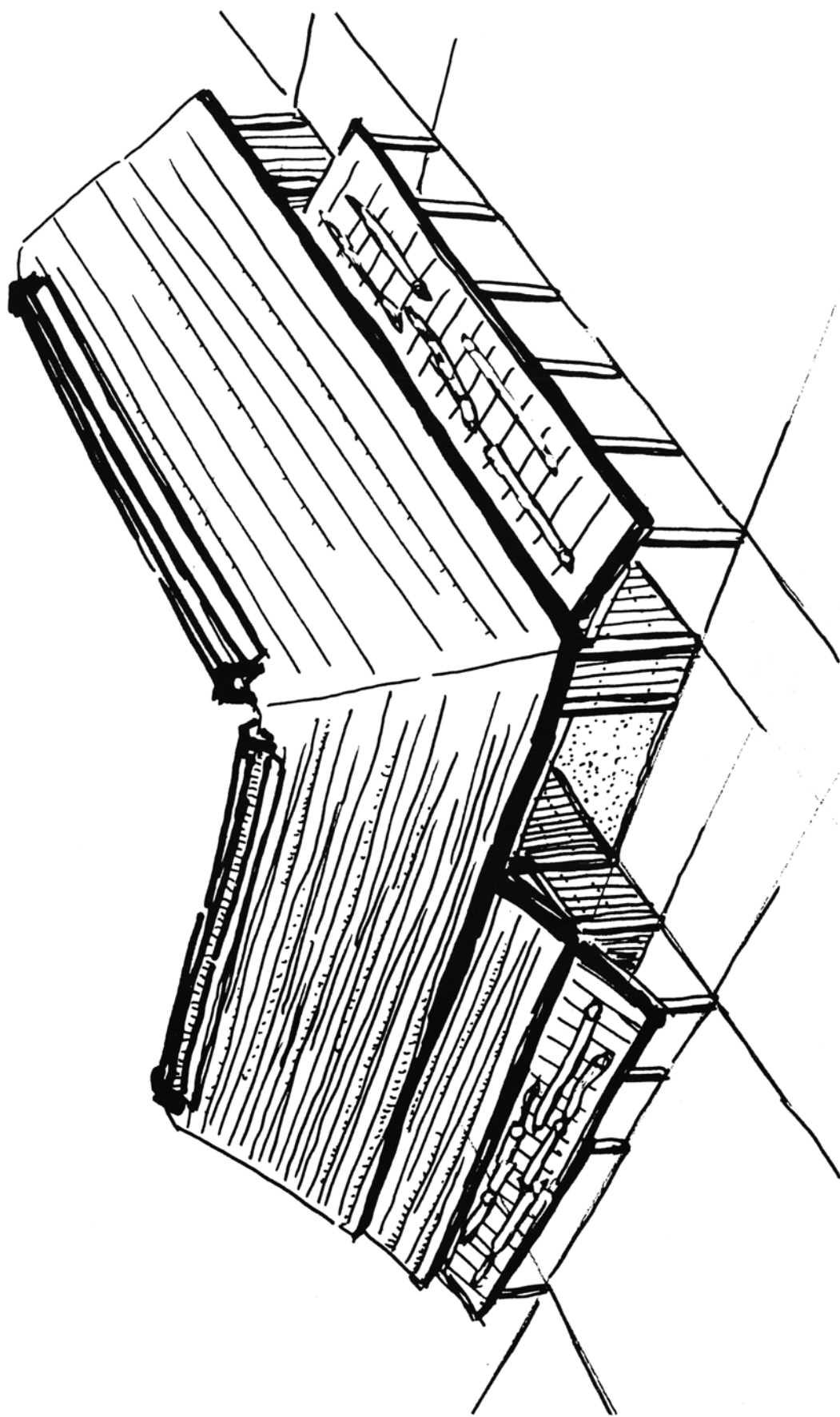
第876図 主な掘立柱建物の構造(1)



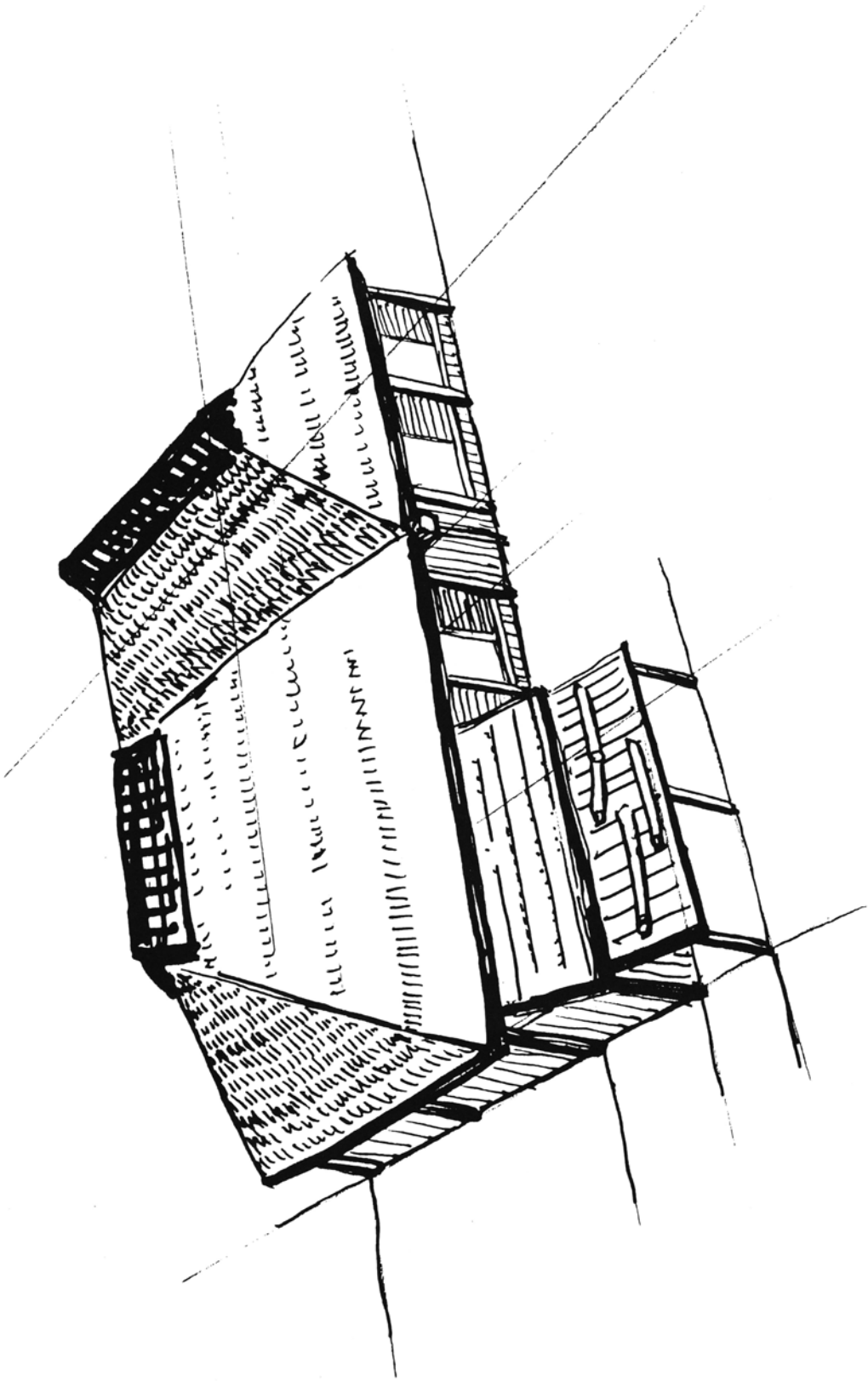
第877図 主な掘立柱建物の構造(2)



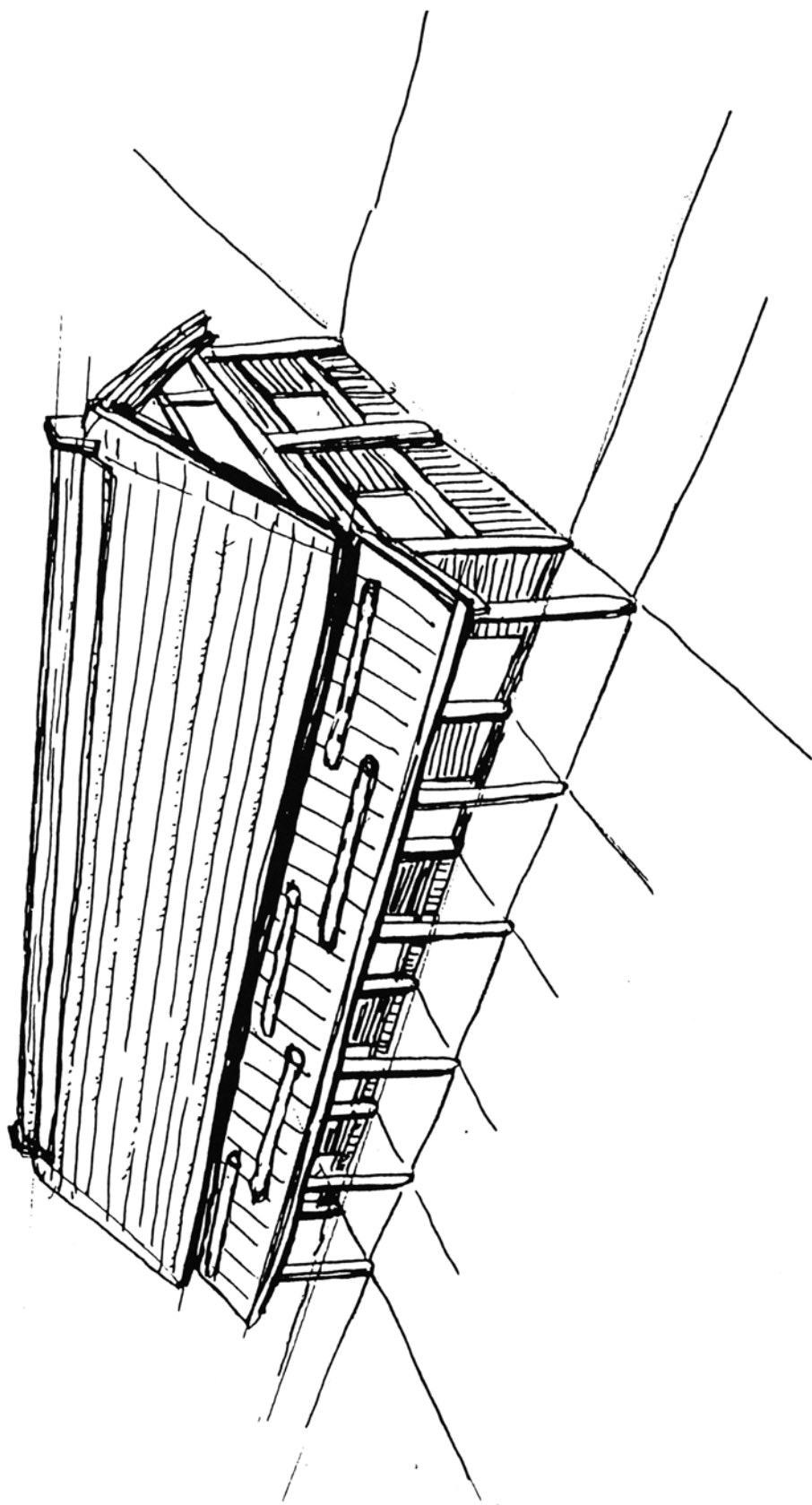
第878図 27号掘立柱建物復元図



第879图 11号掘立柱建筑物复原图



第880図 28号掘立柱建物復元図



第881图 12号掘立柱建物復元図

発掘報告書抄録

フリガナ	ジンボウエマツイセキ
書名	神保植松遺跡
副書名	関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第41集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第214集
編著者名	谷藤保彦
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年月日	西暦1997年3月25日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
じんぼうえまつ 神保植松	たのぐんよし 多野郡吉井 まちおおあぎじんぼ 町大字神保	103632	10005- 00267	361417	1385844	19871001- 19890331	31.500	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神保植松	集落 城郭	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代 中世（戦国）	竪穴住居跡 土坑 方形周溝墓 古墳 中世城郭 掘立建物 竪穴状遺構	縄文土器・石器 弥生土器・石器 土師器甕・坏 須恵器甕・坏 内耳鍋・カワラケ	縄文時代前期から中期初頭の多量の出土遺物、および弥生時代中期の土坑群。古墳時代初頭・平安時代の集落・墳墓多数。中世城郭のほぼ全様の解明。

群馬県埋蔵文化財調査事業団
調査報告第214集

神保植松遺跡

《本文編II》

関越自動車道(上越線)地域埋蔵
文化財発掘調査報告書第41集

平成9年3月20日 印刷
平成9年3月25日 発行

編集/群馬県埋蔵文化財調査事業団
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

発行/群馬県考古資料普及会
勢多郡北橋村大字下箱田784-2
電話(0279)52-2511(代表)

印刷/朝日印刷工業株式会社